
榎本心靈調查事務所

琥珀鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

榎本心靈調査事務所

【Zコード】

N2177W

【作者名】

琥珀鳥

【あらすじ】

一族の宿痾を背負つたオッサンが流れながらも日々、除霊に励むお話です。

直接の除霊部分は少なく、調査・準備や人間関係等に重点を置いています。

一応ホラーのジャンルですが、お笑い成分とお色気成分が有ります。

因みに主人公はロリコンですが、基本プラトニック路線です。

第一話（前書き）

三作目にして、漸くオリジナル小説を書きました。

前からコシコシ書いていたので季節感がズレていますが、『容赦を……』

ジャンルはホラーですが、日常や準備をメインに書いて行きます。

ガンガン靈と戦つ話には、ならないでしょ。

第1話

僕の名前は、榎本正明。

こつ見えても先祖には、函館戦争で負けた榎本武揚が居る。

もともと榎本武揚は、榎本武兵衛武田の娘みつと結婚して婿養子となつた男だ。

旧姓は箱田といい、現広島県福山市神辺町箱田辺りの出身だ。

どうでも良いトロビアを（読者に）話している時にテスクの電話が鳴る……

事務机の上の電話機が鳴っている。

他にはノートパソコンとハードディスク、それと充電中の携帯電話が乱雑に置いてある。

パソコンの画面は、今ハマッているゲームの攻略サイトを開いている。

今日は面倒くさいな、と思い受話器を見詰めているだけだったが鳴り終わった。

「うん。
今日は自主休暇として遊びに行こうかな？」

良い天気だし、鎌倉辺りの古刹でも眺めようか……

と、考えていたら携帯電話が鳴った、仕事用の方だ。

折り畳み携帯を開いてディスプレイを見れば

「長瀬綜合警備保障 長瀬社長」の文字が……

残念、仕事かな？

と思いながら通話ボタンを押す。

「もしもし、榎本です」

電話から渋い声が聞こえる……

「ああ、榎本君か？」

事務所に電話したら出なかつたんでも携帯にかけたんだ。
今、電話大丈夫かい？」

「ええ、今は事務所に向つている途中ですから平氣です。
どうしたんですか？」

取り敢えず居留守は誤魔化しておく。

「そうか……

実はな、厄介な物件を請け負つちまつたんだ。
横須賀の建設途中で施主の資金繰りが付かず、建設半ばで放置して
いるマンションな。

アレの巡回警備を請けちゃったのよ

頭の中で思い出す……

確か横須賀市の中でも、海の見える景色が良いけど不便な場所のアレか？

「何故、請け負ったんです？」

長瀬さんの会社は、建設現場の警備はしないでしょ？」

マンションやテナントビル等の常駐警備が主流のはず。

「嫌だつたんだけどねえ……

付き合いで仕方なく短期間だけ請け負つたんだ。

今は坂崎が行つているんだけど……

もう一人が、嫌な物を見たつて辞めちゃつて困つてるんだよ。悪いけど頼まれてくれないかな」

僕の仕事は、靈障の調査と出来れば解決迄だが……

解決方法は、人には言えない僕の一派カルマの業で処理をする。

人には言えない為に正当な報酬も評価もされないが、それで良いと思つ。

人に知られたら、良くない事にしかならないだろうから。

「良いですよ。

長瀬さんはお得意様ですか……

そうすると、今晚の夜間警備から同行すれば宜しいですかね？」

「ああ、有難う。

では事務所の方に案内図と詳細をFAXしとくから、時間は坂崎と連絡を取り合つてくれ。

頼んだよ」

そいつ言って長瀬社長は電話を切つた。

携帯電話を卓上充電器ホルダーに戻す。

今夜は夜勤か……

そうだ、結衣ちゃんに連絡しておくかな。

折角再充電を始めた携帯電話を手に取り、ポチポチと彼女の携帯に送るメールをうつ。

「結衣ちゃん。

今晩は夜勤の仕事が入つたので夕飯を食べたら出かけます。早めに支度お願ひします。

榎本

これで、彼女の手料理の夕飯を食べられる、と。

結衣ちゃんは、本名 細波結衣

13歳の口リ美少女だ。

訳有りのツルペタロリ美少女だ！

大切な事だから、2回言いました。

彼女の母親は愛知県のある寒村の狐憑きの家系の女性で、彼女もそうだった。

詳細は省くが、家族から虐待を受けていた彼女を助けたのが縁で、その後も面倒をみている。

一般的な里親制度を利用したが、オッサンが少女を引き取るには苦労した、

くつくつく……

口リ美少女と同棲中だぜ！

彼女で妄想していると、ファックスが入る……

一応事務所だから、リコーの複合機をレンタルしている。

「ピーチもファックスも、これ一台でオーケー！

送られてきたファックス用紙に目を通す。

なる程ね……

次は自分で情報集めだ。

ガセネタが多いが、インターネットでも結構な事が調べられる。

少なくとも何の情報も無く危険なホラーハウスに突撃など出来る程、無謀でも無いからな。

出来るだけの下準備はする。

取り敢えずノートパソコンを開き、インターネットでキーワード検索……

「横須賀 マンション 怖い話」

塙○洋介……

違うよ。

アレな方の怖い話じゃないんだ。

アイ・キャン・フラーイじゃない。

日常に潜む怖い話 マンションの住人……

惜しい、でもコレも生きている人間が怖い話だからな。

心霊スポット横須賀スレ……

これか？

読んでいけば、横須賀の建設途中のマンションの怪……

当たりだ！

夜中に前を通ると、3階の窓の部分に人影が見える。

敷地内に良くな野良猫が死んでいる。

浮浪者が住み着いて、小火をだした……

在り来たりだな。

他のサイトも何件か見たが、共通するのは動物や虫の屍骸と3階の人影か……

次は人が死ぬような事件が有つたかの検索だ。

「横須賀 建設現場 マンション 殺人」

自宅マンションから投身自殺……

これは場所が違うな。

孤独死、独居老人が死体で発見、これも遠いな。

建設中のマンションに乗用車が突っ込む。

関連が有りそうだが、場所が離れているから違うか。

今回は事件性は無いのかな?

後は土地絡みの日ぐだが、これは調べるのは現地に行かなければ無理だ。

時計を見れば、PM1：30か……

先ずは坂崎君に連絡するか。

何度も一緒に仕事をしているから、携帯のアドレスに入っている彼の番号を探して電話をかける。

「…………もしもし榎本です。

坂崎君?

今電話で話しても平気かな?
うん、社長から聞いたよ。

大変だったね……

それで今晚だけど巡回は何時からだい?

20時から2時間置きか……

危ないのは0時以降だらうね。
分かった!

22時の巡回には間に合つようといくから、それじゃ

彼、随分と怯えていたな……

見えちゃう体質だけど、自分では何も出来ないからな、辛いわ。

「さてと、現地に聞き込みに行きますか

愛車のスクーターの鍵を持つて事務所のガレージへ向かう。

最近購入したYAMAHAのビーノモルフェだ。

小道具の多い僕には、収納力ゴヤフロントポケットの有るこのスクーターは気に入っている。

コンセプトは街乗り用のレトロ感の有る、多分女性が好むスタイルシユにフォルムをしているスクーターだ。

筋肉で、ゴツい僕が乗るのは似合わないと言われ続けている……

車？

持つてるけど使わない。

停める所を探すのが大変だし、駐車禁止で捕まるの腹立つし……

一度駐車違反で捕まつたが、罰金か減点かどちらかにして欲しいよな。

事務所は横須賀市の中央部に有る。

駅前の大通りを抜けて国道134号線を南下する。

久里浜港を横目に更に南下し野比海岸をひた走る、途中アル中専門の病院がある。

今は解体して無いが、国立野比病院と言つ怖い病院廃墟が有つただ……

心霊現象の噂も有つたんだよね。

医療器具やカルテが散乱していて、持ち帰ると電話が掛かってくるんだ。

「ウチの病院から持ち出したカルテを返して下さいー。」

つてね。

実際に怖かつたのは、所有者が頻繁にくる不法侵入を警察に相談して巡回が多かつた事。

それとセ○ムのセンサーが各所に設置されていた事だ。

廃墟ファンには堪らない物件だったね。

そんな事を思い出しながらスクーターを運転する。

道沿いは長閑な漁港だが、結構な漁船が停泊している。

何時漁にいくんだろ？

金田湾を見ながら、途中で国道214号線に右折し山の方に向かう
……

海岸線から少し入れば、畠がやたらと田に付く長閑な田舎町。

途中で更に枝道に入り目的のマンション前に着く。

少し離れた路肩にスクーターを停めて、歩いて現場まで行く。

平屋の民家と畠ばかりの土地に、いきなりコンクリートの建物が見えた。

くすんだネズミ色の建物……

縁の山々と畠に囲まれたこの場所には似つかわしくないかも知れない。

まずは、2m位の高さの白いパネルで覆われた仮囲いにそつてグリリと歩く……

お約束のスプレーの落書きがチラホラ、しかし侵入出来そうな場所は無い。

そして正面のパネルゲートの前に立ち、問題の建物を見上げる。

外から見た分には、まだまだ手を入れれば新築物件として売り出せそうだ。

コンクリートの躯体の損傷も見受けられない。

しかし施工中には有つただろう、外部足場が無くなっている。

まあリース品だし、再開の見通しがつくまで解体して引上げたのかな？

これは逃げる時に外部階段は使えない、中の階段しかないのか……

退路が一箇所しか無いのは心許ないな。

中に入る前に周りを見渡すと道沿いの少し先に、個人が経営している懐かしい雑貨屋が見えた。

板壁に屋根は鉄の波板で、いかにも古そうな造りだ。

板壁には昔の鉄製の看板が今も貼り付けて有る。

「元気ハツラツ！オロナミンヒ」

の大塚麗さんの物や

セクシー ポーズの由美かおるさんの

「アース渦巻」

それにサビだらけでモデルが誰だか分らないが

「ボンカレー」

の看板。

今では余り見掛けなくなつた懐かしの看板類に溢れている……

この看板類を懐かしいと思うと、歳がバレるかな？

気を取り直して店の中の人へ、話を聞こうと覗いてみれば……

うほつ！

若い女の子が店番をしているではないか！

どう見ても、まだ小学生だ！

「こひつしゃ いませ！」

目が合ひつと、元気に挨拶をしてくれる口リツ子。

「いざなみひまー」

残念ながらイケメンでも若くもないが、出来るだけ爽やかに挨拶を返す。

店に入り、商品を物色する……

コンクリートの剥き出しの土間に無造作に棚が並べられ、商品が置いてある。

トイレジトペーパーから洗剤等の日用品から雑誌や食料品まで……

これぞ昭和の雑貨屋だね。

無難にガムとコードを持つてレジへ。

「じゅくを下せー」

渡すとちやんとレジを打つている。

流石にバーコード式でなく手打ちタイプだが……

「お手伝い、偉いね。」

おウチの人は居ないの?」

220円ですと言われ、千円札を渡しながら聞く。

「有難う御座います。」

おつり780円です。」

うん、お父さん入院中だからお母さんが世話をしているの

彼女の表情からは、父親の容態が重いのか軽いのか分らない。

「お父さん早く元気になると良いね」

と言つて店をでる。

最近の子供は発育が良いな……

もうスポーツブラを着けてそつなサイズだつた。

ニヤニヤしながら「一ラを飲んで、今度は建物の付近をキヨロキヨロと見回しながら徘徊する……

しかし、これでは通報されても仕方がない変質者つ振りだ！

近くには交通事故のお地蔵様も無ければ、庚申塚も無い。

昔の因縁も無むつだな……

元々が山村であり、戦災が有つたり歴史的な古戦場でもない。

何処にでもある長閑な田舎で、やつと開発の手が入りつつ有る場所だ！

最後に近くのお寺、畠に囲まれた小山の上有る方道寺に行つてみる。

こじんまりとしているが、よく手入れもされていて小奇麗な境内……

住職と話が出来ればと思つて訪ねたが、人の気配は無い、かな。

お寺の住職とは意外に忙しいから、アポ無しで来ても無理か。

「んー原因が分からなーいな……」

昼間のウチに周辺を廻つて見たが、収穫は可愛いロリッ子が一人で店番をしているだけか。

「ぐふふ……

大収穫じゃないか！」

意氣揚々とスクーターを停めている場所に戻る。

途中でもう一度、あのマンションの前を通りると、さつきは『気が付かなかつたが古い看板が目に入る。

「マンション建設反対、自然を守れ……か」

何かの利害関係が、あのマンション建設の際に有つた訳か。

こんな長閑な場所でも静いが起こる。

人間つてのは業が深い生き物だよねえ……

その業に囚われている僕も人事じゃないんだけどさ。

さて、帰つて結衣ちゃんの『飯を食べて、結衣ちゃんでラブな妄想しながら仮眠を取ろうかな。

帰り道で、お土産に銀座ロージーローナーのケーキを買つ。

彼女はイチゴのショートケーキが大好きだ。

女の子が物を食べる姿って、セクシーだよね？

第2話

現場の調査を終えて家の前に到着、家を見れば既に部屋の電気が点いている。

既に結衣ちゃんは帰つて来ているのだろう。……

駐車スペースにスクーターを停めて玄関に廻り

「ただいま！」

と言つて家に入る。

玄関先までいい匂いが漂つてゐる。……

既に結衣ちゃんが夕飯の準備をしてくれてゐるみたいだ。

「おかえりなさい。
正明さん」

台所からHプロンで手を拭きながら出てきてくれて、少しこそめな
声で迎えてくれる。

彼女の両腕には手首の部分まで包帯が巻かれている。

スカートで見えないが、右の太もも部分にも同様に包帯を巻いてい
る。

「ただいま。

良い匂いだね。
夕飯は何かな?」

「今日の献立は、イカと大根の煮物にアジフライです……
スーパーで特売だったんです、イカとアジが。
アジはちゃんと3枚におろして揚げたんですよ」

彼女の頭をポンと軽く叩いてから

「凄いね!」

と褒める。

彼女は児童虐待を実の母親と、その男達に受けていた。

だから扱いは慎重に、スキンシップは控えめに、優しく頼れる男を
演出しなければならない。

「お風呂沸いてますから、先に入つて下さい」

仄かに頬を赤く染めて恥ずかしそうに、そう言つて台所に戻つて行く。

本当に良く出来たお嬢さんです!

風呂に入りサッパリしたところでキッチンに向かうと、既に料理が
並んでいる。

なかなか美味しそうなイカと大根の煮物にアジフライ、それと海草
サラダに……

「ウガのお吸い物か！」

結衣ちゃんはお婆ちゃんから料理を習つていたらしく、多少田舎っぽい料理が得意だ。

その代わり、外食をする時は洋食系が多い。

パスタが大好物なので、洋麺屋五右衛門やジョリーパスタには良くなれて行く。

彼女自身が大人し目の真面目っ子だから、兄弟か親子に間違われる事が多いのが癪だ。

歳の差カップルでも、口リコン野郎でも全然構わないのにね。

「今日はこれからお仕事ですから、お酒は駄目なんですよね？」

そう言って急須からお茶を注いでくれる……

何時もばーべルを嗜むのだが、今日はお茶だ。

僕はお茶は飲めれば良いのだが、結衣ちゃんはお婆ちゃんの影響か？

お茶に拘りがあるのだ。

前に誕生日プレゼントを贈りたくて

「欲しい物はないの？」

つて聞くと、釜伸び茶とか釜炒り玉露茶とか難しいお茶を欲しがった。

いずれ静岡とかのお茶の産地に旅行に連れて行って上げたい。

湯飲み茶碗とかも好きだから、京都とか焼き物を多く扱う場所も喜ぶかな？

などと考えながら、軽くソースをかけたアジフライを口に入れると、「うまい！」

サクサクのコロモの食感に、仄かなソース。

それにジュワッとしたアジの風味が口の中に広がる……

「飯をモツモリとかつ込む。

本当に中年の男心を驚撃にする料理を作る子だ。

「美味しいね、このアジフライ……

魚を捌くなんて、結衣ちゃんは本当に料理上手だよね」

そう褒めると、真っ赤になつて俯いてしまう。

この子には欲望に塗れてない優しさが必要だから、出来る限り褒めてあげる。

「そんな事無いです。

私は料理位しか、正明さんに恩返し出来ないから……」

恩返しなら結婚してくれって叫びたいが、グッと我慢する。

「十分だよ。

最近食生活が充実しているから、お腹周りに脂肪が付いてきてね……

「…

すこし脂肪がついただらう腹を擦りながら呟つ。

自虐ギヤクだ……

他愛無い冗談を言いながら楽しい夕食の時間が過ぎていく。

『飯をお代わりし、全ての料理を平らげてから

「『』馳走様」

と言つて浴室に戻る。

「わい、少し仮眠をとりますか……」

布団に「口口」と横になる。

因みに僕はベッドより布団が好きだ。

満腹感の為か、横になると睡魔が……

おやすみなさい……

少しだが仮眠を取った事でスッキリした。

目覚まし時計をセットしていた21時に起きて、支度を始める。

先ずは装備の確認だ。

清めの塩・数珠・強力なマグライトを2本、それとスタンガンに特
殊警棒……

何も敵が靈ばかりではない。

時には人間が敵の場合もある。

それと夜間に行動する為に照明器具は必須だ！

よくテレビや映画で、懐中電灯が突然消えたりする事があるが、強
い靈だと稀に有る現象だ。

だから用意するのが、発炎筒と軍用のケミカルライト！

前者は自動車にも積んでいるので馴染みのある方も居るだろう。

炎の力で光を出す。

火に弱い靈達には有効だが、火なので使う方も取扱いに注意が必要
だ。

後者は良くお祭りとかで見かける、光るリングとかステッキの実用版。

玩具ではなくちゃんと実用性の有る光量を持たせた物だ。

これは、ショウ酸ジフェニルと過酸化水素との混合溶液の科学発光により螢光を放つ。

玩具から軍用で利用している物まで色々あるが、靈も化学反応は止められないみたいだ。

それと信憑性は低いが電池式のランタン。

量販店に行けば、3000円程度で買える「ECHO式」の物だが、少し細工をして内部に愛染明王の札を仕込んである。

これを大量に逃げ道に置いておく。

多少の靈なら札の力で明かりを消せないが、有る程度の奴だと簡単に消す……

これは単純に僕の札に込める靈力が弱いからか？

一度靈に消されると不思議と一度と点かないのだが、使い捨てだし必要経費だから問題ない。

壊れなければリース代金で、壊れたら経費に乗せる契約をしている。

これらを腰や足に付けたポーチに入れていく。

ランタンは段ボール箱に詰めておく。

因みに今回は長瀬総合警備保障の仕事なので、その制服を着てポケットの沢山付いたチョッキを羽織る。

極力両手はフリーにしておかないと危険だから……

制服着用については、外部スタッフ扱いだから問題ない。

靴は編み上げのアーミーブーツ、コレが結構使い勝手が良い。

スニーカーは防御力が低いし、安全靴は滑り易いのでコーティネイトとしては合わないが何時もコレだ。

それに手袋だが……

本来ならば手袋をして手を守りたい。

しかし、何故か手袋をしたままで愛染明王の印を結ぶと効果が薄いのだ。

只でさえ威力が低いのに、これは致命的……

なので取り敢えず軍手は持っているが、靈絡みの仕事中は使えない。

最後に、結界を張った祭壇に祭つてある「箱」を見る。

結界とは勿論、他の人がこの「箱」を触らせない為の結界。

実際には、この「箱」をどうやって出来る奴など居ないだろ？……

忌々しい程の力を持つた「箱」。

本来なら触りたく無い箱を手に取る。

箱根細工の様に組み上がった、ルービックキューブよりも少し小さい「箱」……

コレが僕らの物語の、始まりの「箱」。

呪われた一族の生き残りの僕が面倒を見なければならぬ「箱」。

無造作にポケットに突っ込む。

2階建ての我が家の中の2階部分は全て僕の私室と倉庫と、祭壇だ。

掃除は自分でするからと言いつて、結衣ちゃんにも祭壇には近付けさせていない。

さてと、準備が出来たらから出掛けるかな。

階段を降りて、結衣ちゃんの部屋をノックし出掛ける事を伝える。

直ぐにドアを開けて顔を見せてくれる……

びつやから勉強中だったらしい、机の上にノートやら教科書が見える。

来年は受験生なんだよね……

勉強が終つたら直ぐに寝るのだろう、Tシャツにホットパンツ姿だ。

服から覗く華奢な手足が艶かしい……

仕事の前に、彼女の部屋にこもる甘つたるい匂いを堪能する。

仄かにミルクの香り！

所謂「くんかくんか」状態だ！

そんな変態行為に気が付かず、彼女は玄関までお見送りをしてくれた。

戸締りをしつかりと言い聞かせ出掛けた。

ちゃんと扉の鍵をロックする音を聞くまでは、扉から離れないけどね。

今度はスクーターでなく、愛車のキューブで現場に向かう。

田舎だけに、夜の9時を過ぎれば交通量は疎らだ……

20分程で現場に到着した。

一旦現場の前に停めて、ランタンの入った段ボール箱を降ろす。

それから昼間の内に調べておいたパーキングに移動し、後ろに積んである折り畳み自転車で再度現場まで……

靈障なのか、電子機器やら自動車・バイクは時として使えない場合

が有る。

何故かエンジンが掛からない！

「うわあ、ヤバいよ懐中電灯の灯りが消えたよー！」

とか

「電話が圈外だ！

助けを呼べないじゃんか！」

とかね。

だから人力駆動の自転車、これ最強！

僕の強靭な足腰を動力として走る自転車は、今迄に逃げ切れなかつた事は無い。

まあ捕まつたら口では済まないし、最悪は死ぬ……

軽快に自転車を漕いで現場の前へ！

見上げると、コンクリート製の建物は昼間とは違つた雰囲気を醸し出している。

確かに何かが居る気配がする……

仮設のパネルゲートを入つて直ぐに自転車を停める。

勿論直ぐに逃げ出せる様に鍵は掛けない。

「お早う御座います、榎本さん！」

元気に名前を呼ばれたかと思えば、缶コービーを飲みながら坂崎君が近付いて来る。

しかし微妙に恐怖で腰が引けているのがわかるんだ……

せわしなく視線を動かすし、懐中電灯やらラジオタンが置いてあるし。

彼なりに色々準備したんだね！

「現場の挨拶って夜でも「おはよう」だよね

業界用語なのか？

「榎本さんがお出張つて来るつて事は、やっぱコレ絡みなんですか？」

両手を前でダラっと下げてお化けの真似をする……

「まだこれから調べるんだよ！」

それより、今回もヤバくなつたら逃げるから自転車の準備をしついでね。

坂崎君の安全は契約外なんだよ

命有つての物ダネだからね！

「うわっ！」

前回みたいにアル中みたいな浮浪者に、出刃包丁を持って追い掛け

られる可能性有り? 「

廃墟に棲み付くのは、何も幽霊だけじゃない。

人間の方が多い位なんだよね。

「うん。

可能性は有るよね。

でも今回は浮浪者が住み着いた様子も無いし、ヤクザ絡みの物件で
も無い。

周りの神社やお寺。

庚申塚や日く有りそうな地蔵も石碑も無いし……
ここで事件が起こった事も調べられなかつた

どうやら建物の中に入りたくないのか、外に折り畳み椅子を置いて
休憩スペースを作つていた。

寒いし雨降つたらどうするんだい?

しかし正解だ!

ゴーストハウスの場合、建物の外には効果を及ぼさない場合が多い。

「それで、一緒に夜間巡回ですか?」

マグライトと特殊警棒を取り出して笑いかける。

「僕ら肉体労働者は、自分の足で調べるしかないんだよ。
まあ22時の巡回に行こつか?」

「ここまで調べて分らなければ、直接乗込むしかない。」

正規な手順を踏むなら、夜に建物の中に入るの愚行だ。

周りからカメラや温度センサーとかで、先ずはじつくりと異変を調べるのがリスクが少なく確実だ。

海外では「コーストハウスは割りとポピュラーなジャンルで、調査方法もそれなりに確立している。

しかし我々には、時間も金も無いから体を張るしかない。

「じゃ行こうか……

先ずは建物の外周をぐるっと歩こうか……

その後に、何時もの巡回ルートで案内をお願い。

それと歩きながらで良いから、知ってる事を教えてくれる?」

先ずは建物を時計回りで一周する……

不法投棄だらう車のバッテリーやブラウン管テレビ、それにエロ本を見つけた。

そう言えば子供の頃は、何故か廃屋探検する度にエロ本を見つけて読み耽ったものだ……

誰が持ち込むんだろう?

噂にあつた動物の屍骸は無かつたな。

しかし膝まで雑草が茂り、バッタだか分らない虫が飛び回っている。

動物の屍骸については、猫とか死期を悟ると人目に付かない場所に行くらしいが……

なにか関係が有るのかな？

さて建物外周には、手掛かりはなかった。

もはや内部に侵入するしか有るまい……

「坂崎君、外部に異常は見当たらない。
覺悟を決めて中に入らう」

既にビビリまくつの彼に声を掛けて先導させる……

そして曰く付きマンションの捜索が始まった。

第3話

地元で有名な心霊マシンション……

噂ばかりだつたが、警備員の一人が怪奇現象を目撃し、逃げ出す様に辞めてしまった。

お世話になつている永瀬社長の頼みだからと請けた仕事だが、どうやら当りみたいだ。

「坂崎君、外部に異常は見当たらない。
覚悟を決めて中に入ろ!」

既にビビつまくらの彼に声を掛けて先導をせる……

坂崎君の後について、先ずは1階のエントランスホールに入る。

この辺は、地元のヤンキーとかも探検に来たんだろう……

スプレーの落書きにBB弾か?

サバイバルゲームでもしたのか?

こんな田舎とはいえ、それなりに人目の有る場所で?

建物の入口は、内部に何も光源が無い為か、ぽつかりと闇が口を開けている様に感じる。

「クリと生睡を飲み込む……

何時までたつても怖い事に慣れる訳でも無いから怖い物は怖い。

しかし仕事だからと割り切つて建物の中に入る事にする。

1階はエントランスホールに管理人室、E・L・Vホール・集会所・郵便ポストスペースと共に部分が多い。

もつとも仕方も未だだし、機材も置いてないから、剥き出しのコンクリートの小部屋ばかりだ。

特に変化は無い。

気になると言えば、床に水溜りの跡がある事や、ジメジメしている事だ。

それに微妙だが空気の流れを感じる……

妙に土臭く、そしてカビ臭い。

普通コンクリートの建物の中に入ると、ヒンヤリするが、この建物は最近雨が降つてないのに湿気の程度が酷い。

「榎本さん……

1階と2階は問題無いんですね。

同僚が見たのは3階の東側の部屋らしいです……

血相を変えて飛び出して来て、それっきり辞めちゃいました。

3階つてのも同行して巡回した時に、その部屋に入つて……

僕は見てないんだけど、彼がいきなり叫びだして走つて逃げたから自分も逃げ出したんです。

後は、彼が恐ろしい物を3階で見たって……

それで、そのまま帰つたつくり仕事には来なくなりました」

話を聞きながら、2階に内部階段で登る。

思つた以上に内部は暗い……

階段室には窓が無い為に、外の光が何も入つてこないからだ。

途中でランタンに灯りを付けて、階段に5段おき位に置いて行く。

足元が暗いと逃げ出す時にスピードが出ないし、危ないからね。

「その彼は、どんな恐ろしい物を見たのかな?
それについては何か言つてた?」

質問をしながら2階に到着する。

2階のフロアからは居住区画で、均等にコンクリートの壁で部屋割りがされている。

1フロアが8部屋で仕切られているが、ここも仕上がりされてないの
でコンクリートの剥き出しの壁のままだ。

このフロアも落書きが多いな……

卑猥な言葉や意味不明なサイン?

あとはお決まりの

「ここの場所は呪われている

とかね……

「少し待つてくれるかな?」

どんびん進む坂崎君を止める。

じっくりと周りを見渡す……

通常、経験でいくと靈が現われる時は温度変化が、具体的には温度が下る。

身の毛もよだつとかは、物理的に温度が下るからかも知れない。

しかし、物音もしなければ温度の変化も感じられない。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、再度気配を探るが僕の靈感には何も反応しない。

まあ大した靈感も靈力も無いんだけどさ……

「このフロアは問題なさそうだよ。

でも心靈現象ってのは、特にゴーストハウス系はね……

知らない人が来ると一旦おさまるんだ。

そこからの振り返しが恐ろしいんだけどね

坂崎君は、ブルブルっと身震いして左右を見渡す。

「じゃ問題の3階に行こう。

先に僕が歩くから、逃げろって合図したら振り返らずに走つて逃げるんだ。

僕に構うなよ、僕も君には構わないから。

それとヤバイと思つたら2階からなら飛び降りるんだ。
最初に外周を廻つたけど、落下してもぶつかつて怪我をする物は無かつたし、とかしておいた。

自縛靈ならば、建物から出れば平氣な場合が多い

「ひでえ……最悪だよー。」

「肉体派だろ、僕らは！」

大丈夫だよ、社長も労災申請位はしてくれるさ」

ゆっくりと階段を登り、問題の3階のフロアに到着する……

この階段入口部分は、ランタンを3個置いておく。

最悪の場合、此処だけが脱出ルートだから田印代わりだ。

念の為に清めの塩をランタンの周りに、大き目の円を描く様に撒く。

本当に氣休めだが塩は魔を払う効果が有り、一応祭壇に祭り清めた塩だ。

ただ大量に持ち歩いて、しかも大量に使うので質より量的な感じを受けるのだが……

これで最悪の時の脱出ルートの田印は出来た。

流石に鍛えている僕らでも、3階から落ちれば最悪は死者の仲間入

りだからね。

退路を確保してから、周囲を確認する。

……ヤバイな。

ライトに照らされた周りを見て思つ。

このフロアには、思った以上に落書きが少ない。

普通は話題になつたフロアには人が結構来るんだ。

度胸試しとかで……

だから証拠に落書きを残して行く。

しかし1階や2階よりも、明らかに落書きが少ない……

「こりゃ当りかな？

坂崎君、ちょっとマジにならつか……」

依頼されている以上は確認をしないと帰れない。

覚悟をきめて、手前の部屋から覗いていく……

問題の部屋は一番突き当たりだが、本当に其処にだけ現われるとは限らない。

ライトを持つ手首に数珠をして、特殊警棒をしまい清めの塩を持つ。

念のため、坂崎君にも清めの塩を渡す。

「榎本さん、何か異様に静かですよ……」

耳がキーンって鳴るんだけど、これってヤバイのかな？」

彼も緊張しているみたいだ。

コツチも緊張で喉がカラカラだよ。

2部屋目に入る。

ここは一時期浮浪者が誰かが住んでいたのか、コンビニ弁当のパックや新聞紙が散乱している。

どこか腐った臭いがする。

しかし異常とは言えないか……

新聞の日付を見ると3ヶ月程前だな。

少なくともその頃は、怪奇現象は無くて此処まで人が登つて来ていたんだ。

続いて3部屋目に入る。

「こりは……

綺麗に何も無い部屋だ。

3部屋目を見終わって一息つく……

持っていたペットボトルの水を少し飲む。

僕が立ち止まっている間中、彼はライトで周りを忙しく照らしている。

「落ち着いて。

さあ、行こうか」

4 部屋田……

5 部屋田……

6 部屋田……

なんの異常も無い。

共用廊下部分にもランタンを設置するが手持ちが尽きた……

じつくりと逃げの準備をしているが、また異常は見当たらない。

少し拍子抜けだ……

もしかして、初日は反応しないのか？

そんな楽天的な思考が頭を掠めた状態で、7部屋田の前に立つ。

問題の部屋の隣だが、ここで始めて異常に気付く。

「ライトを当てた室内に、小さな白い物が飛んでいる。

「ジジジジジジジ……」

突然、耳元で羽虫の音が聞こえた。

暗がりに灯りを持って歩いているんだ、虫ぐらじ寄ってくるだらう。

しかし、この部屋だけにしか虫は飛んでいなかつた。

用心しながら部屋の中に入ると、足にジャリジャリと違和感が……

右足を上げて見ると、床一面に黒い塊が？

ライトで照らすと、ひわひわと動き回る虫・虫・虫の屍骸と生きている虫達。

「虫?

とその屍骸か……
こんなにか……」

見ればその部屋には黒い絨毯と見間違つ程の、大量の虫と虫の屍骸が有る。

ハエやゴキブリ、カナブンやら色々な虫が積み重なつて死んでいる

……

毛虫や芋虫みたいな物は、つねづね動いているし。

虫の屍骸？

動物じゃなくてか？

パソコンの書き込み情報と違う、初めてだらつ座異に立ち止まって考え込んでしまう。

ひょいって脇から室内を覗いた坂崎君が呻く様に

「うわっ 昨日は無かったですよ。
こんな虫の屍骸なんて……」

そう呟いた。

彼の心臓は既にバクバクだらり、震えてるのが掠れた言葉でも分る……

調査初日から、反応してくれると嬉しくないなあ。

「どうやら我々は歓迎されているみたいだな」

隣の部屋からも微かだが、物音が聞こえ始めた。

ウオ　カチッ　カチッ　アグウ　カチッ

耳を澄ませば、なにやら呻き声の様なものと何かを叩く音だ。

2人に緊張が走る。

「榎本さん、なにか音がしませんか？
隣から……

見に行くの嫌ですよ僕は……」

今まででは静まり返っていた建物の中で、突然僅かだか異様な音が聞こえ始めた。

坂崎君も聞こえているなら間違いないのだろう。

「これが僕らのお仕事でしょ？」

我々は体を張らねばならない肉体系労働者だからね。
ここからは僕が先に行きます。

逃げろと言つたら、何があつても建物の外には最低でも出て下さいね。

後は自己責任でお願いします」

そつ言つたら、情けない顔になつた彼の肩を叩いて気合を入れる。

問題の部屋を出る前に、退路を確認する。

途中に設置したランタンは正常にボヤけているが灯りを放つていて、階段の3台も心強い光を放つていて……

しかし、念の為に頭の中でシミュレートする……

最悪の場合、用意した照明が消されて真っ暗になつたら。

先ずは照明の確保だが、発炎筒にしよう。

火はそれだけで、魔を退ける力となるし、光量も大きい。

念のために部屋の前にケミカルライトを一つ取り出して、くの字に曲げて中の液体を化学反応させてから床に落とす。

この光の左側が階段だ。

坂崎君を見れば、僕の後ろ3m位の所に立っている。

両手には懐中電灯と清めの塩をそれぞれ持っている。

無言で領き合ひ、問題の部屋に向かった……

入口から正面に開口があり、外の夜景が見える。

東京湾を一望し、遠く千葉県の木更津工場地帯の灯りが見える絶景のビュースポット……

入口から中を覗いても何も居ない。

覚悟を決めて室内に一歩踏み出す……
何も居ないな。

もう一步中に入つて中を伺う。

喉がカラカラだ……

フツと壁際に目をやると、居たつ！

「ちらりに背を向けて立つてゐる、多分40歳位の中肉中背の中年の男が……

青白ストライプのバジャマを着て何かを呑んでゐる。

ウォ カチッ カチッ アグウ カチッ

左手の人差し指で壁の一部分を叩いてゐる。

「うつうわあ……

榎本さん！

アレッ、アレッて本物ですよね？

向こう側の壁が透けて見えて……

あがががつ

坂崎君がパニックに成り掛けで騒ぎ出した！

「ちよ坂崎君、静かにしないと……」

ほんの一瞬だけ目を離し、坂崎君に注意して再び中年の男を見ると

……

今まで呻きながら人差し指で壁を叩いていたのを止めている。

少しづつ、本当に少しづつ体を此方に向け始めた……

「あつひや榎本さん、どうするんですか？」
はつ早く逃げまよ「うよ

坂崎君はもう無理か？

「坂崎君、先に逃げろつー。

僕は一撃でえて様子をみるからつー」

やつまつとい、腰を抜かしながらも廊下に這つて行く坂崎君……

その緩慢な動作に、少しほは時間稼ぎが必要だと理解するー。

愛染明王の印を組み真言を唱える……

「おん まかひあや せんぐわ こゑじ や ひめみわ ひめ ねじま じゅ
く うん ばん いへ」

真言を唱え、裂帛の気合を奴にぶつかるー。

渾身の靈力を乗せた愛染明王の真言を受けて、奴は……

流石の奴も……

アレ? 奴は……

その靈体を僅かに揺らしただけで、此方を向いた。

精氣の無い表情で、しかし此方を睨んでいる。

「やべえー！

効いてない？

手順に間違いはなく、靈力も乗っていた真言をモノともしないのか？

奴の落ち窪んだ暗い眼窓を見てしまった。

「あがつ……あががつ……」

奴は手を伸ばしながら、ゆっくりと近付いてくる。

「これは、戦略的撤退だ！」

僕は奴から目を離さず、「ゆっくりと出口まで下がり始めた……

第4話

横須賀に有る、施主が資金繰りに困つて建設中止になつてゐるマンション。

「こんな」時世なら良くある話だ。

しかし再開の目処が有るのか？

債権者が事業を受け継ぐのか警備を開始した。

何時も世話になつてゐる長瀬総合警備保障の社長から、その物件での怪奇現象について相談が有つた。

何でもバイトが一人辞めてしまつたので調査をしてくれ！

そう頼まれて、早速下調べをしてから乗込んだ。

現在その怪奇現象を起こした本人（靈体？）を確認。

先制攻撃とばかりに、愛染明王の真言をぶつけてみたが……

全く効果が無く、現在見詰め合つています。

「あがつ…………あががつ…………」

奴は右腕を此方に伸ばしながら、ゆっくりと歩き出している。

ちゃんと全身を現し、足を使い律儀に歩いて……

「これは、戦略的撤退！」

駄目元で清めの塩をばら撒き、振り向いて逃げる。

出入口に落としておいた、ケミカルライトを田舎に部屋を出て左通路を見る。

通路沿いに置いたランタンも正常に点いている。

ダッシュで階段返走り、後ろを振り向くと……

奴が、丁度部屋から出て此方を向いて歩き出すのが見える。

「坂崎くん！」

奴が追ってくる。

取り敢えず現場からも離れるぞ！

先に逃がした彼に檄を飛ばし、階段を駆け下りる。

一階まで到着、後ろを振り返らずに一気に外まで出た所で、坂崎君に追いついた。

肩に手を置いたら

「ひいい」

とか騒いだが、僕を確認すると走りだす。

2人で仮設ゲートの前まで到着し、少しだけ気が落ち着いたので後

ろを建物を振りかつて見れば……

真っ暗な建物の3階部分だけ、僕が設置したランタンの灯りが窓から漏れている。

その窓からコラコラとした人影が3階の角部屋に見えた。

「彼はあの部屋に御執心みたいだな。

自縛靈かと思ったが、愛染明王の真言が全く効かなかつた。
まるで何も無い空間に飛ばした見たいに……

坂崎君、明るくなるまで中には入れない。

夜が明ける迄は此処で待機だよ」

本当は、昼間でも心靈現象は起こる。

別に連中は夜型ばかりじやないつて事なんだ。

でも、懲々怖い思いをさせるわけにも行かないから、日が出たら再度一緒に行こうと誘つ。

朝の八時になれば、交代要員が現場に来る。

その前に再度、現場を確認し装備を回収する。

今も、問題の3階を見詰めながら話しているが、彼はまだコラコラと窓際に立ち竦んでいる。

まるで此方を見ている様に……

取り敢えずは落ち着く為に、清めの塩を使い円陣を畫く。

その中に坂崎君が休憩用に持ち出していたパイプ椅子を置いて座る。

危険を感じたら、直ぐに自転車で逃走出来る準備もある。

しかし夜通しあんな影が窓から見えていると、噂になるな間違いなく……

へたり込んでいる坂崎君に、なにか暖かい飲み物を買ってきてくれと千円札を渡しお願いする。

彼は少し現場から離した方が良い。

僕から受け取った千円札を手に、フラフラと外へ出て行った……

最悪、彼が戻つて来なくても良い。

こんな経験をして、戻つて来る方が異常だらう。

清めの塩で簡易な結界を張つたが、一応愛染明王の印を組んで置く。

そして考える……

今も3階でフラフラしているアレ……

只の靈体じゃない。

えじい経験から導き出したのは、「生靈」だ！

パジャマ姿と言つ事は、こんな時間だし本体も就寝中なんだらう。

無意識に寝ている時に生靈を飛ばしている可能性も有る。

顔は酷くやつれて落ち窪んだ眼窩をしていたから、本体の顔を特定するには無理だらう。

本体もあんななら、それは酷い状態だ！

しかし、入院中つて線も……

「あつ熱つ……

ああ、坂崎君か。
脅かさないでよ」

熱々の缶を頬に当てられ驚いて現実に引き戻される。

「アイツ……まだ居ますね

坂崎君は此方を見ずにポツリと零した。

アレだけ怖い皿に呑つたのに戻つて来るとは、大した奴だ。

「ああ、どうやらあの部屋に問題が有るんだろうね」

熱い缶のフルトップを空けて一口飲む。

「んつ？

坂崎君、なにコレ?
カレーリゾット?
はあこれ何なの?

カレーは飲み物とか大食いタレントが言つてたけど、まさかダイドードリンコつて、ええ？」

ショート缶だから、てっきりコーヒーかと思えばカレー？

缶をマジマジと見れば、ダイドードリンコの

「どひどひ嚥込んだカレーラゾット」

だと…

ツブツブのコンニャクの食感がまた空腹を促すのか？

流石はダイドードリンコ…

ネタで仕込むには最高のドリンクだよ……

そんな彼の手には、伊藤園の

「なめ」・「カメ」・ネギ入りみそ汁」

を持つている。

「伊藤園さん……

ダイドードリンコさん……

企業的にアリな戦略商品なんですかコレ？」

そのまま椅子に座り込み、残りを飲む……

薄口のサラサラしたカレー味で飲みやすいかな？

インパクトは『デカかつたが、味は基本を抑えていたので飲み干した。

驚かされたが、まあ美味しいと言つて良い商品だった。

しかしカレー臭が少し口に残るかな……

「何処で売つてたの？」

「このキワ物商品、初めてみたよ」

坂崎君もみそ汁を飲み干して

「ああ、その先の懐かしい雑貨屋みたいな商店の自動販売機に有りましたよ」

雑貨屋？

昼間来た時に入つた、ロリッ子が店番していたアレか！

流石に外の自販機の商品まではチェックしてなかつたな。

結衣ちゃんの為に、今度ネタで買つておくか……

そんな馬鹿話をしながら時間を潰していると、午前3時半過ぎに問題の影は消えた。

明け方、周りが明るくなつてから再度建物に突入する。

「坂崎君、怖いなら外で待つていってくれても良いよ。
今日は資材を回収したら引き上げだから。」

長瀬社長には、僕から連絡をいれるから

建物の入口に少し入り、外に居る彼に話し掛けた。

大分怖い思いをしたんだから……

「榎本さん……

僕、今晚も警備のシフトに入ってるんですよ。
今晚はどうしたら良いのか

そう良いながら、建物の中に入つて来る。

結構肝は据わつているんだろう。

初めてじゃない心霊体験だが、普通なら怖くて仕方ない筈なのに、
なんの対抗手段も持つてないのに。

「いや、今晚は建物の外部からの警戒にしよう。
僕も、もう少し調べてみるから……

危険な奴が、本物の心霊現象が発生したのは確かだ。
でも、公表すると面白がつてくる奴とか興味本位でくる馬鹿が必ず
居るから。
君はそいつ等を建物に侵入させない事が仕事だよ」

溜め息をつきながら、これから事を考へる。

「交代の連中は7時半に来ますが……

彼らは昼間は建物内に入つても平氣ですかね？」

「昼間の連中も中には入れない方が良いよね。

理由は……

教えないほうが良いかな。

また辞めちゃう奴が出るかも知れないし。

7時を過ぎたら、長瀬社長に報告をするから交代要員に指示して貰おう

階段を登り、3階のフロアまで登つてきた。

室内の窓から朝日が差し込み、廊下の部分を照らしている。

朝もやの中に、幾つもの光のラインが走つている……

幻想的だけど、奴はもう居なくなつたのかな?

問題の部屋の前に来る。

氣休めだが、数珠と清めの塩を構えてから中に入る……

何も無い、誰も居ない室内。

タベ奴が立つていた、叩いていた壁の部分を見る。
特に問題は無さそうな……

「アレ?

これ何ですかね。

何か壁に書いてありますよ……

ローマ字に数字かな?

でも掠れて……

何て書いてあるんだる

彼の見ている部分を覗くと

「ん……

FL + 1 . 000 か。

これは仕上りのフロアレベルから 1 m 上の高さを示しているんだよ

関係無さそうだな。

もう一度、周辺の床や壁を見たけど気になる部分は何も無い。

叩いていた壁には窓用の開口があり、外の景色が良く見える……

角部屋だと 2 方向が外部に面しており、採光が取り易くそして値段も高くなる。

この室内の広さと最上階の角部屋と言つ立地を考えると、相場でも 4 000 万円台かな。

正面の大きな開口は海を一望出来る作りになつており、此方の窓は山側……

丁度、ロリッ子商店の通りが見渡せる。

ああ、アレが妖しい商品を売つてゐる自販機か。

丁度ロリッ子が店から出てきて、母親かな？

女性と 2 人でタクシーに乗込んで行つた……

平田の早朝にか？

「榎本さん?
どうしました?
ボーッと窓の外を見て……
何かありましたか?」

坂崎君が不審な顔で此方を見ている。

「ああ……
さつき君から貰った、妖しい缶ジュース?
アレはあの自販機で買つたんだね?」

窓の外を見ながら聞くと、ヒヨイッと覗きながら

「そうですよ。

昼間は良く買い物に行くんですよ。

結構な美人の奥さんが店番してるんですよね、えへへへ」

彼は、年上のお姉様属性で、多分M男君だと僕は予測している。

時代の最先端は口りなのに、流行に逆らつから彼女が出来ないんだぞ……

全く、口リは正義!

日本の未来を背負つのは口リと、それを尊重する紳士だけなのだ。

育ちすぎた女性は、出産率の低トやシングル率も高いのだよ。

昔エロい人が言つたではないか。

人は石垣、人は城。

生めよ育てよ、と……

もつと若い段階で結婚を奨励した方が良いのだよ。

「榎本さん……

言葉が駄々漏れしていますよ。

そして間違っています。

女性とは熟成してこそ、その美に磨きが掛かるのです。
ダイヤの原石とか言いますが、磨かなければタダの屑石と変わらないのです。

昔エロい人が言いました。

肉も果物も女性も、腐り掛けが一番美味しいと……
発酵食品を見てください。

納豆・チーズ・ヨーグルトいやケフィアです。
全て美味しい物では有りませんか！

青い果実など、苦くてしょっぱくて食べれませんね」

「ひ、ハイッ……

腐つてやがる、年上お姉様趣味かと思えば……

更に高みに登りやがった。

熟女だと……

無理、無理だよ僕には……

「食わず嫌いと思われても、僕はフレッシュな？もぎたての果実が食べたいんだ」

話は平行線に突入にたま、全ての機材を収集に建物を出る。

時計を確認すれば、午前7時少し前……

では長瀬社長に電話を掛けるかな。

内ポケットから携帯を取り出し、登録している番号を検索して彼の携帯に連絡する。

何度もかの呼出音の後に繋がった

「…………おはよう、榎本君。
昨夜は」「苦労様だったね。
で、どうだった？」

「昨夜、坂崎君も確認しましたが……

居ましたよ、痩せこけた中年の男が。
しかし靈体かと思いましたが、愛染明王の真言が通じなかつた……
僕は生靈かと思います。

ええ、お払いは出来ませんでした。

これは、調査が必要なので警備については建物の廻りだけで

「…………君から見て危険かい？」

危険か、危険でないか……

心靈現象など危険以外の何者でもないと思つけどね。

「危険だと思います。

残念ながら、僕の通常の技では効果が無い。
ならば、原因を探つて対策を講じるか……」

「……より強い霊能力者をぶつけるか、かい？」

「そうですね。

しかし強さと金額が比例するとは限らないこの業界ですから……」

無論、本物は居る。

しかし彼らは総じて高い除霊料金を請求する。

己の命を賭けて挑む事と、自身の技術に自信が有るから……

「榎本君で何とかならないかな?
日数は掛かつても構わない。

とは言え、うちの警備期間は今月中だから
正味3週間だけね」

3週間か……

生靈の人物の特定と、その怨嗟の根本を探し出すにはギリギリかな。

「やるだけの事はしてみますが……

見通しが立つまでは、警備を外周のみに限定して下さい。
多分、昨夜一晩中3階のフロアに徘徊する影が居ましたから……
興味本位な連中が来る可能性が高いですよ」

「それで構わない……」

出来れば原因を突き止めて欲しい。

駄目なら、次の警備会社に申し送りをするまでだが……」

そう言つて電話を切つた。

「さて、調査しますかね……」

第5話

長瀬総合警備保障？

主に商業ビルの巡回警備を請けている警備会社だ。

社員60人の中小企業に分類されるが、社員教育が充実していく商品を扱うテナントを擁するビルオーナーからも信頼は厚い。

「榎本君しにて、難しいか……」

長い付き合いの中で、彼に頼んで解決出来なかつた物件は無い。

逆に他で調べて貰つて問題有り・解決出来ない、と言われた案件も靈障が無くなつたと報告を受けた事がある。

つまり彼が何もしていない・調べても何も無いと報告を受けた。

確かに、その後に靈障は治まっている……

どんな案件でも、彼が関われば治まっている。

もし自身が解決したならば、正規に報酬を要求するし此方も払う用意がある。

他で危険と判断された物件を解決したのだ。

個人事務所としても、随分な宣伝になるだろ？……

彼は個人経営だからと経費は掛からないと、相場よりも安いし明朗会計だ。

ちゃんと必要経費や使った機材の項目を記載した見積書を出してくる。

あやふやな表現も無いし、労務費だって実働日で換算している。

心靈を抜かして調査事務所として一般会計に廻せる内容なんだが、彼は有名になる事・注目を集めることを極端に嫌がる。

良く居る自称靈能力者の一式幾らで、成功したら報酬を吊り上げたりもしない。

「何故なんだろ? ねえ……

危険な仕事なのに商売つ気が無いのは、気になるんだけどね。

生靈か……

たしか生靈や死靈を得意とする靈能力者が居て、仕事を紹介して欲しいって言っていたな……

梓巫女の桜岡霞か。

お試して使ってみるか。

偉い美人さんらしいし、榎本君も殺伐とした靈障現場が華やぐから嬉しいだろう

そう言って彼女に連絡を入れる事にした。

夜勤明けで自宅に戻ると、台所に朝食が用意してあった。

結衣ちゃんが、オニギリを3個と甘めの卵焼きを作つてテーブルに用意してくれたんだ。

急須と湯飲みもセットされている。

彼女は既に学校に行つたんだろう。

大人しく自己主張の無い彼女は、昔から苛められていた事が多かつたらしい。

最近のガキは不良でなくとも、苛める側に廻るのなんて普通だ。

少しでも他と違えば、イジメに発展する。

しかも陰湿ときていやがる。

先生達も事なき主義でイジメを絶対認めないし、有つたとしても知らなかつたとか平氣でぼぞく。

だから筋肉同盟の友人や、その筋の仕事関係者を集めて運動会に参加したんだ。

自慢じゃないがイケメンでも何でも無いオッサン集団だが、厳つい顔と肉体には自信が有る連中だ。

結衣ちゃんを苛めたら、筋肉馬鹿の集団が何をするか分らないからな?

まあ口リツ子を囮む肉体派の連中の輪を見て、彼女をビリーハンサムとは思ひまい。

逆に彼女が孤立してしまつかと心配もしたんだが、何人かの友達もできただみたいだ。

もし苛める奴がいたら、構わず相手に呪いを掛けるけど。

結衣ちゃんは実の母親とその交際相手の男達に、家庭内暴力を受けていた過去があるから……

嫌な過去を思い出させる様な奴には、死ぬほど後悔させてやる。

急須をフタを開けると、ほつじ茶の茶葉が入っている。

ほつじ茶を美味しく淹れる方法は、沸騰したお湯を一氣に入れる事で香ばしい香りが引き立つ事。

多めにお湯を急須に入れて茶葉が開くのを待つ。

茶葉が開くまで暫く待ち、その間に電子レンジでオーブンを暖める。

30秒程待つて急須にお茶を注ぐ。

良い香りだ……

オッサンはお酒とお茶が大好きだからね。

電子レンジからオーブンを出して一つを齧る。

具は梅干か。

彼女は必ず複数の具を用意するから、他の2つは違う具材だひつ。立つたままで一つ皿のオーブンを食べ終え、残りと湯呑みをお盆にてのせて応接セツトに向かつ。

ソファーに座り、ボンヤリと先程の調査について考える……

生靈……

箱が反応しなかったのは、大した相手ではないのか食指が動かなかつたかのどちらかだ。

つまり、アレによる強制終了は無い。

有つても生靈とは、文字通り生きている相手がいるのだから後味が悪いから……

情報を整理しよう。

先ずは奴の服装だが、青白ストライプのパジャマだ。

これで特定は難しい。

病院のお仕着せのパジャマだったり直ぐに特定できるが、良くある市販品らしいパジャマでは……

それこそ付近の病院の入院患者を虱潰しで探すしかないし、毎日同じ柄を着ていると限らない。

表情だが、見たのは落ち窪んだ暗い眼窩の顔で有り、これも特定は難しい。

生靈の表情は千差万別で、酷い顔をしていたり怖い顔をしていたり……

逆に普通だつたりもする。

つまりは、見た目では個人の特定は出来ない。

次は、奴の行動だ。

3階の角部屋に固執する意味が分からぬ。

あの部屋の中で、何か心残りな出来事が有ったのか？

工事中の建屋の中での事だと、工事関係者と考えられる。

建設に携わった連中で、長期療養中の奴が居るか？

この建物は、内装が手付かずだ……

それにはあの部屋に入る工事関係者も絞られる。

具体的には現場監督・型枠大工・鉄筋工・鳶土工・墨出工、後は埋設配管を行う電気・設備工の連中だ。

これは、当時の現場監督を探し出し金を握らせて調べをせるのが一番だ。

当時の作業日報や作業員名簿とかも有るだらつから、名前が分かれば調査はし易い。

最悪は資料だけ貰つて、別枠で興信所を使つても良いか長瀬さんと相談してみるか……

あと考えられるのは、窓の外の景色だけビ。

これも特定は難しいな。

見える景色全てを調べてたら、もう週間じゃ終わらないよ。

考えに耽つていたら、全てオーギリを完食していた！

折角、結衣ちゃんが作ってくれたのに味わう間も無く完食つて？

温くなつたほうじ茶を飲み干してから、食器を洗い乾燥器の中に入れておく。

さて、風呂に入つてから仮眠をとるかな。

寝不足では、考えも纏まらないだらつ……

携帯電話の田覚まし機能の電子音で田が覚めた。

時刻は、午後3時……

そろそろ結衣ちゃんも帰つてくるだらうから、グウグウ寝てこる記
にまいかない。

ベットから起き上がり、部屋着に着替えて簡単な身嗜みをする。

イケメンでない分、清潔感は持たなければ！

窓の外を見ると、雨雲が広がつており今にも雨が降り出しそうだ。

テレビを付けて、天気予報がやつているかを調べる。

ケーブルテレビのお天気専門チャンネルを見れば、神奈川県東部二
浦半島は……雨だ。

明日の午前中まで、降水確率は80%を越えてくる。

「やれやれ、坂崎君も大変だな。

雨なのに外で一晩中警備をするのか。

途中で様子を見に行こうかな……」

昨日の今日で、一人で心霊現場に夜間警備じや可憐そうだからね。

差し入れ位はしてあげましょ。う。

結衣ちゃんにお帰りを言つ為に、1階の居間に移動しようとしたら、携帯が鳴り出した。

ディスプレイを確認すれば

「長瀬総合警備保障？長瀬社長」

となつてゐる。

何か有つたのかな？

「もしもし？榎本です」

「ああ、榎本君か。

今、電話は大丈夫かい？」

「ええ、仮眠から起きたといふです。
何か有りましたか？」

「ふふふふ、榎本君に良い知らせだよ。
生靈に詳しい専門家をそちらに送るよ」

「それでは今回の件は、その人に引継ぎをして元々で良いですか？」

生靈の専門家なら、お任せして平氣だろ。う。

長瀬社長が頼む位だから、裏は取れてる本物なんだろう。

「いや、今回は彼女と協力して当たって欲しい。

梓巫女の桜岡霞君だ。

本物だつたら、今後もお付き合いを願いたい相手なんだ。
宜しく頼むよ

桜岡霞？

「本当に有つた怖い」

とか

「信じるか信じないかは貴方次第です」

とかに出でくる靈能者じゃないか！

「長瀬さん？」

そんな大物なら僕は要らないですよね？
面倒くさいから嫌ですよ」

僕自身が脛に傷を持つ身なんだ。

お茶の間の有名美人靈能力者なんかと一緒にだったら、悪田立ちして
しうつがないぞ。

「そこを何とか頼むよ。

彼女はかなりの美人らしいし、恩を売るのは良い事だと思つた？

彼女のプロフィールを思い出す。

巫女さん……日本美人……巨乳……性格はドS……お姉さん属性……

…却下だ！

僕は口りつ子が大好きなんだ！

でも坂崎君にはご馳走だね。

「靈能力者同士は共闘は難しいんです。

お互に、同業者には秘密にしたい事が有りますから。
どうしてもと言うなら、今回は僕が辞退しますが……

申し訳有りません」

そう電話越しだが、頭を下げる。

「そりゃ……

では仕方ないな。

僕は榎本君の方を信用しているから、残念だが彼女の方を断るよ。
引き続き調査を頼むよ」

そう言って電話を切られた……

申し訳ないけど力有る靈能力者と共闘すれば、箱の秘密がバレるかも知れない。

危険は犯したくないんだ。

やれやれ、まさか辞退する程に嫌がるとはね……

今、売り出し中の美人靈能力者を遠ざける意味が分からぬ。
業界の先輩として、榎本君は本当の靈能力を持ち安くて堅実で有名
なんだ。

彼は自分では思っていないだらうけど、この業界では

「困つたら榎本心靈調査事務所へ」

つて言われてるんだよ。

大手各社は専属の靈能力者を抱えているから触手は伸ばさないが、
機会が有れば紹介して欲しいと依頼も有る。

彼が嫌がるなら、彼女を断るのは構はないのだが……

「電話で話した感じでも、かなり気の強い女性だった。

先任者から協力体制は嫌だからなんて言つても、引き下がるかどうか
か……」

気が重いが、仕方ないか。

デスクに貼つてある付箋に、彼女の携帯電話と事務所の電話番号が
書いてある。

「先ずは、事務所から掛けるかな……」

気が重いためか、指はかなりゆっくつとボタンを押していく。

仕事を頼んで直ぐにキャンセルだからな……

結果だが金は要らないが、この件には関わると強く押し切られた！

すまない、榎本君。

君は、その、かなり恨まれてしまつたよ。

先程の彼女の剣幕を考えても、実力不足で断られたと思つたんだろ
う……

「俺の仕事に口出しそるな！」

それ位、言われたと受け取つているぞ。

あれなら今晚にでも、現場に押しかけるな。

あてびりあるのか……

もつ一度、榎本君にあやまりの電話をかけるのも億劫だし。

なるようになれば良いかな？

僕は、桜岡君の依頼は取り下げた。

だから彼女が、その後にどう動くかは彼女の自由だな。

うん、そうだ！

もう良い大人の男女なんだし、あとは彼らの問題だ。

なにか有れば、榎本君も連絡してくるだらう。

彼らの事を頭の隅に追いやり、次の仕事の事に頭を切り替える。

「結衣ちゃん、おかわり！」

元気よく茶碗を彼女に差し出す。

「はい、どうぞ。

たくさん食べて下さいね」

「飯を大盛りによそつた茶碗を渡してくれる。

今夜のメニューは、八宝菜・揚げだし豆腐・ホウレン草の御浸し、それと卵焼きに油揚げとジャガイモの味噌汁だ。

昨夜は揚げ物だったから、色々と飽きない様にメニューを考えてくれる。

この八宝菜も、豚肉・チンゲン菜・椎茸・人参・竹ノ子と具沢山だ！

野菜をちゃんと食べる様に考えているのだろう。

オッサンに配慮したメニューが多い。

勿論、僕は彼女の手料理は何でも残さず食べるけどね。

「そうだ！」

今晚も様子見だけだけど、昨日の現場に行つてくるよ

坂崎君の様子見と、適当なホカ弁でも買つて差し入れよう。

「大変なんですね。

体に気を付けて下さいね。

何か残り物で、お夜食を作つておきますから

はにかみながら、仰つて下さいました！

ええ子やなー、結衣ちゃんは……

やはり家庭的な口リツ子つてサイコー！

彼女との幸せな同棲生活？を守る為にも、変に目立たない様に気を付けなければ駄目だね。

第6話

長瀬社長からの電話を切つてから、デスクの椅子に深々と座り考える……

外を見れば、暗い雲が立ち込めてきたわね。

今夜は雨かしら？

先程の話を噛み碎いて考えてみる……

この私に一度仕事を依頼して、直ぐにキャンセルするなんて……

先方は理由を濁したけれど、先約の靈能力者が私との仕事を嫌がつたのだろう。

榎本心霊調査事務所……

調べてみても、大した事も無い弱小の部類でしかない。

本人一人だけの個人事務所でしかないし、大手企業と専属契約を結んでいる訳でもない。

ただ数少ない本物の靈能力者である事は確からしい。

しかも、この業界では珍しく明朗会計と言つ変な事務所らしい。

何があるか分からない、命懸けの仕事をテンプレートみたいな価格設定で行っているとは、欲が無いのか馬鹿なのか？

しかし……

長瀬社長は、私よりも相手を取つた。

私の実績は知つている筈だし、彼が調査して靈障は生靈が原因だと報告し生靈の対処は不得意と知りながら

あえて私の方を断つた。

何か彼に有るのだろうか？

安いから？

長年の付き合いから？

私が女だから？

何か、私では勝てない要素が有るのかしら……

私だって厳しい修行に耐えて、この力を手に入れたの。

靈障で苦しんでいる人達を助ける為に――

それでお金が貰えるなら一石二鳥だしね。

でもついカツとなつてしまい、お金は要らないけど、この件には関わると言つてしまつが……

「後悔させてあげるわよ。

この私を袖にしたんですからね。

おーっほつほつほー！」

桜岡除霊事務所内で響き渡る高笑い……

所長室の隣で待機していた電話番のバイト

薺 菊里
あざみ きくり

と

田鶴 更紗
たづる さらさ

の2人は頭を抱えていた。

「また霞さんの高笑いが始まつたわね」

「うん。

今日は一段と切れが良いわ……

よっぽど良い事は有つたのかしらね？」

実はテレビにも出ている桜岡霞は有名人だ。

しかも美人だし巫女服だし、胡散臭い霊能力者だし……

だから引切り無しに電話やメールが届く。

仕事の依頼だけでなく、冷やかし・嫌がらせ等の迷惑な問い合わせ
が殆どだ。

中には、他の（自称）霊能力者からの果たし状？

や見た目に騙されたのか結婚の申し込みとか……

サインと実印を押した結婚届が送られてきた時にはドン引きした。

添えられた写真は……

本人の名誉の為にも伏せなければならぬ人物だつたとだけ、書いておく。

あと馬鹿に出来ないのが、郵便物と小包だ。

これも封を開けると、言葉に出来ない不思議な物が多く有る。

流石に爆発物とかは無かつたが、嫌がらせの剃刀やゴミなどは当たリ前。

怪しい人形や、どう見ても危険な手作りの何かも送られてくる。

これらは金属探知機に掛けて、知つてる人以外で送られてきた食べ物は殆ど捨てる。

人形やら呪術的な品物は、霞さんに見て貰い相手に返す。

相手が分からなければ、お払いするか……

捨てる。

一寸した貴金属やブランド物などは勿体無いと思つたが、呪術の中

には一寸した金品に呪いが掛かっており、知らずに受け取ると呪いが発動するとか……

しかも、その呪いは持ち主に富を与えるが代償を求められる。

その代償を知らずに停滞すると、呪いが発動するという巧妙さだ。

なんて嫌な世界なんでしょう……

でも大抵の物には、そんな物は掛かってないので内緒でリサイクルショップに引き取つて貰つている。

結構な金額になつていて、良い臨時収入です。

等と考えていたら、靈さんが所長室から出てきて

「今夜は仕事で出掛けたから、私は先に帰つて仮眠するわ。
貴女達も定時になつたらお帰りなさいな」

そう言って、事務所を出て行つた。

「今夜はテレビ関係の仕事も無かつたわよね？」

「そうね……

予定表にも、除霊現場の仕事は無いわ。
急に何か有つたのあしらね？」

私達は、あくまでも電話番のバイトであり靈障現場には同行しない

私達は、顔を見合わせながら考えたが、特に問題ないとthought。

のだから……

「更紗ちゃん、今日帰りに上大岡のタカノフルーツパークーに寄つて
いかない？」

「いいわよ。

特製パフェを一人で食べましょ！」

3000円もする巨大なフルーツてんこ盛りなパフェを思い浮かべ
ながら、残りの手紙のチェックをする手を早めた。

彼女達に指示を出し、地下駐車場に停めてある愛車に向かつ。

スカイラインR34・GTターボ！

ATT仕様だが何ちゃってスポーツカーが気に入っている。

この手の車でATT仕様なのは何だかなーって思うけど、マニアアル
はかつたるいし別に走りに拘りが有る訳でもない。

駐車場を出て、のんびりと国道を自宅へと走る……

15分ほど走るとフロントガラスにポツポツと水滴が付きだした。

「ああ、降り出したわね。

雨って嫌いなのよね、濡れると髪が重くなるし服は透けるし……」

前にテレビの除霊現場で豪雨に合ひ、只の自然現象だったのに靈障とか騒いで……

びしょ濡れのまま撮影を続けたのよね。

あのエロティレクター！

ジロジロと私を覗きしやがつて！

今、思い出しても腹が煮え繰り返すわね。

その回の視聴率が高かつたのは、除霊の内容でなく私の透けた巫女服だとか言いやがつて！

あれからよね、変な手紙やメールが来る様になつたのは……

「梓巫女霞・濡れ濡れ除霊スペシャル」

つてどんなエロビデオのタイトルなのよ！

ゴールデンタイムで、こんな特番を放映するから大変なんだからね。

TV局の役員を軒並み下痢にさせたら謝罪会見をしたけど、世間に定着した私のイメージはガタ落ちだわ！

しかし正式な除霊には、決められた手順が必要だし精神集中にも欠かせないので仕方ないのよ。

しかも今夜は、同業者に宣戦布告みたいな事をしなければならないのだから……

バツチリ正装で行かなければならぬわね。

今夜の対策を考えていたら自宅に着いた。

新興住宅街にある低層マンションが私の家。

巫女が神社でなくして、近代的なマンションに住むなんて変だと思うかも知れないけどね。

私は巫女と言つても、神社で奉仕する緋袴の巫女とは違つ。

現代の巫女は神職ではなく神社に奉職する女性の総称だ。

梓巫女とは古来より特定の神社に所属せず、各地を渡り歩いて人々を助けた女性達だ。

吉兆の占い・厄落とし・口寄せを行う先代の梓巫女に師事し、適正があつた厄落としと口寄せが免許皆伝となつた。

誰も居ない一人暮らしは気楽な物だ。

玄関を開けて、セコムを解除しベッドにダイブする。

今夜は仕事だから、このまま眠つてしまいたいが……

化粧を落としてお肌の手入れをしなければ大変な事になる。

只でさえ不規則で有りストレスの多い仕事なんだから、お手入れを怠ると大変なのよ。

菊里や更紗みたいにピチピチして水を弾く肌でなく、私はしっとり肌なんですからね！

疲れた体に鞭を打ち、バスルームに向かう。

夕食？

勿論デリバリーよ！

手作り？

ナニを女性に幻想を抱いているのかしら？

最近は蕎麦屋か中華屋やピザやデリバリー ガスト等、色々有るから迷っちゃうわ。

あと欠かさないのは焼酎ね！

百年の孤独や森伊藏が最近のお気に入りよ。

ワイン？

シャンパン？

カクテル？

なにそれ？

かつたるい飲み物ね！

今夜はピザのカレーモントレーのMサイズに焼酎の抹茶割りで決まりね！

残念ながら、彼女は見た目は美人だが中身はオッサンだつた……

愛車のR34・GTターボで問題の建物の前の仮設ゲート前に横付けする。

シトシトと降る雨の中、問題の建物を見上げれば……

確かに禍々しい何かを感じるわね。

特に3階の角部屋が怪しいと言っていたが、残念だが私には其処まで特定出来る力は無い。

見ただけで場所や原因が特定出来るなら苦労はないのだけど……

そんな万能な靈能力者など歴史上の有名人物くらいだろう。

ボーッと見上げていたら、ゲートのくぐり戸から誰か出てきたわ。

彼が、あの榎本……

じゃないわね。

警備員の服装だから、彼は長瀬総合警備保障の社員かしら？

「あのー？」

ここは私有地で立入禁止なので車の移動を……
つて、あれ？

お姉さんもしかして桜岡霞さんですか？」

馬鹿ズラ下げて私を凝視する彼は、私の事を知っているのね。
まあ悪い気はしないわね、私の知名度も大した物だわ。

「ええ、そうよ。

この建物で問題があるとお宅の社長から聞いたのよ。
だから調べにきたの」

にっこりと笑顔のサービスをしてあげるわ。

勿論、仕事は断られたけど話を聞いたのは本當だから嘘はついていないの。

「ああ、そうでしたか。

そろそろ榎本さんも来るので、共同で除霊するんですか？」

アーッ、そろそろ来るのね。

そうね、直接対決の前に情報を仕入れておいつかしら……

「共同戦線を張るのは相談次第かしら？」

それで榎本さんって、どんな人なのかしら？
どんな力を持っているのか教えて欲しいわ」

胸を強調する様にお願いする。

案の定、鼻の下を伸ばして私の胸元を見つめているわ……

全く男つて奴は、みんなスケベで下品で最低だわ。

「榎本さんですか？」

「そうですね……」

筋肉質の短毛種で、愛染明王の力を借りて除霊をするそりですよ」

愛染明王って事は、真言系仏教宗派ね。

泉涌寺派かしら？」

「個人の除霊事務所を構えていると聞いたけど、お坊さんのかしら？」

「ここの寺に所属しているなら、調べようは色々有るわね。

ただ正式に何処かのお寺に所属しているのに、単独の事務所を構えるのは問題が有る筈よ。

「在家僧侶って言つてましたよ……」

「ここは濡れるので、中に入つて下さい。」

榎本さんから建物の中に入るのは禁止されますが、テントを用意してありますから。

わわ、どうぞどうぞ此方へ……

見ればアウトドアで使つ様なテントが設置され、椅子が幾つか置いてあるわね。

こんなシートシート雨の降る吹き隕しの場所で、立ち話もなんだわね。

車のエンジンを切つて中に入らうとする、微妙な顔をされたわ？

「どうかしました？

この場所に駐車するのは邪魔かしら？」

一応警備員だし、職場の前に不法駐車は問題だったのかしら？

「いえ、榎本さんは退路の確保を重視していく……

車やバイクは靈障で動かなくなる場合が有るから、現場近くに車を停めて自転車できますから」

ああ、なる程ね……

確かに靈障で、電子機器が壊れるのは聞くわ。

車だつて電装品がイカれればエンジンが掛からないわ。

「確かに慎重な方なのね。

でも何故自転車なのかしら？」

私は自転車は乗れないの！

悪いけど、運動神経は良くないの！

「自分の肉体のポテンシャルだけで最高40km位のスピード出せますし、何も危険は靈だけでないから？」

何故、疑問系なの？

「靈だけではない？」

「いや、ヤクザや不法侵入者・キチガイや浮浪者とか危険は人間の方が多いつて。

だから、逃走手段は十分に用意するそうです。でも結構な武闘派だから、一人二人位なら肉体言語でKO出来る人ですよ？」

筋肉馬鹿の武闘派つて……

確實に脳ニソ筋肉君じゃない！

そんなど共同戦線なんて嫌だわ！

只でさえ人気の無い所ばかり行くのよ。

私の美貌にクラクラつときたら？

か弱い私では抵抗も出来ないのよ！

「結構危険な人なのね……

私、怖いわ……」

貞操の危機だわ！

私を監禁して陵辱するかも知れないわ……

「大丈夫ですよ！

あれで紳士だし、女性には優しい人ですから……
噂をすれば来たみたいですよ」

彼の目線を追えば、折り畳み自転車をゲートの中に入れていく男を見た。

なんて言つか……

見た目は普通のオッサンだわ。

坂崎君が、現場に女性を連れ込んでる？

何ていう事だ！

わらべのみかど
童帝の癖に、深夜に巫女さんの彼女を連れ込むだと……

巫女さん……巫女？

こんな心霊物件に、夜遅く巫女さん？

よくよく見れば、テレビで見た事があるぞ……

梓巫女の桜岡霞だけ？

たしか透け透けだか濡れ濡れだかで有名な……

今回の件は彼女に手を引いて貰った筈だけど、何故ここに？

「今晚は、坂崎君。

職場に彼女を連れ込むなんて、やり手だね」

もしかしたら坂崎君の本当の彼女の……筈は無いな！

大方、自分が断られた訳を知りに来たか、若しくは宣戦布告か……

この業界の連中は自信過剰気味なのが多いからなー。

「お馬鹿さんな事を言わないで下さらない？」

私を袖にしてまで依頼した貴方の事を調べに来たのよ」

ああ、やつぱりプライドを傷付けた報復か……

胸を反らせて高笑いしそうな表情だし、典型的なタカビーさんかな？

「榎本さんスゲー！」

売れっ子美人霊能力者から、そんなに警戒されるなんてスゲー！」

美人の件で顔が二ヤけてるとは、おだてに弱いのか？

「あつ……えつまあ、それ程美人でも……」

良し、追撃だ！

「いやいや僕もこの物件は遠慮したんですよね。生靈と判断したんですが、専門外だつたから……でも専門の桜岡さんがお張つてくれたなら安心だ！それで、何時調査を受けたんですか？」

「いえ、その私は……

ボランティア、そうボランティアよー！」

何故か、その場の勢いでボランティアとか言つてしまつたわ。

だつて素直に美人靈能力者とか言つから……

最近は、スケスケ巫女とかヌレヌレ巫女とかA/V女優扱いをされたのよ。

あの榎本って男も下手に出てるし、私の素晴らしさを分かつているのね？

そうなのね？

美しさは、罪……

私は罪深い女……

「では僕はこれで……
いや良かつた良かつた。
本職の美人巫女さんが来てくれて……
ではお願ひします」

なに、ここに居ると厄介事に巻き込まれる事間違いなからみたいな
顔は？

さつさと撤収しようと、その場でコーラーンした所でガツチリ掴む。

「お待ちになつて、榎本さん。
逃がさないわよ」

誤魔化せる程、私は甘くないですわよ。

ガツチリ掴んだ肩は、中々の筋肉を纏っているわね。

随分と硬いわ……

「何でしょ、桜岡さん？」

貴女が居れば、事件は解決したも同然じゃないですか？」

やんわりと肩を掴んでいる私の掌に、彼が掌を添えて肩から外す。

掴まれた掌を二ギーギとされた。

やつぱりコイツもエロい肩野郎か？

私は嫌そうな顔で彼の掌を払うと

「ふざけてないで手伝いなさいな！」

そう言つてやつた。

「手伝いとは？」

とか真面目な顔で言つてきたから

「良いから現場を案内しなさいな」

そう言つて顎で建物を示す。

「取り合えず、昨日の進入で危険と判断した物件に入れと？
本気で言っていますか？」

一度撤退した相手なら、対抗手段を用意しないと問題があるんですね！

ましてや生靈だ……

僕が出来る事は少ない

なる程、自分が一度調査したから生靈の部分には自信があるのね。

しかし生靈ならば私も一度確認しておきたいし、彼の能力も知つておきたいわね。

「生靈に関しては、私の得意分野。

大船に乗った心算でいなさい」

そう言つてズンズンと中に入ろうとする私を止めて、なにやら装備を取りに行くとか出て行つたわ。

警備員の彼が言つには、照明器具とか自衛の武器とか色々有るみたい。

除霊道具か……

私は梓弓と少量の清めの塩くらいだわ。

最近は小型のLEDローライトを持っているけど、除霊道具と聞かれると違うわね。

同業者の除霊道具か、凄い興味が有るわ！

しつこく話しかけてくる警備員に、適当に相槌を打つていたら段ボールを二つも抱えて来たわね。

ベースにしてこるテントの中に段ボールを置くと、色々と荷物を並べ始めたわ

先ずは……

市販のランタンかしら?

幾つも出して点灯確認をしてるわね。

「お店でも始める位にランタンばかり……
これが貴方の商売道具なのかしら?」

ランタンをチェックする手を止めて、なにやら蓋を開け始めたわ。

何かしら?

中に、御札が折り畳んで入っているわ。

「これは?
なにやら梵字が書いてあるけど、御札で良いのかしら?」

ランタンの中に仕込むなんて……

まつまさか、このランタンが武器なの?

これを投げつけるの?

なんて巧妙な……

「これはGENTOS製のエクスプローラー・プロEX-777X
Pつて言つランタンや。

別にメーカーに拘りは無いけど、火事を起さない電池式で長持ち
で明るいLED製が良いね。

消耗品だから安価で構わない。

愛染明王の御札を入れるのは、耐靈障措置だよ。

良く除霊現場では、電子機器が使えなくなったりするでしょ？

確かに携帯電話やカメラが使えなくなったり、照明器具も消えたり
するわ。

「でも御札だけで対抗出来るの？」

車のエンジンを掛からなくなる様な、強い靈障も聞くわよ。

「氣休めにはなるよ。

確かに御札で防ぎ切れない事も有ったよ。
だからこれも用意している」

次に箱から取り出したものは……

発炎筒と、なにかしら？

この液体の入った棒は？

「何かしら？

発炎筒は分かるけど、この薬品の入った棒は……」

「これは普通の発炎筒じやないよ。

船舶用の発炎筒さ。

車に積んでいる発炎筒は、燃焼時間は5分程度で160カンデラ以上
の照度がある。

しかし船舶用は400カンデラ以上の照度があるんだ。
でも1分しか持たないけどね。

火は、それだけで魔を払うから有効だよ

そう言って、その船舶用の発炎筒を私に差し出してきた。

「車の発炎筒と基本は同じだよ。
しかし着火したら、自分に火の粉が被らない様に手を水平にして持
つんだ。
こんな感じで」

試しに水平にして持つて見せたら

「そりそり、でも火災だけは気を付けるんだよ。
それはあげるからね」

まるで子供扱いをされたわ。

「IJの棒は何?」

親切にしてくれたのは嬉しいわ。

でも恥ずかしいから、テレ隠しでへんな棒を持つて振つて見せた。

「それはケミカルライトだよ。
折つてごらん」

「ケミカルライト？」

言われた通りに、中ほどでぐの字に曲げてみたら……

棒 자체が黄色く発光したわ。

「綺麗……」

「これ何なの？」

黄色に発光する棒を振り回して聞いてみる。

何よ、その見守るような温かい田線は……

「シウウ酸ジフニールと過酸化水素を折る事で混合し、科学反応により発光させるオモチャだよ。夜店やコンサート会場でも売っているよ。

靈障も流石に化学反応までは止められないのか、これは消された事はないよ。

ただ、吹き飛ばされた事はあるけど

これも何本か差し出してきた。

受け取ったのは、面白そうだからね。

「あとはコレヤー。

1200ルーメンの明るさが有るし、遠くまで光が届くから便利だよ。

あと、暴漢がいたら棍棒代わりに使えるし

軍用みたいな厳ついマグライトを2本、箱から取り出して見せてく

れる。

私のLEDライトがオモチャみたいで恥ずかしいわ。

確かに、あの腕の太さで鉄の棒みたいなマグライトで叩かれたら……

グロい事になるわ。

チツ、流石は現役の先輩だわ。

小道具一つでも考えているのね……

「でも同業者に教えて良いの?
真似されたりしたら、嫌じやないの?」

私なら人に教えないわ。

しかし彼は、表情を変えずに

「秘密にする程、大した事じゃないからね。
同業者だってライバルだって、生存率が少しでも上がるなら積極的に真似するべきだよ」

そう言って、また段ボールを漁り出した。

「今度は何が出るの?」

もつと面白い発想の物が見たい。

もつと現場で役立つ物が見たい。

もつと同業者の秘密が知りたい。

「特殊警棒にスタンガン、編み上げのアーミーブーツに多機能チョッキ。

数珠に御札に清めの塩だよ」

「清めの塩って、5kg立有るわよ?」

ドサツと紙袋にパンパンの塩を置かれてても……

清めの塩って、少量で有り難味の有る物じゃないの?

「自分の祭壇で祭ってるからね。」

効果が弱ければ量で補うのは有効だよ」

そう言って小さなケース……

昔良く見た円柱型のフィルムケースに詰めていく。

はいって3本程、手渡されたけど。

「こつちは相手にぶつける用だよ。蓋を取つてぶちまければ良いから。」

こつちは結界用……

円を描く様に地面に撒けば簡易結界だ……

でも逃げ道が無いから、朝まで篭城用かな」

やはり真言系仏教を修めているから、清めの塩も御札も自作出来るのね。

ただただ関心するしか無かつたわ。

「桜岡さんの準備は良いかい？」

良ければ、そろそろ行こうか……

あまり遅くなると、奴らが活発に動き出すかも知れないからね」

ランタンの入った段ボールを警備員に持たせて、私の準備を待つて
いるわ。

自分の装備って言つか、持ち物を確認する。

貰った発炎筒とケミカルライトを帯に差す。

清めの塩は小袖の部分に入れて、梓弓を右手に持つ。

貸してくれた軍用のマグライトを左手に持ち、持参のLEDライト
は清めの塩を入れた小袖の反対側に入る。

たったコレだけの装備とも言えない持ち物……

彼は靈力が弱いから小道具に頼るとか言っていたけど、私ももつと
自分に出来る事を考えないと駄目だわ。

「準備は出来たわ。

では案内して下さいな……」

彼を先頭に私、そして警備員が一列に並んで建物に入つて行く。

昨夜と同じ手順なのだろうか？

警備員が手馴れた感じで、カンテラを床に置いていく。

なる程、退路の照明を確保しているのね。

でも灯かりが消されたらどうするのかしら？

奴らが襲つて来たら？

建物内に入つて初めて分かつたけど、階段室つて真っ暗よ。

私は、そんなに早く階段を下りられないわよ。

「ねえ？

もしも、もしもよ？

逃げる時に一斉に灯かりが消されたらどうするの？

外は生憎の雨で月明かりは無いし、人工の灯かりも建物内には届かないわよ」

前を歩く彼の袖を引っ張つて聞いてみた。

彼はニヤリと笑いながら

「方向はケミカルライトを床に落としておくから、灯かりの右側が階段だよ。

しかし階段は暗い、ノロノロと下りるしかないよね。だから2階まで下りたら、近くの窓から外に飛び出すんだ！」

「2階から？飛び降りるの？

無理よ無理、私は運動は苦手だし、普通女の子に2階から飛べって

「いつ？」

「建物の周りに危険な物が無いのは確認済みだから、最悪でも足を骨折する位だから平氣だつて。

逃げ切れないと死ぬかも知れないんだよ？」

物凄く真面目な顔で、トンでもない事を言いやがつて！

「貴方が私をお姫様抱っこして飛び降りなさい！」

アホ面晒して驚いている彼に、指を差して命令する。

全く少しば見直したと思えば、女の子に無茶振りするなんて……

私をこの桜岡霞をお姫様抱っこ出来るんだから、気張りなさいよね！

第8話

勢いとプライドだけで来てしまった、心霊物件マンション。

当初は私を仕事から降ろした相手に文句を言つ為に来た訳だけど……

榎本心霊調査事務所つて零細企業相手に、現在好評売出し中の私が大人気ないと思つたわ。

しかし実際は実績有る業界の先輩で有り、色々と学ぶ事も有つたのだが……

彼は脳も筋肉の馬鹿だった。

確かに靈に反撃されたり、または能力が効かずに逃げ出す事は有るわ。

その為の退路確保は重要なのは、理解したわ。

あれだけの準備をする靈能力者は珍しい。

逃げる事を準備するのは恥ずかしい事だと思っていたけど、考えを改めさせられたわ。

確かに、命有つての物ダネだわよね。

確かに、その辺の準備に抜かりは無いと思っていたの。

しかし……

しかしよ。

最後の最後で

「追いつかれそつなら、2階の窓から外に飛び降りるんだ！」

つて女の子に何言つてるのよ。

しかもガチで本気だつたわ……

反論したら、何を言つていいるの的な顔してたの。

信じられる？

勿論、私は自分の力を信じているし、生靈の対応には自信があるわ。

でも最悪……

そう！

最悪の場合は失敗するかも知れないから。

その場合は、彼に抱っこして貰い飛び降りるわ。

ちょっとそこ褒美が過ぎるかも知れないけど、一応は命の恩人になるのだから……

私に触れる事を許してあげるわ。

この穢れなき清純な私をね！

彼も私程の美人を抱っこ出来るのだから、嬉しそうな顔をしていたわ。

いえ、している筈よね？

私に気付かれない様に、警備員と押し付けあつてるのは……

聞こえないったら聞こえない。

あのインポ野郎共め！

もしかして、おホモな連中なのかしら？

でも……

「榎本さん、確かに彼女は美人だけど熟女じゃない！
だから命を懸けて迄は、守れない！」

とか

「あのなあ坂崎君！

僕だつて仕事と割り切つているけど。
口汚じやないから無理！」

とか、あまつねえ

「「やつは微妙な年齢じや萌えないよなー」」

とか、酷すぎるわー！

今まさに女盛りの25歳の私としては……

私の硝子のハートは粉々に砕けたわ！

この変態異常性欲者野郎共め！

何かやつたら、即通報してやるー

社会的制裁を受けるが良いわ。

でも結局は警備員が私を背負つて逃げて、彼が殿で防ぐ事になったらしいわ。

取り敢えずは、体を張つて守る気持ちはあるのね？

信じるわよー！

私、信じるからねー！

お馬鹿なじやれ合いをしている内に、問題の3階に到着した。

本来、窓が有る空間は只のポツカリとした暗黒の開口になつていて

外は生憎の雨模様……

月明かりも星の煌きも無い。

ドンコリとした雲に覆われているので自然の明かりは殆ど無い。

彼から貰つた軍用マグライトと、床に置いたランタンだけが頼りね

「ねえ？

問題の部屋は一番奥なのよね？」

無言で頷く彼は、それでも周囲を警戒しているのが分かる……

問題の部屋以外も、一応は警戒するのね。

階段を登りながら聞いた話では、最奥の部屋とその手前の部屋に異常が有つたって。

虫を敷き詰めた黒い絨毯ね……

心霊現象で虫を操るなんて初めて聞いたわ。

標準的な女の子で有る私も、当然虫が苦手よ。

昨夜は一部屋ずつ確認したりしげ、今回は問題の虫の部屋まで進んで行く。

彼がゆっくりと虫の絨毯の部屋に入つて行く……

私も彼について室内に入り、彼の背中越しに中の様子を伺つ。

「マグライトで照らした床一面に蠢く虫・虫・虫……

思わず漏れる悲鳴を飲み込む為に口を手で塞ぐ。

ききき、気持ち悪いわ。

ウゾウゾと蠢く、波打つ黒い絨毯……

「昨夜と変わらないな……
いや、少し増えているのか？」

靴の先で、虫の……

多分だが、甲虫だらう死骸を軽く蹴りながらボソッと話す。

「異変は継続しているって事？」

私の問いに頷く……

「この部屋の虫の実害は？

この虫つて、気持ち悪い以外に何か害が有るの？」

女の子的には物凄い被害が有るのだけど、靈障としては弱いと思つ。

彼は、ふつと考える様に顎に手をあてて……

虫なんてウザいだけだ。

「本当に昆虫を自由に操れるなら、厄介だ……
僕らじゃ瞬殺だな」

両の手の平を上に向けて、おどけた感じで敗北宣言をしたわよ！

「瞬殺？たかが昆虫でしょ？」

それは毒虫だつたら危険かもしれないけど、そんな虫は日本には少ないわよ！」

踏めば死ぬ様な虫だし、どちらかと言つと不快感が強い生き物だ。

瞬殺されるとは思えないんだけど？

「虫と侮ると危険だよ。

人間の生活圏に居る昆虫だけだって危険なんだよ。

例えばミツバチだって、弱いけど毒針を持つてているよね。
それらが一斉に頸動脈を集中的に刺したら？

カメムシが鼻や喉に大量に詰まつたら？

蛾や蝶の鱗粉が眼に入つたら？

小さくて弱くても、数が半端無い生き物なんだよ。

死兵として群がつたら、何処にも逃げ場なんてないでしょ？」

なつ？

なんて気持ち悪い想像をする男なんだろ？……

「リアルに嫌な想像をしたわ……

全くレディを怖がらせるなんて、紳士じゃないわよ」

両手で自分を抱き締める様にして、体の震えを抑える。

想像するだけでも、吐きそうだわ……

彼が部屋の外に出る素振りをしたので、道を空けるよひに部屋の外に出る。

「前に山の中で、虫を操る敵と戦った事がある。
戦うなんて格好良くなくて、全力で逃げたんだけどね……」

はははって笑ってるけど、流石は現役って事ね。

私よりも遙かに戦闘経験が有るのね。

あら?

警備員があんなに後ろに下がって……

まあ仕方ないわね、彼は素人さんなんだし。

「じゃ問題の部屋に行きましょう

そう言って彼の背中を軽く押す。

凄く嫌そつな顔をして、私を見たわ。

こんな美人がスキンシップをしたのに、何が嫌なのよ……

無言で前を歩く彼にムカついたので、軽くお尻の辺りを蹴りつけた!

チクショウ！

ケツも筋肉質で固くて、コッチの足が痛いわ！

「イタいじゃないか！」

つて怒つたから

「もつと私を労りなさい…」

と言つてやつたわ。

一瞬ビックリして、次に苦笑したわね。

「すまん、悪かつたよ」

そう頭を搔きながら謝つたから、許してあげるわ！

再び歩き出した彼の後ろについて、問題の部屋の前へ。

そこで例のケミカルライトを曲げて落としたわ。

淡い螢光色を放つケミカルライト……

確かに靈障が、化学反応に干渉するなんて聞いた事がないわね。

これで最悪の場合の、逃げ出す準備は完了なのね？

「桜岡さん、最悪明かりが全て消えたり対処が出来ない場合は……この明かりを目印に左側が階段だよ。」

2階に降りたら、近くの窓から外に飛びんだ。
間違つても頭から飛ばずに、足を下だよ。

最悪でも両足骨折ですむから……」

やはり彼は、私を抱っこして飛びつもりはないのね……

「貴方が私を抱っこして飛ぶふんでしょう……」

私は飛び降りるなんて無理よって言つたら……

「僕は最悪の場合は時間稼ぎをするから、一緒に逃げられないよ。
じゃ、問題の部屋に入るよ」

そう言つて、問題の角部屋の中に入つて行つた。

でもそれって、私の為に体を張つて時間稼ぎをしてくれるの?

まつまあ、それならそれで構わないけどね。

少しだけ、本当に少しだけだけど嬉しいわね。

ふふふつー

誰かが守ってくれるなんてね。

そして遂に問題の部屋に入る。

その空間は異様だった……

空気が纏わり付くと言つか、 どんよりとした池に落ちたと言つか。
たかが一歩踏み入れただけなのに、 田常と違う空間に入ったのが分かる。

息をするのにも、 強く吸わないと駄目なくらいに……

空気が粘性を帯びたみたいなのよ。

先を歩く彼が止まり、 片手でオイデオイデをする。

「どうやら、 問題の生靈がいるみたいね。

「どう、 居るの？」

彼の肩越しに前を見ると……

指差す先に、 問題の生靈が居た！

落ち窪んだ眼窩に、 痩せこけた頬。

服は確かにパジャマだが薄汚れている……

この様な無残な外觀の生靈は、 本人自体も衰弱してゐる場合が多い。

念が強く本体もピンピンしている場合は、もつと攻撃的な姿形をし
てる場合が多いわ。

彼は多分衰弱しているか、恨みより悲しみが先立つていて……

彼が体をズラしたので、奴の全体が見えた。

やはり生靈ね、間違いないわ。

「私に任せて……
やつてみるわ」

彼の前に立ち、梓弓を構える。

そして弦を弾きながら、祝詞を口づさむ。

大祓祝詞……

本来は大祓式にて、各々が犯した罪や穢れを祓うために唱えられる
祝詞よ。

でも私は、この祝詞に力を加え梓弓の弦の振動を了解して相手に叩
き付ける事が出来る！

「高の天原に神が留り坐す、皇族神漏岐に神の漏美なる命を以て……

…」

梓弓の弦の振動に合わせて、祝詞に乗せた靈力を相手にぶつける。

「我が皇の御孫命は、豊き葦原の瑞穂の国を……」

問題の生靈が、此方に気付いたわ！

此方を振り返り、ゆっくりと右手を上げて……

一步、私達の方に近づいて来た。

ゆっくりと、ゆっくりと……

まだ私の力は奴に届いていないのか？

「天の磐座を放ち、天の重なる叢雲を伊頭の千別きに千別きて……」

まだ、まだよ！

更に靈力を乗せた祝詞を唱える。

奴の歩みが……緩くなつたわ！

良いわ、効いている。

「ぐつ……ぐげげ……ぐつ……」

それでも奴は……

先程よりは緩慢としているが、歩みを止めないわ。

「おいつ！大丈夫か？」

彼が心配して声を掛けてくれた。

でもね、手応えは有るから……

まだまだイケるわ！

「皇の御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて、天の御蔭・田の御蔭へと隠り坐して、安らぎ國へと平けく……」

更に靈力を練り、それを乗せて梓弓を弾く！

「ぐつ……げげげつ……があ……ゅ、ゆつ……れ……ゆつ……」

完全に動きを止めて、何やら呻きだした……

ゆつ？ セゆつ？

誰かしら？

でも、もう一息だわ！

更に奴に靈力をぶつけよつと……

「ぐつ……ぐがあ……」

呻くように叫ぶと、突然消えてしまった……

手応えは有ったのに、でも最後は違つたわ。

まるで……

「流石は巷で噂の桜岡靈さんだ。

奴は祓えたのかい？」

未だに周りを警戒しながらだけど、彼が労りの言葉を掛けてくれた。

彼は、最後に何か感じなかつたのだろうか……

私も梓弓から手を放さずに、周りを警戒しながら応える。

「終わったのかは……
分からぬわ。

でも手応えは有つたの。

最後が呆気なすぎて……

普段なら、もつとこう……

最後は、弾ける様に霧散したりするのに……」

「今日は、忽然と消えた……と？」

そう、忽然と消えた……

「しかし、僕の見ていた分でも奴は弱っていたからね。
効果は有つたんだよ。

後はアフターで何とかするしかないか……

彼も私の祝詞が効果有つたのは分かるのね。

でもアフターって？

「アフターって何？」

気がつけば片付けを始めている彼に尋ねる。

まさか、この後に飲みに行くとかかしら？

ランタンをチェックしながら、下階に降りる彼に声を掛ける。

飲むなら付き合つけど、私は車なのよ……

「ああ、手掛けた仕事は一応解決してもね。
一週間は様子を見るんだ」

一階まで降りて、仮設テントに置いていた段ボールに道具をしまいながら応えてくれた。

「一週間？

そんなに私の仕事が信用出来ないの？」

彼は困った顔をして

「靈障は簡単には収まらないし、原因の靈が一体じゃない場合もあるからね。

一週間は様子を見るんだ」

経験からくるのか、なる程と思わされてぱっかりね……

ちょっとだけ悔しくて空を見上げたら、先程迄の雨が止み雨雲の隙間から月明かりが私達を注いでいた。

最後の最後まで教えられっぱなしだわ……

「私……私も最後迄付き合ひつわよ」

「私にだって、意地が有りますからね！」

第9話

桜岡霞……

TVで見た感じだと高飛車なお姉さまキャラだったが……

実際に会って見れば、やはり高飛車だが素直で責任感は有つそうだ。

しかしプライドが高く、実践慣れはしていない感じがする。

多分だが、TVスタッフをゾロゾロ連れて除霊現場に行くのが多かつたんだろう。

この手の物件は除霊1体で即解決とは行かない場合が多いし、1体目を除霊したら本体が出てきたとかザラだ。

本来なら其処まで説明する必要も無いのだが……

長瀬さん絡みだし、生霊の対処は僕では出来ないからね。

何とか桜岡さんを正規に仕事に巻き込まないと面倒臭いよね、主に僕が……

そんな思惑を持って、彼女を誘つてみた。

坂崎君の用意してくれたテントでランタンを整備しながら考えたが、やはり彼女を巻き込む事にした。

何故か彼女も帰らずに、僕の道具整備をずっと見ているし……

「ねえ？」

毎回一々道具を回収したら整備するの、その場で？」

「どうやら彼女は、今回の件で同業者の仕事運びを調べるつもりかな？」

「それはね……

物に憑く霊も居るし、使い捨て出来ない道具は自宅に持ち帰る前に調べないと危険だよ。

僕は自宅の他に道具置き場も持っているから、ソッチで調べる時もあるけどね。

序に作動確認を怠ると、肝心な時に使えない事もある。

僕らは労災保険は適用外だからね……

自衛はやり過ぎる事は無いでしょ？」

「確かに……

靈が憑依した物を家に持ちるのは嫌ね……

自宅以外に倉庫？作業場？も有るのね。

でも他の霊能力者も、そんなに用心深いのかしら？」

最後のランタンを調べ終わり、段ボール箱にしまつ。

「ヨシ、お終い……

何だか分からない物を相手に命を懸けるんだ。

用心にこじした事はないと思つよ。
わい、桜岡さんはこれから予定有るへ。」

「アレ?」

「何だひへ、一ヤリと笑つたけど?」

「どうしようかなー?」

「こんな時間に女性を誘つなんて、深読みしちゃひやけよ。」

「一ヤニ一ヤと笑われると、なんかムカつく。」

「そんなつもりじゃ……」

「榎本さんズルイっすよ!」

「僕は朝まで居残りなのこ、彼女を誘つてお楽しみなんて、結衣ちゃんに言い付けてやる!」

坂崎君が、クダラナイ食い付きをしやがった。

桜岡さんも自分の両手で体を抱きしめながら、後ずさりするし……

「私の肉体を狙つていたのね……
このケダモノ!」

「ロココンだったと思つたのに、お姉さんも諦めるんつすねー!
長瀬社長にも言つて触りじてやる」

「えつ?」

「彼つてロココンなの?」

じゃ結衣ちゃんって小学生？
それとも幼稚園生？」

「結衣ちゃんは口リロリな中学生ですよ。
榎本さんが困ってるんす。

コイツは男の敵なんすよ！」

妙に息の合った漫才を繰り広げる一人……

なんか疲れたから放置したくなつてきた。

「桜岡さん？」

「よひないで変態！

ロリコンはお断りよ！」

どうしようか、本気で危険視してると田をしてるけど……

「いや真面目な話で、今後の対策と長瀬社長への連絡をどうするか
の相談がしたかったんですけど……

もう面倒臭くなつたから、後は桜岡さんに全てをお任せして良いで
すよね？」

段ボール箱を持って立ち上がる。

癒しの結衣ちゃんの下へ帰る……

だからスレた年増は嫌なんだよ。

その点、結衣ちゃんはピュアだから、HへHへ……

薄ら笑いを浮かべた僕をどう思ったかは知らないが、坂崎君は土下座し桜岡さんは僕の肩を掴んだ。

「その……

からかい過ぎた事は誤るわ。

今後の話をしましううね？ね？」

言葉使いは優しいが、肩を掴む力は強かつた……

「ではファミレスにでも行きましょうか……

この近くだと三浦海岸通りのジョナサンが近いし空いてるかな。
場所は海岸線に出て久里浜方面へ、セブンイレブンを過ぎてスシローの少し先にあるから。

駐車場で待ち合せしようか？
では坂崎君、後は独りで宜しく！

そつと現場を出て行く……

ゲートの前でスカイラインに乗り込む桜岡さんに

「じゃあとでね」

と言つて、自分のキューブを停めてある有料駐車場まで向かつ。

しかし……

面倒臭い事は間違いないな。

長瀬社長には彼女と正式に契約を結んで貰い、僕は適当な所で終了

かな。

例えば、事前調査を行い今夜引継ぎを兼ねて現場を案内したら生靈と遭遇。

そして彼女の力で一旦は退けた……

んで現在は要観察中かな。

うん、このストーリーで行こう。

これなら切り良く彼女に引き継げる筈だ。

今回は箱も反応しなかったから、アレに喰わせて解決とはいえないからね。

ある意味、桜岡さんの介入は良かつたのかもしない……

車を停めてあつた駐車場には、僕の車しか無かつた。

こんな田舎のこんな時間だ……

結界が反応してたら、僕か荷物のどれかに靈が憑依している事だい運転席に乗り込む。

結界が反応してたら、僕か荷物のどれかに靈が憑依している事だからね。

もっともショボイ自作結界だから、強い力を持つ相手には効かないけど……

エンジンを掛け、ゆっくりとキョーブを発進させる。

時計を確認すれば、すでに〇時を回っていた……

暗い農道をゆっくりと走りながら、県道に合流する。

ここまでくれば外灯が有り、明るく他の車もチラホラと走っている。

「さて、240ccのビッグハンバーグセットでも食べるかな……」

「どうやら緊張が解けた為か、空腹感が我慢できないレベルになってしまった。」

暫く走ると、待ち合せ場所に到着した。

先に停まっているスカイラインの一つ空けた隣に停める。

車から外に出ると、彼女もスカイラインから出てきた……

しまった、彼女はまんま巫女装束のままだぞー……

「あの……桜岡さん、着替えは持つて無いのかな?」

深夜のファミレスで、巫女さんと差し向かいで食事つて、ナンダカナー……

ネタ以外の何物でもないよね?

彼女はムツとしながら

「私の仕事着に文句が有るの？」

と怒りてこますが……

「いや……その……深夜のファミレスに巫女さん。
これって周りはどう思うかな？」

「嬉しいんじゃない？」

素で返してきましたよ。

速攻タイムラグ無く脊髄反射みたいな速度で……

「そうですね……
では、入りましょうか」

諦めて、店内に入る。

オートドアが開き、店内に入ると

「いらっしゃいませ、ジョナサンへようこそー
お一人や……お、ですか？」

僕の後ろに座る巫女さんを見て、バイトだらの店員が固まつた。

「……ああ、禁煙席で頼みます

多分、バックヤードに戻つたら彼女の話題で持ち上がるだろ？。

最悪、有名人のヌレヌレ梓巫女の桜岡さんが深夜の密会とか「シップになりそうで嫌だ……

席に案内されて、メニューを開く。

もつ自棄食いでも良いよね？

「240gハンバーグセットに……」

「タラコと貝柱のスペゲティとジャンボベイクドポテトのチリビーンズ、それに温泉卵のシザーサラダにガーリックトーストあと、ビールは無理だからドリンクバーね」

僕のセリフに被せて、大量に注文しやがった。

なんだと……

こいつフードファイターか？

「自分は240gハンバーグセットにズワイ蟹のクリーミードリア、それとヤリイカの空揚げにドリンクバーで」

一人でニヤリと見詰め合つ……

この女、見た目の派手さと奇抜さで誤魔化されたが中身はオヤジだ！

「なかなかのチョイスね……

でもマダマダ甘いわ、ハンバーグなんてド定番を頼むなんて

「いやいや、物事は基本が大切なんですよ。

貴女も一見バランスが取れているみたいだが、パスタもポテトもトーストも全て炭水化物……シザーサラダは免罪符ですか？」

「あらあら?

ハンバーグにドリアと空揚げなんて、お子様の王道ね。おほほほほ……」

しばし無言で睨み合い、ドリンクバーコーナーに出撃する。

彼女を見れば、メロンソーダのカルピス割りだと！

「オリジナルブレンドか……

やるな！

しかし僕は「ツチだ！」

「なつ？

オレンジをカルピスソーダで割った……

配合は3：7ね、やるわね

互いのオリジナルブレンドを披露しつつ、席に戻る。

ドリンクバーでは、1回で2種類の飲み物を持つてくるのは常識。

僕はジンジャーエールを彼女は梅昆布茶をチョイス。

クッ……完敗だ。

あそこで梅昆布茶に手を出せるとは……

僕は最後の口直しで頼むのだが、初回から逝くとは。

ドリンクバーで盛り上がった為か、大分距離感が縮まつた気がする

馬鹿な遊びで時間を潰した為か、元々お客様が少なく調理が早かつたのか……

直ぐに頼んだ料理がテーブルに並べられる。

2人で頼むには異常な量だが。

「先ずは食事を楽しもう……

面倒臭い話は、その後で」

そう言つてハンバーグを切り分けていると、僕のヤリイカに手を出しゃがる。

「ふふん！

まあまあの味ね」

人の頼んだ物を食べながらニヤリとしゃがる！

仕返しをしたいが、奴の陣営は……

単体で手を出せるのはガーリックトーストだが、警戒してかテープルの最奥に置いてある。

「僕のヤリイカの報復は……

ガーリックトーストと見せかけて、コッチだ！」

フォークで温泉卵のシザーサラダの温泉卵を掬い取る！

「あつ？」

貴方、それは反則じゃなくて？
既にそのサラダは……死んだわ。
責任を取りなさい！」

モグモグと温泉卵を頬張る僕にナイフを突きつける。

「先に手を出したのは貴女だ……

やつて良いのは、やられる覚悟の有る奴のみだ」

ギヤーギヤーと楽しく食事が進んだ。

結衣ちゃんとの食事は静かに食材に感謝しながら食べるのだが、こんな賑やかな食事も楽しいだろ？……

食後のコーラを飲みながら、今後の話を進める。

「さて……

落ち着いた所で、今回の件について相談しますか？」

彼女はナップキンで口を拭いながら真面目な顔になつた。

「いいわ。

それで、奴は完全に倒したかは確認出来ていなかね。
それで、調べると言つても……」

俄かに店内が煩くなつてきただけど？

入口を見れば、2～3人の若者が入つて來たぞ。

「t w i t t e rに載つていた店つて此処だろ？」

「ああ、ヌレヌレ梓巫女の霞たんが居るお」

「スゲー、芸能人に会つのつて、俺初めてだよ

クソつ、誰かバラしやがつたな？

客か店員か……

インターネットで個人のプライバシーを考え無しに公開するのは犯罪なんだぞ！

「桜岡さん、僕が先に行つて会計を済ますから……
タイミングを見計らつて車で逃げるんだ。

コレ、僕の名詞だから、落ち着いたら電話してくれる。
それと目立つから、これを羽織つて」

そつ言つて名詞と上着を彼女に渡すと、レシートを持つてレジに向かう。

今、まさに騒いでいる連中に向かって上半身ムキムキのオッサンが睨みながら歩いて行く……

「おひおこ、何かヤバいオヤジが近付いて来るぞ……」

「何がヤバいつてムキムキだし、この時期にTシャツ一丁だぞ……」

「キモいムキムキが来るお

そんな野次馬の群れの真ん中に突入する。

「邪魔だよ、貧弱ボーイズ！
ちょっとどこでてくれるかい？」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

彼らがどいた脇を、僕の上着を羽織った桜岡さんがすり抜けて行く

……

「あつ？ 霊たん？」

騒ぎ止とおとしたオタク風の若者の頭を握る。

「何だ？ たんつて？」

「ああ？」

「お前、俺を馬鹿にしてるのか？」

三角筋と上腕二頭筋をムキムキにこわせし蹴る。一

伊達に肉体を鍛えてはいないんだよ。

俺のマッスルなバーティを見やがれ！

視界の隅で駐車場からスカイラインが走り出すのを確認し、お釣りと領収書を受け取つて店を出る。

この店には仲間のムキムキズを伴ひて、再度来なればなるまい。

密のプライバシーを流した奴をお仕置きする意味で……

第10話

個人情報を安易に公開する馬鹿がいて困る……

特に桜岡さんは、今話題の美人靈能力者だからゴシップになりやすいし。

深夜のファミレスで巫女姿で男と密会なんて、ネタとして最高だろう。

幸いな事は、twitterで広まつたが直接店に来たのは3人だけだ……

店員の証言を取つても、僕と特定するのは難しい。

彼女の周りを調べれば最近接觸した関係でバレるが、ソッチ方面からバレたなら仕事帰りの食事で他意は無いでOK。

只の密会じゃなければ、理由が有れば良いのだ。

ファミレスから車で移動する際に、連中の車のナンバープレートを撮影しておく。

なにか有れば、調べられる様に……

相手を特定出来れば最悪話題になつても、連中にガセだと証言させれば鎮火も早いだろう。

勿論、平和的に証言を求めるつもりは全く無い。

色々やり方は有るのだから。

ドロドロと暗に思考をしてみると、携帯から電子音が……

僕の着信音は黒電話だ。

仕事用だから着メロとかは不適切だからね。

前に坂崎君が打合せの時に、AKB48のヒット曲を鳴り響かせた時は……

同席の長瀬社長が、顔を顰めていた。

最低限の社会人として、また社員として守るマナーが有るからね。

ディスプレイに表示される番号に見覚えはないが、多分彼女と思い通話ボタンを押す。

「もしもしし、榎本です……」

ハザードを点けて、車を路肩に寄せる。

「桜岡です、先程は有難う御座いました。
ウザい連中に捕まらなくて良かつたわ」

「どうやら彼女も無事に逃げたらしい……

「それで打合せは今夜は、もう遅いし無理でしょうね?
こんな状況だし、深夜に会うのは疑がわれ易いし……

明日つてもう今日だけど、長瀬社長に説明に行こうと思つたけど……

一緒に行ける?」

「私が?何故に?」

一度社長に断られて僕に突っ掛かってきた手前、社長には会い辛いのかな?

「桜岡さんも仕事をした訳だし、僕から長瀬社長に正式に君が除靈した方が有効だと説明するよ。

ボランティアって事には出来ないでしょ?だから正式に長瀬社長と契約を結ばないと……

勿論、僕も引き継ぎをするし継続調査の手伝いはするよ。

責任問題だから、此処は明確にしておかないと僕らが不利だからね」

「契約とか不利とかって……

貴方つて本当に霊能力者っぽくないわ。

何て言うか、ジャーマネ?」

ジャーマネって……

芸能界に毒されてないかい?

彼女の中の霊能力者つて、どんなイメージなんだろう?

「君の霊能力者のイメージについて、小一時間討論したいね……
僕らは仕事を請負うんだよ。」

そこには最低限でも最初に契約を取り決めないと負けなんだ。

じゃないとズルズルと仕事や責任が追加されるだけだし、請負とは

読んで字の如く請けると負けるんだ。

だから条件を明確化するのが必要なの！」

別に経営学について講釈を垂れるつもりはないが、仕事を貰つ側は立場が弱い。

それを逆手にとる連中が多いのは事実。

長瀬社長は良い人だが、会社の存続に発展した場合は責任を追及されるかもしれない。

除靈で高額な物を壊したり人的被害を及ぼしたり、弁償や賠償は勘弁して欲しい。

ウチみたいな零細企業は一発で倒産だよ。

だから契約内容はちゃんとしないと駄目なんだ。

ふっと窓の外を見れば、野比海岸が見える。

夜の海は暗く、その先に見えるのは千葉の明かりだ……

木更津辺りの工場群だろうか、人工の明かりはやけに輝いて見えた。

「ねえ、聞正在る？

長瀬社長に会うのは良いけど、どこで待ち合わせするの？」

朝イチで長瀬社長にアポを取つてから、事前に彼女と打合せをして訪ねるか……

「先方の予定が分からぬからね。

朝イチで連絡して時間を決めるから……

そつちは午前午後どっちでも平氣かい？

出来れば長瀬社長に会う前に、下打ち合わせをしてから訪ねたいんだけど……」

口裏を合わせないとボロが出そつだし。

彼女はウツカリ属性が有りそuddash;。

「良いわ。

じゃこの携帯に連絡してくれる？

それじゃ連絡するよと黙り、通話を切る。

さて、面倒臭くなつてきたな。

箱が興味の無い生靈だと、彼女頼りで対処するしかないんだが……

電話を切つてから暫しボーッとする……

朝イチだから9時には電話しないとならしいが、長瀬綜合警備保障は横浜のスカイビルにあるからね。

彼女との事前打合せを考えれば、午後にしないと無理かな？

昼イチだと、また昼食を一緒にとかの流れは好ましくないだろ？

流石に横浜駅周辺だと、彼女の知名度を考えれば大騒ぎだ！

これは打合せには私服で来いって説得しないと駄目かね？

両手で頬を叩いて眠氣を飛ばし、車の運転を再開する。

家に着くのは1時を過ぎるかな……

ガレージに車をとめて家に入ると、居間の電気が点いてる？

「ただいま……

あれ？ 結衣ちゃん？」

ソファーで居眠りをしている彼女を見つけた。

テーブルにはのり塩味のポテチと、急須と湯呑みが置いてありTV
はついていた。

本当に日本茶党なんだね。

そして何を観ていたんだろうか？

風邪をひかせない為にも、ベッドに移動させないと駄目だね。

「結衣ちゃん、起きて、ほら……

ほら、結衣ちゃん」

声を掛けるが、全然反応してくれない。

「うひゅ……うひゅにゅにゅ……うひゅ……」

本当に可愛い寝言を連発している……

彼女は実の父親を早くに亡くし実の母親と、その男達に幼い頃から虐待を受けていた。

その為に常に周りを気にして、自分の意見を抑える大人しい娘に育つてしまつた。

それでも非行に走らなかつた優しい娘だ……

あの獣憑きのクソ母親と情夫は箱が喰つてしまつたが、後悔はしていない。

最後の肉親で有る祖母が亡くなつたのを切欠に、僕が引き取つた。

一般的な里親制度だ。

本来は市町村の福祉課に申請し講習や審査が必要だけど、在家だが僧侶である僕は何とかクリアした。

これでも宗教関係者だからね！

お役所関係には、宗教法人は強いんですよ……

風邪をひかせない為にもベッドに連れて行きたいけど、彼女は異性からの接触を恐れるんだ。

きっと母親の情夫から、性的な欲望の日に晒されてきた為に過剰に反応するんだろう。

正しき口コトとは、双方合意の上で行為に及ぶものだ！

押し付けや強引なのはNGですよ。

仕方ないので毛布を持ってきて彼女に掛けて、更にエアコンのスイッチを入れる。

乾燥対策に濡れタオルを吊るせば完璧だね！

超過保護とは思うが、これ位なら紳士として普通だろう。

一旦居間を出て台所に向かう……

思った通り、台所の机の上には夜食が用意して有った。

チキンクリームシチューに、最近彼女がハマッている酵母パンだ！

電子レンジでシチューを温めて、缶ビールを2本持つて居間に戻る。

ソファーを見れば、結衣ちゃんは毛布に包まり本格的にオネム体制だ！

僕は向かいに座り、彼女の寝顔を見ながらシチューを食べる。

彼女の作るクリームシチューは最後の味の調整で僕の分には胡椒を多めに入れて、すこしピリリとした味付けにしてくれる。

鶏肉も余分な脂身は取つてあり、野菜類も人参・ブロッコリー・ジャガイモ・マッシュルームと彩り良く具沢山だ。

肥満になりがちなオッサンの体に気を使ってくれる。

だから僕も、彼女には最大限の配慮をするんだ！

もし、もしも彼女に彼氏が出来て紹介されたら……

笑つてソイツを速攻で呪い殺す自信がある。

僕はそんな欲に塗れた、只の俗物だからね。

用意した食事を粗方食べ終わつた辺りで、彼女が「うにゅにゅ」と言つて皿を擦りながら起き上がつた。

「うにゅ……あれ？
まさあき……さん？」

「おはよう、結衣ちゃん。
ベッドに行かないと風邪ひくよ……」

半覚醒の彼女は

「ふあーい、おやすみなさい」

と浴室へと向かつた。

ズルズルと引き摺る毛布を受け取ると畳んで自室に持ち帰る……

今夜は結衣ちゃんの残り香に包まれて寝ようかな……

心優しい口リツ娘の臭いに包まれて、爽やかに目が覚めた……

携帯を開いて時刻を確認すると……朝の7時16分か。

シャワーを浴びて寝たのが2時過ぎだから、5時間位は寝れたのか。

半覚醒の頭をシャツキリさせる為に顔を洗いに下に降りる。

結衣ちゃんが朝食の用意をしているのだりつ、台所の方から良い匂いが漂つてくる……

今朝のメニューは何だらうか？

遅くに夜食を食べたのに空腹感を覚えた。

洗面所で顔を洗い身嗜みを簡単に整えてからキッチンに向かつ。

「おはよう、結衣ちゃん。」

「お腹がすいたけど、今日は何かな？」

調理台で何かを調理している結衣ちゃんの後姿を見ながら声を掛け
る。

制服にエプロン……

結衣ちゃん、君はスバラシイ！

「あっ、お早う御座います正明さん。

今朝のメニューは……

納豆オムレツにガーリックソーセージを焼いてみました」

「うん。美味しそうだね」

彼女と向かい合つてテーブルに座る。

彼女が炊飯器から、「」飯をよそつている間に、急須に茶葉を淹れて
お湯を注ぐ……

茶葉が開ききるまで待つてから湯呑みへ。

日本茶好きな彼女の為に学んだ手順だ……

朝食の用意が全て整つたら

「「」いただきますー！」

と言つてから食べ始める。

彼女は食材に感謝して食べなければならないと、祖母から躊躇られたそうだ。

それには同意する。

しかも口ひとつ娘の手料理なのだ！

敬愛する愛染明王様に最大限の感謝をしつつ、料理を味わう。

因みにウチは毎回1合飯は2合を炊く……

お米は国産でブランドや産地は拘らないが、10kgで4000円前後の物を選ぶ。

その代わり炊飯器は拘っている、勿論彼女がだ……

折角だから美味しいお米が炊ける物を買おう！

そう言つたら、色々と調べてアレコレと説明してくれた。

彼女のお勧めは

「お米が踊る！踊り焼き！

圧力IH炊飯ジャーが良いです！」

そう力説し、今の炊飯器を買う事に決めた。

普段は消極的だが、好きな事はちゃんと自己主張してくれるのは嬉しい。

最初の頃は、警戒されてたからなー。

まあ確かにオッサンが里親なんて、普通に考えたら良からぬ事を考
えていると勘織るよね……

彼女の信頼を勝ち取つたのは最近なんだ。

朝の時間帯は忙しい……

モグモグと食べていると、少食な彼女が先に食べ終わり

「(+) 馳走様でした、今日は口直で早いので行つて来ますね」

そう言つて自分の食器をシンクに運ぶ。

食器洗いは僕の仕事だ。

とは言え、洗濯や掃除くらいしか家事は手伝えないから……

ほら、口ひとつ娘に料理を作つてもらつたりアイロンを掛けて貰うん
だから、それ位は当然だよね。

自室に戻りカバンを持って来たのだろうか、キッチンに顔をだして

「では、正明さん。
いってきます」

行儀良く頭を下げる彼女に手を上げて応えて送り出す。

さて、もう少ししたら長瀬社長に連絡を入れるか……

思考を切り替えて仕事に専念しますかね。

心優しい口りつ娘を見送つてから、暫し自室のパソコンに向かいメールをチェックする。

このアドレスを知るものは友人と仕事関係、それに通販関係くらいだ。

2件ほど、受信がある。

1件は……

旨い物ドットコムの定期カタログだ。

震災関連商品が充実している……

非常食や飲料水、防災グッズ等マウスをクリックしながら内容をチエック。

今回は特に欲しい物は無い。

もう一件は、此方もお得意様である山崎不動産の山崎社長から。

こちらは仕事の依頼ではなく、遊びのお誘いだ。

山崎社長は風俗の世界では有名な性豪で、横浜のヘルス・川崎のソープでは知る人ぞ知る有名人。

僕の師匠であり、お得意様でも有る。

彼の愛人で社員でもある飯島女史は、巨乳で口元のお姉さんまだが色情靈が憑いている気がする。

だから余り近付かないし、向こうつもムキムキなオッサンである僕には興味が無いらしい……

金持ちとイケメンが大好物と言っていた。

嫌われてはいないが、お誘いも無い関係だからちょうど良い。

さて、と……

一日自分の事務所に向かい、それから長瀬社長に連絡を入れるかな。

ここは僕の結衣ちゃんの愛の巣だから、仕事は極力持ち込まないのだ！

榎本心靈調査事務所は、神奈川県の横須賀市にある京急電鉄の主要駅の近くのマンションの一室を借りている。

デカデカと心靈調査事務所と看板を掲げるのは、ご近所付合い的な意味で不可だ。

心靈など、胡散臭い事この上ない業種?だ。

だから登録は（有）E・P・Rとしている。

Enomoto Psychic Research (エノモト
サイキック リサーチ)

略してE・P・Rだ。

郵便局への登録も同様の名前で申し込んでるので普通に郵便も届く。

何故、有限会社にしたかと言えば……

責任が有限だから。

資本金は300万円でOKだし、社員無しの一人で起業出来る。

役員の任期も無いし、取締役会も開く必要が無い。

デメリットとしては、社員数が50人以下だし、銀行から出資保管証明書も貰わなければ成らない。

銀行への登録手数料や、登録免許税とか兔に角お金が掛かる。

銀行の問題は、自分の口座に両親から受け継いだ遺産や生命保険があるから信用は有る。

僕は在宅だが僧侶の資格も持っているので、社会的な信用は高い。

有限会社って弱小企業なイメージだけど、商売そのものが目的で無いので除霊で失敗し莫大な負債を抱えても……

根こそぎ自己資産を取られる事も無い。

なので、一応社長業をやれる訳です。

なんたつて大切な扶養家族が居ますから……

電車通勤にて、自分の借りているマンションに到着。
直ぐにポストを確認し、郵便物をチェックする。

水道料金や電気料金のお知らせの他には、宅配ピザのチラシだけ、
か……

公共料金は、銀行からの引き落としだから問題は無い。

それらを保管しているファイルに差込む。

保管しておかないと確定申告の時に大変だから。

必要経費は、しっかり計上しないと国に税金をふんだくられるから
ね。

ピザのチラシは玄関の電話台の上に置く。

たまには出前を取るし、チラシには期間限定のサービス券も付いて
いるからお得だ！

FAXには、特に受信した用紙は無い。

それらを確認してから冷蔵庫に向かい、中から缶コーヒーを取り出し自分の仕事用デスクに座る。

備え付けの時計を見れば、午前9時32分だ……

長瀬綜合警備保障へ電話をかける。

3回目のホール音の後に、受付の女性が出たので社長への取次ぎをお願いする。

声で分かるが、彼女とも顔見知りだ。

「もしもし、長瀬です」

相変わらず渋い声が聞こえた……

「お早う御座います、長瀬社長。

実は昨夜、現場に桜岡さんが来まして……

ええ、どうやら仕事を断られた事が納得出来なかつたみたいで……」

暫くの沈黙の後

「それで、彼女は問題を起こしたのかい？」

若干だが、彼女が問題を起こしそうな事を予測していた？

「いえ……彼女は……

そうですね。

何でいうか素直？

いやオダテに弱い？

兎に角、昨夜は一緒に現場に向かい生靈と対面。

その靈力は本物でしたが、彼女が言つには完全に除靈は出来なかつたみたいなんです」

突然、気配が消えたと言つていたし……

最悪は、逃げられたか？

「失敗、では無いんだな？」

それで、榎本君が態々電話してきたのは何故だい？」

「いえ、責任の区分をハッキリさせときたくて……

「いえ、彼女は有能ですし僕より生靈の対応には慣れています。なので、当初の通りに彼女メインで除靈をさせた方が効果的かと勿論、僕も引き継ぎや手伝いはしますが、ちゃんと長瀬社長と仕事の契約を結んで欲しいのです」

「つまり無責任に入らせずに、ちゃんと最後まで仕事をさせ、と？」

「流石に長瀬さんは話が早い。

それと箱の興味が無い生靈なんて、僕には関わる意味が薄いんだ。

最悪の場合、箱に頼れずに自分で対応して死亡とか嫌過ぎる。

「そうです。」

彼女の能力は本物ですし、この後に仕事を依頼する場合も考えれば悪くないと思います。

勿論、僕への報酬は調査のみの分で構いません。

残りの除霊費用は彼女に渡して下さい

成功すれば、ですけどね。

彼女も自信が有りそうだったし、難しい除霊ではなさそうな感じだつた。

「榎本君が、そう言つたら問題無いだろう。わかつた。

それで、今後の動きはどうするんだい？」

「今日の午後に時間が有れば、彼女を伴い昨夜の説明と今後の話をしたいのですが……」
「そうですね。
「2時過ぎに時間は有りますか？」

パラパラと手帳を捲っているのか、暫く無言で待たされた後に

「今日は3時半から5時までは開いているよ。
その後は、お得意様との飲み会が有つてね。
都内まで行かなくてはならないんだ」

話すだけなら、2時間も有れば大丈夫かな……

桜岡さんとの契約については、僕は立ち会つ必要は無い筈だし。

「分かりました。

3時半に、そちらにお邪魔します。
では、宜しくお願ひします」

そう言って、電話を切った……

これで引継ぎは問題ないな。

この仕事が今後長瀬社長から仕事が貰えるかの、彼女への試金石になるだろ？。

でもタレントの仕事でも食べて行けそうだよね、彼女なら。

勿論、実力は本物だけど色物だからな……

怪談の季節の夏は忙しく冬は暇？

いやジーテオ制作会社と繋がれば、乱立するホラー物に出演出来るか

……

勿論、彼女は靈能力者として働きたいなら芸能界からは離れて堅実に企業との結び付きが必要だ。

だから、この手の口く物件に関連する不動産関係や警備関係の会社は重要な役割を果たす。

個人からの依頼なんて、よほどの信用がないと来ないんですよ。

暇つぶしにインターネットで彼女の名前を入力して検索すれば、出るわ出るわ！

色々なサイトがH.I.T.した。

その数、32000件以上だ……

殆どが、ヌレヌレだかスケスケだかの単語が入っているが注目度は高い。

彼女の場合、タレント霊能力者の方が大成しそうな感じがする。

除霊仕事も立派なビジネスだから、海千山千の連中に立ち向かえるのか？

まあ僕が心配する必要はないから、関係ないね！

長瀬社長のアポが取れたので、彼女の方にも連絡をしなければならない。

温くなつた缶コーヒーを一気飲みして、喉を潤してから携帯の着歴から電話を掛ける。

名刺を渡したから、この事務所の電話番号も分かつていいとは思うけど。

折り返し通話の方が、向こうも分かり易いからね！

こちあは8回田のコールの後に繋がった……

繋がつた後に少し間が空いてから

「もしもし……」

何だろ？

随分と不機嫌な声だけど……

「あの、榎本ですけど桜岡さん？」

ガサガサと音が聞こえた後に

「あっああ……えーと。

おはよ。

榎本さん、早いわね？」

えーと……

まだ寝てたな、コイツ……

「もしかして、寝てました？」

「いえ、ちゃんと起きてましたよ。

ええ、起きましたから大丈夫です」

慌てて否定してるけど、寝てたんだろう……

年頃の娘さんが、朝寝坊とは頂けないですよ。

結衣ちゃんの爪の垢でも煎じて飲ませた方が良いだろうか？

「……長瀬社長と連絡が取れまして、先方に3時半に向かいいます。だから1時間前には合流して打合せをしたいんだけど、どうかな？」

「んー 2時半に横浜ね。

待合わせ場所はどうするの?」

横浜東口だと、待合わせの定番は……

横浜そいつの大時計の下とかだけど、彼女の知名度を考えると面倒臭い事態になりそうだ。

あまり人目に付かないで、それでいて怪しくない場所と言つと……

地下街ポルタ内の丸善BOOKSの中で時間を潰していくつかな。

「じゃ、地下街ポルタの中の本屋知ってる?
その店内に居てくれれば、こちらから声を掛けるよ。
合流したら、近くの喫茶店で打合せしちゃう」

本屋なら最悪、少し待たせても苦にならないだらう。……

「分かったわ。

じゃ2時半に本屋に居れば良いのね?」

後一つ、大切な事を言わなければならない。

「桜岡さん……」

「なつ何よ、改まつて?」

「服装だけど、巫女服は駄目だよ。

それとサングラスかマスクで変装してね。

僕は見分けが付くと思うし、分からなければ携帯に電話するから

逆に凝った変装は注目され易くバレ易い。

しかしサングラスやマスクならば、花粉症の時期だけに結構同じ格好の連中が居る。

僕が分からなければ、大した変装能力だし分からなくとも携帯に連絡すれば店内なら気付くだろう……

「わっ私だつて何時も巫女服は着てません！

昨夜は仕事現場に行くから着てたの！」

怒鳴られてしまった……

でも昨夜の様子だと、彼女にはウツカリな属性が垣間見えるんだよなー！

じゃ私服姿を楽しみにしてるからね！」

そりゃ言つて携帯を切る。

あれだけ言えば、それなりな服装で来るだろう。

プライドが高そうだから、ブランドスーツで決めてくるかもね！

楽しみだ。

僕は、量販店の吊しスーツで十分だけど……

男つて、こう言つ場合は凄く楽だ！

何たつて背広とネクタイと革靴が有れば、大体オーケーだからね！

第1-2話

今日は午後から桜岡さんと待ち合わせをしてから、長瀬綜合警備保
障に行く。

先に待ち合わせの彼女とは横浜で一時半だから……

事務所を一時半過ぎに出ても間に合ひ。

一応、女性との待ち合わせだから先に着いてなくては紳士を名乗れ
ないだろ？

勿論、頭に「変態と言つ名の」が付くけどね……

まだ暫く時間が有るので、今後の流れを考える。

生靈……

つまり生きて生活している相手が居るんだ。

執念か怨念かは知らないが、奴はマンションに固執している。

桜岡さんは準備とか調査とか段取りには無縁な霊能力者だと思つ……
多分だが、番組が探してきたり直接依頼があつたりした案件しか対
応した事が無いのか。

または出たとこ勝負で解決してきた力と自信が有るのか。

少ししか一緒に行動してないけど、プライドが高いけど素直で乗せられ易い性格だと思う。

根っこは善人で優しい娘さんで、本当に人助けたいと思っているタイプだ。

つまり自分の靈能力で人助けをしたい、稀有な人材だ。

僕は自分の宿痾を解決する為に箱に縛られて、この仕事を続ける。

他には詐欺紛いの金儲けをする連中も多い。

そして胡散臭く偽物が多い業種だ！

だから僕には彼女が眩しく見えるし、変にスレたり潰れて欲しくない……

しかし自分に最悪の秘密が有るから、同業者として馴れ合いは危険なんだ。

あの他者を巻き込む箱の呪いを考えたら、同罪として肅清されても文句は言えないのだから……

今回の件は、彼女に引き継ぎをして手伝う。

その考えは変わらない。

後は……

どれだけ踏み込んで手伝つかだ。

彼女は生靈と直接対決しか出来ない。

つまり生きている相手を探し出す事は難しい。

相手の生靈を生み出す程の悩みを解決する事も難しい。

普通の人間の事を調べる事は、僕だつて難しい。

だから普通なら興信所を使うんだが……

彼らだつて具体的な事を指示しないと無理だ。

何か切欠か調べる方向は、僕らが探し出さないと駄目なんだよね……

それと予算！

コレ大切！

長瀬社長は、あのマンションのオーナーじゃない。

なら何故、僕に依頼が来たかと言えば……

長瀬社長は、マンションのオーナーと当然ながら面識が有るんだ。

田ぐ付きの物件を解決すれば、高値で販売出来る。

ならば、長瀬社長は自分の手配で解決しマンションのオーナーに交渉を持ち掛ける筈だ。

幸い？かは分からぬが、僕は除霊 자체が目的だから費用は安い。

だから立替え払いでも、先行で僕に依頼した。

解決すれば何割か増しで請求するのだろう……

この業界で曰く付き物件を抱えている人は多い。

長瀬社長程の人脈が有れば、今後も僕に除霊仕事が舞い込むから持ちつ持たれつの関係だ。

さて今回の件は……

そう考えると興信所への依頼は、長瀬社長の独断では許可出来ないだろう。

興信所とは調査日数が掛かれば費用も莫大だ！

それにボランティアと言つていたが、責任区分を明確にする為にも桜岡さんには長瀬綜合警備保障と契約を結んで欲しい。

彼女の為でも有るから。

しかし契約には支払いが発生する。

僕は調査込み実質2日間だし、解決してないから20万円位だ。

しかし彼女の依頼料は分からぬし、同業者が聞く事はマナー違反だろう。

「」は長瀬社長に、本来のマンションオーナーと話し合ひをして貰うしかない。

もし費用が見込めなければ、または見合つた金額でなければ手を引けば良い。

ヨシ一

方針が決まつた所で時計を見れば、既に12時前だ……

随分と考え込んでいたんだな。

昼飯は外食か「ンビ」にしておる。

結衣ちゃんが

「良かつたら、お弁当を作りましょうか?」

と言つてくれたが、彼女の負担を増やす訳にはいかない。

それに私立の中学校に通う彼女は、給食が出るので僕の為だけに早起きしてお弁当を作るのは大変だから……

何故、お金の掛かる私立に通わせているかと言えば、

ぶつちやけ彼女は虐められつ子体质だ!

大人しく引っ込み思案で、天涯孤独だ。

しかも、彼女自身に人に大っぴらに話せない秘密がある。

公立の学校の教師は、基本的に虐め対策は消極的だ。

相談しても、なんの解決にもならない連中が多い。

しかし私立は違う。

常に生徒達を観察し何か有れば……

例えば喧嘩でもすれば、直ぐに連絡が入り学校に呼ばれて当事者と担任、それと各自の親を交えた話し合いをする。

そして解決するまで、学校は責任を負つて行動する。

学校と言えども、高い金を払うだけ有り生徒はお客様なのだ。

偏差値の高い私立は、この辺が凄い。

幸い彼女は真面目な性格故に、頭は良かつた！

更に僕のメインバンクの支店長に紹介して貰い、編入試験を受けたんだ。

見事合格したのは結衣ちゃんの実力だし、僕は口りつ娘の足長おじさんを気取れただけでも良い。

最大の理由は、かの学校の制服が可愛かつた事。

体操服がスパツツだつた事。

そして美少女が多くて有名な女子中学校であり、体育祭や文化祭は親族関係者しか行けない厳しいセキュリティで有名だった事。

なんと新体操部とか水泳部とか有るんだぜ！

初めて文化祭に招待された時は、思わず感動の涙を流したね。

レオタードに上着を着ただけの少女達が、普通に廊下を歩いていたんだぜ！

結衣ちゃんには、是非エスカレーター式で付属高校にも行って貰いたい。

なんて妄想から我に帰ると、何故か行き着けの鰻屋のカウンターに座つていた……

「へい、うなぎの蒲焼き大盛り！

それと骨せんべいお待ち！」

顔見知りの板前さんが、ドンっと大盛りの丼を置いてくれた。

「あれ？もう頼んでたんだっけ？」

板前さんは、少し呆れた顔で

「お密さん。

「ヤニヤしながら入つて来て、何時もの大盛りね！
つて言いましたよ」

「骨せんべいも？」

「へーーー。

ちよつと骨せんべいが揚がりやしたよー。
つて言つたらソレもつて……」

うん……

妄想癖は注意しないと、ただの変態として通報されそつだー。

「有難うー。

頂くよ……」

一口食べれば、脂がのって無いー！

この店は天然物を浜名湖から取り寄せている。

所謂ぐだり鰻だ！

鰻は水温が10℃以下になると泥の中に潜り、冬眠みたいにじっとしている。

寒い冬を越す為に沢山餌を食べて脂ののった秋から冬が、最も鰻の旨い時期だと個人的に思う。

モグモグと美味しく食べて、板前さんに声を掛けて店を出る。

因みにお値段は、一人前大盛りで3800円だ。

妄想癖の改善を今後の課題として、待ち合わせ場所に向かつて京急電鉄の快速特急に乗る。

平日の昼間だけあり混んでない為か、進行方向を向いた二列シートに座れた！

ゆつたりと座り窓の外を見れば……

海の方から暗い雲が此方に向かってくるのが見える。

この時期は雨が多いが、最近は寒くても雪にはならないな。

鞄の中に折り畳み傘を入れて有る事を思い出し、自分の準備の良さに少し嬉しくなった……

快速特急で約30分、京急横浜駅に到着。

ホームの先端にLEDが埋め込まれ、電車の到着と共に点滅をする珍しい設備の有る駅だ！

改札口は地下街に直結している為に、エスカレーターで下に降りる。

改札を抜けると、右がダイヤモンド地下街。

左が地下街ポルタだ。

待ち合わせはポルタの中の丸善りゅうかんだから、左側に歩いて行く。

直ぐにポルタの入口の大階段に到着。

総ガラス張りの大屋根を見上げれば、ポツポツと雨の水滴が見えた。

「あちやー降つてきたか……」

「そうね……

天気予報通りだけど、雨は嫌だわ」

ボケつと立ち止まり見上げていたら、急に声を掛けられた。

慌てて振り向けば……

昨夜の巫女服とは、随分印象の違う彼女が立っていた。

シックなグレーのスースにポンチョ？マント？を羽織りベレー帽を
チョコーンと乗せている彼女は、間違い無く美人だ！

だが、惜しい！

僕は口リコンだから、感動は半減だ！

「こらにちは、榎本さん。
どひっ？」

その場でクルツと回る彼女を通りすがりの野郎共が振り返って見て

い。

「良くなつてますよ。

一瞬誰だか分からなかつたし……」

褒められたのが嬉しかったのか、中々の笑顔を浮かべてくれました。

「じゃ打ち合わせをするから、取り敢えず喫茶店に行きましょう。マイアミガーデンって言つて、何時も空いてる店が有るんですよ」

「なに、その基準？

普通はケーキが美味しいとか雰囲気が良い店を知つてるとかじゃないの？」

ちょっとビックリした顔をしたが、素直に付いて来る。

生靈とか除霊とか、怪しい単語が多い話をするから混んでたり周りの客席が近いのは良くないから……

その点、この店は味も値段もそれなりで何時も空いてるから密談に利用している。

やはりお風過ぎなのに空いている店内の一一番奥の席に座る。

「なんか……

店内は妙に明るいのに、余りお客様が居ないのね……」

女性同伴だし、薄暗い店はNGですから。

店員さんにアイスコーヒーを2つ頼む。

ケーキ位はと勧めたが、要らないと言われた。

うん、メニューの写真で見てもどうしても食べたいケーキでは無いかな？

注文した品物が届くまでは談笑し、店員が下がつてから本題に入る。

私の事務所は京急電鉄の上大岡駅の近くの商業ビルの中に有る。

昨夜は遅かったから少し朝寝坊してしまったけど、まさか榎本さんから電話を貰う迄熟睡するとは思わなかつたわ。

ん一寝酒の焼酎のお湯割り三杯が、思ったより効いたのかしら？

目覚ましは掛けていたのに不思議だわ……

その後、一度寝てしまい気が付いたらお昼過ぎー。

ビックリして起きて、買い置きのカツプ焼きそばを食べて……

永遠の定番焼きそばの、ペヤングソース焼きそばよー。

そして歯を磨き、シャワーを浴びて事務所に向かつた。

流石に青海苔が歯に付いていたなんて、女性として終わった感があるし。

直接待ち合わせ場所に行きたくて、仕事関係の資料や名刺とか自宅に置いてなかつたから……

一応、大人の女性として恥ずかしくない化粧と服装に気を使つたわ。これでもファッションセンスは中々らしく、テレビ局の衣装さんからも私服の「一デイネートは褒められた事もあるの。

事務所に付いたら直ぐに荷物を纏めて待ち合わせ場所に……

少し余裕を持つて着くと思えば、目の前に大屋根?を見上げている彼を発見。

何やら天氣を気にしていたから、声を掛けたわ。

一瞬、私を見てビックリしていた！

ザマア！

私だってお洒落すれば中々の美人なのよ。

ほら、笑顔でクルッと回つてあげれば道行く男子が注目してくるわー！

こんな私を連れて歩けるなんて幸せでしょ？

早くエスコートしなさいな。

連れて来られたのは、妙に店内が明るく客も疎らな喫茶店……

ケーキを勧められてメニューを見たけど。

[写真に写っているケーキは、どれも食指が動かない微妙な物……

確かに密談には持つて来いかも知れないけど、女性同伴としてはどうかしら??

男として、どうなのよ?

それについて、小一時間問い合わせたいわね……

全く!

第13話

客も疎らな喫茶店にて、これから相談をする男女。

一人は筋肉ムキムキなオッサン。

一人は妙齢の美女。

「凹カツブルにも見えなくは無い。」

周りに居る僅かながら男性客も、羨望の眼差しをオッサンに向けていた。

畜生、美女と野獸を氣取つてんじゃねーよ、と……

だがしかし、残念ながら男の方はロリコンだった！

折角の美女も、攻略対象外では仕方ない。

「それで……

私はどうしたら良いのかしら？

契約とかの交渉事は苦手と言つか……

今回が初めてなのよ。

何時もは先方から提示されたり、お礼として渡されたから

あれ？

そこの数を担当してなかつたつけ、この梓巫女シリーズはTVで何度か見た記憶が有るけど……

「もしかして……

桜岡さんって、凄いお嬢様だつたりする？」

お金に無頓着なのは、金持ちかボランティア精神が旺盛な一寸アレな人しか居ない。

勿論、彼女は善人だとは思うが、そこまで博愛精神が豊かでもあるまい。

つまり金持ちなんだろ？

「えっ？」

まあパパは社長だし、お嬢様と言えばお嬢様かしら？
でもそんなにお金持ちでも無いわよ。

別荘は有るけど、クルザーは持つてないし

いや別荘の維持費とクルザーの維持費つてどっちが高いの？

家と船じゃ家じゃね？

と言つ事は、結構安く使われているのかプライドに見合ひの金額ならそれで良いのか？

行儀良くアイスコーヒーを飲む彼女を見れば、確かにマナーが良く美貌を伴つて上流階級のお嬢様に見えなくも無い。

深窓の……と言わるとお淑やかでないのがネックか？

「失礼だけど、長瀬社長との話しあいには桜岡さんの報酬の件も含

まる。

報酬は……

同業者の僕は聞かない事にするけど、相場といつか自分の設定価格つて用意してる?」

料金表までとは言わないが、何日かかってレベル別の生靈の価格位は金額が弾けるよね?

しかし彼女は頬を少し赤く染めて俯くばかり……

「えっと……大体一回で100万円?」

駄目だこの女……

絶対周りから騙されている。

「えっと、それって経費込みで何日掛かっても同じ金額じゃないよね?」

黙つて頷いたよ!

腕時計を見て残りの時間を確認する……

大体あと30分後には店を出ないと、待ち合わせ時間には間に合わない。

でも、このまま行かせたら多分だけど……

あっせり

「じゃ 100万円で…」

「分かりましたわ、おほほほほーー！」

とか言つて納得されそつだ。

1件100万円は悪い金額じゃない。

でも諸々の条件をつけて、安からうが高からうが納得せしられる根拠と、万が一の場合の保険をかける事を知るべきだ。

僕は、いつまでも節介なキャラじゃないんだけど……

溜め息をついてから話し出す。

「桜岡さん……」

「なつ……なによ？」

「世間を知らうか！」

先ずは、どんな内容でも同額は駄目だよ。

仕事の規模や難易度によって料金を変えるのは当たり前だ！
この仕事は事後清算が多い……

何日かかるか分からない物件も多いし、命の危険は千差万別だから同一で考えちゃ駄目だ。

それこそ危険で難易度の高い物件を優先的に回されるよ

彼女はグッと息を飲み込んだ。

当然、言いたい事や反論もあるんだろう。

「先ずは話を聞いて欲しい。

君の力は本物、それは分かる。

この業界はインチキや偽者も多いから、本物の靈能力者が一括の安値で仕事を請けると言えば殺到するだろう。

しかし、相手もリスクを正直に教えるとは限らない。もしかしたら最悪の条件かもしれないし靈以外の危険もあるかもしれない。

例えば不良債権でヤクザ絡みとか、良くない連中の溜まり場とか……自分を守る為にも最初に条件を付ける事、危険に見合った金額を請求する事が大事だよ。

あと、あまり言いたくないけど……

同業者に恨み妬みを買う。

力有る連中に恨まれるのは、危険だ……」

実際に呪いを掛けられたり邪魔されたりする可能性は捨てきれない。

欲に塗れた人間ほど、怖いモノは無いんだ。

「靈障に困った人々を助ける為に梓巫女になったのよ……

それを妨害が有るからって止める事は出来ないわ。

私は……」

信念有る善人ほど扱い辛いモノは居ない……

なんたつて正論だし、何を言つても障害を跳ね除ける意志が有る。

ただ、その障害を跳ね除ける力が足りなかつたり無闇に要らない敵を作つたりするんだ。

だから志半ばで挫折する……

大抵が、最悪の裏切りかなにかでね。

「桜岡さん……

先ずは今回の物件を解決する事を考えよつ。

それには、長瀬社長に正式に君が除霊する内容で契約を結ぶ。

費用については長瀬社長と相談が必要だ。

何故なら彼はマンションのオーナーじゃない。

僕は比較的安価だから先行投資で仕事を依頼した。

多分少し上乗せして、マンションオーナーに請求するつもりだったんだと思つ。

しかし、蓋を開ければ僕だけじゃ対応出来ないから君を巻き込んだ

……

これ以上の費用負担は難しい。

だから長瀬社長にマンションオーナーと協議して貰い、僕らが引き続き仕事をして良いか決めて貰つ。

じやないと無料奉仕になるし、最悪はこの仕事を外されるからね

「そう言つても彼女は未だ不満顔だ……

だから

「取れる所からは、ちゃんと取らないと駄目だよ。

その分、お金が無く本当に困っている人を助ければ良い……」

と言つて、取り敢えずこの話は先送りにした。

イマイチ納得はしないけど了解はする、みたいな……

もう一悶着有るかもね？

でも先ずは、この仕事をどうするか決める。

その後の話は、ゆうべつ考えれば良いから……

「いいでタイムリミットが来た！」

「さあ、長瀬社長に会いに行こう。

そろそろ出掛けないと間に合わないよ」

レシートを持ってレジに向かつ。

当然、此処は僕の奢りだ！

流石にロリコンの僕だが、世間的にこれだけの美人と同伴でコーヒー代を折半とか奢られるのは勘弁して欲しい。

甲斐性無しかヒモに見られて、男として終わった感じがするから……

彼女も何も言わないのは、奢られ馴れているんだろうな。

会計を済ませて店を出る。

「すみません、御馳走様でした」

そう言つてくれるのは、育ちの良さが伺える。

「いえいえ……」

そう言つて並んで、スカイビルの方に歩いて行く。

流石は商業テナントの多い飲食店舗や物販店舗を抱える地下街だけあり、通行人は多い。

客層も幅が広い。

そんな中でも、周りから注目を集めの二人だ。

「あれ見て！

お嬢様と番犬かしら？」

「ガードドッグ？

いやボディーガードかしらね」

「おい！

似合わないスーツのゴロラが美女を連れてるぜ

「どうせ暴力で従わせてるんじゃねーの？」

本当に凸凹コンビなのか、容赦ない批評が聞こえます。

女性なら聞き流し、野郎ならキツい視線を送る……

「榎本さん、ほら威嚇しない。

こうやって腕を組めば、カップルに見えるわ」

そつと恋愛感情は無く、周りの暴言に対しても哀れに思い腕を組んで

きつと恋愛感情は無く、周りの暴言に対しても哀れに思い腕を組んで

くれたのだろう……

しかし知り合いの多い場所では逆効果だ！

しかも彼女は色物の有名人……

スポートの紙面を飾れる怪しさだよね？

長瀬綜合警備保障はスカイビルの18階。

シースルーエレベーターに乗り暫し外の景色を楽しむ。

遠くにランドマークタワーが見える……

チン！

と言つ電子音が鳴りエレベーターは目的の18階に到着。

彼女を伴い、長瀬綜合警備保障の受付に向かった。

「こんにちわ、榎本さん。
社長から連絡は入っています。
どうぞ……」

顔見知りの受付嬢に声を掛けると、直ぐに少会議室に通される。

すたすたと社内を進んで行くと

「随分と手慣れているのね……」

勝手に他人の会社の中を進んで行く事に疑問を持ったようだ。

「僕は長瀬さんから良く仕事を貰う。

それは、この会社が警備を請け負つた建物が多いからね。

長瀬綜合警備保障の外部スタッフになってるんだ。

その方が便利だよ。

例えば不法侵入にならないよね、警備を受け持つ会社の社員なら、仕事先のビルの入館手続きとか話が通り易いし

「なる程……

確かにそうね。

所属会社や訪問先、訪問内容とか書かれるわね。

受付でビルの警備員さんに

この辺の理解が早いのは、何処かで苦労した事があるのだろう……

大抵の心霊現象は深夜。

管理された建物に入るには入館手続きが要る。

そこで

所属 靈能事務所

目的 除霊

うん、怪しい怪しき過ぎる。

しかも立ち会いを頼むと大抵は断られる。

被害にあつてゐる方々が夜中なんかに来たくない。

自分の家なら兎も角、わざわざ立ち会いなんか来ない。

だから警備員に連絡だけ入れておく。

その時に不審者や異常を確かめる為に

「身元の確かな警備会社から調査・警備の為に派遣された」

僕ならば、割とすんなり通してくれる。

じゃないと胡散臭さ過ぎる肩書きだから……

「色々と考えているのね……

でも私は女性だから、その手は無理だわ」

「これは警備員向きなムキムキの僕だから可能だ。」

流石に女性では無理があるよね。

そんな話をしながら少会議室で待つてゐると長瀬社長が入ってきた

……

何時もスーツで決めたダンディーな紳士だ。

話す声も渋い。

「わざわざ」足労すまないね。
で、今回は複雑らしいね。
桜岡さんは会うのは初めてか。
どうも、長瀬です」

にじむかに名刺を差し出す。

驚いた事に彼女は名刺を持つていた。

「はい、榎本さんにも……
office SAKURAOKA 代表、桜岡靈です。
宜しくお願いします」

手渡された名刺を見れば、確かにoffice SAKURAOK
A 代表桜岡靈となっていた。

「わざわざいつも。

榎本心靈調査事務所の榎本です。
名刺は以前渡しましたね」

そう言って頭を下げる。

端から見れば普通の商談の開始風景だ……

「それじゃ話を聞こつか……」

僕達は打ち合わせの通りに、長瀬社長に現在の状況を報告した。

「生靈……か。

それで、今後の方針は?」

「生靈の対応は、僕は不得意ですから桜岡さんに手伝つて欲しいのですが……

多分、長期になる可能性も有るし場合によつては興信所に依頼をする可能性が有ります。

相手は生靈……

つまり生きている人間を相手にしなければならない。
でも探偵じゃない我々が探しても見付ける事は難しい。

長瀬社長が言つていた、あのマンションの警備委託期間内に解決出来るのは……

流石に彼も渋い顔になる。

一時的に警備を任せられたマンション。

期間は決まつてるので、長期対応は想定外だらう。

「確かに私が警備を請け負つた期間は短い。

それで見通はどうなんだい?

それなりに勝機は有りそうかい?」

「見通しは……

正直難しいです。

相手を特定出来れば、対処も有りますが待ちで除霊は厳しいです。

毎日出るかも分からないから、出来れば原因を突き止めた方が良いですよ」

「私は、やりたいわ！」

乗り掛かつた船ですからね。

このまま知らぬ存ぜぬは出来ないわ」

ああ、やつぱり説得出来てなかつた訳だ……

こちからやりたいと言へば、いや予算が……

なら幾らでも良いわ！

的な流れかい？

少し困った顔で長瀬社長を見詰める……

彼も視線を感じたのか、こちらを一瞥してから溜め息をついた。

お互ひの腹の探り合いだけど、彼も僕も持つ持たれつの関係だし。

落としどひを探らないと駄目かな……

この見た目に騙されがちな、美女だけど中身がオッサンで善人の為に苦労している……

せめて外見が口りなら頑張りも報われるのだが。

どこのぞいつ見ても育ち過ぎている。

どにも食指が動かないんだが……

「長瀬社長。

取り敢えず、マンションオーナーと話し合いをして貰えませんか？

今のままだと、警備の連中の危険は取り扱えてないんですね。

アレは生靈だから、地縛霊と違い移動出来ます。

建物周りだけを巡回させても、かなり話題になつていて。

警備の目を盗んで侵入する馬鹿は居るでしょうね……」

深夜にランタンの灯りに照らされた、蠢く人影の目撃者は居る筈だ。

インターネットに書き込まれたら、人が集まってくる。

多分だが、その中には質の悪い連中が居る。

度胸試しや興味本位で侵入し……

怪我を負つたり、最悪は死ぬ。

誰が、この阿呆の責任を取るのか？

不条理だが、警備を任せていた会社と建物の持ち主だ。

不法侵入なのに、安全上・警備上に問題は無かつたのか？

防げた事故じゃないのか？

お前らが、ちゃんと警備をして持ち主が立入禁止の措置をしておけば……

助かつた命だろ？！

だから謝罪と保障をして欲しい。

そつ言つ逆ギレをする遺族が居るんだ……

その点を匂わせてみた。

案の定、腕を組んで悩み始めた。

「本当に、又出るかね？」

大分揺らいできたかな？

少なくとも長瀬綜合警備保障の警備中に、そんな不祥事はお断りしたい。

だからと言つて警備員の人数を増やして警備体制を強化するのと、僕達に頼む為にマンションオーナーと交渉する手間を天秤に掛けている。

最悪の場合、マンションオーナーが除霊を断れば等しくリスクを背負わされるから……

長瀬社長も何とかマンションオーナーと交渉して、除霊の件と料金を認めさせたい。

そして自分と、社員の安全を確保したい筈だ。

「僕でも除霊後に一週間は様子を見ますからね。

今回の件は、桜岡さんは除霊が成功して奴が成仏したかの確証は無いと言つた……

つまり相手は手負いですからね。

完治するまで出ないか、怒つて周りにハツ当たりをするかは分かりませんね……

桜岡さんも、そう思つよね？」

「えつ？

ええ、そうね。

そうかも知れないわね……」

妙に慌てて相槌を打つけど、まさか寝てた？

罰が悪そうに此方を見る彼女は、僕と長瀬社長の会話を聞き流していたのだろうか……

暫し沈黙が流れる。

僕が駄目押しをして、彼女が肯定した……

これで長瀬社長は追い込まれた筈だ。

後は彼の判断を待てば良い。

僕は用意されたコーヒーを飲む。

うん、すっかり温くなっちゃったな……

砂糖とミルクが無いと飲みにくいんだよね。

「分かった。

マンションのオーナーと掛け合ってみよう。

継続で君達に任せるとか、新しい連中を呼ぶかは向こう次第だからね」

釘を刺されたな……

最悪、長瀬社長は手を引く事も視野に入れている。

それが向こうが手配した霊能力者の場合を持ち出したんだ。

先方がゴネれば、僕達を切り離して話を進めるのだろう。

悪い条件なら、僕達を紹介した分のリスクを負うかもしれないから

もしかしたら、この物件は放置かもしれないな……

「今日のところは長瀬社長の連絡待ちですね。

宜しくお願ひします。

さあ桜岡さん、お暇しようつか?

今後については、そのマンションオーナーとの交渉次第。

又は交渉の場に同席せられるかも知れない……

「え？ ？」

もう良いのね、分かったわ。
では長瀬さん、失礼しますわ」

桜岡さんは、イマイチ状況を理解してないのでは？

面識の無いマンションオーナーとの交渉には、彼女は連れて行かない方が良いね。

後で釘を刺しておこう。

長瀬社長からマンションオーナーとの交渉に、意見が聞きた以為
同席して欲しいって頼まれたら……

ホイホイ付いて行きそだだから怖いな。

笑顔で長瀬社長に別れの挨拶をする彼女を見て、見えない様に溜め
息をつく……

嗚呼、溜め息の分だけ幸せが逃げるとは良く聞く。

しかし今回は、溜め息の分だけ苦労しそうだ……

主に僕が！

桜岡ちゃんと連れ立つて横浜駅に向かう。

確か彼女の office は、京急上大岡駅の近くだった。

だから途中迄は同じ電車だ……アレ?

「桜岡さん、何で来たの?」

電車?車?

「電車よ。」

待ち合わせの場合、時間が読めない車は使わないわよ。
それに横浜駅周辺は渋滞するし……」

一般的な常識は凄く持っているんだよな。

「そう。

じゃ途中まで一緒だね。

僕は京急横須賀中央駅までだから

丁度ホームに入ってきた快速特急に乗り込む。

行きと違いソコソコに混んでいる為、並んで吊革に掴まる。

電車が走り出し案内のアナウンス放送が終わると……

「えつ？」

今後の話をしないの？」

つて唐突に話しおした。

つて今後の話？

だつて長瀬社長からの返事待ちでしょ？

「えつと……

長瀬社長が先方と話し合いをして、結果で僕らは動く話になつたよね。

それは理解してるよな？」

「でも……

待つてるだけじゃなくて、何か出来る事があるんじゃなくて？」

「無い！」

ちゃんと契約する迄は、オーナーさんとの話が纏まる迄は何かしちゃ駄目だ。

それは長瀬社長にも迷惑をかけるの……」

ブーつて頬を膨らませる……

それは口つゝ娘がやると嬉しいが、貴女がやつても子供っぽいだけだ。

子供っぽこと言つても、絶対子供にはなれない。

だから僕には……

無駄無駄無駄ムダアー！

「結果は2～3日中には分かる筈だよ。
だから、結果を聞いてから行動するのー。」

「でも……」

「でもじゃないでしょ？』

ちゃんと契約してから仕事をするつて約束でしょ。
もし契約前に桜岡さんが怪我でもしたら……
長瀬社長が困るんだよ』

またブーっと頬を膨らませる……

「……」は話し掛けない方が良いだろ。」

暫し無言で並んで窓の外の景色を見る……

行きに降り出していく雨は、今は本降りだ。

長瀬綜合警備保障から横浜駅までは、屋根付きの通路を歩いて来た
がら余計に雨足の強さを感じる。

冬の雨には、嫌な記憶しかない。

爺ちゃんが亡くなつたのも、親父が亡くなつたのも……

こんな冬の雨の日だった。

「何よ！」

そんな怖い顔して。
分かりましたわ。

大人しくしています。

でも連絡が入つたら動き出すわよ

ん？

どうやら思い出していた時に、怖い顔になつていたらしく……

それで僕が怒つていると誤解したんだな。

「いや『メン』。

死んだ爺ちゃんと親父を思い出してね。
アレも、こんな寒い雨の日だった……」

爺ちゃんの亡骸を抱えて泣いたのも、親父の亡骸に対面したのも。

どちらも寒い冬の雨の日だった……

そして、僕が箱に。

あの箱に居る奴に初めて会つたのも……

「ナリ……

お祖父様とお父様が……」

お祖父様？お父様？

糞ジジイと糞オヤジだつたよ！

様付けなんて……

背中が痒くなるよ！

「いや、気にしないで……

それより長瀬社長からマンションオーナーに説明したいから同席を頼まれても、一人でホイホイ行かないように。必ず僕に連絡して欲しい」

コレは念の為にも言つておかないと。

最悪、長瀬社長が桜岡さん一人に押し付けて縁を切るとか……

又はマンションオーナー側から不利な条件を押し付けてくるか……

人の良い彼女じや、口口と騙されるよね。

クスクス笑いながら

「なにそれ？

榎本さんって私の保護者なの？」

つて返してきたけど、そんな気がしてきたよ。

「そんなモンかな……

少なくとも、この件が解決する迄はね」

じゃないと直接被害を受けるのは、僕だし……

「クスクス……

可笑しいわね。

本当にボディガードみたいよ。」

何故か嬉しそう？

プライドの高い彼女なら、私に任せられないの？

つて怒るかと思ったんだけど……

電車は弘明寺駅を通過した。

後3分位で京急上大岡駅に到着するだろう。

「そろそろ着くね。

じゃ連絡を待ってるから、そっちも大人しくしてる様にね」

「あら？

ウチ（office）に寄つていかないの？」

何故に？

そして周りの乗客も、何故コツチを伺うんだ？

「それは連絡が着てからでしょ？」

内容によつては事前に話し合う必要が有るかも知れないからね

そう言つと車内アナウンスが流れて駅に到着した。

「あら残念ね。

では榎本さん、ご機嫌よう」

そう笑顔で言つて、颯爽と電車を降りて行つた……

「ヤレヤレ……

お嬢様のお守りは大変だ」

誰に言つともなく、ボソリと漏らすと、周りからの視線がキツくなつた？

周りを見渡せば、男性陣が睨んで居る。

「ああっ？」

そいつ等に視線を合わせてやると、殆どが目を逸らすが……

何人かは睨み返して来やがつた！

アレか？

まさか嫉妬か？

結衣ちゃんの時は親子ですか？

微笑ましい的な反応の癖に、何で桜岡さんだとシット団なんだよー！

ドッと押し寄せる疲労感に耐えながら、早く事務所に帰らうと思つた。

今日は早仕舞にして、早く結衣ちゃんと癒やされよ。……

大人しく微笑む彼女の顔を妄想しながら、周りの視線を無視した。

端から見たらニヤニヤしたオッサンは、さぞかしキモかつただろ。……

僕は夢を見ているのだろう。……

桜岡さんと別れてから事務所に戻り早めに自宅に帰った。

結衣ちゃんと楽しく夕飯を食べて、風呂に入つて直ぐに布団に潜り込んだ筈だ。……

しかし意識が覚醒しているのに、周りは真っ暗だし体も動かせない。

また、あの夢なのか。……

「 そうだよ。……

お前の父親達が苦しみ悶えている。
早くお前も、コツチに来いとな。……」

耳元でアイツが囁く。……

くつ……動け動くんだ！

手足に力を入れてもビクともしない。

無駄に足搔いていると正面の暗闇から、爺ちゃんと親父が現れた……

見る度に奴に魂を漫食されているんだろう。

最初は会話も成り立つた。

しかし今では苦しみからか、罵声しか聞こえない。

「あや……あや……

何故、お前だけ……無事なんじや……」

「ちち……が……

苦しんで……こるの！」

お前が……何をして……るんだ……」

タールを流し込んだ様な沼地から、這つ様に此方に手を伸ばして……

恨み言を話す爺ちゃんと親父……

くそつくそつ糞ツタレがあー！

「オイ、箱！

出できやがれ。

何故だ！

僕はお前に贋を差し出していく。

なのに何故、爺ちゃんや親父が苦しんでいるんだ！

出て来て説明しやがれ！

幾ら叫んでもヤツは姿を表さない。

口以外に動かせない僕の耳元で高笑いをするばかり……

ヒヤハハハハハー！

お前らの魂は、私が握っているんだよ。

足掛け、足掻くんだー！

恨み言を言いながら這つてくる爺ちゃんに足首を掴まれた時点で……

体の自由を取り戻し、起き上がった。

「くっ糞ツタレガ！」

全身汗だくで疲労感が凄い……

ノロノロと起き上がり、部屋に有る!!!!冷蔵庫からコーラのペットボトルを取り出し一気飲みをする。

「くっゲホッ……ゲフー」

激しく咽せたが、今はそれが丁度良い。

少しでも気が紛れれば……

僕はペットボトルに残るコーラもがぶ飲みし、そのまま布団に倒れ

込んだ。

疲労感からか、襲ってきた睡魔に身を任せたる……

「爺ちゃん、親父……

まだ苦しんでいるのか……」

張り裂けそうな胸の苦しみも、眠ってしまえば一時は忘れられるか
が。

第15話

嫌な夢を見た……

体は疲労感で一杯で汗だくだ。

あれから気を失う様に眠りについてから、3時間位は寝れただろうか？

少し体力が回復し、体のベタベタが気になり始めた……

一度気になりだすと中々寝付けないものだ。

時計を見れば5時55分か……

冬の朝は未だ日の出前。

部屋の中も真っ暗闇だ。

「風呂で汗を流すか……

今日は長瀬社長の返事が来るまでは、自主的な休みでも良いかな……

……

クローゼットを漁り、着替えとバスタオルを持ってバルスームへ行く。

一階の結衣ちゃんの部屋の前を通るが、未だ彼女は夢の中だらう。

扉から漏れる灯りは常夜灯の淡い光だけだ。

彼女を起こさない様に静かに移動する。

ウチの風呂は家庭用の濾過機能の付いた24時間風呂だ！

だから何時でも設定温度の42　のお風呂に入れる。

夏は39　に設定するが……

結衣ちゃんは良く出来た娘さんだから、オッサンである僕の下着を含めた洗濯物も一緒に洗ってくれるし、お風呂のお湯も入れ替えたりしない。

年頃の娘を持つ父親の悲劇は……

回避しています。

体を簡単に洗い流し、浴槽に浸かる……

「ふいー

風呂は命の洗濯と、逃げちゃ駄目な子供が言っていたな……」

タオルを絞り両手の上に乗せる。

じんわりと疲労感が溶けて行くのが分かる……

15分位だろうか？

体の芯まで暖まつたので上がる事にする。

そろそろ出の出が近いのだらうか？

外で雀がチュンチュン鳴き出したし、仄かに明るくなり始めた……

浴室を出ると脱衣場で体を拭く。

部屋の灯りは敢えて点けなかつたが、窓から太陽の光が少しづつ入つて……

「あや！」

正明さん、「めんなさい」

どうやら洗面所を使いたかつた結衣ちゃんに、僕の全裸を見られたか？

窓を向いていたから息子はセーフだが、尻エクボはバツチリ見られたらかな？

「ああ……

結衣ちゃん、直ぐ出るからね」

彼女に声を掛けてから、急いで身支度を整える。

普段は7時に起きて朝の支度を始める筈だが、今朝は早出なのかな？

髪の毛をガシガシと拭きながらキッチンに向かえば、結衣ちゃんが朝食の準備をしていた……

「おはよ、結衣ちゃん。

今朝は早いね。

未だ6時半前だよ?「

まな板で何かを切つている彼女に声を掛ける。

「はこや?

「じゅめんなさい、正明さん。

まさかお風呂に入つていたなんて……」

真っ赤になりながらワタワタする彼女。

せかせかと手を動かしながら謝る姿は、小動物みたいで可愛い。

「『めんね、僕も電気を点けておけば良かつた。
気にしないでね』

そう言つて冷蔵庫を開けてパックの牛乳を取り出す。

コップに注いで一口……

火照った体に冷たい牛乳は鉄板だ!

珈琲牛乳? フルーツ牛乳?

男ならシンプル且つ基本の白牛乳だらう!

コップの残りを左手を腰に当つて、仰け反る様にゴクゴク一氣飲み
だ!

余りに全裸を見られた僕が気にしないので、彼女も溜め息をつきながら調理を始めた……

アレ？

溜め息をつかれた？

結衣ちゃんが料理をする姿を後ろから舐める様に凝視する……

左右に動きながら手際良く調理する彼女のフリフリと動くお尻の辺りを。

うん、美少女の手料理を食べれるなんて幸せだ！

美少女と言つた店番をしていた美幼女にも、また会いたいな。

あの仕事は僕も気になるから、もう一度昼間に周辺を調べながら店内に顔を出さつかな……

田の前の極上口つつ娘を見ながら、他の口に思いを馳せるとほー！

なんて贅沢な環境。

しかも結衣ちゃんが早起きをしたのは、学校の給食室の什器が故障した為に3日間は弁当持参だそつだ。

だから僕の分まで作つてくれた！

「では、行つてきますー！」

元気良ぐ……

ではないが、行儀よく挨拶をして出て行く彼女を見送る。

折角、彼女がお弁当を作ってくれたんだ。

休もうと思つてたけど、事務所に向かう事にする……

「さて、お仕事頑張りますかね！」

あれから支度をして、事務所には8時45分に着いた。

基本的に営業時間は9時から5時迄だ！

紹介が殆どの僕の事務所には、一見さんとかは殆ど来ない。

広告も出してないし、タウンページにも記載されていない。

完全に舐めた商売形態だが、長瀬綜合警備保障や山崎不動産からの紹介が結構有るので、そこそこ毎日仕事がある。

何時もの様に郵便物とメール・FAXをチェックする……

そして仕事の依頼は何も無い。

だから長瀬社長からの連絡が来る迄は仕事が無い。

「ち……

ネットサーフィンでもするかな……」

冷蔵庫から「一」を取り出し、力チャ力チャとネットで遊ぶ。

最近ハマっているゲームの攻略サイトを梯子し、ネット小説の更新状況をチェックすると……

もうお昼だ！

「時の経つのが早過ぎる……

さて、結衣ちゃんのお手製弁当を食べよつかなー。」

至福の時が訪れた……

お弁当のメニューは定番中の定番だ。

ミニハンバーグ・甘い卵焼き・インゲンとベーコンの炒め物それに
煮豆だ。

煮豆は販売品だが、その他は彼女の手作り。

両手を合わせて

「いただきます！」

と言つた所で携帯が鳴つた……

誰だよ？

と思い携帯を開くと

「桜岡霞 携帯」

と表示されていた……

卵焼きをモグモグと食べながら通話ボタンを押す。

「はい、榎本です。
只今食事中です……」

「あら、こんにちは。

桜岡です。

まだお腹には少し早く有りません?」

時計を見れば11時52分……

ほんの少し早いのか?

「それが自由業の素晴らしいですよ。
それで、何か有りましたか?」

インゲンを一本づつ摘んで口に入れる。

うん、コショウが適度に効いていて旨いな。

「うーん……

何かって言われると、長瀬さんから連絡が無いから榎本さんの方はどうかなって？」

ズズーっとお茶を飲む。

「無い！

てか、昨日の今日で話が纏まるとも思えないよ。
2～3日は掛かるんじゃないかな？」

白米を口に入れて咀嚼する……

やはりお米つてサイコー！

日本人なら米を食べなくちゃ。

「呑気なのね……

私は気になつて仕方無いのよ。
何とかしなさいな」

また無茶振りを……

ミニハンバーグを一口でパクリ。

おつ、中にチーズが入っていたよー！
「ねえ？

聞いてるの、榎本さん？

「うん、チーズ・ンハンバーグって良いよね？」

「……そうね。

榎本さんって、ハンバーグとか子供っぽい料理が大好きですよね？」

まだファミレスのフードバトルの件を根に持っているのかな？

「待つのも大切な仕事だよ。

無為に動き回ると周りに迷惑を掛けれる事もある。

その辺はテレビの仕事もしている桜岡さんなら詳しいでしょ？」

あの業界もマイナールールとかしきたりとか煩そーな……

最後の卵焼きを食べて完食する！

美少女の手作り弁当を美女と会話しながら食べる。

ある意味では……

何て贅沢な環境？

「それは分かってるわ。

でも……」

「桜岡さんも暇じゃないでしょ？」

何かやる事は無いの？」

僕はネットで遊んでたけどね。

「無いわ！」

悪い？

そうだ、榎本さん私に付き合へなさいな」

「無理、忙しい」

「脊髄反射みたいに即答ね……

忙しつて除霊の仕事かしら？」

ちげーよ、遊びだよ。

ゲームの攻略を実践したいのよー

「……単純作業の地道なレベル上げさ」

敵キャラ無限増殖でレベルをガンガン上げたいんだ！

「流石ね……」

仕事の無い時は、自分を鍛えているのね？
確かに凄い筋肉ですもの。

日々の努力の賜物なのかしら……」

ピュアな回答をされると、オジサンの毛の生えた心臓もピクピクしてしまつ。

「まつまあね……」

じゃ長瀬社長から連絡が来たら、お互い連絡する事。

それで良いね？

じゃ！」

ブツリと通話を切る……

桜岡さんって友達が少ないのかねえ？

こんなオッサンに絡んでくるとは……

しかし、言われると確かに気になる事もあるな。

もう一度、現場周辺を当たつてみるか。

生靈の関係者のヒントくらい掴めれば、興信所に頼めば早く見付かるかも知れないし……

駄目なら調査のみで打ち切りだ！

外を見れば、どんより冬の曇り空。

午後からノンビリと電車と徒步で、現場の周りを調べてみようか……

横須賀中央駅からノンビリと三崎口行き特急電車に乗る。

客は疎らであり、シートに座りボーッと景色を見る。

手荷物は折り畳みの傘だけ……

暫くして目的地の駅に到着。

その後、バスに乗り問題のマンション迄辿り着いた。

「……」

アレの存在を知ってるのに毎回は普通に見える……」

見上げる建物は午後2時を過ぎたばかりだが、夜と違う顔を見せて
いる。

「でも前に毎回来た時とは違う雰囲気だ……

何故かな？」

2～3日前に毎回来た時よりも、感じる雰囲気が明らかに違う。

何かヤツに変化が有ったのか？

手負いになり、なりを潜めているのか？

それとも除霊は成功していた？

後は何か他に原因が有るのか……

しかし今は建物には関わらず、周りを調べ直す事にしようと。

先ずは口ひつ娘店番の雑貨屋に……

「アレ？ 休み…… か？」

シャツターが閉まっているが、お知らせの貼り紙はどこに無い。

「父親が病気で入院中、母親はその見舞い。
娘が一人で店を切り盛り……」

怪しいかな？」

しかし口一つ娘なら今は学校に行つてゐるか微妙な時間だし。

店を開けられなくても不思議じゃないか。

「あら？」

榎本さんも来ていたの？

私の誘いを断つたのに現場に来るなんて……

やはり気になつてたのね」

閉まつているシャツターを睨みながら考え方をしていたら、桜岡さんが隣に居た……

彼女は昨日と違ひ少しラフな格好だ。

皮のジャケットにパンツスタイルだ！

僕の知らない海外ブランドだろう高級感が素人でも分かる……

ちつ、お嬢様め！

「あら？」

このコーディネートは気に入らない?
現場には動き易い方が良いと思ったの

自分の服装を確認する様に、左右に首を振る。

「いや……

悔しいが似合っている。

流石はブルジョアめ！」

僕は重度の真性ロリコンだが、攻略対象外の女性だからといって無意味に差別をしたりしない。

ただ、興味が無い・縁が無いと言つだけだから……

「……？」

それ、ほめ言葉じゃないわよ。

まあ良いわ。

それで何か分かっのかしら？」

彼女のセンスは確かなのだろう……

悔しいが結衣ちゃんへのプレゼントを選んで貰うのも良いかも知れない。

悔しいが、僕に美的センスは無い……

折角だから利用させて貰おうか！

「ふははははー！」

桜岡霞よ。

僕の為に役立つが良いわー！」

「いえ、私の為に役立つて貰つわよ榎本さん…」

見詰め合ひながら、互いにニヤリとする……

「「ふははははーーー（おほほほほほーーー）」」

実は気が合つ2人だつた！

「さて、周りから不審者扱いされる前に移動しよう」

「そうね……

私は兎も角、榎本さんはマンマ性犯罪者に見えるわ

結構毒を吐くお嬢様だ……

並んで歩きながら、一回口りつ娘の店の前から離れる。

「さて、僕はもう一度周りから調べてみるけど……

桜岡さんって何時もはどうしてるの？」

「えつ……

その、その辺も一緒に回つて教えて欲しいなーって……ダメ？」

可愛くシナを作り言つてゐるつもりなのだろう。

彼女程の美女にお願いされたら、一般男性なら墜ちたかもしけない

……

しかし、何度もいうが僕は口利コンだから。

無駄無駄無駄ムダー！

第16話

梓巫女の桜岡靈……

本物の靈能力を持つ25歳の美人さんだ。

彼女はテレビの心靈番組で良く見掛ける、今一番知名度の高い靈能力者だろう。

しかし出土と勝負の一発屋的な除霊スタイルと大雑把な料金スタイルを持つ、世間知らずなお嬢様だ。

だが、自分の力で人を助けようと行動する善人でもある。

このままでは利用されたり騙されたりして大怪我をする前に、何とか業界の先輩としてその辺の立ち回りを教えておきたい。

別にお節介な筈じゃなかつた僕だが、今隣に居る彼女に自分の仕事の手順を教えているから不思議だ！

「だから最初に調べられるだけの事を調べるんだ。

ネットでキーワード検索をしたり図書館で昔の新聞記事を調べたり

靈障つて事は、誰かが死んだ訳だからね

「ネット?

あの某巨大掲示板の書き込みとかを?
信用出来る内容とは思えないわ」

僕らは問題のマンションの周辺300m圏内をゆっくりと調べながら歩いている。

田舎だから周囲の県道や市道、又は農道や私道とか限られるけどね。

「煙の無い所には噂は広まらない。

確かに人聞き、人伝だから真実とかけ離れている場合も多いよ

余り当てにはならないけど参考位にはなるからね、と笑いながら言う。

「例えば今回の件はどうだったの?」

「ん?

そうだね……

「心霊スポット横須賀スレ」って書き込みが有ってね。

読んでいけば、横須賀の建設途中のマンションの怪についてだった。夜中に前を通ると、3階の窓の部分に人影が見える。

敷地内に良くな野良猫が死んでいる。

浮浪者が住み着いて、小火をだした。

他には動物や虫の屍骸と3階の人影を見たとかね」

「人影つてあの建物の中は真っ暗だったわ。
外から人影なんて見えたのかしら?」

虫は大量に居たわね。

でもあの警備員と話した時は前日に初めて虫の死骸を大量に見たつて。

小火は……

実際に有つたかは分からぬけど、火事が有つたから警備が厳しくなつたのかしら?」

確かに言われてみれば、その通りだ。

ランタンの灯りに照らされて、コラコラ動き回る影が確認出来たんだ。

真っ暗の中で人影なんて見えないな……

「確かにそうだ……

多分だけど、誰か勇氣の有る馬鹿が中に入つて目撃したんだろう。それを読んで、さも自分も侵入した様に書き込んで内容が変化していったか……

実際に建物の中を調べた時は、2階迄は落書きが酷かつたでしょ? でも3階は殆ど無かつた。

普通は肝試しなら、証拠に問題の3階迄侵入して落書きしたりするのに。

だから逆に噂は本物だと判断した。

3階には立ち入れない何かが有るつて……

真偽が分かれば警戒も上げられる。

嘘か本当か迷うよりは余程良いからね

彼女は首を傾げながら

「そうやってネットの情報と実際に見た状況を摺り合わせて考える

のね？

榎本さんって脳筋かと思つたけど、ちゃんと考へているのね……
凄いわ、チョットだけ尊敬しちゃつた」

笑顔で誉めて？くれた？

でも……

このアマ、人の事を脳筋とか言いやがつたな！

態度を見れば本人には悪気は無いのだろう……

その分ムカついたぞ！

ムツとした表情を出してしまつた為か

「怒つたの？

ごめんなさいね。

ほら、機嫌を直して……」

そう言つて腕を絡めてくる。

毎回思うが、彼女はこの辺の警戒心が足りな過ぎる。

もし僕が口リコンじやなかつたら、誤解されて大変な事になるぞ！

「そう言つのは誤解されるから止めなさい。

それは彼氏にしてやると喜ぶけど、それ以外だと誤解されるから……

……

スルリと腕を離すと

「榎本さんって固いわね！」

クスクス、お父さんと話しているみたいだわ」

此方を見ながら後ろ向きに歩いて、嬉しそうにクスクス笑っている。

「僕はまだ30代だ！」

君みたいな大きな娘は居ないぞ」

「はいはい。

お父さんは心配性なんですね！」

チクショウ、全然反省してないや。

「それで……

この歩き回る事の意味はなにかしら?」

散歩じゃないんだぞ！

「現場の周囲にお地蔵様や庚申塚。

墓地とか曰くの有りそうな物が有るかを探しているんだ。

神社やお寺も怪しい場合也有るし……

こんな看板も、何かしらのトラブルの原因が有るかも知れない」

そう言つて古びた看板を指差す。

「マンション建設反対……

自然を守れ。

これつて、あのマンションの事なの？」

「つまり反対運動が有つたんだね。

純粹に自然保護か利権問題か……

少なくとも対立する人間は居たんだよ。

この辺が、ヤツの生靈に關係してゐるかも知れない。反対運動をしていた連中や、利権絡みの關係者。

工事関係者だつて怪しいかも知れない。

この辺の調査は、本職の興信所じやないと我々では難しい。だから長瀬社長に予算の件を相談したの！」

ビックリした顔で此方を見ている？

「予算とか契約とかヘンテコな人だと思つたら、こう言つ訳も有つたのね！

確かに探偵紛いな事は、私には無理ですわ……

それに今の話だけでも、何十人つて規模だし。

でも、興信所の人達は生靈の相手を判断出来るのかしら？」

「いや、報告書を読めば絞り込めるでしょ？

最近、調子が悪そうだ！

とか入院中だとか……」

パジャマ姿の生靈なら、入院中の線が濃厚なんだけどな。

「確かにそうね……

あの後、出没してゐるのかしら？

警備員の人達は危険じやないの？」

「彼らには建物内部に入る事を禁止して貰つたよ。

ゴーストハウスは、案外建物の外には影響が無い場合が多い。

でも今回は生靈だから微妙だけだね。

長瀬社長が請け負つた警備期間は短期だ。

だから採算は合わなくても、2人体制に警備を変える様に頼んだ。
1人だと魅入られて誘い込まれる危険がある。
事情を知つてゐる連中なら、相方がフラフラ中に入り込もうとしても、
ぶん殴つて止めるからね

やつぱり脳筋じゃない！

力任せは良くないわ。

とかクスクス笑つて楽しそうなお嬢様に溜め息が出る。

彼女の中では、僕や坂崎君は脳筋のひと括りなんだろうな……

「いい加減に脳筋から離れなさい。

この業界は調査・準備が9割以上なんだよ。

実際に効果が有ると判断しないと、直接対決なんか出来ない。

僕に言わせれば、出たとこ勝負な桜岡さんの方が脳筋に見えるけど
ね！」

「ひつ酷いわ、レディに脳筋なんて！

榎本さんって意地悪だわ」

凄いショックを受けた顔をして、此方を睨んでいる……

言わないが、黙つてればレディと認めてやっても良いけどね。

「でも桜岡さんの除霊スタイルは考えた方が良いよ。

初対面の靈と戦うのが基本つて、霊能力者としてはどうかと思つ。

テレビ的には、こんな地味な調査なんてせずにズバッと戦った方が良いんだろうけど……

テレビ以外の仕事をする考えが有るなら、尚更だ！

普通の顧客は値段と解決率が全てだよ」

最近良く見せる、ブーつて頬を膨らませて此方を睨む……

本当に子供っぽいお嬢様だ。

「テレビの仕事は、止めた方が良いのかしら？」

有名には成れたのは確かよ。

でも……」

色ノモ芸人と変わらない扱いだからか？

「それは一概には言えないね。

僕は余り周りに知られたくないんだ。

元々在家僧侶として資格を持つてるから、派手に仕事をするのも問題があるからね。

桜岡さんも、ソコんとこロロシク！」

釘を刺しておかないと、テレビ関係者に話されでもしたら大変だからね。

「分かつわ。

あの……

榎本さんってお祖父様とお父様を亡くされているじゃない。実家のお寺は、ご兄弟の方が継いでいるのかしら？」

「……故郷はダムに沈んだよ。

家も寺も何もかも。

親兄弟、親戚も既に他界してゐる。
天涯孤独の身の上を」

ハツと息を飲まれた……

少し言い方が悪かつたな。

反省しなければ。

「氣を悪くしたら」「メンね。

檀家衆も村がダム湖に沈んだ時に、同じ宗派のお寺に引き継いで貰つたんだ。

継ぐ寺が無いから在家僧侶なんだよ。

だから、余り除靈とかしてるのは広めたく無いんだ」

だから内緒だよ！

つて笑つて言えた。

暫く無言で並んで歩く……

この辺は、まだまだ開発の手は伸びていない。

周りには畠が沢山有り、昔ながらの住宅が密集している。

木垣の家も多く、鉄製の看板も沢山有る。

これが有名なオロナミンコの昔の看板だよ。

とか

これはボンカレー、あれはオリエンタルカレー！

昔はルーが粉末だったんだよ。

とか、昭和のトリビアを話ながら散策を楽しんだ。

2時間位歩いたどうか？

漸く「ホールのマンションが見えて来た。

冬の夕暮れは早い……

既に遠くに見える水平線には、沈みゆく太陽が半分掛かっている。

「綺麗……

でも、もう夕暮れね。

結局何も見つからなかつたわ」

暫し並んで夕日を見ていたが彼女が、ポツリと言つた。

確かに確認の意味での散策だから、真新しい事実は見つからなかつた……

「連絡次第だけど、次は付近のお寺や神社に聞き込みをするよ。田舎では神社仏閣には住民の情報が集まるからね。住職や神主さんの話は貴重だ」

「今日行かなかつたのは、何故？」

「正式な依頼を請けたければ、あのマンションのオーナーから頼まれて調べています！」

つて言えるでしょ？

プライバシーに絡む話は、中々聞き出せないよ。

興味本位や取材なんかより、ちゃんと依頼を請けてる方が相手も話し易いでしょ？」

お寺なら伝手が有るから、最悪は総本山からの紹介とかも使えるからね……

やつて考えなしにお寺や神社に突撃しない様に釘を刺す。

それにどいつも聖職者だし、ペラペラと話してくれる内容でもないからね。

人の生き死にに関する情報なんて……

「榎本さんが寺社、私が神社を担当すれば良いコンビじゃないかしら？」

「はははははっ！

桜岡さんは、どの流派に属しているんだい？

さて、最後に長瀬綜合警備保障の連中の待機場所に簡易結界を張つておしまいだ！

流石に彼らを放置じや危険過ぎるからね

知った顔も多いし、彼女曰く筋仲間だからー

無用な度胸で突撃する奴も居るんだよ。

「俺は、幽霊なんて信じないつすよー。
だから平氣つす」

とか

「自分は非科学的な事は信じてないから大丈夫ですー。」

とか、氣の良い奴でも否定派は少なくない。

逆に深夜のビルとかを巡回する連中は、それ位じやないと務まらない。

一々怖がっていたら仕事にならないからね……

長瀬社長も毎晩はそんな連中を夜は靈障の実体験を持つていても辞めない連中でシフトを組んでいる筈。

危険は圧倒的に夜の連中だ……

だから彼らを守るのも僕の仕事の内なんだよ。

「ふーん、結界ね。

それって私も見ていて良いかしら?」

「別に構わないけど……

そんなに楽しい事じゃないよ」

今日は、このお嬢様に付き合ってはなしだね。

マンションに向かえば、例の雑貨屋のシャッターが開いていた。

「桜岡さん、ちょっと店に寄るね」

彼女に断りを入れてから店に入る……

店内には蛍光灯は点いているが、少し薄暗い。

店番は……居ないな。

商品を物色する様に、ゆっくりと中に入る。

「いらっしゃいませ……」

店の奥から、30代半ばと思われる女性が出て来た。

髪をキチンとセッタし、薄く化粧もしている。

その表情には旦那さんが入院中で苦労している感じは無いか……

まあ調べなければ、あの娘の母親とも限らないけどね。

前回同様、ガムと「マーク」を取りレジへ。

「これをおかい……

前に来た時は、娘さんですか？

店番をしてましたね。

偉いなあ、まだ小学生位ですか？

ウチの子にも見習わせたい

子供なんて居ないが、話のネタ振りで嘘を言つ。

彼女が僕と後ろの桜岡さんを交互に見てるけど？

「わつ私達の子供じや未だ違いますからね！」

桜岡さんが慌ててるナビ、旦那さんの事を聞きたくて話しがけているの。

騒いだら話の切欠が途切れんでしょう！

邪魔しないで下さい。

見れば彼女は、淡々と商品をレジ袋に入れている。

怪しこのは怪しこのだけど……

第17話

働く口りつ娘を見にくれば、彼女の母親と思しき女性が出て来た……

30代半ば、身嗜みに気を配った女性だ。

とても田那さんが入院中で苦労している様には見えない。

淡々と商品をレジ袋に入れている彼女に話しかけても反応は薄い。

「220円になります……

其方はご夫婦では？」

小銭入れからピッタリの金額を探して渡す。

「僕達ですか？」

僕達は仕事の同僚ですよ。

あのマンション……

競売に掛けるらしくて下見がてら来ました。

周りの生活環境によつても入札金額が変わりますからね」

競売と聞いた時に、僅かに反応した……

あのマンション絡みで何か有るのか？

「そりなんですか……

知りませんでした。

そう、工事が再開されるのですか？」

少し食い付いて来たかな？

「でも、調べてみたら良い噂を聞かないんですね。
何か周りも口を濁すと言つたか……」

幽靈が出るとか言われた時は笑いましたよ。
この平成の時代に幽靈ですからね。

奥さんは何か聞いてます？」

それとなく探りを入れてみるが……

「いえ……
でも工事が中止になつてから、変な人達が夜に訪れたりして騒がしくつて……」

困ります、と言つてくれたが……

この辺が潮時かな？

「ああ、肝試しとか?
大変ですね、では！」

そつと店を出る。

暫くは振り返らずに真っ直ぐ歩く……

「榎本さん！

子供が居るなんて聞いてませんよ！
離婚したんですか？

子供には両親が必要なんですよ！
てか、さつき天涯孤独つて……」

「落ち着いて下さい。

嘘ですよ、彼女との話の切欠作りです。

それより、怪しいと思わなかつた?

彼女の旦那さんは入院中だ。

娘に店番をさせて見舞いに行つてゐる。

そんな環境で身嗜みを必要以上に整えるかな?」

状況は辛い筈だ……

一家の働き手が入院中。

幼い娘に店番をさせる程、困つてゐるのに化粧?

それともスナックとかバーとか、夜の店に働きに行つてゐるのか?

「なつ? 嘘?

駄目ですよ、騙すなんて!

子供が居るなんてビックリしましたわ

違う!

君じゃなくて彼女が怪しいか聞いたのに……

「でも入院中の旦那が生靈として、何故マンションの3階なんだ?」

それとも彼女絡みでは無いのかな……」

場所に憑く生靈は、僕は聞いた事が無い。

生靈は人に憑き纏つ物だと思つていたけど……

「んー普通の生靈は、怨みや執着している相手に憑きますわ。
前にストーカーの生靈を祓つた事が有ります」

「えっ？」

ストーカー被害つて、ついに心靈現場まで発展してるので?
でも、歪んだ思いの結果なら有り得るのか……」

話しながら歩いていると、マンションを囲う仮設ゲートの手前まで
来た。

さり気なく手前の角を曲がる時に後ろを確認すると、例の彼女が此
方を伺っている。

「桜岡さん、彼女が見てるから曲がるよ。
後ろを振り向いちゃ駄目だからね……」

道を曲がり僕達の姿が見えなくなつてから一息つく。

やはり、彼女は何かしら今回の件に関係してる。

携帯カメラを録画モードにして、角から突き出し確認する……

少しだけ突き出しているから、向こうからは確認出来ないだらつ。

画面を見ればジッと此方を伺っていたが、一分程で店の中に戻つて
行つた。

「怪しいな……

でも不用意に会つてしまつたな。

向ひつも警戒しちゃつたし……
わい、どうじよつか？」

「えつ？」

直接問い合わせないの？」

携帯をしまいながら聞いたり、脳筋な回答来ましたー。

オイオイ……

いきなり聞ける訳ないでしょ！

塙にもたれ掛かり溜め息をつく……

「えつと……

馬鹿にされてるか、呆れられてる気がしますわ」

ブーツと頬を膨らませて

「私怒りますー！」

的な表情の桜岡さん。

「直接問い合わせるのは下策でしょ！」

先ずは調べないと……

いきなり、貴女の身の回りの誰かが生き靈となつマンションに出現
してます！

どうしてくれるんですか？」

つて、警察を呼ばれたら僕達が不審者で捕まるよ

「これから先は、長瀬社長次第だな。

興信所に依頼出来れば、結構解決は早いかも……

「不審者？私が？」

何を驚いているんだか？

心霊話をいきなり始めたら、結構不審者ですよ……

「桜岡さん。

彼女が警戒してるかも知れないから、正面ゲートからは入れない。僕は塀をよじ登つて中に入るから、君は迂回して今日は帰った方が良いよ。

そろそろ暗くなるから危険だしね」「

そつと音で電柱を利用して、工事用のパネルに手を掛ける。

「えっ？」

彼女が驚いている間に、パネルの上に登り

「後で電話するから……

じゃ今日は解散で！

くれぐれも彼女に見付からない様に帰るんだよ

と言つて、中に飛び降りた！

「えっ？」

榎本さん、私を放置プレイしないでーー！」

……何か騒いでいたが、気にしない事にする。

「ここはマンションの裏側だ。

建物の外周をゆっくりと歩いて正面に回る。

入り口付近のテントに、長瀬綜合警備保障の警備員が詰めていた……

良かつた、知つた顔だ！

「お疲れ様！」

漫画を読んでいた彼に話しかける。

確かに心霊現象の肯定派の人だ。

「うわっ？

なんだ、榎本さんですか！

脅かさないで下さいよ。

社長から聞いてます。

だからいきなり声を掛けられたからビックリしたじゃないですかー！」

本気でビビってたね！

大丈夫かな？

「ゴメンゴメン……

長瀬社長から聞いているなら問題無いね。

このテントに簡易結界を張るから……

それと御守りのお札ね。

あと、建物の中には絶対に入らない事。

少し噂になってるから、肝試しとかで変な奴らも来るかもしね。でも基本的には中には入らないで欲しい。

もし入るなら3階には立ち入らせないで、その前に連れ出して欲しいんだ……」

テントの四隅に盛り塩をして、鉄製のポールにお札を貼り付ける。

後は護身用の札を何枚かと、フィルムケースに入れた塩を渡す。

「交代要員は？」

「22時にもう1人来ます。

それまでは僕だけです」

深夜警備だけを増やしたのか……

まあ仕方ないか。

「テント内に居れば、一応結界が有る。ヤバいと思ったらダッシュで逃げる。

お札は一枚を肌身はなさず持つていてね。残りは他の人に渡して。

塩は最後の手段だからね。

もし襲つて来たら……

撒いて逃げる。

基本的には逃げの方向で」

彼に一通り簡単な説明をしておく。

「それと……

僕が除霊で来ている事は誰にも内緒ですね。今日は生霊の可能性が高い。

つまり相手は生きている人間だ。
どんな奴かも分からない。

男か女かも分からない。

下手に話すと君も危険だからね……」

そう言つて口止めをしてから、入つて来たのと同じ様に裏の塀から外に出る。

成り行きとは言え、手持ちの除霊道具の殆どを渡してしまった。

残りは数珠だけか……

見渡せば、すっかり辺りは暗くなってしまった。

時刻は、6時48分か……

シマツタ、結衣ちゃんに連絡入れるのを忘れた。

迂回しながら駅の方へ歩きだす……

途中で携帯電話から自宅へ電話をする。

「はい、榎本です」
「科尔音が聞こえ、4回目で結衣ちゃんが出てくれた……

「はい、榎本です」

「へーっ、はい榎本ですって新婚さんみたいだよね？」

「もしもし、結衣ちゃん？」

「ゴメンね。

これから帰るから、あと一時間くらいかな？」

「分かりました。

では夕飯は食べずにまつてます。

今夜は鍋にしたんですね」「

「おお、鍋！」

寒い時期には最高だよね。

何かデザートを買つて帰るよ。

何か良い?」

「すみません。

今日は調理実習でショーケースを作ったんです。

良ければ正明さんに食べて欲しくて……

ナンダシテ?

口コツ娘の手作リスイーツだと!-

「勿論、そっちを頂くよ。

じゃ戸締まりはちゃんと確認してね。
真っ裸で……

いやマツハで帰るから

「何でこつたに愛染明王様よ!」

こんな(,)褒美が待ってるなんて。

足取りも軽く、通り掛りのタクシーを捕まえて最寄り駅まで……

一分一秒を惜しんで帰宅しました！

タクシー・電車・タクシーの三連コンボで、予定時間を大幅に短縮して帰宅した。

途中で、桜岡さんにも電話をして経緯は報告。

後は本当に連絡が来ないと何も出来ないと念押し。

2~3日だから大人しくしていなさいと説得。

漸く本口の(,)褒美、……

口ひとつ娘の手料理の海鮮チゲ鍋を食べています。

普段はキッチンで食べるけど、鍋と皿ついで居間の炬燵に運んでテレビを見ながら食べています。

最近結衣ちゃんがハマっているクイズ番組だ。

僕が遅れたので、付き合わせて見れないじゃ申し訳ないからね！

「和食党の結衣ちゃんが韓国料理とは珍しいね！
辛いの苦手でしょ。」

大丈夫かい？」

余り辛い物が食べられない結衣ちゃん。

序でに猫舌でもある。

フーフーと取り分けた野菜に息を吹きかけていく。

嗚呼、僕にもフーフー + アーンして下せー！

のコンボを決めて欲しい。

「えつと……

冷凍庫の整理をしてたら、海老とかイカとか少量ずつ残つてて。
一度に食べれるのは鍋が最適かなって。
それに私だつて辛い料理だつて食べられます。

正明さん、過保護です」

あからさまに怒つたり拗ねたりはしないが、こんな風に拗ねられる
のは最高だ！

「『メン』『メン』！

じゃ今度は少しだけお酒の効いたケーキとか買つてくるからね

結衣ちゃんの食べる仕草は可愛い。

特に大好物のケーキは、本当に幸せそつに食べる。

でも日本茶党だから、ケーキにもお茶なんだよね……

「……ケーキの時点で子供扱いです。

でも洋酒が効き過ぎだからと言つて食べさせてくれなかつた、パティスリー雪の下のロイヤルフルーツケーキなら許してあげます」

ああ、鎌倉のアレか……

普通は加熱するからアルコール成分は飛んでいるんだけど、アレは結構な量がかかつていたし風味も残つてて危ないと思つたんだ。

「じゃ今度の休みにでも、2人で鎌倉散策に行こつか?」

「……良いですよ」

グフフツ……

結衣ちゃんを合法的にデーターに連れ出せたぞー

週末は楽しみだなあ……

鎌倉だけじゃなくて、江ノ島まで足を延ばして江ノ島水族館に行ってみようか?」

「そうだ!

序でに江ノ島まで足を延ばして江ノ島水族館に行ってみようか?」

「そうですね！」

お魚大好きですから行きたいです」

結衣ちゃんは水族館や動物園が結構好きなんだ。

ズーラシアやシーパラダイスには良く連れて行つた事がある。

そりゃあ池袋のサンシャイン水族館も改装中だし、次は其処に誘おうかな！

デートプランも固まつたので、料理に専念する。

海鮮チゲ鍋は、海老・イカ・ホタテ・白身魚の切り身、それにほうれん草・白菜・大根と栄養のバランスも取れた逸品でした。

最後にうどんを入れて溶き卵で辛味をまろやかに……

デザートのショーキーラムは、膨らみが少し歪だつたけど美味しく頂きました！

「御馳走様でした。

結衣ちゃん！」

榎本が結衣ちゃんといチャイチャイしてた頃、問題のマンションでも变化が有った……

久し振りに夜空に雲も無く、満月に近い月明かりに照らされて敷地全体がボンヤリと見渡せる明るさだ。

仮設のテントの中でボーツと待機するだけでは隙を持て余す。

しかし巡回は2時間おきだし、建物の中には入らない様に言われている。

つまり敷地に巡らされた仮囲いの周りを定期巡回するだけ。

大して動かないから寒さが堪える……

屋根は有つても壁は無い。

缶コーヒーを買つても直ぐに冷えてしまう。

「うー寒みーなー！

それに暇だし……

ビル警備なら暖房が効いてるしテレビもあるのにな

「全くだよ。

でも幾ら寒くとも、アレの中には入りたく無いな……

今回は本物らしいからな

社長からも念を押されている。

「入るな危険！」

第三者が侵入しても2階で何とか取り押さえろ

しかし仮囲いには正面しかゲートはないが、一旦中に侵入してしまえば建物内には何力所か入り口がある。

気付かれずに入る事は可能だ。

だから外周は30分おきに回っている。

不審者や不審車両のチェックの為に……

週末のせいか、それともネットで噂が広まつたせいか何組かの若者が見に来ている。

外から

「これが噂の廃マンションかー！」

「怖えーよ！

マジでヤバくね？」

とか、怖いもの見たさで騒いでいる分には良い。

近くに行つて懐中電灯で照らしてやれば、笑いながら帰つて行く。

問題は、気合いで入った心靈マニアだ！

奴らは、単独又は少人数で静かに侵入しやがる。

警備が居ても

「取り壊される前に見たかった！」

「折角の貴重な建物なんだ！
記録映像を撮らせてよ」

とか言つてくる。

直ぐに警察に通報するのが、会社のマニュアルだ！

勿論、現行犯で確保もするし証拠の写真も撮る。

不法侵入は立派な犯罪だから……

「昼間に榎本さんが来たんすよ。

あの人、今回は難しこりって言つてましたよ

「あー、結構信用してんだよ、あの人は。
俺らと同じに現場回ってくれっし、肉体派だしな」

「「それに下ネタが好きっすからね」」

全く風俗にハマって、横浜ヘルス街と川崎ソープ街じや有名な人に
師事してるとか言われてるぜ！

全くエロ坊主じやね？

猥談で盛り上がる彼らを一瞬で現実に引き戻す事態が発生した！

「オイ！』

『2階で一瞬、FLASHが光らなかつたか？』

『俺も見たつす！』

『最近はナイトビジョンでの撮影が多いけど、今のはFLASHだ！誰か侵入しやがつた』

警棒とマグライトを掏んで、建物にダッシュする。

『幾ら怖いと言つても、仕事だから仕方ない。』

建物の入り口で、一瞬だけ躊躇したが侵入する。

『誰か居るのか？』

『居るなら出てこい！』

『出口は塞いだぞ！』

『2階から飛び降りる気か？』

1階内部を探索し、声を掛ける。

『どうやら黙りを決め込むつもりか？』

『階段は此処だけだ……』

『2人で行こう』

警棒を構え、マグライトで周囲を確認しながら階段を登つて行く。

直ぐに2階に行かないのは、すれ違いや思わぬ反撃を警戒してだ。

奴らも犯罪行為は理解している。

逃げ出す為に反撃する奴も居るんだ。

「オラッ！

出て来いやー！」

威嚇の為に警棒でコンクリートの壁を叩く。

静かな建物内に響き渡る打撃音……

ゆっくりと手前の部屋から調べ始める。

「居るなら今の内に出て来い。

見付かつてからじや洒落にならないぞ」

荒事専門、肉体派の2人は顧客には礼儀正しいが不法侵入者には厳しい。

何度も彼らを捕まえて、警察からも表彰を受けた事もある猛者だ。

「ひつひー……

畜生、覚えてやがれ！」

突然、外から叫び声が聞こえた！

窓に顔を出して確認すれば、小太りの男と背の高い男が走り去つて行くのが見えた……

「ほう……

2階から飛び降りたか。

まあまあ気合いが入つていいじゃんか

「今から追つ掛けでも捕まらないか……」

取り敢えずは任務完了だ。

ふつと張り詰めていた気が緩んだ瞬間

「ふつ……」

耳元で誰かの息遣いが聞こえた！

「オイツー！」

「誰だ？」

2人が振り向くと、部屋の入り口にパジャマを来た奴が居た……

頬が瘦け眼窩の落ち込んだ暗い穴の様な両目を此方に向け、ただ立っていた。

「……出やがった

「かつかか体が、動かない……」

懐中電灯を向けたままの姿勢で体が固まって動かない。

「おい！塩、塩だ！」

持つてるか……」

「有る……

けど、ポケットの中だ……
体が動かねえ」

奴から目が離せない。

体が動かせない。

気持ちは焦るが、対処出来る物を持つてるのに行動出来ない……

「やつヤバいぞ。

近付いて来やがる」

「たつ助けて……

いや、嫌だ……」

ガタガタと震える体に力を入れるが、全く言つ事を聞かない。

ゆつくりと近付いてくる奴をただ見ているだけた……

後、2mで触れる位に近付いてしまう。

何故か奴の呻き声や布ずれの音までが、ハツキリと聞こえる……

後、1m。

もう吐く息さえ感じられそうだ。

「動け、動けよ……」

「くつ来るな！

来ないでくれ……頼む……」

直立不動で動けない彼らの一歩手前まで近付いた。

「がつ……あがが……」

唸る声、吐き出す息遣いまで感じられる距離。

願いも虚しく田の前まで近付いて来た。

「ぐがつ……わ……わ……わ……わり……」

枯れ枝の様に細く痩せた手を彼らに延ばしてきた。

「「「わあーー！」

彼らの悲鳴が深夜のマンションに響き渡ったー

突然の電子音で田が覚めた……

電話？携帯？

枕元に置いてある携帯電話に手をのばす。

ディスプレイには

「長瀬綜合警備保障 長瀬社長」

の文字が。

同じくディスプレイの右上には現在時刻が表示されている。

4時18分……

何か有ったのか？

「もしもし……

榎本です」

電話に出ながら起き上がり、机に向かいメモれる様にする。

「早朝にすまん。

榎本君、先程警察から連絡が有った。

例のマンションの警備の連中が入院した。

状況は分からんが、見てしまつたらしい。

付近の住民が悲鳴を聞いて警察に連絡。

駆け付けた警察官が2階で倒れている彼らを見付けて病院まで搬送してくれた……

「2階ですか？」

3階でなくて？」

まさかヤツは移動出来るのか？

「そうだ2階だ……」

幸い怪我は無く見つけ出した時に目覚めたが、錯乱していたので念の為に入院だ。

それと検査をされている。

心理的なショックも有るが、薬物使用の有無を確かめられてるんだろうな」

麻薬をキメて幻覚を見たとか疑われたのか？

と、言つ事は警察も彼らが幽霊を見た！

そう聞いてしまったんだろ？……

「それはご愁傷様でした……
しかし命に別状が無くて良かつた。
でも警察に知られたのは不味かつたですね。
僕の事は話しても構いませんが、桜岡さんの事は……」

お茶の間の人気梓巫女である彼女は、格好のネタだ！

梓巫女・桜岡霞、除霊に失敗！

遂に被害者が出る。

とか五月蠅そうだと！

「警察に呼ばれているよ。

朝9時に所轄の刑事課へ……

警備会社は警察ともコネがある。

君達の事は伏せておくよ。

幸い君に言われてマンションのオーナーに調査を頼んだのが良かった。

警察には、何か怪しい物が見えると社員から報告が有り警備体制を増員していた。

向こうの調査待ちだつた！

そう言えるからね

「坂崎君にも口裏を合わせないと……

でも僕は無理ですよ。

昨日、彼らに有つてお札と清めの塩を渡したんです。

調べればバレるし、もしかしたら彼らが話しているかもしれないし

「……

対策を講じていたのに、全く効果が無かつた。

まるで無能だ……

「分かった。

君への依頼はちゃんと報告する。

そして危ないと報告されて、警備体制を強化。

マンションオーナーに問い合わせている最中だつた！

この線で行こう」

後は幾つかの決め事をしてから電話を切つた……

最悪の流れだ。

騒ぎが大きくなつた。

しかも警察沙汰だし救急車まで呼んだんだ。

騒ぎは広がるばかりだらう……

時刻を見れば、6時7分か……

少し早いけど、桜岡さんにも釘を刺すか。

彼女なら知らなければ、騒ぎの中に突っ込んで行きそうで怖い……

携帯からホールするが、出ない。

まだ寝てるのか？

10回鳴らして諦めた。

所轄だと横須賀警察署か……

刑事課には知り合いの刑事さんが何人か居る。

最も友達じゃなくて、職務質問とかされた仲だ。

彼らからすれば、僕らの業界は詐欺師の集まりだからね。

でも比較的、人の死に近い警察も心靈絡みは……

実は結構有る。

でも彼らは表立っては認めないけどね。

僕は在家僧侶だし、料金も破格に安いから問題は少ない。

坊主が依頼を請けて死者の魂を極楽浄土へ導く……

別にどこも悪く無い。

しかも警察から何回か依頼も請けているし、遺族にさり気なく紹介してくる節もあるんだ……

だつて広告出してないのに、事務所に来るんだよ。

何処からの紹介かを聞いても答えないし、でも警察絡みの事件の関係者だから……

少し早めに事務所で待機していれば、案の定警察から任意同行と言うか……

お話を聞かせて欲しいと連絡が有った。

僕の事務所から横須賀警察署までは、歩いても10分と掛からない。

9時30分にと言われたのは、長瀬社長と時間差で質問し粗を探つもりか？

結局、桜岡さんからの電話は無く事務所の留守電に用件を録音しといた。

大切な話が有るから、午後は体を空けておいてくれと……

勝手知つたる刑事課に顔を出す。

「お早う御座います。

榎本と申しますが、刑事課の佐々木さんに呼ばれまして……」

この警察署の刑事課は、20畳ほどの別室になつており扉は一つしか無い。

だから入ると一斉に厳つい刑事さん達が注目する。

ちよつと怖い……

「ああ、榎本さん。

わざわざ済みませんね。

ちよつと聞きたい事が有りましてね」

「長瀬さんから聞いてます。

何でも昨夜の騒ぎについてだらつて……

ナチュラルに話ながら、応接室に通される。

何も犯罪はしていないから、警察も取調室には案内しない。

大抵は会議室か応接室だ。

緑茶を淹れてくれて対面で座る。

「で、どうなの？」

「あのマンションは本物だと思います。

先日、夜に立ち会いで調査しましたが……

僕も見ました。

だから真偽をマンションオーナーに問い合わせして、取り敢えず警備を強化しろって長瀬社長に言つたんですよ……」

朝の打ち合わせ通りの内容を話す。

僕は在家だが僧侶。

僧侶が靈の話をしても、なんの不思議も無い。

幽霊なんて居ない！

魂なんて無いんだ！

なんて言つたら、警察と言えども仏教界に喧嘩を売った様なものだ。

「やはり同じ事を言つんだな。

まあアンタは坊さんだ。

靈を信じてるのは職業上当たり前だよな。

分かった、ご苦労様でした。

でも、あのマンションどうするんだ？」

これだけの騒ぎだ。

沈静化するのに何ヶ月掛かる事か……

「あとは長瀬さんとマンションのオーナーさんとの話として話し合いでしょうね。」

正直、依頼も無く動き回る訳にも…………」

廊下まで案内してくれた佐々木刑事に頭を下げて警察署を出る。

長瀬社長の携帯に「ホールするが、直ぐに留守電に切り替わった。

此方の取り調べは終わった血を録音する。

僕と違い長瀬社長には、聞かれる事が沢山あるんだろうな。

何たつて社員が入院したんだからね……

「長瀬社長……

頑張つて下さい」

僕は、まだ取り調べの最中だらう長瀬さんにホールを送った。

第19話

警備員がヤツに襲われた……

幸いにして怪我も無く、多少の精神的なダメージを負っていたが、タフが売りな連中だ。

2～3日の休養で現場復帰出来るそうだ。

しかし、警察沙汰になつた為に現場は一時閉鎖されるだろ？

問題は……

長瀬さんは、責任をマンションオーナーに振つた。

タイミング的にも、それは良かつた。

先方の受け取り方次第では、揉めるだろ？

一連の説明と今後の対応について、僕は桜岡さんと話し合わないと駄目？

「駄目でしょう！

榎本さんも、ほらほら呑んでー」

いやいやいや……

ナレーションに突っ込み入れないで！

「いや、僕は手酌で……

ビールに継ぎ足しは駄目だから」

僕は本当はホッピー派なんですよ。

横須賀はホッピー発祥の地。

冬でも三冷が当たり前なんです！

因みに三冷とは、ホッピー・焼酎・ジョッキの三つをキンキンに冷やしておく事。

四冷は氷を足す事。

焼酎の量を調整する事で、好きな濃さを楽しめる逸品だ！

「ほりー！

瓶を持つ手が重いわ……

早くグラスを空けなさいな

それって、何処の体育会系なコンパだよ？

笑顔を絶やさず上品に……

しかしいる事はオッサンだぞ、この女は！

「いや、そもそもホッピーに変えようかなって……」

ビールも好きだけど、横須賀で飲むならホッピーだ！

「ホッピー？　

何なんですか、それ？
力クテルか何かかしら？」

こんなサラリーマンが実用で呑む赤提灯に、力クテルなんかねーよ！

大衆酒場だぞ、ここは。

「えつ？　

桜岡さん、知らないの？

横須賀はホッピー発祥の地なんだよ。
代用ビールとして生まれた……」

「知らないわ！　

それよりボトルいれて、ボトル。
芋は臭いから麦の焼酎、何かないかしら？」

折角説明しているのに、バツサリ切りやがったぞ！

しかも飲み物のメニューを持つて見てるんだし、ボトル無いの分かれますよね？

「いや、この店にはボトルキープなんてないから……
女将さーん！　

麦の焼酎、何があるー？」

カウンター内で忙しく動き回る女将さんに声を掛ける。

正直、焼酎の銘柄は良く分からない。

大抵はサワーで頼むから……

「今日は、ばっかいか白水が有るわよ。
何で割る?」

ばっかい?白水?

有名なのかな?

まあ本人に選んで貰えれば良いか……

隣で上品にしめ鯖を食べている彼女に聞いてみる。

「桜岡さん。

麦焼酎なら、ばっかいか白水だつて!
何で割るの?」

可愛らしく首を傾げて

「あら白水が有るの?
じゃお湯割りを貰うわ」

と、オヤジなチョイスを宣つた!

普通は女性つてカクテルとかサワーとかじゃない?

初つ端から瓶ビール、次が焼酎のお湯割りつて!

見た目だけは上品で美人なのに、何か勿体無い感じが……

「女将さーん！

白水をお湯割りでー！

序でにホッパーの黒、三冷でお願いします」

いつも言つても、この酒乱に付き合わないとならぬのか……

どうして、こうなつた？

誰か教えてくれ……

警察署で事情を聞かれてから、一旦事務所に戻る。

長瀬社長や桜岡さんには留守電を入れてあるから、今日は連絡が取れる体制にしておいた。

携帯電話は、常に出れる様にしておくか……

事務所に戻り、今までの経緯を報告書に打ち込んで行く。

後で長瀬社長に請求する時の添付資料だ！

カタカタとパソコンで打ち込んで行く……

今までの経緯を粗方打ち込み終わると、一度昼飯の時間だ。

デスクワークで凝り固まつた体をラジオ体操第一で解していく。

「ゴキゴキ鳴る体は、年のせいじゃないよね？」

外食だと携帯電話はマナー違反だから、コンビニが出来合いの惣菜でもデパ地下で探そつかな？

取り敢えず、財布と携帯電話を持ち上着を羽織つて外に出る。

エアコンの効いた室内から外に出ると、思わず寒さでゾクゾクつときた！

「うわっ！」

寒いなー、こりゃ雨が降れば雪になるかも……」

お弁当にカツ丼でも買ってこよ。

ポケットに両手を突っ込み、前屈みで駅前商店街に向かった……

寒さに負けて手近なコンビニでオーギリとカツ丼を買ふ事務所に戻った。

因みにオーギリはツナマヨと明太子だ！

カツ丼は天麩羅ソバ。

テレビを見ながらモソモソと食べる……

今朝はバタバタして折角、結衣ちゃんがお弁当を作ってくれるのを

早出だからと断つたんだ。

残念だが、彼女を早起きさせて作りせる訳には、ね。

流石に昨夜の件はニュースにもなってないな。

新聞も確認したけど、横須賀版にも載つてなかつた。

それはそれで良かつた。

変に知られると、対処が面倒臭いからね。

食後のお茶を飲んでいると、漸く桜岡さんから電話が有つた……

ああ、長瀬社長からは連絡が有つた。

特に社会的責任云々も無く、警察からも入院中の2人から薬物反応も出なかつた為、無罪放免だそうだ。

後はマンションオーナーさんとの協議だけか。

そんな事を考えながら、桜岡さんからの電話に出る。

「もしもし、榎本です」

「ここにちは、榎本さん。
今、電話大丈夫かしら?」

「ええ、今は事務所ですから大丈夫ですよ」

「すみません、電話頂いたのに連絡が遅れて……
実はテレビ局で打合せ中だったんです」

「テレビ局？打合せ？」

「結構早くからやるんだな……」

「構いませんよ。」

「桜岡さんには昨夜の連絡が行つてますか？」

「昨夜……ですか？
いえ、あれから事務所の娘達と食事して今朝は電車で都内に行つて
ましたから」

「電車の中だからマナーモードか。」

「彼女って一般常識とか、真面目さんなんだよね。」

「きっと電車内で携帯電話は弄らないんだろう……」

「そうですか……」

「例のヤツだけど、動きが有ったんだ。」

警備の連中が襲われた。

怪我は無かったが、騒ぎを通報されて警察沙汰になつてね。
午前中は長瀬社長と共に、警察署で事情聴取だつたんだよ」

「そつそんな事に？」

「そつしそうかしら……」

実はテレビ局からオファーが有つて、榎本さんに相談と言つか助言
を貰いたくて……」

でも今の話も良く聞きたいわ。

そうだ！

榎本さんの事務所に行つて良いかしら？」

「ウチに？何故に？」

「だつて警察沙汰なお話を普通の喫茶店とかで話すのは良くないわよ。

私の相談も、余り人には聞かれたくないの。

私のオフィスに来て貰つよりは、其方に伺つた方が良くなくて？」

んー別に来て貰つても問題は無いか……

仮にも事務所だし、変な事をする気も無いし。

「そうだね。

場所は名刺に書いて有るから分かるよね。

何時位にこれるかな？」

一応は片付いている部屋を見回しながら応える。

時間が有るなら掃除した方が良いかな……

「今から向かいますから、3時には着くわ」

二時間半後か……

何とかなるかな。

「分かつたよ。

んじゃ 3時に待ってる。

その前に例の2人の見舞いに行つてくるよ。

話せるならば、昨夜の件を聞いてみる」

そつ言つて電話を切つた……

さて、お見舞いには何を持つていこうかな?

怪我は無いようだし、簡単に食べれる物でも持つていくか……

彼らの入院している病院は警察署からも僕の事務所からも近い。

まあ横須賀市の中心地区だし大抵の施設は揃つているから。

病院の受付でお見舞いの旨を申告し、名簿に記載してバッヂを貰う。

病室はA棟のかな4階、403号室か……

床に書かれた案内に従い病室に向かう。

軽くノックをしてから中に入る。

「こんちは!

元気してるか?」

なるべく明るく声を掛ける。

2人はベッドの上に……

いやしねえ。

治療か？それとも診察か？

「あれ？

榎本さん、どうしたんす？

こんな所で？」

声を掛けられ振り向けば、新聞やお菓子を持った2人が立っていた。

「見舞いだよ！
てか、大人しく病室に居ろよな」

「昼間つから寝てばかりいられないって

全くだ、と笑い合つてから談話室に移動する。

見舞いの品々をテーブルに並べる。

ジュースにスナック菓子だ……

ひとしきり食べてから昨夜の事を聞く。

「で、お前らでも気を失う事を聞かせてくれ。

昨夜何があつたんだ？」

2人とも黙り込んだが、意を決したのか話出した……

「昨夜、警備中に建物内に侵入したヤツが居た。FLASHの光が2階で見えたんつすよ」

「社長から話は聞いていたけどさ。

行かない訳にやならんから直ぐに建物に入った。
3階には行くなつて言われてたからな」

そこで一日話を止めて缶コーヒーを一気に飲んだ。

「3階には行かなかつたんだな。
じゃ何処で？」

「見たのは2階の一一番手前の部屋だ。

俺達は、1階から威嚇し調べながら2階に上つた。

侵入者は俺達の威嚇にビビつたんだろう。

窓から飛び降りて逃げ出した。

俺達は騒ぎながら逃げるヤツをその部屋から見ていたんだ。

2人組の侵入者を……

そして気がつけば、ヤツが居た」

「後ろから気配を感じて、振り向いたらヤツが入り口に居たんだよ

2階の廊下だと？

確かにヤツは3階の部屋から僕を追つて來た。

でも建物から逃げ出した時は、3階を徘徊していた。

2階へ降りて来なかつたのに、何がヤツを変えたんだ?

「どんな感じだつた?」

「痩せこけた男だつた。

パジャマを着ていたな……

見た瞬間に恐怖で体が固まつたんだ」

「折角貰つた塩を撒こうにも体が動かねえ。ヤツはゆっくりと近付いて、俺に触つた。干からびてミイラみたいな腕だつたぜ……」

「息づかいも感じられる近だつた……」

俺もアレが近付いてくるのに田が離せなかつた。

そしてアレに触られた後の記憶が無い。

恥ずかしいが悲鳴を上げたらしいな……

だから誰かが救急車を呼んでくれたんだ」

全く情けないぜ。

荒事専門の俺達が幽靈にじびじびと氣を失うなんてな。

そう締めくくつて、何とも言えない顔をした。

かなり悔しいんだろう……

いや、心靈現象を体験して悔しつて感覚が凄いんだが。

このタフさが、スゲーよ。

「うん、有難う。

良かったよ、元気そуд……」

2人と別れたが怪我も無く精神的にも大丈夫そうで安心した。

ざつと事務所の片付けをする。

一応は女性を迎える訳ですから……

掃除機をかけて机を拭いて、「いいを出したら終わりだ。

寒いけど窓を開けて空気を入れ替えた時にチャイムがなった！

「いらっしゃい！」

事務所とは言え、マンションの一室なので普通の家の玄関と変わらない。

扉を開けて彼女を中に招き入れる。

「お邪魔しますわ。

あら、少し寒いかしら？」

彼女は今日もお洒落なんだ……

本気で結衣ちゃんのプレゼントを選んで欲しい。

「すいませそ、換氣中でした……」

応接室に通して換氣していた窓を閉める。

Hアロンを強こじてからお茶の用意をする。

「では、先ずは僕の方から……」

昨夜の件、長瀬社長との話・警察での話・見舞いの結果を順を追つて話す。

「私に配慮してくれるのは嬉しいわ。
でも、それじゃ榎本さんに迷惑ばかり……
そうだ！」

私がご馳走しますから、何処か飲みに行きませんか？

パンと両手を胸の前で合わせて、名案だわ！

つて感じですか……

「いや、そんな気を使わなくとも……」

結衣ちゃんとマイホームで夕飯食べたいんだよ！

「気になさらず」。

相談事も有るから、丁度良いですわ

強引に推し進められて、仕方無く結衣ちゃんお勧めのフレンチレストランに連れて行こうと出掛けたが……

途中で大衆酒場に行つた事が無いから、連れて行つて欲しいとせがまれた。

ガチガチの労働者が行く店でなく、普通のオーナー会社員が実用で飲みに行く店に連れて行つたけど……

彼女が酒を呑むと、化けるのは聞いてなかつたんだ。

第20話

相談事を持ちかけられて……

誘われるままに居酒屋で飲み始めた。

見た目はお嬢様な桜岡さんは、中身はオヤジだったのは誤算だ。

にこやかに絡むし、お酒を強引に勧めるし。

しかも自身はお酒好きだけど弱いときで……

僅か5杯で出来上がりますよ？

彼女の頼みで本当ならフレンチレストランに行く予定が、所謂居酒屋に来る事になった。

見た目がお嬢様な彼女は浮くかと思ったが、すっかり馴染んでいやがる。

何故だ？

上品に焼き鳥を食べ、しめ鰯を摘む姿に違和感を感じるのは……

内面がオヤジだからか？

「それで、相談事つてなんだい？」

上品にマグロのやまかけを食べてる彼女に話しが掛かる。

不思議だ……

妙に店にマッチしている。

「ん……

初めて来たお店なのに馴染むわ

「そう、来慣れている感じがするけど？」

モツ煮込みを箸で器用に食べている……

食べ過ぎじゃないかと思つたが、ファミレスでフードバトルをした
んだつた。

「そのね……

夏用の番組で心霊特集を組むの。

それでね、私のコーナーを作ってくれるって。

桜岡霞の除霊コーナーね。

そして対象は、八王子山中の廃屋よ。

かなり前から噂の絶えない曰く付きらしいの。

私は其処に若い女性タレントを連れて行つて戻つてくるだけ……
もし怪異が有つたら対応するの。

どうしたら良いのかしら？」

良くある夏の心霊番組か……

除靈の仕事じゃない見せ物番組だらう。

しかし名前は売れる。

「それは、良く有る夏の特番だね。
知らなかつた、この時期から仕込むんだ……
有名人にはなれる。
霊能力者としては微妙だけどさ……
でも名前を売る事は大切だ。
仕事の依頼は増えると思うよ」

但しう茶の間霊能力者としての名前が……

彼女が望む人助けからは、ちょっと距離が有るかな。

「榎本さんつて見た目が脳筋なのに一般的な意見を返してくるわよね。
不思議だわ……

逆に、私がテレビに出るのってどう思つかしら？」

まだ脳筋ネタから離れないのか！

ちょっとイラッとしながら、丁度注文していたシシャモが来たので
一本かじる。

あつ私も！

と言つので皿」と彼女の方にズラす。

マヨネーズと一味唐辛子を付けて上品に食べる。

頭から丸かじりの僕とは大違ひだな……

「君が言つた人助けがしたいって言つのにには、ちょっと遠いかな?
テレビには視聴率が有るから、思つた通りには除霊出来ない。
お茶の間霊能力者を本心から信頼して頼む依頼者が多いかな?
勿論、テレビに出る霊能力者にも本物は居るから一概に同じとは言
えない」

立て続けにシシャモを食べる彼女から皿を奪つ。

チクショウ、五四の内三匹も食べられた!

「そうなのよ。

確かに売り出し中の私には、テレビに出るのは効果が有ると思つた
の。

でも実情はヌレヌレだかスケスケだか変なあだ名を付けられたの。
酷いと思いません?」

ちゃんと考へているじゃないか!

彼女が頼んだモツ煮込みを奪つて摘みながら思つ……

多分、自分の中では正解は出てるんだ。

それで後押しが欲しい。

踏み出す一歩を……

「君は人助けをしたいと言つた。

心靈現象で悩んでいる人は、テレビのバラエティーに出てる人に心底縋ろうと思うかな？

特番の心靈番組の常連者も同じだと思うんだ。ある程度は名前が売れたなら、後は実績を積んで行くのが遠い様で近道だと思うよ」

箸を止めて、此方を真剣に見詰める桜岡さん。

口の脇にシシャモの焦げたカスが付いてますよ……

「分かっていたわ。

その通り、テレビの出演者に本気で縋つたりはしないわ。分かつたのは最近よ。

貴方と仕事をして本物を知つたのよ。今のやり方では絶対に無理な事もね。でもテレビのお仕事は好きだわ……だから年に何度かの特番は出たいと思うわ。でもちゃんとした物語にしたいの」

話し終えて、どうって顔のお嬢様の口元を指差す……

「…………？」

バカっ、意地悪ね

ハンカチで口元を拭うと、ニッコリと笑つた。

「それは良い事だと思つた。

でも番組的にどうなんだ？

地味な調査や逃亡の準備なんて番組にはならんでしょう？
テレビには派手な除霊や靈現象そのものが喜ばれる

僕のやり方に影響されたのは良いけど、そのまま実践されちゃ無理だろ。

あの番組は、梓巫女・桜岡霞のヌレヌレで持つている様な物らしい。

美人な巫女さんが活躍するから視聴率が稼げるんだよね？

「でも本物の靈現象の起ころる現場に素人を連れて行く危険は理解したわ。

私達本職が2人居た時も、警備員さんの時もヤツにやられたでしょ。だから撮影の時に榎本さんが一緒なら心強いと思うの。
お願い

可愛く拌む様に頼まれたが……

「却下！」

「即答ね、脊髄反射なみに早かつたわよ！」

落ち着け……

ホッピーを一気飲みする。

「桜岡さん、僕は目立つ事はしたくない。
前にも言つた筈だ！」

ちゅうとだけ語氣を強くして話す！

「分かりましたわ。

この話は此処までにしましょう。

榎本さんつてシャイなのね……

ムキムキなのにシャイ？

ふふふ、変な人

そつとメーラーを見始めた。

まだ食べるつもりか？

ならば張り合わねばなるまい……

あんな細い腰の女に負ける訳にはいかない。

手を上げて女将が近くに来るのを待つて

「先ずは串焼きの盛り合せだな。

後はじゃがバター、それに小えびの唐揚げを……」

「やるわね。

なら私は……」

ファミレスに続き、第二次フードファイト勃発！

僕の財布と財布はボロボロだ……

流石に奢ってくれるって話だったが、支払いは僕がした。

居酒屋で2人で18000円って結構な金額だ！

まあ楽しかったから良いし、彼女のお願いも断つたんだから僕が払うのは当然だろ？

何より行き着けの居酒屋だ。

「榎本さんが、この間美人さんと一緒に来られまして奢って貰つてましたよ」

とか言われたら、余り嬉しくない。

見栄つ張りだとは思うのだが……

オッサンがお嬢様にたかるみたいで嫌だ！

そのお嬢様と言えば……

「榎本さん……

ぎょぎわるいわ……」

絶賛悪酔い中です。

居酒屋を出てから酔い醒ましを兼ねて、駅ビル内のプロントでお茶

をしている。

彼女は、机に突っ伏してダウン中……

僕はホット「コーヒーをチビチビ飲みながら、彼女が回復するのに付き合っている。

回復したら適当なタクシーに放り込んで帰そう。

それが、大人の対応だ！

間違つても

「少し休んで行こうか？

エヘエヘ！」

ではない。

15分位だろうか……

大分顔色が良くなってきた。

「桜岡さん、タクシー呼ぶけど自宅は何処らへん？」

お冷やを飲んでいる彼女に聞く。

余りに遠いならビジネスホテルに放り込もう。

「んー家は金沢区よ……」

金沢区？近いな。

此処からなら一万円で足りるか。

「立てる様になつたらタクシー乗り場に行こつか
まだ休んでいて良いよ。

この店は22時まで開いているからね」

携帯電話で現在時刻を確認すれば、まだ20時半だ。

居酒屋に2時間と少し居た計算か……

「ねえ……

やつぱり私の手伝いは嫌なのかしら？」

テレビに出なくても、相談には乗つて欲しいの……

私の周りには、相談出来る本物の霊能力者なんて居ないし、お師匠様は亡くなってしまったし

随分と懐かれた物だ……

確かに、この業界の連中は癖の有る奴ばかりだ。

こんなお嬢様は珍しいし、自分の力や除霊方法は隠すのが普通だからな。

駆け出しの彼女にとって、業界の先輩の僕に頼りたいのは当たり前か……

「桜岡さん……

僕は目立つ事はしたくないんだ。

だから個人的な相談としてなら受けるけど、テレビの仕事絡みは駄目だよ」

「テレビ出演とかは危険だし、撮しませんとか言つても分かつたもんじゃない。」

彼女はテーブルに伏せつたまま

「ふふふ……」

個人的な相談つて。

榎本さん優しいのね。

それとも下心アリアリ?

でもロリコンだから安心なのかしら」

クスクス笑っているのを見ると大分回復したのかな?

「あのね、君が危なっかしいから心配なの。

それに結衣ちゃんのプレゼントを見立て欲しいんだ。

オッサンの僕に若い娘のファッショնは難しい

余り物を欲しがらず、お洒落に興味が無さそうな彼女を着飾らせてあげたい。

年頃の女の子として、普通の幸せを感じて欲しいんだ。

「結衣ちゃん?」

「ああ、中学生なんでしょう?」

「榎本さんが困っている。」

「嫌ね、光源氏計画?」

起き上がって、正面を見ながら結構キツい事を言われたよ。

でも光源氏計画か……

心惹かれるぜ！

「結衣ちゃんは……」

母親と母親が連れ込んだ男達に虐待されていた。
まだ小学生の時にだ！

しかし母親が靈障で亡くなり、唯一の親族だった祖母も亡くした……
彼女の一族は、獣憑きの血筋なんだ。

普通の孤児院では対処が出来ないし、獣憑きなんて信じやしないだ
ろ。

だから僕が、里親になつたんだ……」

それにはれだけの口りつ娘が不幸になるのを分かつて、変態と言
う名の紳士たる僕が黙つてろ？

無理無理、そんな事出来る訳が無い！

一応、下心を隠して真摯な表情で教えた。

変に勘ぐられて、行政にチクられたら同棲生活の破綻だ！

「……………」

榎本さんって凄いのね。

見直したわ。

分かりましたわ。

結衣ちゃんを連れ出してお洒落させるのね？

確かに年頃の女の子だから、父親代わりがムキムキの脳筋じや相談

事も出来ないわね……

フムフムと頷いている……

騙せたみたいだな。

でも何気に酷いぞ！

いい加減、脳筋から離れろ！

確かに男親には話せない相談事か……

あつアレか？

昔、小学生の時に女子だけ別の教室で何やら教えられていた。

確かに僕じや子作りは教えられても、それは難しい。

「そうだね……

今度、結衣ちゃんと会って欲しいんだ。

大人しく引っ込み思案だから、少しあ洒落と言つか……
その辺の相談に乗つてあげてくれる？

「分かりましたわ！

お姉さんが教えてあげるわ。
任せて下さいな」

笑顔で承諾してくれた。

彼女は基本的に善人だし、本物のお嬢様！

結衣ちゃんの為に頑張つてくれる筈だ……

それに桜岡さんは高飛車でケバいかと思つたけど、実際は印象が全然違う。

彼女なら結衣ちゃんを任せても大丈夫。

僕の未来の花嫁を任せたよ。

思わずニヤニヤしてしまつ……

「榎本さん、何かしら?」

気持ち悪いわ。

そのニヤニヤは……

結衣ちゃんの前で、その笑いをしたら嫌われるわよ。
とってもイヤライから!」

おっと、結衣ちゃんととの新婚生活を妄想してしまつたか……

「えつと……

結衣ちゃんと桜岡さんの買い物シーンを考えたら、美人姉妹だなー
つじ。

H A H A H A H A !

兎に角宜しく頼むよ」

ヤバい、言葉使いが変になつてないか?

「ふーん……

美人姉妹ね。

結衣ちゃんて、どんな娘なのかしら?」

僕は携帯電話の画像フォルダーから、彼女の制服姿の一枚を見せる。

これは去年、夏服に変わった時に撮らせて貰つた僕の宝物だ!

「あら、随分と大人しそうだけど可愛い娘ね。
なる程、榎本さんが親バカになるのも分かるわ」

そうです!

親バカです!

もし結衣ちゃんが彼氏を連れて来たら、速攻で笑いながら呪殺する
位に……

「榎本さん、怖い顔をしているわ。

でも呪殺は駄目ですからね!」

真剣な表情で、桜岡さんにダメ出しされました!

アレ?

だだ漏れだったかな?

第21話

タクシーに乗り家に帰る途中で、先程までの事を考える……

まだ会つてから一週間も経つてないに、随分と彼に甘え過ぎだわ。

夜の街を後部座席の窓から見ながら考える。

ネオンが綺麗……

海岸通りの134号線を横浜方面に向かっている。

右に見えるのは横須賀米軍基地……

その先はダイエーね。

トンネルを抜ければ田浦、その先は追浜……

自宅はその先。

15分もすれば到着するだろ？。

運転手には134号線から脇道に入る時に指示をすれば良い。

座席に深く座り、深く息を吐く……

飲み過ぎたかしら？

何時もは自制して3杯以上は呑まないのに。

お酒は好きだけど弱いのは、十分理解していた。

以前にテレビの打ち上げで酔わされて、ホテルに連れ込まれそうになつた事が有つてから、異性と外で呑む時は警戒していたのに……

「それだけ、安心して甘えているのかしら?」

確かに業界の先輩であり、靈能力も本物。

体も鍛え抜かれている。

頼りになるのは確かね。

交渉に長けて、契約とか料金とかに細かい人。

女性に優しく何だかんだ言つて支払いもスマートに払ってくれる……

そして話していく楽しい人。

大食いな私に張り合える、やはり沢山食べる人。

料理の取り合いなんて初めての経験だったわ。

家族とだって、そんな事はしなかつたのにナチュラルに私が手を付けた料理を食べるし……

やだ、考え出したら顔が熱いわ。

「不思議な人……」

私をイヤライ目で見ない。

何故？

僧侶だから？

それとも私って魅力が無いのかしら……」

独身なのに善意から子供を引き取れる程の人だもの……

邪な目で私を見ていないのね。

アレ？

でも確か……

初めて会った日に、あの警備員と私を押し付け合つた時に……

「僕だつて仕事と割り切つてているけどさ。
口うりじやないから無理！」

とか言つていたわよね？

聞き間違いよね？

榎本さんを信じて大丈夫よね？

結衣ちゃんつて、本当に安全なのかしら……

幸い明日は土曜日だし、早めに結衣ちゃんに会つて真偽を確かめないと！

まさか本当に光源氏計画を実行していたら……

「結衣ちゃんの為にも、榎本さんのナニをモギ取らないといけないわ……」

「お密さん……

怖い台詞が駄々漏れだけど、彼氏の浮氣の制裁に息子をモギるのはやり過ぎだぜ！

アンタの子供も作れなくなるんだぜ！」

はあ？

私と榎本さんとの子供？

「なつなななな……」

「あんた美人なんだから、浮気って本当かい？
彼氏と良く話し合った方が良いんじやないかな。
案外、勘違いとか多いぜ」

ギヤハハハ！

ちゃんと首輪してガツチリ捕まえておけよ！

とか言いやがつたぞ、この運転手！

首輪？

犬、かしら？

犬ね、それ良いかも……

確かに番犬には、うつてつけな人材ですわね。

「そうね。

首輪……良いですわ。

クスクスクス

桜岡霞に、不思議な性癖が開花したかも知れない。

「長瀬君、君の所に任せているのに今回の不祥事は何故かな？」

「いや、曰わく有りとは聞いていたが実害が有るとは聞いていませんでしたよ」

「だからと云つて、警察沙汰は御免だ！

私も呼ばれたんだぞ。

建物の持ち主としての責任を問われた。

君の所の従業員の保証もだ。

労災は利かないそうだよ……

心霊現象では無理だろうな。

だから、此方で面倒をみよう。

それと忌々しいが、あのマンションも曰わく付きとして広まつてしまつた……

靈能力者も此方で手配するぞ。

「もつ君には任せられん！」

「では、警備の契約は明日の昼勤務で終了とさせて頂きます。
そちらの靈能力者は何時からですか？」

「……明日の夜にならう。

まあ君が手配した連中よりは確かだよ。

生靈？

ふん、どうだかな」

「では請求は今日付にて送らせて頂きます。
なに、こちらの靈能力者の支払いは請求しませんよ。
彼らにも手を引かせますので……」

相手から無言で切られた。

全く、榎本君が難しいと言つたんだぞ。

どの程度の連中が対処するか楽しみだな。

まあ義理で請けた仕事だ。

喧嘩別れでも構わんか……

榎本君の請求も、報告書込みで20万円位か。

桜岡君には悪かったが、まあ彼に説得させれば良いだらう……

この件は、これで終わりだ。

仕事用のデスクに座つていたが、体が凝つて固くなってしまったな

……

椅子から立ち上がり、社長室の隅に設えた応接セットに首を回しながら歩いて行く。

「ゴキゴキなるのは年齢のせいだらうか?

ソファーに深く座り目頭を揉む……

そうだ!

坂崎君に撤収の準備をさせなければ。

それと榎本君にも連絡だな。

桜岡君は……

榎本君経由で押し付けよう。

ああ、最近妻と娘と過ごす時間が無かつたか……

明日は週末だし、前からお願いされていたディズニーランドに連れて行くか。

時計を見れば、既に21時を少し回っている。

全く面倒事は今日中にするとするか。

胸ポケットに入れてある携帯電話を取り出し、榎本君の番号を検索

する。

ヤレヤレだな。

数回のコールの後に榎本君に繋がった……

桜岡さんをタクシーに放り込み、自分は電車で自宅に帰れる。

時刻は20時30分……

タクシーで帰るには勿体無いからね。

横須賀中央駅のホームで、電車を街ながらボートと週末の予定を考える。

土日のどちらかで結衣ちゃんと鎌倉に遊びに行こう。

久し振りに彼女と2人きりでお出掛けだ！

長瀬さんの方も1日や2日では進展しないだろう……

多分だが、揉めると思つ。

警察沙汰になつたし。

マンションオーナーも、頭を抱えてるだらうな。

労災申請しても状況が状況だからな。

ただ、あの2人は頑丈だから数日の休業補償と医療費だけだから……

実費負担は20万円程度かな？

丁度、快速特急が来たので乗り込む。

平日だからか、結構な乗客が居るな。

結構な酔客の数だ……

まあ週末だし、10分位だから立つても良いか。

車窓から外を見れば、遠く千葉県の内房の辺りが見える……

木更津辺りの工場の煙突群が見える。

横須賀から千葉は、結構近いんだ。

東京湾フェリーで50分位で、久里浜から浜金谷迄行けるからね……

つらつらと考え事をしていたら、駅に付いた。

コンビニで結衣ちゃんへのお土産を買って行こう。

何が良いかな？

女の子だから、スイーツ！

結衣ちゃんも甘党だから、ケーキかプリンか……

結局コンビニで、「一ヒーゼリーを2つ買った。

夜遅かつた為か、品揃えが良くなかったのだ……

「そう言えば、最近は桜岡さんとばかり外食してたな。ファミレス・喫茶店・居酒屋……

このラインナップは倦怠期のカツブルか？
まあお仕事だから仕方無いよね。

結衣ちゃんをお買い物に行つて貰う時には、誤解の無い様にしない
と。

「桜岡さんって榎本さんと付き合つてるの？」

とか言われたら悶死しそうだよ

確かに美人で話してて面白いんだけど、年喰つてるからなー！
おっと、携帯が……

電車に乗る為にバイブモードにしていたので、ポケット内でブルブルと。

「もしもし、榎本です」

「ああ、榎本君。

夜分にすまないね、長瀬です

時刻は9時過ぎ……

長瀬社長からつて、何か進展したのか？

「大丈夫ですよ。

丁度、家に帰る途中ですから……
何か進展したんですか？」

「例のマンションの件だけビ
ウチは手を引く事になつたよ。

明日で終わりにする」

手を引く？

やはり警察で責任は建物の所有者に押し付けたのがマズかったかな
……

「そうですか……

残念ですが、仕方無いですね。

では私の請求は昨日迄の分を報告書と共に送りますが、宜しいですか？」

調査だけだが、まあ仕方無いか……

「箱」も乗り気じゃなかつたし。

「勿論構わないよ。

それと……

桜岡君には、君から説明してくれ。

仕事を依頼しようにも、先方から断られたからな。
仕方無いが、次に何か有れば頼むからと

えつ？

僕は桜岡さんのマネージャーじゃ無いっすよー。

「ちよ、それは……」

「頼むよ。

君から持ち掛けた話しだろ？

彼女の件は……

そうそう！

明日の夜から、先方の靈能力者が対応するそつだ。
じゃ頼むよー！」

そつ言つて、一方的に電話を切られた。

お~お~い……

彼女は、あの件に介入する気が満々だぞ！

しかし、マンションオーナーから断られ、他の靈能力者が派遣され
るなら……

未解決にはならないから、何とか説得出来るかな？

「明日電話すれば良いかな……

夜に女性に電話するのも何だし

「明日電話すれば良いかな……

夜に女性に電話するのも何だし

それに、今夜は結衣ちゃん成分を補給しなきゃならぬからね！

丁度、自宅に付いたので玄関の鍵を開けて

「ただいま！」

と言つて中に入る。

「お帰りなさい、正明さん」

直ぐに応えてくれたのは、居間に居た為か……

「ゴンベー袋を渡しながら

「はー、お土産。
今から食べる?
明日にあるかい?」

と囁つと

「何ですか?
あつコーヒーぜりーですね。
じゃお茶淹れますね」

そう言つてキッキンに行つた。

確かにゴーヒーゼリーを食べながら、ゴーヒーも紅茶は飲まないかな？

それとも日本茶好きな結衣ちゃんだからか？

僕は着替える為に、浴室へと向かつた。

結衣ちゃんの、物を食べる口元が好きなんだよね。

エヘエヘ……

桜岡さんは上品に食べるけど、結衣ちゃんは少しづつ口に運ぶ食べ方なんだよ。

性格的な物かも知れないけど、控え目な感じが大和撫子なんだよなー。

部屋着に着替えてから居間に戻る。

丁度、結衣ちゃんが湯呑みをコタツに置いた所だ。

寒い時期にはコタツが良いよね。

うつかり足と足が触れ合ったりもするし……

いや事故ですよ、故意じゃないからー！

向かい合って座り

「「 いただきます」」

と言つて食べ始める。

結衣ちゃんは、スプーンで少しづつ崩して食べ始めた……

うとうん、良いですぞ！

「……？」

正明さん、何か私の顔に付いてますか？

ヤバい、ガン見してたのがバレたか？

「いや、美味しそうに食べるなって……

そうだ！」

結衣ちゃんは、梓巫女の桜岡霞さんって知ってる？
長瀬綜合警備保障の長瀬社長から紹介されてね。
今、仕事を一緒にしてるんだ」

彼女は少し驚いた顔をして

「あの心霊番組で良く見るお姉さんですよね？
少しエッチな……」

と言つて、顔を少し赤くした。

やはりヌレヌレだかスケスケだか有名なんだ！

テレビの仕事は、辞めさせた方が良いかも。

特に女性の尊厳的な意味で……

「本人は至つて真面目なお嬢様だよ。

あれはテレビ的な演出で、本人も嫌がつてた……」

「せうなんですか……

分かりました。

それで、桜岡さんがどうかしたんですか?」

流石は結衣ちゃん!

物分かりが良いな……

「いや、結衣ちゃんの話をしたら一度会いたいって事になつてね。
嫌じゃなければ、会つてみるかい?
彼女はかなりお洒落さんだから、結衣ちゃんのコードネートを頼
もうかと思つてさー」

「わつ私のコードネートですか?
恥ずかしいですし、これ以上正明さん迷惑は……」

やつぱり遠慮するか……

もつ少しワガママを言つて欲しいんだけどな。

コーポーラーを食べ終わり、日本茶を啜つてから結衣ちゃんの説
得に掛かるかな……

結衣ちゃんには、人並み以上の幸せになつて欲しいからね。

第22話

結衣ちゃんと2人、コタツに入つて寛いでいる。

日本茶とコーヒーゼリーと言ひ、不思議なコラボレーションは結衣ちゃんのお薦めだ。

コーヒーゼリーを食べ終わり、コタツでまつたつとテレビのニュースを見ている……

プロ野球の結果や天気予報をぼんやりと見る。

週末は天気みたいだ……

今日は金曜日の夜。

明日、明後日はお休みだ！

結衣ちゃんと鎌倉に遊びに行く約束を果たすのと、桜岡さんに頼んだコーディネートの件を話す。

しかし、結衣ちゃんは持ち前の謙虚さと遠慮深さから、この申し出には難色を示した……

僕はお洒落をした結衣ちゃんを見たいのだが。

CMに入った所で、再度その話題を振る。

「正明さん、そんな迷惑は……」

今でも全て正明さんのお世話になつてゐる」

俯き加減で話す彼女だが、それでも初めて会つた時よりは大分会話も繋がつてゐる。

昔は一言一言で下を向いて黙つてしまつたからな。

「いや遠慮は要らないよ。

桜岡さんも乗り気なんだ。

断るのは、かえつて悪いと思うし……

それに家事全般やつてくれる結衣ちゃんに、お礼がしたいんだ

ねつ！

と強めに頼むと、引っ込み思案な彼女は頷いた。

三シ一

これでお洒落な結衣ちゃんも見れるぞ。

桜岡さんのファッションセンスは、流行に無頓着な僕でも格好良い・可愛いと思つたんだ。

素材が良ければ、更に素晴らしいだろう。

楽しみだなー！

明日は鎌倉に行くので、大体の予定を決めてからお開きになつた。

「僕は……

まだ仕事があるから…」

そう言つて、先に彼女にお風呂を勧めた。

「大変なんですね……

では先にお風呂に入りますから」

そう快諾してくれたが、何時も結衣ちゃんに先に入つて貰う。

何故なら、結衣ちゃんエキスが浴槽内に……

ゲヘゲヘ！

美少女の残り湯なんて最高だぜ！

僕の邪な気持ちには気が付いてないのだらう。

何時も申し訳無さそうに、先にお風呂に入る結衣ちゃん……

コッちからお願ひしてるんだから、気にしないでね！

変態的行動を取るが、覗きはしない。

それは合意の上でのプレイだ！

自室に戻ると携帯が着信有り、の点滅をしている。

見れば桜岡さんからだ。

着信時間は21時58分か……

今は既に22時17分、女性に電話をするには遅い時間だ。

明日でも大丈夫かな？

それとも緊急か？

取り敢えず、折り返しで電話をかける。

3回田のホール前に繋がった。

はやっ！

これは待っていたか？

「こんばんは、榎本です。
夜分にすいません。
着信に気が付かなくて……」

一応、夜に女性に電話する訳だから一言謝つておく。

「榎本さん？」

夜遅くご免なさい。

ちょっと気になってしまって……

気になる？

何だらう？……

除霊の件かな？

「何だい？改まって……」

暫し無言だけど……

「結衣ちゃんの事ですか……」

「ああ、有難う御座います。

先ほど彼女に話しましたが、喜んでました」

「……そうですか。

でも早い方が良いと思つんですね。
ええ、本当に切実に！

例えば、明日とか……」

何だらう？

鬼気迫る迫力を感じるんだけど……

「明日は予定が有りまして……

明後日以降なら結衣ちゃんと相談しますが

「今、話せますか？」

「結衣ちゃんと……」

「何で、こんなに急ぐんだろうか？」

「アレかな……」

「テレビ収録で忙しくなるのかな？」

「今はお風呂に入っています。
もう遅いですし……」

迷惑でなければ明日、此方からかけ直しますが」

流石に一面識も無い桜岡さんと、いきなり電話で話すのは結衣ちゃんには大変だ……

人見知りなんだし。

「風呂ですって！」

「はい、僕の帰りを待つていてくれたので。
お土産のコーヒーゼリーと一緒に食べて、今から寝るといります」

「寝るですって！」

「桜岡さんは、何を興奮してるんだ？」

「一々怒鳴るけど……」

「もう夜も遅いですし、中学生に夜更かしあ……」

それに桜岡さんにも少し話しましたが、彼女は虐待を受けていたせいで極度の人見知りです。

いきなり電話で話すのは無理ですよ。

ちゃんと僕が同伴で、紹介しないと……

「

根っこじが優しくてお嬢様な桜岡さんなら、結衣ひやんも懐く筈だけ
どね。

「やつでしたわね……

でも、彼女の為にも早めに確認した方が、傷は少ない筈ですわ」

傷?トライアウスマ?心の傷かな?

桜岡さんって、其処まで結衣ひやんの事を考えてくれていたのか!

「買いたい物は明日以降になりますが、明日時間が有るなら結衣ひやん
を交えてお茶でもしませんか?」

鎌倉まで散策に行きますから、良ければ一緒に……」

早い段階で桜岡さんと引き合せた方が、結衣ひやんにプラスにな
るかな。

「鎌倉ですか……

そうですね。

いきなり買いたい物に行きましたよ! 無理ですね。

分かりました。

明日、一緒に鎌倉に行きますわ

鎌倉には女性の喜びそうな喫茶店やレストランが多いし、お礼を兼
ねてご招待しますか……

「ではJR鎌倉駅の改札付近で1~1時で良いですか?」

「分かりましたわ。

では明日……

キリキリ白状して貰いますからね

そう言つて電話を切つた。

キリキリ?白状?

何の事だろ?

でも明日は賑やかになるだろ?な……

古都鎌倉……

1192年源頼朝が征夷大將軍に任命され、武家政権の鎌倉幕府を作つた。

実際はもつ少し前の1185年には幕府としての機能を持つていた
そうだ……

「良い国（1192）作ろう鎌倉幕府」

つて語呂で覚えたんだけど、今は違ひらしい。

武家政権発祥の地も、今では世界的に有名な観光地で有りテー^{トス}
ポツトだ！

そひ、今日は結衣ちゃんとテー^ト。

おまけで桜岡さんも来るけどね……

自宅から京急電鉄で汐入駅まで行き、JR横須賀線に乗り換える。

ローカル色豊かな横須賀線のボックシートに結衣ちゃんに向かい合って座る。

この車両には8人しか乗つていない……

ガタゴトとのんびり走る電車は、如何にも旅行に行きます的な感じだ。

「結衣ちゃん、急に桜岡さんと一緒にゴメンね。

一度一緒に顔合わせしないと駄目だと思つて……」

昨夜、桜岡さんとの電話の後、結衣ちゃんに鎌倉で合流すると話した。

急な展開で、少しひくりしていたが……

元々素直な優しい娘だから、反対はされなかつた。

僕的には

「正明さんと2人きりのデートなのに嫌です…」

とか言つて欲しかつたのは秘密だ……

「急でびっくりしましたが……

テレビで活躍してゐる人と会つて、不思議な気持ちです」

そう微笑む彼女は、前に自分がプレゼントしたワンピースを着ている。

勿論、女性のファッションセンスなど皆無だから適当に高やうな店に入り店員さんに『写真を見せて見立てて貰つた。

パステル調のフリミーン風？なワンピースだが、彼女は氣に入ってくれたらしい。

実際似合つてゐると思つ。

「見た目はお嬢様だけど、話すと氣さくな感じだよ……」

性格はオッサンだけどね。

「そりなんですか？」

話し易い人なんですね」

等と話していると、JR鎌倉駅に到着した……

流石に観光地だから、ホームはいつも返している。

はぐれない様に手を繋ぎながら改札へ向かいたいが……

引っ込み思案な彼女は、そんな事はしない。

自分の真後ろを付いて歩いている。

僕は防波堤だね……

改札を抜けると、駅前はパスター・ミナルになつていて、数台のバスとタクシーが並んでいた。

左側が小町通り、右側が江ノ島電、鉄通称江ノ電だ。

周りを見渡すと……

居た！

桜岡さんだ。

今日は遠田でも気合いが入つている服装だ。

結衣ちゃんの性格は話してあるが、派手ではないが、これぞお嬢様な服装だ……

しかもナンパかな？

若い男2人連れと話しているけど、にこやかに手を振つて断つてるな。

あっコツチに気が付いたぞ！

全く気合こを入れてお洒落したのは、結衣ちゃんの為でお前りを楽しませる説じやないんですよ。

断つても諦めず食い下がつてくるチャラ男め、ウザいわ。

似合わない髪に冬なのに胸元全開のシャツ。

妙に日焼けした肌に、下品な香りの香水。

チャラチャラしたアクセサリー。

これが両脇から絡んでくるなんて。

地を出しても良いのだけれど、もし結衣ちゃんに見られたら……

彼女が怖がると思つて我慢しているのよー

「いえ、ですから待ち合わせをしてますので……

「ナニナニ友達?

俺らも2人だし丁度良くな?」

「そうだよ。

俺ら車有るから、ドライブしよーぜ!」

そうだ、それが良いぜ

行きませんわよー

お前達とドライブなんて、何処に連れ込まれるか分かりませんわー！

「いえ、待ち合わせは男性ですかーり……」

それと同伴の引っ越し思案な少女なのよ。

早く追い払わないと……

「いやいや、女性を待たす男なんて碌な奴じやないって！」

「せうだよ！」

「俺らと行こうぜ、なー！」

遂に手を握つて引っ張り出したわ……

「嫌ですー！」

振り払おうにも2人掛かりで両手を握られては……

ちょ、本当に嫌なんですって！

その時、視界の隅に最近見慣れた筋肉が居たの……

「オラオラー！」

優しく言つてる内に行こうぜ。

裏通りに車停めてんだよ

「あやははー！」

江ノ島行こうぜ、江ノ島にわ……

ちょ、おいた、痛いよ

榎本さんは、チャラ男の髪の毛を掴み捻り上げたわ！

毛髪つて体を浮かせる程、強いのね……

「おー、止め！」

「禿げる、禿げるじゃねーか！」

チャラ男が騒いでいるが、ビクともしないわ！

あっ抜け落ちた……

ゴッソリと両手にチャラ男の髪の毛を掴みながら、初めて見る怖い顔をしている。

「なあ誘拐犯。

知ってるか？

現行犯なら、警察官じゃなくとも逮捕出来るんだぜ？」

「何だとテメー！」

「ああ、ゴッチは2人だぞ！

おつ？」

後ろに可愛い娘が居るじや……」

問答無用で急所を蹴つたわ！

崩れ落ちる様にしゃがみ込んで……

「おまつ？

人としてヒテエよ。
つて、あぐつ……」

危険を察してか、残つたキャラ男が股関をガードしたけど……

ガード越しに蹴り上げたわ！

しかも爪先で……

アレは指と急所が、大変な事に。

でも榎本さんは、怖い顔のまま……

ちょっとヤバいかしら？

「なあ誘拐犯？

2人も攫う気か……

これは他に危害を加えない内にモギルか」

白由を向いて悶絶するキャラ男達には、聞こえてないですわよ！

彼の腕にしがみついて

「もう許してあげなさいな。

反省はしないでしきょうが、罰は受けたわ。

ほら、人が騒ぎ出す前に離れましょ」

私がナンパされてる時は遠巻きで見ていた連中が騒ぎ出したわ。

警察とか呼ばれたら面倒よ……

「 わあ わあ、 ひひひへ」

腕を掴んだまま、路地の方へ誘導する。

「 貴女が結衣ちゃん?
さあ 榎本さんをコツチに……」

「 はっはー」

あまりの出来事に固まっていた? 彼女に声を掛けて2人掛けりで榎本さんを路地に引っ張る……

私達の力では動かない筈だけど、素直に移動してくれた。

野次馬から引き離したら、タクシーで移動しましょう。

全く番犬には一度良いと思つたけど、結構氣の荒い性格なのね。

助けてくれたのは嬉しいのだけど……

幾つかの路地を曲がり大通りに出てから、タクシーに乗り込んだ。

後部座席に3人は狭いけど、私も結衣ちゃんも小柄だから何とか座れた。

この乱暴者の手を離すと暴れそつだから……

ずっと腕を組んでいたのに気が付いたのは、タクシーに乗り込む時
だつたわ。

JR鎌倉駅前で酷いナンパに有つていた時に助けてくれた。

でも、あんなに怖い顔は初めてだつたわ。

確か坂崎さんと云つ警備員が、彼は武闘派で肉体言語が得意だから
1～2人なら負けないって言つてたわね……

でも容赦の無い急所攻撃は、荒事に慣れている感じがしたの。

命の遣り取りをする仕事なんですもの。

私が甘過ぎるのね……

タクシーの後部座席で、私と結衣ちゃんで左右の腕を抱き締めて
いるのを理解したのか、真っ赤だわ。

「すまない……

つい、カツとなつた。

後悔はしていないが、反省もしていない。

腐れナンパ野郎は悉く滅べ！

幸い頭髪は確保した。

呪おつ……」

ちゅ、髪の毛を掴んだのって、そんな思惑が？

表情は未だに真っ赤だけど、田は真剣よ！

「榎本さん。

程々にしないと、私も怒るわよ。

でも助けてくれたのは……

嬉しかったわ

あのまま後5分も遅ければ、あの連中に拉致られたかも知れない……

そう思つと、急に怖くなりギュッと彼の腕をかき抱いた。

やはり、この番犬は良いかも知れないわ。

頼りになるし、基本的に私を何時も守ってくれているもの……

もつ勿論、仕事のパートナーとしてだけね?

「結衣ちゃんも落ち着いたかしら?

いきなり怖い思いをさせてごめんなさいね。

でも、私だけだったら対処出来なかつたわ。

有難う御座いました、榎本さん」

そう言つて頭を下げる。

腕を抱いていたので、その固い胸板に頭をコシンと当てる感じだったけど……

ただ

「無事で良かつたよ」

とだけ言つてくれたわ。

暫くは沈黙が続いた。

ただ空氣を読んでくれたタクシーの運転手さんは、気まずそうに咳払いをしていたわね。

確かに真ん中に座るオッサンが、両脇に美女と美少女を侍らせねば、

取り敢えず目的地は横浜ランドマークにしたわ。

お洒落なお店も多いし、何より私の行き着けの店が有るわ。

横浜ジャックモール・赤レンガ倉庫・クイーンズイースト・ワールドポーターズとか、お洒落なお店が多いし美味しいレストランも何件か知ってるし……

何故かしら、『デート』コースよね。

ふふふ……

でも、私が着れなくなつた服をあげても良いわね。

妹が出来るつて、こんな感じかしら?

でも榎本さんと結婚すると、娘に?

イヤイヤイヤ、それは飛躍し過ぎだわ……

そう言えば、ちゃんとした自己紹介が未だだった事を思い出し改め

て結衣ちゃんと名乗りあった。

あんな事が有った後だからだろ？

人見知りと聞いていた彼女だが、それなりに会話が弾んだ。

榎本さん越しに、変な位置取りだったけどね！

女性の買い物に同行するのは、精神的にキツい。

歴代のエロい人は言った……

「諦める……

そして何でも似合つてると言え。

後は財布が被害を引き継いでくれる、と……」

良く分からぬが、桜岡さんと結衣ちゃんは意氣投合している。

何故だら？

僕は既に両手一杯の衣装を持っている。

しかし彼女等は、まだ衣装選びをしている。

つまり、この手に持つ衣装は全て買つか?

それとも候補なのは、怖くて聞けない。

「結衣ちゃん、これも着てみましょうか?
デザインだけでなく機能的なのも選ばないと」

「はい。

でも少しスカートが短くないですか?」

「これ位は普通よ。

それにこれより長いと動き回る時に不便よ。

さあさあ試着室に行きましょ!」

長くなりそうだ……

彼女等を見詰めながら、財布の中身とカードの限度額を思い浮かべる。

財布には20万円、カードは今月使っていないな……

限度額上限40万円だな。

結衣ちゃんのコーディネートを頼んだ以上、桜園さんにもお礼をしなければ駄目だらう。

今月は節約しなければ……

ここやかに此方を見詰める店員の笑顔が、良いカモがキター!

と、喜んでいる様に見えた……

問題のマンショノ……

昼間の警備で長瀬綜合警備保障の警備員は撤退した。

建物の外周しか点検しないので、入り口には警察が張った立入禁止の黄色いテープがそのままだ。

此処に2人の男が建物を見上げている。

時刻は既に日付が変更された辺り……

今夜は久々に月が顔を出し、建物と敷地をほんのりと照らしている。
しかし窓ガラスや玄関扉の無い建設途中の建物は、暗い口がポツカ
リと開いている……

禍々しい口に見える。

「さて、やりますかね」

「そうだな。

現れて脅かすだけの相手なら、楽勝だぜ」

1人はスーツを着崩した感じの20代後半、痩せ型で神経質そうな男。

もう一人はジャンパーにGパン、小太りな中年男。

此方は体型故か、人当たりの良さそうな感じだ。

しかし口調はどうちらも悪い……

無言で頷き合い、建物の中に入っていく。

「確かに初期調査だと3階の角部屋にしか現れないのが、除霊後は2階に現れたんだよな」

「そうだ……

失敗したのか、初めから建物全体に憑いてるか？
まあどっちでも構わないけどよ」

懐中電灯で確認しながら、1階を探索する……

今夜は雲が多いが月が出ている。

窓部分の開口からも、仄かな月明かりが差し込み暗くは無い……

「さて2階に上がるか……」

「特に何も感じないな。

ああ、2階に行こう」

痩せ型が前、小太りが後の順で2階に上がつて行く……

階段を登りきると、8箇所の入り口を見通せる廊下に出た。

慎重に辺りを見回し、己の靈能力を集中させるが気配一つ無い……

「やれやれ……

奴め、今夜は様子を見る氣かよ?」

「初日から出るのは少ないからな。

面倒臭いが、何日か張らないと駄目かもしけん」

軽口を叩き合つが、警戒は怠らずに各部屋を回る。

しかし8部屋全て回つたが、何も異変は無い……

角部屋の中を見回り、何もないのに安心したのか。

窓際の壁に寄りかかり煙草を吸いだす……

「おっ、一本くれよ!」

小太りが差し出す煙草は、Sevenstars。

痩せ型がくわえると火のついたライターを差し出す……

暫し喫煙タイム。

「なあ、何でこの仕事請けだんだ?」

「ん?

ああ、金の為だな……
他に理由は無いだろ?」

瘦せ型の問いかへ、何言つてんだ?

と聞え返す。

「まあ確かにな。

俺もそりだけどよ……

短期で終わらせるとか、無茶言われたからな

あの糞ジジィが!

と毒づき乱暴に煙草を壁に擦り付けた。

ピンー

つと窓の外へ吸い終わった煙草を指で弾きながら

「さて、と……

じゃ3階に行くか?」

一服も終わり部屋を出ようとしたら時、空気が変わったを感じた……

粘つく感じの生暖かい空気が体全体を包む。

「ヤベー! 来るか?

「はつ！」

初日からじり焱場とはな」

背中合わせになり、周りを警戒する……

成人男子の生靈だ！

近くに居れば、直ぐに分かる筈。

しかし、体に纏わり付く粘着質な空気は密度を増すが本体は現れない。

「おい！

撤退するか？」

「駄目だ……

見ろ……入口を……」

絞り出す様な小太りの言葉に目をやれば……

天井から逆さまに降りてくる頭が見えた。

逆立った髪の毛がだらしなく垂れている。

そして徐々にオデコから目迄がハツキリしてきた……

既に口元まで現れている奴は、奴の目には……

明らかな殺意が有る。

顎が見え首が現れて始めたが、異様に首が長い……

まるで首を吊つて暫く放置した遺体の様に。

そして30センチは有りつかと思える首の後に、漸く剥き出しの方
が見えた。

「やるぞー。」

「ああ、エエつてんじゃねーぞー。」

暫し見詰め合つていたが

全身が現れると危険だ！

と本能が訴えた……

既に痩せこけて肋骨の浮いた体が見えている。

「おん ばやぢ うんけん まゆきぢ てい そばか かん

「おん ばやぢ あーでー ゆーでー まーでー」

共に力ある言葉を紡ぐ！

「「はー。」「

「」の靈能力を乗せた言靈をぶつけられ、奴を壁までぶつ飛ばした！

「ミッシャー！」

効いてんぜ、アレはよー

「バカやろ？！」

奴の全身が……

くつ、アレは生靈じやねえよ。

怨靈だ……

確かに靈能力で吹き飛ばした！

しかしヤツの体は天井から抜け出し壁に張り付いていたが、そのまま床に崩れ落ちる。

べちゃり、そんな擬音が聞こえそうな感じだ……

「あ……ががつ……あがが……」

ヤツが床に体をめり込ませた瞬間、彼らの足首が何かに掴まれた！

「ヤベー……

靈体が物質化してるぞ」

「バカ！」

「塩だ、清めの塩を撒くんだ……」

2人の足首にめり込む様に握り締める手に、思わず唸ってしまう。

ヤバい、ヤツは実体化している！

これはかなり強いヤツだ。

しかも壁や床を抜けてくるのか……

準備不足だぞ、どうする？

掴まれた足に清めの塩を撒き散らし、一寸距離をとる。

ヤツは床に沈み込んだ……

「一寸逃げるぞ！

何処から現れるか分からん。

建物内は危険だ！」

「はあはあ……

聞いた話と違つぜ。

分かつた、うわっ？

ベチャリと、天井から落ちてきたヤツが、瘦せ型にしがみつく！

「ひつひ、ひい……
たつ助けて！」

のし掛かる様にして動きを止めると、だらしなく開いていた口から涎を垂らしながら

「げつげげ……うづ……」

痩せ型の顔に実体化した涎が降り注ぐ……

「げふつ！

おい、ヤメロ……ヤメてくれ……ガハツ……」

気が付けば、小太りは逃げ出していた。

腐乱死体の様な怨霊は、涎を垂らしながら瘦せ型の首を絞める。

息をしたくとも首を絞められ、口には涎が大量に垂らされしていく……

お風呂に入り、缶ビール片手に浴室に戻る。

簡単に髪の毛を乾かして、床に座り込んでビールを飲む。

今日は疲れた……

女三人集まれば姦しいと言われるが、桜岡さん独りでも騒がしかつた。

何件も店を梯子し、結衣ちゃんの服を購入……

8着目までは数えたが、後は分からぬ。

しかも後半は桜岡さんのカードで支払っていたのも有るみたいだ。

ちゃんと返すか、何か同額以上の物を贈らなければならぬな……

でも彼女の楽しそうな顔は久し振りに見たんだ。

桜岡さんは感謝しなきや……

飲み干したビールの缶をクシャリと潰して、「ゴミ箱に投棄!」

壁に当たり、ゴミ箱には入らなかつたが、起きて捨てに行くのも怠い。

ああ、眠いな。

今日は、疲れた……よ……

そのまま布団に横になつた。

勿論、万年床じゃないぞ……

「…………まさ…………あき。」

「おー、まさあわ…………起きる…………」

誰だ?

気持ちの良い眠りを妨げるのは……

「起きる……

アヤツが変化したぞ。

ただ恨むだけから、誰彼構わず怨むになりあつた……
だから起きんか……」

アヤツ？恨む？怨む？

何を言つてゐんだ？

半分覚醒し、寝たまま周囲を確認する。

眠くてスタンドを点けっぱなしだったのか、仄かな灯りが部屋を照らしている……

テレビ・衣装棚・パソコンラックにゴミ箱。

寝る前と寸分も変わらない部屋に奴が居た。

そう！

我が一族を悉く取り憑き殺している奴が。

真っ黒な髪を足首まで伸ばし、ほそりとした体には何も纏っていない。

顔は影になつているが、真っ赤な唇と。

両目だけが真っ赤に光っている幼女が、僕を見下ろしている。

箱の中身、呪いの元凶は僕の好みを反映させて現れる。

「ああ起きたか？」

アヤツが変化したぞ。

今、人を独り喰い殺したな……

もう一人も……

ああ、ヤラレタぞ。

あれは良い怨みを纏っているな。

正明よ、アレが喰いたい。

行くぞ、支度をしろ

真っ裸な幼女に上から目線で命令される。

しかし、これは仮の姿……

本性を知る僕が、逆らえる訳がない。

頷くと、幼女は消えて「箱」だけが転がっている。

この忌々しい「箱」を握り締めて、飲酒をしたが車を運転しなければならない事を思い付く。

「クソツ！

バレずに現場まで行けるのか？」

僕は着替えを始める。

箱の機嫌が悪くならない内に、出掛けねばならないから……

足首まで伸びた、濡れている様な艶やかな黒髪。

透き通る様なきめ細やかな陶磁器を思わせる白い肌。

蠱惑的な真っ赤な唇。

それに前髪に隠れているが、紅く光る瞳……

真っ裸の幼女にこき使われているのが僕だ。

アレは人の欲望を忠実に再現する。

つまり僕の理想は日本人形みたいな幼女、そして真っ裸なのか。

爺さんは早くに祖母を無くしていたので、若い頃の祖母だったらしい。

親父は……

派手で露出度の高い巨乳のネーチャン。

つまり飲み屋のネーチャンか、理想の浮気相手だったのか？

榎本家の直系男子にのみ、ヤツは取り憑く……

見た目に騙されて、ヤツの機嫌を損ねれば問答無用で取り込まれる。

魂がヤツから逃げられず、未来永劫絶えず苦しむんだ！

夢でしか会えないが、最初の頃は爺さんとも親父とも会話が成立した。

しかし今は……

既に僕を認識してるかも分からず、辛い責め苦に耐えているだけだ。

そして恨み辛みを切々と訴え縋りつく……

アレに、「箱」に魂を捕らわれると未来永劫苦しみ続けるのだろう

……

祭壇に祭り結界を張つても簡単に抜け出していく。

布団の上に転がっている「箱」を掴むとポケットにいった。

時計を見れば0時29分……

今から行けば、朝迄には帰れるだろ？

結衣ちゃんには巴レズに行わなければならぬが……

部屋で着替えてからバイク……

ビーノモルフHのキーを持つて一階へ降りる。

結衣ちゃんの部屋の前を通つたが、電気も消えているし寝ていいるみたいだ。

音を立てずに外に出て、玄関の施錠を確認。

ビーノモルフエを50m程押して自宅から離れてエンジンを掛ける。深呼吸を数回し、酔いがそんなに強くない事を確認してから走り出す。

自宅から国道134号線を南下する。

途中の道沿いは長閑な漁港が有る。

夜に漁があるのか、
灯りを灯した漁船が停泊し慌ただしく人が動いている。

何が捕れるんだろう?

金田灣を見ながら、途中で国道214号線に右折し山の方に向かう

- 1 -

海岸線から少し入れば、畑がやたらと田に付く長閑な田舎町。

途中で更に枝道に入り目的のマンション前に着く。

少し離れた路肩にスクーターを停めて、歩いて現場まで行く。

この時間になれば、人通りや車の通行は皆無だ。

民間さえも雨戸を閉めて室内の灯りが漏れない。

疎らな街灯の灯りを頼りに、現場の近く迄歩いていく。

後50m程だらうか？

問題のマンションが見える。

前に車が停まってるな……

アレが「箱」が教えてくれた連中のか？

慎重に周りを確認し、建物の裏手に回る。

仮囲いの前まで到着。

左右を確認し、電信柱を利用して仮囲いを登り中に侵入する。

飛び降りてから、姿勢を低くしたままで周囲を警戒……

物音も無く、人の気配も感じられない。

警戒しながら建物に近付き、正面の入口から中に入る……

幸い今夜は雲が無く月明かりが仄かに建物内を照らしている。

ここで不用心に灯りを点けたら侵入がバレるから、暗闇からくる恐怖にじつと耐えるしかない。

暫く入口で留まつてみたが、反応は無い。

「箱」を取り出し、話し掛ける。

「おい、着いたぞ！
どうするんだ？」

持つていた「箱」からタールの様な黒い粘性の液体が床にこぼれ出
す……

直接持つ手に触れるが、凍える様に冷たく不気味だ。

小さな箱から溢れんばかりに漏れ出した液体は、床に溜まり……

そしてボコボコと盛り上がると、人の形を成してゆく。

そう、真っ裸な幼女に……

本性を知つていながら、暗闇に浮き出す病的に青白い裸体に目が行
つてしまひ。

その不躾な視線に気付いたのだろうか？

「なんだ？
妾に欲情したのか？
くづくづく……
相手をしてやつても構わんぞ？」

振り向いて、右腕で長い髪をかき上げる仕草は見た目の幼さに反比
例する淫靡さだ。

「いや……

遠慮するよ。

で、どうするんだ?」

首を傾げる仕草は愛らしきのに、背筋には冷や汗が垂れ流れている。

「……一階に死体が有るな。

それなりの霊能力者だな。

先ずはソレを頂くか

天井を見上げながら、とんでもない事をサラリと言つと呟き出す。

その後を二歩離れた位置で着いて行く。

彼女自身が仄かに発光している為に、見失う事は無い。

一階に上ると、廊下に小太りな中年が倒れている。

彼がマンションオーナーから頼まれた同業者か?

恐怖に顔を歪ませて絶命している。

口の周りに黒いヘドロの様な汚れが……

首を搔き落つていて、まるで溺れた様な?

陸で?まさか

「ほつ……

そこそこ力が有るな。

まあ良い、喰らうか……」

呆然と立ち尽くし、考えに耽つていると彼は闇に溶け込む様に床に沈んで行つた。

「うむ。

恐怖に捕らわれて死んだ人間の魂は旨いな。
さて、次は部屋の中か……

行くぞ」

まるで散歩に誘う様な気楽さで、先を促す。

「今は……

溺れている様な死に様だが?」

「ん?

ああ、多分実体化したヤツの体内に取り込まれたかしたんだな。
多分ヤツは水死してるな。
しかも汚い川か沼で……
だからヘドロ塗れなのだろう。
ほら、ヤツもそうだぞ」

「箱」が指差した男は奇妙だった……

痩せこけた男はぐの字に体を折り曲げ、舌を極限に伸ばし死んでいた。

コツチも溺死みたいに口の周りがヘドロだらけだが、首が折れて曲がっている。

失禁したのか股間の辺りが濡れているし……

「ふふふふ。

「コレも皿をうだ。

では頂こうつか」

あんなに汚れている者が皿をう?

彼も体を包む様に黒い液体で取り込んだ。

「さて、前菜は終わりだ。

主菜と行くか。

ん?

ヤツの気配が消えておるな……

ほう、アレが求めた者か。

くたびれた中年女性に固執した結果か。
色欲に塗れた人間の末路は哀れよの。

正明、ヤツは外に出ているぞ。

行くぞ」

独り言を言つてスタスタと歩き出す。

「ちよちよっと待つて!

何を言つてるんだ」

慌て後を追う。

建物から出でゲートに向かい律儀に潜り戸を開けて外に出る。

風が吹いているのにアレの長い髪はなびかない。

そして左右を見ると、またスタッタと歩き出す。

コツチはバレない様に細心の注意をしてるのに、真っ裸で外を歩くな！

潜り戸から左右を見て、人が居ない事を確認する。

アレは口りな少女が手伝つ雑貨屋の前に立っていた……

「人目を考えてくれ。
真っ裸で彷徨くなんて！」

深夜に真っ裸な幼女と一緒に所を見られたら、言い訳出来ないんだぞ！

つて、中で何か騒がしいな。

ガタガタ騒いで……

お店の正面はシャッターしかないが、右脇には木製の扉がある。

此方が玄関扱いなんだろう。

其処から女性が飛び出して來た！

「たつ助けて……
中に、中に娘が……残つてます」

息も絶え絶えに転がり出て來た中年女性。

確か昼間にレジに居た女性だ。

そして玄関扉から室内を覗けば……

ヤツが居た！

初めて見た時よりも酷い有様だが。

首が異様に伸びてダランと右側に傾き、口と胸の辺りをヘドロの様な物でベッタリと汚している。

しかも「箱」が教えてくれた様に、怨霊化してるのか？

咄嗟に愛染明王の印を組み、真言を唱える！

「おん まかりあや ばれり しゅにしゃ ばれり わじば じや
く うん ばん いへ」

真言を唱え、裂帛の気合を奴にぶつける！

今回は効いた？

前は揺らめくだけだが、今回ばぶつ飛ばせた！

しかし、直ぐに立ち上がりてくれるから……

大して効果は無い、か。

「逃げろー。

「……」は食い止める

しゃがみ込んでいた女は、僕が怒鳴るとヨタヨタと遠ざかつて行く

おいおい娘を残してか？

しかし「箱」である真っ裸な幼女は見ていない。

近付いてくるヤツに再度、愛染め明王の真言を叩き付ける為に……

叩き付ける前に真っ裸な幼女が動く！

その魅惑的な唇が、愛らしい顔が顎から後頭部までベロンと捲れ上がる。

当然、顔の皮膚が捲れ上がれば筋肉と骸骨だ！

「ウケケケケエー！」

雄叫びを上げてヤツに貪りついた。

後は捕食するだけ……

人の体をしたモノが、人の成れの果てを貪る。

玄関先で粘着音を響かせ喰らう「箱」を外から見せない為に玄関扉を閉めて施錠する。

既に頭部は喰われ胸の辺りを喰つているのだろう……

右手を突っ込み心臓を取り出して笑っている。

トライアになりそうだ……

食事を楽しむ「箱」を迂回して室内に入る。

裕福では無いのだろう。

質素で昭和の匂いが漂うインテリア。

玄関を入り直ぐ左側が台所、右側が居間でその先は……

おそらく店に繋がっているのだろう。

暖簾越しに商品棚が見えた。

多分突き当たりの左側がバス・トイレで右側が寝室かな……

取り残された口ひつ娘を探そうと奥へと進む。

「お邪魔します……」

一応断りを入れておく。

大人のマナーだ。

居間には居ない。

台所にも居ない。

トイレも風呂場も電気は点いていない。

「寝室かな……

誰か居るかい？」

声を掛けながらドアノブを捻ると、中からガチャガチャと押されて

「誰！ 誰なの？

お母さん、助けて……」

口リツ娘の悲痛な叫びが……

「大丈夫だよ。

僕はお母さんに頼まれて助けに来たんだ。
一応、お坊さんだよ。

安心して開けてくれないかな？」

背後をチラリと見れば、大腸だか小腸だかを引っ張り出している最
中。

これは見せられないよ。

「本当に？

怖いのいないの？」

「ああ、お兄さんが追い払ったよ。

それに僕は前にお店で買い物をしたんだ。

覚えてるかい？

ガムとゴーラを買ったんだけど」

安心させる為に、更に優しい声で話し掛ける。

すると、そつと扉が少し開き中から小さな瞳が覗いてくる。

「あつ！

オジサンだ、オジサン助けて！」

そつ音つい飛び出して来た口づつ娘をガツシリと正面から抱き締める。

顔を胸に埋めて、後頭部を押さえ後ろは見えない様に……

現在の食事状況は、両足を振り回している最中だ。

もう暫く掛かるだろづ、完食までは。

「もう大丈夫だよ。

お兄さんが助けに来たから平氣だ」

ポンポンと背中を叩いて安心させる……

「怖いオジチャン居ない？

汚いオジチャン居ない？」

どつやぢりやつは汚いオジチャンと認識したらしく。

お化けよつマシか？

「勿論追い払つたよ。

もう大丈夫だよ……」

背後から盛大なゲップが聞こえた。

つまり完食だな。

彼女を抱き締めながら振り返れば、捲れ上がった顔を下ろしている
最中だ……

何時見てもキモい。

「箱」は満足したのだろう。

またドロドロに溶けて僕のポケットに流れてくれる。

黒いタールみたいな液体が、足元からポケットまでせり上がつてくれる。

身の毛もよだつ感触を残して「箱」は元に戻った……

しかし、今は口リツ娘のケアが大事だ。

彼女を下ろして台所の椅子に座らせる。

母親が誰か助けを呼びに出て行った筈だからな。

助けが来る前に退散したいが、怖がっている彼女を放置出来ない。

冷蔵庫を開けると、パック牛乳を見つけた。

適当に鍋を漁りガスコンロにかける。

砂糖は……

流し台の上の棚に調味料bōxが有り、塩・砂糖・薄力粉かな？

砂糖を大さじで一杯入れて甘めなホットミルクを作る。

「オジサン、コップこれだよ！」

口リツ娘も大分落ち着いたのか、「コーヒー カップを出してくれた。

「はい、熱いから気を付けて飲むんだよ」

鍋から直接カツプにホットミルクを注ぐ……

湯気をたてたホットミルクは、甘くて美味しそうだ。

出来ればブランデーを数滴垂らしたい。

「オジサン有難う！」

「お兄ちゃんだよ、オーライチャン！」

フウフウ息を吹きかける口リツ娘は聞いていなかつた……

30代はオジサンか？

ガックリとうなだれてしまう。

さて、この後どうするかな？

第25話

建設途中で中止となつたマンションの怪異。

当初は生靈だつたヤツが怨靈化した。

「箱」が言つには生靈だつたヤツが溺死して怨靈化したそうだ。

3階の角部屋にしか現れなかつたのに途中から他の階にも現れ、あまり口りつ娘の家にも現れた。

何故だ？

ヤツは口りつ娘の母親に固執していたのだろう……

確かに3階の角部屋からは、口りつ娘の家が見えた。

靈的ストーカー？

しかし、それなら直接この家に現れるんじゃないかな？

何故、あのマンションだつたんだ？

何故、あの部屋だつたんだ？

「オジサン、絵梨眠くなっちゃつた。
お母さん、何処に行つたのかな？」

不安げに此方を見る口りつ娘。

母親が居なくて知らないお兄さんが居る状況だ。

不安になるのも仕方ないよね。

そうか、彼女はエリちゃんか……

「お母さん、外に人を呼びに行つたからね。
そろそろ戻つて来るんじゃないかな？」

あの中年女性にヤツは襲いかかったのだらう。

怖くて娘を置いて逃げ出したからな……

まあ僕が何とかするひて言つたけどさ。

そもそも誰か連れて来るなり、様子を見に来るよ。

「エリちゃんは、あの汚い人に見覚え有るのかな？」

「うーん……

いきなり台所に居たの。

お母さんが、何か話し掛けたけど。

お母さんに襲い掛かつて。

私は怖くて奥の部屋に行つちやつて……

話し掛けた？

アレの見分けがついたのか、それとも全く分からず普通に不審者として扱つたのか……

暫くはホットミルクを啜る音だけが響いた。

玄関から人の気配がして、扉をそつと開ける音が……

「絵梨？ 絵梨居るの？」

おつかなびっくりな様子で玄関扉を開けて、中を伺う中年女性。

僕が台所を出ると皿があった……

「あつ 貴方……」

絵梨は？

娘は無事なの？

アイツは？」

両手を胸の前で拝むよにして、それでも中には入っこない。

「あつお母さん！
このオジサンが追い払ってくれたんだよ」

子供にとつて母親は絶大だ！

眠そつだつたエリちゃんが、椅子から飛び降りて母親に駆け寄る。

「嗚呼、絵梨……
『めんなさい』

暫し母娘の感動の抱擁を見詰める。

母親に抱き締められて安心したのだろう。

エリちゃんは眠ってしまった……

彼女の髪を優しく撫でている母親は、とても娘を残して逃げ出した様には見えないな。

エリちゃんを奥の寝室の布団に降ろして寝かせている。

「では、僕はこれで……」

「どうやら人は呼ばずに戻つて来たみたいだ。

「確かにお化けがウチに出た、助けて！」

は、田舎な近所付き合いをしていては難しい。

直ぐに変な噂になるだろう……

下手したら村八分だ！

「あつあの？

待つて下さい……

アレは、アレはどうなつたのですか？」

有耶無耶にするには衝撃的な事件だ。

真相を知りたいのか？

逆にコツチが知りたいんだけど……

「申し遅れました。

僕は真言宗の僧侶をしています。

あのマンションを警備している会社から、怪奇現象の調査を依頼されています。

しかし、あの者は此方のお宅に現れた……

何故でしょうか？

ああ、彼は極楽浄土にお送りしました。

死して尚苦しまれていましたから、私が祓いました」

ヤツは極楽浄土なんかには行っていない。

「箱」に喰われたんだ。

未来永劫苦しむだろ？……

「お坊様……

極楽浄土、祓つた……」

へなへなと廊下に座り込んでしまったよ。

アレが居なくなつて安心したからか？

でも誰なんだろう……

彼女の旦那か？

それにしては扱いが酷いな……

「もう夜も遅いですね。

それでは僕は失礼します

「あっあの……

待つて下さー。

私達は、これからどうすれば良いのですか？

私は……

後悔だか恐怖だか分からぬ表情で縋つてくる。

「少し、お話を聞かせて下わー」

これも御仏に仕える義務だのつ。

彼女の話を聞き、気持ちを楽にさせる事にある……

台所で母親と向かい合わせに座る。

少し前はエリちゃんと向かい合つてたのに……

口っこじやない年増と向かい合つてもテンションは上がりない。

わつきはホットミルクを飲んだが、今は日本茶だ。

銘柄は分からないが、余り良い茶葉ではない。

その代わりお茶請けの菓子が出てきた。

ザラメ煎餅にチーズ鮭だ。

お店の商品を直接持つてきましたよー。

「貴女は、かの者が誰か……
ご存知のようですね？」

社交辞令で、お茶を一口啜り聞いてみる。

多分、旦那だろ？……

「彼は……彼は、私の浮氣相手だと思います。
見た目は変わり果てていましたが、私には分かりました」

アレ？ 旦那じゃない？

旦那は入院してた。

だからパジャマだし、病氣だから瘦せこけていたんじゃ？

「旦那さんは見当たりませんが……
別居なやつでいるので？」

入院中なのはHづちゃんから聞いているけどね。

彼女は言い濁んでいる……

浮氣を告白したのに？

「主人は、三浦市民病院に入院しています。元々、体が弱く入退院を繰り返していました娘と2人、この店を守り暮らしていましたが。生活が苦しく駅前のスナックに私は働きに出ました……」

寂しさと生活の苦しさで浮気に走る……

有りがちだが、説得力は有るな。

「そこ」で、彼と知り合ったのですか？」

ホステスと客が不倫したのか……

「はい……

彼は、マンションの建設会社の社員。昼間、良くお店を利用してくれて……それでスナックにいらした時に意気投合しまして、ズルズルと。でも建設が中止となり、暫くは有つていませんでした……」

久し振りに有つたら靈的ストーカーに変貌かよ。

でも切欠はなんだ？

「久し振りに再開して、また関係を持ったと？」

坊主が下世話は話をするのはどうかと思うが……

彼女も直接的な表現に頬を染めてるけど。

「はい。

こんな田舎ですし周りに見られない様に、あのマンションの3階で会つていました……」

アレが3階に固執したのは、逢瀬の場所だからか……

「彼は貴女に執着していました。

最初は生靈として、あのマンションの3階に現れていました。
しかし……

多分、入水自殺をなさつたのでしょうか。
死して尚、貴女の元に現れた。

今度は怨靈として……」

実際「箱」が喰つたが、アレは2人も殺している。

「あのマンションが建設中止となり、彼もリストラに合つたそうです。

暫くたつてから教えて貰いました。

当然お金が無く私にたかる日々……

私も生活が苦しくてスナックに働きに行つてますから。
別れ話になりました」

浮氣相手がヒモへ？

元々生活が苦しいのに、一時の浮氣相手の面倒までは見れないわな

……

「何時から会つてないのですか？」

異変が現れたのは、確か今年に入つてからか？

もう少し前だらうか……

チーズ鱈を一本食べる。

お酒が欲しくなるよね。

「昨年末には別れ話を……」

その後は直接会つてませんが、電話やメールのやり取りは少し不摂生で体調を崩し入院したと聞きました。

暫くして主人も定期検査のレントゲンで肺に影が移り入院してそれで忙しくて、最後の電話がかかつてきた時に……」

そう言つて俯いた。

顔は見えないから表情は分からぬが、小刻みに震えているのは泣いてるのか……

「何か決定的な事を話したのですか？」

彼女は俯いたままだ。

「は……い……」

主人を裏切れないと

もう電話もメールもしないでつて……

それから少し言い合いになり……

貴方なんか嫌いだ、死んでしまえ、と……」

ちょおま、それで入水自殺したんだぞ！

アレは浮氣相手に本気になり、そして振られたのか。

しかも「死んでしまえ」とか言われたら……

病氣で氣落ちしてゐる時に、好きな相手からトドメを刺されたのかよ。

「そうですか……

エリちゃんの為にも、夫婦仲良くしてあげて下さい。

子供には両親が必要です。

彼女は貴女を心配していましたよ。

良く出来た娘さんですか。

彼は残念な結果でしたが、死して安寧になれたのです。

それを忘れずに、成仏を祈つてあげて下さい」

これで事件は、僕的には解決だ。

後は社会的に纏める事なんだけど……

「彼の魂は救われました……

しかし入水自殺をされている筈です。

もしかしたら遺書が有るかもしません。

しかし……

思い人にこつぴどく振られた上に怨靈になつた。

などと広まれば、彼は成仏し切れないのでしょう。

僕が祓つた事、この家に現れた事は秘密にしてあげて下さい。

私も警備会社の方には、何も無かつたと報告します

社会的醜聞は避けたいだろうし、折角旦那と寄りを戻したんだ。

今更浮氣相手の事など知られたくないだろ？……

何度も頭を下げる彼女に

「それでは、失礼します」

と言つて、今度こそ帰らしてもらひ。

後味の悪い事件だった。

浮氣相手は自殺、マンションオーナーが頼んだ靈能力者は行方不明。

死体は「箱」が食つたから、殺人としての立件は不可能だ。

ゲートの前の車は、不法車両として問題になるだろ？

依頼者としてマンションオーナーは事情聴取か？

僕もバレない様に帰らなければならぬ。

既に時刻は4時ちょっと前……

幾ら田舎の朝は早いとは言え、まだ周りは寝ている時間帯。

なるべく県道を通らず、コンビニ等のカメラの有る場所は避けて帰らなければ……

幸いバイクだし、農道を通りて遠回りして帰ろ？

帰宅ルートを予測しながらバイクのキーを回した……

あれから一週間……

警察からの問い合わせは無い。

結果を知るのは僕だけだが、対外的にアフターをしているのを理由に現地に向かっている。

出来れば口りつ娘に会いたいが、何か言い触らされたら厄介だから会わない。

ノンビリと電車とバスを乗り継いで、問題のマンションに到着した。ゲートの前に立ち建物を見上げるが、相変わらずくすんだコンクリートの外壁。

剥がれた立入禁止の黄色いテープ。

唯一変わっているのは張り紙がある事だ。

解体計画のお知らせ……

もはや日々付きの物件は、更地にしてから計画し直しなのか？

一応現場を一周し付近を確認するが、警備員が居なくなつた一週間

で落書きが増えたくらいか……

遠田で例の雑貨屋を見れば、中年の男性が店の前を掃き清めている。

旦那さん、退院したんだな……

さて、これから長瀬社長に報告と請求書を提出しに行くかな。

大した結果を残さなかつたから、請求額は15万円。

実質昼間の調査1日、夜間巡回が2日だからね。

途中、桜岡さんと合流する予定だ。

一応、彼女も1日夜間にヤツと戦つたから……

もうヤツは居ないから、この先怪異が収束すれば彼女の活躍でも構わないだろう。

「なに、黄昏てるのよ？」

「うわー！」

脅かすなよ、桜岡さん

いきなり声を掛けて背中を叩いた本人が笑っていた……

アフターで一週間。

特にあの晩から連絡も問題も無いみたいだわ。

今日、長瀬社長に報告と請求書を渡しに行くのに同行する約束をした。

でも、その前に一応現場を確認しておくつて……

1人で行くつて言つたけど気になるわ。

だから先回りして現地を確認したの。

待ち合わせの時間から逆算すれば、何時に現場に行くのか大体分かるから……

彼が来る予定時刻より一時間は早く現地に来て、建物周辺を見回る。

長瀬綜合警備保障は、もう警備をしていないから中には入れない。

それに榎本さんからも単独行動を止められているし……

お父様みたいに過保護な人。

前に来た時に寄った雑貨屋さんが営業しているわね。

一応聞いてみよつかしら?

「 」さんにはひば……

あい、お手伝いかしら?」

前に来た時は母親?

かしら中年の女性だつたのに、今日は可愛い店員さんね。

「 いらっしゃいませ」

ハキハキと笑顔で応えてくれたわ。

何か良い事が有つたのかしらね?

第26話

榎本さんの事だから、また独りで何かしてそつだから早めに現場に来る事にしたわ。

待ち合わせの時間から逆算すれば、現地を確認しに来る時間も分かるから。

少し早めに来て周りを見回り、あの雑貨屋に入った。

前は中年の女性だったけれど、今回は可愛い店員さんだった。

小学生くらいだけど、何か知っているか聞いているかもしれない。

えーと、榎本さん曰わく余話を繋げるには……

何でも良いから何か買つて、余話を繋げるって言つたわね。

でも雑貨屋さんなんて、私来たの2回目よ。

何を買つて良いのか……

商品棚を見渡せば、洗剤やら鍋やら食器やら。

統一感が無いから雑貨なのね……

暫く店内を見回してから、結局はキシリートールガムとポケットティッシュを持ってレジへ。

商品をレジ台へ置く。

「あつがとうござりますー。」

彼女は商品を手に取ると、今時珍しい手打ちのレジを器用に操作して

「三八〇円です」

と言われたので、カードは使えないことから五百円で4枚手渡す。

「400円のあずかり……

20円のお返しです」

テキパキとお釣りを渡し、レジ袋へ商品を入れ様としているから

「そのまま良いわ

そつとつて、そのまま商品を受け取る。

彼女に聞いても分からなにかもしないけど、一応ね。

最近、何か変わった事はなかつたかしら?」

少し屈んで、目線を近付けて話し掛ける。

勿論、笑顔ですよ。

「んー、お母さん元気になつた!」

お父さんも退院したの。

汚くて変なオジチャンをおつきいオジサンがはらひてくれたんだって。

お母さんが言つてた。

あつ！

内緒つて言われてたんだ。

お姉ちゃん、お願ひ。

今のは内緒ね

エヘヘつて舌を出して笑つてるけど……

汚くて変なオジチャン？

おつきいオジサン？

最近見たフレーズよね……

あの生靈と筋肉馬鹿な男の顔を思い浮かべる。

「分かつたわ。

内緒ね！

でも、もう少し教えて。

おつきいオジサンつて誰かしら？」

ん一つと悩む格好をしたが、所詮は子供。

誰にも言わないわつて約束したら、教えてくれたわ。

「あのね。

夜に台所に、いきなり汚くて変なオジチャンが居たの。

お母さんに襲いかかって、私は部屋に逃げ出したんだ。

そうしたら、おつきいオジサンが助けてくれたの。

後からお母さんに聞いたら、汚くて変なオジチャンを成仏させてくれたから安心なんだって！

お母さん、喜んでた。

あのおつきいオジサンはお坊さんだって

成仏？

それって靈障なの？

「あつこじらしさいませ」

新しいお客が来たのを機に会話が途絶えた。

入って来たのは3人連れの主婦連中。

私をチラ見するけど、特に反応も無く騒がしく商品を見ていの……

私はレジから少し離れて、商品を見る振りをしながら考える。

心霊現象の起るマンションの近くの雑貨屋で、こじらじも心霊現象？

こんな子供が成仏なんて言葉は分からぬわよね？

だから母親から聞いた事を覚えてる……

どう言ひ事かしら？

それにお坊さんって？

おつきいオジサンでお坊さんって、彼しか居ないじゃない。

あの野郎、私には単独行動はするなどと言つておいて……

自分はヤツを何とかしたって事なのかしら?

もう少し情報が欲しいわ。

暫く考え事をしていると、店内が騒がしいのに気が付いたのか母親が現れた。

「こりゃしゃいませ。

あら……」

私は気付き会釈をして、後から来た主婦達の商品を処理していく。

五月蠅い主婦達が帰った後、今度は母親に話し掛ける。

「ほんにちは」

前に見た時は化粧をして見栄えを気にしていたみたいだったのに、今日はスッピンね。

でも表情が軟らかくなっているわ。

「こりゃしゃいませ。

今日はお連れの方はいらしてないのですか?
改めてお礼を言いたいのですが……」

お礼？ビンゴだ！

あの脳筋野郎、独りで解決したんだわ。

カマを掛けでみましょ。

「今日は彼に頼まれて、貴女の方の様子を見に来ましたわ。何かお変わりはないですか？」

私も知つてます的に話し掛ける。

彼女は、娘を気にしたのか

「絵梨、お店の番はもう良いわ。中で休んでなさい」

「はーい！

お姉さん、バイバイ」

元気の中に走つて行く……

そんな娘を優しく見詰めている。

母親の顔だわ。

「お坊様の言われた通り、あの人は自殺していました。

鎌倉湖で……

共通の知人に確認しましたので、間違いありません。でも私を怨み自殺をしたのに、成仏させて頂き気持ちの整理もつきました。

主人と娘の為に、これからは生きていきます……

そう深々と頭を下げる。

自殺？恨み？成仏？

それに、これからは主人と娘の為に生きていきます……

端から見ても、コレって万事解決ですわよね。

「分かりました。
伝えておきますわ」

もう裏も取れたから、ここに面る必要は無いわ。

あの脳筋野郎を捕まえて、キリキリ白状させるだけなの……

会釈をして店を出る。

見渡しても、まだ来てないわね……

あの電柱の影で暫く待とうかしら？

暫く待つと、独自な体型の男が左右を見ながら歩いて来る。

来たわね！

マンションの外周を見回り、雑貨屋を気にしているわね。

あら、ご主人かしら？

店の前を掃除していらっしゃるのは……

そう言えば、退院したって言っていたわね。

雑貨屋に行へのかと思つたら、マンションを見上げながら黄面てるわー！

攻めるなら今よね……

音を立てない様に彼に近付いて、私の苛立ちを込めながらバシンと肩を叩く！

私の手が痛いわ、この筋肉、ゴコラ！

「なに、黄面てるのよ？」

「うわー！

脅かすなよ、桜岡さん！」

榎本さんは笑顔で振り向いた。

そりゃね。

貴方が独りで解決したんですもの、笑顔も零れますわよね！

そして、どうやら叩いたダメージは無いのね……

「それで、見回つてどうでした？
何か問題が有りましたかしら？」

ニッコリ笑顔で聞いてあげるわ。

私、実情は知ってるのよ？

彼は暫く考えてから

「特に変化無しだね……

あの後、靈障も収まってるみたいだし。
でも警備員の連中も見たから、まだ居るかもね。
しかし建物の取り壊しは決まったみたいだ。
取り憑く建物が無くなれば、収まるかも知れないね……」

なに自分は何もしてませんってシラをきるの？

貴方が解決したのに……

「ふーん、ふーん、ふーん……」

彼の周りをクルクルと回る。

「なつなんだい？」

私の拳動不審さに、引き気味ね。

ならばヒントを上げますわ。

「あの生靈……

怨靈化したわよね?

そして雑貨屋さんに現れた……

何故、成仏させたのに秘密にするのかしら?」

流石にビックリした表情をしたわ!

何時もの保護者面じやないのが、快感ね……

「何故、おつきいオジサンが助けたのかしら?
ねぇ、オジサン」

かなり慌てているわね!

もう状況証拠もバツチリだわ。

「その辺を少し話し合いましょうか?

長瀬さんに会う前に。

此処じゃなんですから、駅前に戻つて喫茶店にでも入りましょう!…

…

彼の太い腕をガツシリと掴んで、そう脅した。

「なつ?

分かつた、分かりました!
だから手を離して……」

見た目と違ひウブなのよね、この筋肉「ココロ」は。

「逃げるから駄目よ！
捕まえてなくちゃ……
わあキリキリと歩きなさいな」

端から見れば年の瀬カツプルかしら？

でも榎本さん30前半らしいし、私が25歳だから普通よね。

京急二浦海岸駅。

駅名の如く、海水浴場の二浦海岸に近い駅。

駅前には海の家みたいなお店が並んでいたり、コンビニや本屋が有つたりと混在した感じの商店街ね。

今回の件で初めて利用した駅……

駅前バスターミナルの外れに、場違いな本格的珈琲を飲ませてくれる喫茶店がある。

當時300種類の珈琲豆があるのが自慢らしい。

しかし、店名はポエム……

似合わないわよね？

店内に入りボックス席に案内される。

実は珈琲つて苦手。

だつて酸味と苦味が……

あら、でもケー キは美味しそうね。

桜と小豆のシフォンケー キか……

「私はオリジナルブレンド珈琲と、この桜と小豆のシフォンケー キにするわ」

「僕はアイスコーヒー。

甘さは普通で」

かしこまつました、と店員さんがカウンターの中に入つて行く。

「ねえ？

アイスコーヒーだけ甘さを言つてたけど何故？」

ガムシロップ無いのかしら？

「ああ、この店はね。

珈琲に拘りが有るから、客が勝手にガムシロップで薄めない様に店側で入れるんだよ」

なんて、常連振りね。

似合わないわよ、貴方に珈琲は……

どうやらかと言えば、日本酒や焼酎よね。

「良く来るの?」

「いや、最近初めて来てね。

同じ事を言られた。

この珈琲は変な酸味が無くて飲みやすい。

もつとも珈琲通じやないから、良く分からぬけどさ

頭を搔いて笑つてると、クマさんね……

何で会話をしていると先に私の珈琲とケーキが来た。

暫くして彼のアイスコーヒーも来たわ。

「いただきます……

このシフォンケーキ、美味しいわ。

少し食べるかしら?」

少しならあげても良いわよ。

「いえ、「遠慮致します」

即答したわね……

「そう?

じゃ話して下さらない?

私に内緒の行動を……」

少し語尾がキツくなるのは仕方ないわよね。

だつて黙つて独りで解決したのですから。

「うん……

何て言うか気になつたんで、夜に再度來たんだ。
暫く様子を見てたら、あの雑貨屋の女性が玄関から飛び出して來た。
慌てて行けば、最初に見たヤツと分からぬ程に変貌したヤツが居
た。

いや最初は別物かと思つたよ。

でもパジャマは一緒だし、痩せこけた顔も似ていたんだ……」

ふーん、何故夜中に独りで?

「それで、怨霊化したのが分かつたのは何故かしら?
見た目だけじゃ分からぬ筈よ……」

ストローを使わずにアイスコーヒーを飲むのね。

手の平が大きいからかしら、グラスが小さく見える。

「咄嗟に唱えた愛染明王の真言が聞いたんだよ。

だから生靈では無いと思ったんだ。

死者は、その直前の姿形で現れる事がある。

溺死体の様に舌をダランとして体をヘドロで汚していたんだよ」

なる程ね……

見た目の変化と真言の効き具合で判断した。

そして即、除霊出来る能力が有るのね。

やはり経験が段違い、か……

「分かりましたわ。
じゃ最後の質問よ。

何故、自分が祓つたつて言わないの?
これは大変な事の筈よね。
何故、秘密にするの?」

何故かしら?

凄く苦惱した表情を……

嫌だわ、何でそんなに辛い顔をするの?

「今回の件は、調査で打ち切り。
長瀬社長とは契約していない。

そして、あの雑貨屋の人達からも頼まれてないんだ。
全くの偶然だからね。

そして除霊後に話を聞いたんだ……」

つまり、この事件の原因の事よね。

それが、そんなに辛いの?

「それは、この件の真相ですわよね?」

「そうだよ。

ヤツは、あの奥さんの浮気相手だ。

旦那が病弱、お店は繁盛せず彼女は夜にスナックで働いていた。魔が差したんだろう。

客で有るヤツと不倫。

しかしヤツは……

金に困り、彼女にたかり始めたので破局。

ヤツは不摂生が祟り入院……

この時点が生靈だ。

そして逢瀬の場所だった、マンションの3階の角部屋に現れていた

だから、あの時は3階にしか現れなかつたのね。

「だが、彼女は余りに粘着質なヤツに決定的な言葉を吐いた……

ヤツは絶望し自殺した。

そして固執していた彼女の元へ。

これが真相だよ」

「そうだったの……

でも、それなら彼女にも責任が……」

手を振つて私の言葉を遮る。

「それを騒いでも誰も幸せになれない。
浮気がバレて、相手は自殺。

旦那が退院してこれからつて時に、波風を立てる必要は無いんだ

それっきり、辛い表情のまま黙つてしまつたわ。

人を世間知らずとか散々言うのに、自分は底抜けの善人じゃない！

自分の実績や手柄よりも、あの家庭の幸せを壊したく無いのね……

全く、顔に似合わない事しかしないんだから。

それが良い所よ……

「でも、貴方の実績や手柄でしょ？
せめて長瀬社長には、お話したらどうかしら？」

首を振つて否定か……

「いや、それも出来ない。
噂なんて、どこから漏れるか分からぬ。
だから内緒にして欲しい」

「ひこんな所で頭を下げたら駄目よ。」

「立つて、立つて、立つて私達！」

「あら見て！」

彼氏の浮氣を問い合わせる彼女かしら？」

「修羅場か！」

「まあ筋肉ゴリラが美人を捕まえるからだ」

「あらやだわ。」

「男に頭を下げるなんて……
何処の女王様かしら？」

結構人気の喫茶店なのだろう。

席を八割ほど埋めているお客様が、此方をみながらヒソヒソと囁きだした……

「分かりましたわ。
分かりましたから!
頭を上げて下さいな。
私も内緒にしますから……」

漸く頭を上げてくれたけど、周りのお客様さんは盛り上がってるわよ。

「ふつ浮氣がバレたのを黙つてゐるッセー。」

「何だよ、惚氣かよ。
人前で良くやるな」

もつ恥ずかしくて、お店に居られない。

「でも、貸し一つ。
もうお店を出ますわよ。
」「は払こますから、貸し一つですかねー。」

こんなに恥ずかしい思いをさせたんですから、貸しですかね。

伝票を持つて立ち上がる私を慌てて追いかけてきたわ。

「の貸し一つ……

何で返して貰おつかしきへ

といても楽しみねー

登場人物（前書き）

登場人物を纏めてみました。

次は小道具を。

今日は本編更新は有りません。

明日から幕間を挟み新章に入ります。

ストック尽きたので、この土日でどれだけ書けるか……

登場人物

えのもと まさあき
榎本正明

榎本心靈調査事務所所長

過去にダムに沈んだ、高知県長岡郡本山町に有つた西院王寺の跡取り息子。

僧侶の資格を持つが、寺は湖の底に沈んでいる為、現在は在家僧侶の扱い。

代替で別の土地に寺を移設したが、とある呪いにより祖父と両親は死亡。

移転保障により国から多額の金銭を受け取っている事や祖父と両親の生命保険。

また代替に貰つた寺も土地も手放した為に、貯金は相当額有り生活に困る事はない。

真言宗の傍系で愛染明王の真言を得意とする。

僧階は「12級 権小僧都」

独身 身長185cm体重85kgマジチョメンであり短髪、残念ながら美形ではない。

ドが付くスケベで有るが、これは愛染明王の教えを曲解している為

に平然とムツツリスケベ道を進む。

「煩惱と愛欲は人間の本能でありこれを断ずることは出来ない。本能そのものを向上心に変換して仏道を歩ませる」

この功德を元に、僅かながらの靈能力と愛染明王の力を使える。

真言は「おん まからぎや ぱぞり しゅにしゃ ぱわいり たじば
じやく うん ばん いへ」

印は両手の親指を交差させ人差し指を離し、中指を手の中に折った形で交差させる。

最後に薬指を立てた状態で合わせるが小指は合わせず離す。

さざなみ
細波結衣

愛知県の寒村の出身。

黒髪のショートカットで小柄な体型、貧乳です。

訳有つて同棲（同居）している元狐憑きの家系のロリッ子。

実の母親と、その交際相手の男達に小さい頃から虐待を受けていた。

両手と太股には、その時の自傷が残っている。

榎本の事は、恩人且つ頼りになるお兄さんと思つてゐるが、実は妄想のオカズにされている。

小さい頃から家事をやらされていたので、家事全般に料理は普通にこなす。

お茶に拘りがあり、お米が大好き。

物怖じする性格だが、頑固な面を持つ。

長瀬亮太郎
ながせ りょうたろう

お得意様その1

長瀬総合警備保障？ 代表取締役社長

社員数60人のビルの常駐警備を専門に請け負う。

中小企業故に、大手が避ける事故物件でも請けねばならず、榎本に物件の靈視を頼む。

ダンディな45歳 8歳下の奥さんと13歳の娘を持つ。

心霊現象については、実体験が有るので信じている。

山崎聖一
やまざき せいじ

お得意様その2

?山崎不動産 代表取締役社長

社員数は営業を含めて8人、主に横須賀・横浜市内の物件を扱う地域密着型不動産屋。

ツルツパゲな60歳 独身 会社の事務員を愛人として雇っている。

榎本の工口師匠であり、横浜のヘルス・川崎のソープでは有名人。

心靈現象については、実体験が有るので信じている。

坂崎 健二
さかざき けんじ

長瀬綜合警備保障の社員

ガタイも良くタフなので、心靈物件担当にされている哀れな男。

ガテン系26歳 独身 恋人無し期間＝年齢。

年上好みのオバちゃん好きな変態。

飯島 弘子
いいじま ひろこ

山崎の愛人であり山崎不動産の社員。

工口いお姉さま系29歳 山崎の他にも複数と愛人契約をしている。

Eカップの巨乳の持ち主だが、榎本の見立てでは色情靈が付いている。

桜岡霞
さくらおか かすみ

現在売出し中の霊能力者。

実力は本物だし、彼女の美貌もありテレビの心霊特番とかに出演もしている。

しかし、ヤラセや演出重視の傾向に嫌気がさしている。

腰まで届く黒髪に中々の巨乳を持つ。

靈障に困っている人々を助けたいと思い、知り合いの紹介で比較的靈障の多い不動産業界に紹介を頼んだ。

残念な所は、お嬢様なので金銭面に関しては大らかな事。

お洒落な外観、オヤジな中身な事。

その姿では信じられない大食漢。

ちゃんとした修練を積んでおり、除霊スタイルは梓巫女の流れを汲んでいる。

梓』を鳴らしながら呪文を唱え神懸かりを行い生霊や死霊を呼び出し（口寄せ）、その靈に仮託して託宣や呪術を行う。

薊菊里
あさみ きくり

桜岡除霊事務所のバイトA。

現役女子高生であり、靈の遠い親戚でもある。

バイトをしたくても校則が厳しく、親戚のお姉さんの仕事を手伝つ
事にした強かさんである。

特技は茶道・華道といつ古風な一面を持つ。

小柄で両肩の所で切りそろえた黒髪を持つ。

田鶴更紗

たづる さらさ

桜岡除霊事務所のバイトB。

菊里とは、ネットゲームのオフ会で知り合つた。

趣味で小物を集めているが、趣味は悪い。

茶髪のショート、今時の女子高生。

「箱」(はこ)

榎本一族に祟る呪いの元凶。

対象者の求める姿形に似せて現れる。

父親は色っぽいネーチャン、爺さんには若い頃に無くなつた妻。

主人公の前には日本人形の様な全裸の幼女姿で現れる。

一族直系の男子に取り憑き、殺す……

小道具

スクーター

YAMAHA ビーノモルフェ

2009年モデル

グレーアッシュクリーンソリッド3

前面の大型バスケット・フロントにコンビニフックやペットボトルが入るポケットがある、収納上手なスクーター。

G-LOGOといって鍵穴に蓋をする機能があり、盗難防止に一役かっている。

本体重量84kg

燃費は1L当たり66km しかし1H当たり30kmの速度なので実際に街乗りで使うと1L当たり50km程度。

4・5Lの燃料タンクだから、まあ200km走つたら給油している。

小道具運搬に便利な相棒です。

車

日産 キューブ

特殊警棒

3段伸縮式、メーカーに拘り無し。

発炎筒

サンフレイバー

燃焼時間は5分程度 160カンデラ以上の照度がある。

1本500円程度の使い捨て。

車に必ず1本付いているアレ。

船舶用発炎筒は400カンデラ以上だが燃焼時間は1分程度。

ケミカルライト

シウウ酸ジフェニルと過酸化水素との混合溶液の科学発光により蛍光を放つ。

ステックタイプで折つて内部のアンプルを割つて使用する。

1本200円程度の使い捨て。

夜店やコンサート会場で売っている玩具の光量を多めにした物。

LEDランタン

GENTOS製 エクスプローラー・プロ EX-777XP

280ルーメンの明るさがありながら、3000円前後という手頃
れ。

フックも付属されているので吊るしても置いても良し。

本体の中に札を仕込む事により気持ち耐震力効果有り?

折りたたみ自転車

doppelganger (ドッペルギャンガー) 製

LPI-10 primo

メーカーに拘りなし。

行きつけのアウトレットモールのアウトドアショップの現品限りを
1万円で購入。

マグライト

MAGLITE マグライト D·CELL4

世界中の警察・消防・軍隊で幅広く使われている。

基本色はブラック、全長435mm ワイドとスポットの切り替え可能。

強度が有り最悪は棍棒として使用経験有り。

小道具（後書き）

明日から幕間で主人公の過去と「箱」との関連を書いていきます。

今日は登場人物と小道具だけですみません。

幕間1（前書き）

何時も私の拙い小説を読んで頂き、有難う御座います。

今回は主人公の過去の話です。

幕間として一話程続きます。

ストック切れの為、もう何話か掲載したら掲載頻度は週二程度になると思います。

呪われた「箱」

僕の生家は、本州の山間部の小さな集落に有つた。

有つたと言うのは、今は人造湖に沈んでいる。

ダム建設の際に、3つの村と1つの町が対象となり移転させられた。ウチの寺が有つた村も例外でなく、檀家衆が居なくなれば経営は成り立たない。

国が用意してくれた場所に墓所を移し寺を建てた……

僕の家系は呪われていると言うか、百年単位で一族の男子を残し早死にすると言い伝えがある。

遡れば江戸初期まで記録が有るのだが、確かに直系の男子以外が10人単位で一年以内に亡くなつた事が2回もある。

病氣・事故・自殺・他殺……

兎に角、何らかの理由でバタバタと一族が減り、そして増えると死んでゆく。

理由は分からなかつた。

爺さんも親父も知らなかつた。

そして前回から約百年が経っていた。

僕の世代で悲劇が起るのかとも考えたが、予兆も前触れも何も無い。

僕自身も家族も、特に気にしてはいなかつた……

「爺さん！

檀家衆からも言われたけど、寺の移築に反対なのか？
でも町長が許可しちゃつたし、檀家衆も引っ越しすんだろ？」

小さな山間部の村に降つて湧いたダム建設の話。

都市部の水瓶として田を付けられたのが、此処だ。

「ああ、正明か……

儂は反対だな。

ご先祖様から祭つてあるお社は、言い伝えで決して開けてはならないと言われている。

移築など問題外だろ！」

呑気に和室でお茶など飲んでる現榎本家当主で、この寺の住職たる爺さん。

もう七十歳を越えているが、元気はつらつた糞ジジイだ。

「父さん。

町長からも言われたが、もう無理だ。

国の方針としてのダム建設、町長も認めちました。

保障も十分だし、檀家衆も引っ越しすんだ。

新しい土地でやり直すしかあるまい。

それに移転先の寺は既に建設中なんだぞ」

補助金やら補償金やらが高額だった為か、とんとん拍子に移転計画は進んでいる。

今更口ねるのは厳しい状況だった。

「そうですよ、お父さん。

此処に残るのは無理ですわ。

新しい土地で頑張りましょう」

僕の両親も爺さんの説得をする。

両親はダム建設に賛成だ。

こんな山間部の田舎よりも代替地に指定された場所は、遙かに便が良く都市部に近い。

特に結婚してから此処に来た母さんにとって、都会に近付くダム建設は嬉しかったのだろう。

寺に嫁ぐと言う事は寺に近くす意味で、嫁は大黒様と呼ばれ大変忙

しい。

元はO-Sで有り都會育ちの母親にとつて、田舎独特の因習とか馴染むのに大変だつた。

気晴らしに出掛けたくても、こんな便の悪い山間部の田舎では出掛けるだけでも大変だ。

しかし新しく寺を建てる場所は、バスで一時間で都心部に出れる。

内緒だが、母さんは凄く楽しみにしていた。

「しかし……

お前達も知つてゐるだらう?

我が家の人わくを……

アレには、お社が関係してると思つんだ。

昔は氣にしてなかつた。

しかし、ダム建設の話が出てから特に思つよくなつたんだが……」

一族が直系跡継ぎを残して死に絶える。

そんな馬鹿な話はないだらう?……

ダム建設開始まで2ヶ月と少し。

引っ越しまでは1ヶ月と少ししかない。

爺さんの説得には時間が掛かるだらう。

心の隅では心配し過ぎだ。

科学が発達した現代で、連綿と続く呪いなんてナンセンスだと思つていたんだ……

しかし、問題の呪いは発動した。

ウチの直系は爺さん・両親と僕だけ……

その晩、母さんが突然息を引き取つた。

原因は不明。

朝、親父が隣で寝ている母親を起こしそうとしたら死んでいた。

死に顔は、凄く怯え歪んでいたんだ。

隣で寝ていた親父が気が付かないのが不思議な位、首を搔き鳴り苦しんでいた。

状況が状況だ……

不審死として警察が司法解剖をしたが、原因は全く分からなかつた。

薬物反応もアレルギー反応も無いし持病も無い。

突然、首を搔き鳴り苦しんで死ぬ。

そんな病状だつて聞いた事もないのだから……

母親の葬儀はしめやかに執り行われ、母さんの墓は移転先の墓地に

埋葬された……

原因不明の母さんの死。

でも僕らは未だコレが一族に掛かっている呪いとは思わなかつた。

いや思いたく無かつた。

しかし……

母さんの葬儀が終わり暫くしてから、今度は父さんの様子が変わつてきた。

何時もは普段と変わらないが、少しづつ瘦せて……

いや^{ひさ}寝れてきたのだ。

食事は僕が作り同じ物を二食と一緒に食べている。

寺の仕事は大変だ……

朝早く起きて掃除とお勤め・昼間は寺の仕事・夜も掃除とお勤め。

大体が掃除に費やしているが、寝れる程の過酷さではない。

朝が早い分、寝るのも早いから健康的は筈なんだ。

病気かと思い、無理矢理都市部の大病院で精密検査をしたけど……

特に問題は無かつた。

精神的なものでは？

とも疑つたが、毎日接している僕達が気が付かない筈もないだろう
……

しかし検査結果の中で気になるのは、内分泌系や免疫機能の低下だ。
いわゆる腎虚の症状なのだが、気を付けなければならぬ程でもない。
いわゆる腎虚の症状なのだが、気を付けなければならぬ程でもない。

年齢からくる老化現象と言われる範疇だ。

打つ手も無く日々を過ごしていたが、母さんが亡くなつて丁度1ヶ月後。

何の前触れも無く、親父が亡くなつた……

冷たい雨が降る冬の朝、社の鍵が開いており中で亡くなつていた。

親父は半裸の状態で、母さんと同じ様に恐怖に顔を歪にしていた。

両の目を見開き、社の奥を向いて壁に寄りかかっていた。

発見したのは爺さんだが僕も呼ばれ、初めて社の中に入った。

驚いた事に社の中にはもう一つ社があり、それは厳重に御札で護られている。

周りには昔から置いて有るのか、木箱やら訳の分からぬ祭事具な

どが乱雑に積まれていた……

爺さんと一人で親父を外に運び出し、救急車を呼んだ。

救急車が来ても、既に死んでいたので警察も呼ばれた。

1ヶ月おきに一人も亡くなつたのだ。

噂が広まるのは止められないだろ？……

親父の死因は不明。

心臓発作と思われるが司法解剖の結果も曖昧だつたが、自殺も他殺も考えられず事故死扱いとなつた。

流石に立て続けに夫婦が同じ日に亡くなつたのだ。

色々な酷い噂が、村中を飛び交つた。

次は僕か爺さんだろ？……

直系の跡継ぎが残ると言つが、次期当主の親父は死んだんだ。

次は僕が死なないとは限らない。

親父の葬儀の後、急に怖くなつた僕は爺さんの書斎に入り漫り昔の記録や資料を漁つた。

しかし今まで歴代の祖先も調べたんだろう。

大した事は分からなかつた……

後は、あの社しか調べる物は無い。

爺さんの目を盗み、社の中を調べる事にした。

あの中には色々な物が乱雑に置いてあつたが、木箱の中には書籍の
様な物も有つた筈だから……

その晩、爺さんが眠つた頃を見計らい社に向かう。

扉の鍵は、親父が侵入する時に壊したのだらう。

多少の音は立てたが、すんなりと中に入れた。

懐中電灯を照らし、中を見回す。

不気味な社の中に有る、もう一つの社。

これが本命で周りは人除けに作られたのだろうか？

幾ら爺さんの目を盗むとはいえ、深夜に中に独りで居るのは怖い。

しかし死ぬよりはマシだ！

周りを調べると二つの木箱が有り、片方には書籍が入つてゐる。

もう片方は、何やら着物の様な布切れが……

書籍の束を漁ると、全く古文みたいで読めない物ばかりだ。

諦めかけていた時に、一冊の本が見付かった！

開かずの社の筈だが、他の本と比べると最近の……

多分、前回の生き残りのご先祖様の書いたらしき本が見付かった。

その中で興味深い記録を見つけ出した。

記録と言うが日記だ。

榎本朝吉と言う、前回の惨劇の生き残りのご先祖様だ。

今朝、我妻が見事に喉を突き通し本懐を遂げる。

これで我が一族の生き残りは私ただ一人。

息子は一人居たが先に長男が服毒自殺を遂げ、次いで次男が割腹自殺を遂げた。

我が家にかけられた呪いは、直系跡継ぎ一人を残し全て死に絶える。

本来なら長男が残るべきだが、あれは最初に長男に取り憑いた。

耐えきれずに自殺。

続いて次男に取り憑き、やはり自殺に追い込んだ。

あれは、自身の願望を反映した姿形で現れる。

そして取り殺すのだ。

我が妻は直系の血を繼ぎ、私は分家筋だつた。

だから私を生き残す為に、自らの命を絶つたのだ。

榎本家最後の1人となつた私の前に、あれは現れた……

我が妻の姿形を真似て、私の前に現れた。

「お前達一族の義務を果たせ……」

たつた一言……

そう言い残し、私の前から消えた。

その意味は未だ解らず、この呪いを子孫に継承する事が心残りである。

……つまり呪いの原因は不明だが、あれなる何かに取り殺されるらしい。

しかも回避するには、義務を果たさねばならない。

しかしそ先祖も、その義務が何だか分からぬ、

直接聞くにも、あれが現れるのは最後の1人になつてからだ……

生き残りは、僕と爺さんの2人だけ。

結局、最後の希望に縋る様に社に侵入したが……

何も分からぬと同じ事だつた。

簡単に片付けをして母屋に戻ると、縁側に爺さんが灯りも点けずに座つていた……

「爺さん……何で……」

思わず話し掛ける。

「正明、馬鹿孫が！」

社には立ち入るなと言つた筈だぞ

「しかし、親父も母さんも死んだんだぞ！

生き残りは僕と爺さんの二人きりだ。

何か、何か原因が分かればと思って」

この数日間の焦りや恐怖をぶつける様に、爺さんに詰め寄る。

もう呪いが確実に我が一族に降り掛かっているのは間違ひ無いんだ。

残された時間は、もう少ない……

「正明……

まあ座れ。

あれ、な……

儂の所に現れたよ。

若い頃の婆さんの姿形でな……
夢枕に立ちあつた」

爺さんは静かに語り始めた……

「アレつて？

まさか……」

「我が一族に取り憑いたアレは強力だぞ。
儂の法力が全く効かんかった……
だが、僅かな遣り取りで分かつた事がある。
アレは我が一族を根絶やしには出来ない。
我々に何かをさせないと、アレは困るんだろうな。
だが、我々はそれが何か知らない。
だから……

罰のつもりで一族を殺すんだ！」

なつ！

そんな傲慢な考え方で、僕らは虐殺されてきたのか？

「それで……

爺さんは聞いたのか？

アレが求める何かを！

僕らに何をさせたいかを！

爺さんは、力なく首を振った……

「いや……

聞いたが、薄ら笑いをして消えおつたよ。

儂にも全く分からん。

だが1人は残るのは確かだな。

正明、お前が生き残れ！」

そう言って、自室へと戻つて行つた。

その後姿は寂しげで、僕は声を掛けられなかつたんだ……

翌朝から僕の生活は激変した！

爺さんから厳しい修行を受ける事になつたのだ。

今までの読経と違い、靈を祓う仕方をだ。

普段唱えるお経とは全然違う、死者を安らかに極楽浄土を送る為でなく、魔を祓う真言を教えられた。

親父と違ひ僕には靈能力と言つ物が有るらしい……

爺さんは自分が死ぬ前に、僕に何らかの自衛策を持たせたかったんだろう。

その気持ちが伝わったからこそ、短期で厳しい修行に耐える事が出来た。

僅か一週間だったが、基礎としてなら合格点だそうだ……

「良く頑張ったな正明。

これで靈能力の基礎は身についただろう。

明日からは応用編だ」

修行中は厳しく讃め言葉など聞いた事は無かったから、この一言は嬉しかつた……

榎本一族に代々伝わる呪い……

直系後継ぎを残して、一族が死に絶える呪いだ！

この平成の時代に何を馬鹿な事をと思った。

しかし呪いは実在し、僕は両親を失った……

残された肉親は爺さんただ一人。

その爺さんも呪いの元凶に遭遇したそうだ。

あれと呼称される社に封印されている何か……

あれは人の記憶を読み、一番望む姿形で現れるそうだ。

爺さんは、死んだ婆さんの若い頃のだったそうだ。

最愛の人の姿形を借りて取り憑くとは、何て嫌らしいヤツなんだ。

両親は1ヶ月おきに殺された。

次の予定日迄は、あと10日程残っている。

少しでも抵抗出来る様にと、爺さんがスバルタで除霊を仕込んでくれた。

所謂靈能力つてヤツだ！

素質は有つたらしく一週間で基礎だけは学べた。

しかし残りは僅か10日だ……

「良く頑張ったな正明。

これで靈能力の基礎は身についただろ？

明日からは応用編だ」

毎日庭で修行を受けていたが、終わると何時も反省点や黙出ししばかりだった。

修行中は厳しく、讃め言葉など聞いた事が無かつたから……

この一言は嬉しかった。

「爺さん、有難う。

でも除霊なんて映画とか漫画の世界の出来事だと思つてたよ」

エクソシストとかG.S美神とか……

まさか田舎の和尚さんが行えるとは思わなかつた。

「高僧が悪鬼を祓つたりするのは聞いた事があるだろ？
何も陰陽道だけが出来る訳じゃない。
死者と密接な関係は仏教の方だろうが。

正明も法力を高める術を学べば、まだまだ強くなれるぞ」

確かに歴史では、高僧が悪鬼を退治する話は良く有る。

てつきり孔雀王みたいに高野山で修行しないと駄目だと思つてたよ。

「何となく自分の中にある力を引き出す事は分かつたけど……
まるで実感がないな。

靈能力なんて……」

体の中にある力を真言に乗せて放出する。

言つのは簡単だが、實際はどの程度なのか全く分からぬ。

「ふむ……

しかし実践させるには、まだ早いからな。

後は反復して体に覚え込ませるしか有るまい。

今日はこれまでだ」

そう言って母屋に戻つて行く爺さんは、とても70歳とは思えない。

疲れを感じさせない足運びだ。

僕の方は、縁側にヨタヨタと歩いてベタつと横になり深く深呼吸をする……

「すーはーすーはー」

汗をかいた体には、冬の風も心地よい。

鼻から入る冷たい空気も、熱くなつた体にもだ。

暫く休んでいたが、これ以上体を冷やすと風邪をひきそうだ……

重い体に鞭を打ち、シャワーを浴びる為了に風呂場へ向かつ。

ベタベタと貼り付く法衣は気持ち悪い。

こんな田舎でも電氣の力で直ぐにシャワーを浴びる事が出来る。

母さんが母屋をオール家電化したせいだが、今は感謝している。

何たつて家事は大変なんだ！

それは両親が亡くなり、爺さんと一人になつて身にしました。

亡くしてから分かる親の有り難みか……

シャワーを浴びてサッパリしたら、夕飯の準備だ。

体を洗いながら冷蔵庫の中身を思い浮かべ、献立を組み立てる。

今夜は野菜炒めとアジの干物、それに板ワサかな……

まんま旅館の朝食だが、男所帯の食事など似たようなものだらう。

早朝の修行に備えて、今夜は早く寝なくては……

既に9時過ぎには布団に入り5時には起きる予定を組み立てる。

「はあ……

青春真っ盛りなのに、田舎で修行三昧かよ」

思わず零した愚痴は、誰にも聞かれなかつた……

この数日間の孫への修行を考える。

確かに素質は有つた。

あれの父親には全く靈能力は無かつたが、幸い孫の正明にはそれなりに有つたのが救いだ。

上手く指導すれば、並み程度の力は得られるだろ？……

しかし、あくまでも並みだ！

しかも修行を始めたのも遅く、未だに一週間と短い。

儂が生きている内に教えられるのは……

もう殆ど無いだろ？。

後は知り合いの寺に預け、修行させるしか無い。

しかし我が一族には、残された時間が殆ど無い。

修行は自己鍛錬に任せ、今は相続の手続きをしなければなるまい。

幸い田舎の住職とは、檀家からの相談も受け付けている。

つまり相続関係には詳しい。

まあ誰かが亡くなつて起つる問題など、相続以外は少ないからな。

孫に少しでも遺産を残し、尚且つ修行の道筋を考えておかねば、独り残される正明は自棄になるやもしれん。

あれは儂では歯が立たんだらう……

せめて正明の為に、やれる事だけはやろう。

幸いな事に息子夫婦の生命保険や、土地建物それに移転の補償金を含めればかなりの額だ。

貯蓄もかなり有るし、儂自身の生命保険も合わせれば、正明だけなら一生遊んで暮らせる筈だ。

宗教法人だし相続税などタ力が知れている。

正明に金の心配だけは、させずに済むだらう……

あれから更に一週間が過ぎた……

残り3日。

僕か爺さんが死ぬ日までだ。

爺さんは僕に生きろと言つたが、あれがどちらを選ぶかは分からな
い……

修行は基本を認めてもらひ応用編に移つたが、やっている事は反復
練習だけだ。

爺さんは……

この三田間、忙しく外出したり税理士やら弁護士やらと打合せをして
いる。

両親の相続とか土地の売買とか、確かにリアル事情が有るからだけ
ど……

生き死にの掛かった残り大事な日にちなのだが。

その晩、夕飯の後に爺さんの部屋に呼ばれた。

和室で卓袱台に向かい合つて座る。

爺さんの部屋には、基本的に暖房器具が無い。

だから寒い。

仕方無くお茶を一人分用意する。

「何だよ爺さん。

改まつて……」

良く分からぬが、爺さんの前には封筒が山積みだ。

提携してゐる銀行や農協、それに地方自治体の口印が見える。

「ああ、正明に相続関係の書類をな。

儂が死んでからでは分からぬ事も多いだらう。

先ずは……

銀行預金の名義変更からだ……」

そう言つと幾つか輪ゴムで纏めていた封筒の上から順に、書類を出し始めた。

暫くは名前を書かされたり判を押したり……

分かり易く付箋や鉛筆で下書きがしてある上から記入していく。

一時間以上掛かつただろうか、最後の書類に記入して終わりとなつた。

相続欄には僕しか記入しない為、比較的簡単らしい。

そう言えば僕の親戚つて少ないな。

母さんは既に爺さん婆さんは他界し、一人っ子だから兄弟も居ない。

親戚は居るが、両親の葬儀に来てくれた人数は10人以下……

これも呪いの影響か。

「疲れたか？」

これ位で疲れでは、卒塔婆書きが堪えるぞ。

何せ年間に1000本は書かねばならんからな」

書類を確認し、封筒に入れ直し老眼鏡を外す爺さん。

確かに盆の時期は、檀家衆に呼ばれる爺さん以外は毎日親父と卒塔婆を書いていた。

今度は最悪一人で行わなければならぬ……

「うへえ……

確かに大変だな」

疲れた利き腕をブラブラ振りながら応える。

「これで儂が死んだら、榎本家は全てお前の物だ。

金庫の開け方や、檀家衆や得意先のリストの場所は分かるな？
引っ越しも順調だが、儂の葬儀は此處で行え。

この寺の最後の葬儀は儂だ……
お前が取り仕切れよ」

縁起でも無い事を言ひ。

「爺さん、何を……」

「まあ良いじゃないか。
明日も早い、もう寝ろ」

そう言われて爺さんの部屋を出された。

あれから何度か新しい寺に荷物を移動したので、部屋がガランとしている。

後は両親の私物整理と僕や爺さんの身の回りの物位だ。

人間、何年も住めば色々と荷物が増える。

この機に不要品は大分処分した。

だけど両親の荷物は……

中々捨てられない。

きっと殆ど箱詰めして新居に送ると思つ。

広々として底冷えする寒さと併せて、急に寂しくなつた。

2ヶ月前は家族4人揃つていた。

だが3日後には、また1人亡くなってしまう。

そう思つと涙が出て来た。

拭いても拭いても涙は止まらない。

悲しみと悔しさで、止めどなく流れる涙……

声を押し殺し涙が止まる迄、泣き続けた。

翌朝、爺さんは昨夜の書類を持って外出した。

最近手抜きで朝飯はパンにしているが、僕は一枚だが爺さんは3枚だ。

6枚切りの食パンをだよ。

目玉焼きにソーセージを焼くのは、せめて手抜きをしない為だ。

「正明の手料理を食べれるのも僅かだな。
お前、本当に上達しないな……」

中途半端に半熟な目玉焼きを突つきながら、爺さんが愚痴を零す。

因みに爺さんは半熟が好きで、僕は完全に火が通っている方が好きだ。

「嫌なら爺さんが作れよ。
俺より旨いんだから……」

早くに婆さんを亡くした爺さんは、男手一つで親父を育てた。

だから僕より格段に料理は上手だ。

でも中々作ってくれないんだよな。

「まあ 良いか……」

晩飯は久し振りに作つてやるよ

爺さんは家庭的な和食がメインだが、手間を掛けるので旨い。

これは夕飯が楽しみだ……

最後の晚餐では無いが、夕飯は大変美味しかった。

冬野菜の煮物・山菜の天麸羅・出汁巻き卵に豚汁。

御飯は、鯛を丸々一匹使い土鍋で炊いている。

それに何とデザートに白玉団子まで有つた！

「爺さん、気張つたな。

久し振りだよね。

こんなに僕の好きな物だけを作ってくれたのは……」

殆ど全てが僕の好きな物だ。

「まあたまにはな……

まあ冷める前に食え

男一人の食卓は殆ど会話は無いが、それでも楽しい夕飯だった。

食後のデザートの白玉団子を食べ、ぐだならい話をしていたら直ぐに寝る時間だ……

「爺さん、そろそろ寝る時間だぞ」

「ん？

もう寝る時間か……

もう少し付き合え。

寝酒に飲もう

そう言つて秘蔵の久保田の万寿と、ぐい飲みを一つ取り出した。

「何だよ、普段は飲ませないくせに。じゃ少しだけ付き合つよ」

白菜の漬け物を切つて摘みにする……

どちらともなく昔の話をして盛り上がる。

いや、僕の昔の恥ずかしい話を掘り返されるだけだ。

幼児の頃のお漏らし迄遡り漸くお開きとなつた……

「零歳児なんだし、爺さんの背中で大小合わせて漏らしあつて良いじゃないか！」

全く黒歴史だぜ……

しかし、これが最後の晚餐だつたんだ！

その夜、爺さんは社に向かい……

あれに戦いを挑んだのだろうか？

それは、今となつては誰にも分からぬ。

爺さんは僧衣を纏い社の中で冷たくなつていた。

その顔は、両親とは違ひ満足げで数珠を握り締め大の字に寝転がつていたんだ……

その口も寒い雨の降る口だつたよ。

親父も爺さんも、冬の寒い雨の口亡くなつた。

爺さんを発見した時、僕は半狂乱だった！

まだ2日……

2日有ったのに何故、爺さんはあれに挑んだんだ？

それでも救急車を呼び、既に死亡していた為に警察が呼ばれ色々調べられた……

やはり両親と同じで原因が不明。

病死として死因は心不全として処理された……

田舎故に、周りが色々と気遣いフォローしてくれたので泣いているだけで夜になり独りだけの家に帰ってきた。

もう誰も居ない我が家。

来週には立ち退く我が家。

自室の布団に倒れ込む様に横になると、泣き疲れだろうか？

そのまま睡魔に負けて、寝てしまった……

深い深い闇の中、夢か現か分からぬ。

しかし、あれは僕の前に現れたんだ！

「最後の生き残り正明よ。

義務を果たせ」

それは幼女だつた！

闇の様に暗い髪の毛を足首迄伸ばし、髪と対比してか肌は病的に青白い。

前髪で隠れている両面は、紅く輝いている。

真つ裸の異様な雰囲気の幼女……

「お前が一族を殺しているあれか？」

ああ！

何故、家族を殺したんだよ？

何故なんだよ！」

僕の叫びに

「ギャハハハハハハ……」

と、ただ大笑いするだけだ。

それが闇に溶け込む様に消えてから、両親と爺さんの苦しむ姿が見える。

黒いタールの様な沼の中で、苦しみ足掻いている姿が……

アレが魂を捕らわれた末路なんだ！

「正明……

来るな、こっちに来るな……

巻き込まれぞ」

「正明、助けてくれ。

苦しい、苦しいんだ……」

「あ……まさ……ああ。

た……すけ、て……」

爺さん・親父・母さんの順に話しつけられるが、母さんは二ヶ用近く捕らわれていた為か？

既に限界を超えた様に呻くだけだ……

これが、あれに捕らわれた末路なんだ。

あれの望みを叶えれば、爺さんと両親は解放されるのだろうか……

第27話

Office SAKURAOKAの事務所のソファーに深く座り、
桜岡霞は悩んでいた。

今はバイトの娘達は学校に通っている時間だから居ない。

事務所には独りだけ。

机の上にはテレビ局から送られてきた企画書と契約書が置いてある。

今まで熟読していた。

それこそ初めて最初から最後まで読んだ。

内容はテレビ局からの依頼で、夏の特番の仕込みについてだ。

「貴方の近くにあつた本当に怖かつた話2011」

この特番の1コーナーの企画についてだ。

都内近郊のとある曰く付きの廃屋に、そこそこ売れ始めたアイドルやモデルの女の子を同行させて探検。

彼女達に何かあれば、その場で対応するのが依頼内容だ……

これは夏に視聴率が取れる心霊関係に、売り出し中の彼女達の人気上昇を狙つての事だ。

勿論、桜岡霞本人が登場する事による彼女のファンによる視聴率アップも盛り込んでいた。

しかし……

桜岡霞は最近知り合つた先輩霊能力者の影響で、準備なく現場に乗り込む事。

素人を同行させる危険。

曰く付きとは言え理由が有つて靈となつた者の事を考えると、簡単に視聴率アップの為だけに仕事を請けて良いか悩んでいた。

「以前なら即請けたわ……

名前も売れるしお金も入る。

根拠の無い自信も有つたから。

でも、今は……

この企画内容では、請けてはいけないと感じている。

あの筋肉馬鹿の影響かしらね

出来るならば……

事前に曰く付きの廃屋の調査から始めたい。

そして何故、心霊物件になつたかの原因を突き止めてから除霊したい。

面白半分に素人を引き連れて曰く付きの廃屋に入つて、出たとこ勝負で除霊する……

なる程、テレビ局には美味しいネタだ！

何か有れば、リアルな心霊現象を得られる。

その“ナニ”かの対応に失敗した時の保険が私。

つまり失敗した責任を負わなければならない。

今まで余りテレビ局の契約書なんて読まず、内容も確認しなかつたけれど……

「請負とは請け負った時点で負けなんだよ！」

だから内容を確認し、責任の所在を明らかにしておくんだ

と、教えてくれた彼を思う……

契約書に先にサインをさせてから仕事を始める。

確かに気を付けないと撮影中の事故責任の殆どが私になつていてる。

良く今まで無事故でいられたものだ……

何か有れば賠償金や靈症のケアで大変だったわ。

「あの糞ディレクターめ！」

スケスケだか又レヌレダか訳の分からないアダナだけでは物足りず、責任まで私に押し付けるつもりだったのね……

でも、でも私では契約書の内容変更の交渉なんて難しいわ。

出来なくはないと思ひ。

でも海千山千のテレビ局関係者に、太刀打ち出来る自信は無い。

何か抜け道的な事をされそうな気がするの……

随分と考え込んでしまったのだろう。

気がつけば時間は11時30分。

出勤後、直ぐに書類を読み始めたがら3時間近く考え込んでいた計算だ。

「やはり榎本さんに相談しましょう。

貸しが2つもあるから無碍には断れないでしょうし、丁度お昼時だし昼食を『』一緒にながら相談すれば良いわ！」

前回の件で、抜け駆け的に事件を解決し……

被害者の母娘の為に、その成果を秘密にしている優しい人だもの。

私のお願いくらいは聞いてくれるはずよね？

デスクに移動して固定電話のボタンをプッシュする。

勿論、短縮ダイヤルに登録済み。

暫く呼び出し音が鳴り響いた後に、あの聞き慣れた声が聞こえたわ

……

「もしもし?
榎本です……」

事務所のデスクに座り、最近有った出来事を考える……

片手に持つた缶コーヒーを弄びながら。

横須賀の心霊「マンション」の件を「箱」が強制終了させた……

生靈かと思えば、まさかの怨霊化したストーカーだった。

まあ口りつ娘が一人幸せになれたのだから、良かつたのだろう。

うん、多分良かつた筈だ！

良かつたよね？

二人程、同業者がお亡くなりになつたのが残念だが……

僕が行く前に殺されてたから、関係無いと割り切る。

マンションオーナーだつて死亡者一人の物件なんて嫌だろ?し、同業者だつて返り討ちに合つのは覚悟しているだろ?う。

この商売は、死者と命の遣り取りをするのだから……

思考がダーク寄りになつたのをパソコンのインコサイトの掲載写真を見て癒やす。

口リツ娘は大好きだが、鳥類も大好きだ！

特にキエリクロボタンインコとかオカメインコとか……

癒やされるなー。

暫しパソコンの画面に見入つていたが、卓上ホルダーで充電中の携帯が鳴りだした。

持ち上げて画面を見れば「桜岡 霞」の文字が……

何故かお嬢様な彼女に懐かれている気がする。

彼女は美人だし、話していく楽しいしフードファイター仲間だが……

口リツじゃないから仲間止まりだ！

育ち過ぎだから、無理だ！

大切だから一回言いました。

何て心の中でも思っていても、おべびにも出さずに通話ボタンを押す。

「もしもし？」

榎本です……」

「」とにかく、榎本さん。
「機嫌はどうかしら？」

オッサンに「」機嫌？

いや、機嫌は良いですよ。

流石はお嬢様だ。

社交辞令も普通じゃないぞ。

「機嫌と言つか……

まあボチボチでんなー、ですかね？」

「何故疑惑なの？」

それに関西弁なのかしら？」

クスクスとオヤジギャグに反応してくれる。

意外にノリは良いんだよね。

「それで? 何か用ですか?」

お互い経営者だし、そんなに暇な訳でもない。

僕も山崎不動産の社長から、手が空いたら連絡が欲しいと言わっている。

長瀬綜合警備保障の仕事が一段落したから、そろそろ連絡を入れな

いとダメなんだが……

「えっと……

お願いが有るのよ。
出来れば相談に乗つて欲しいの……
お願いしますわ」

相談？ お願い？

嫌な予感がするんだけど？

まさかテレビ局の件かな？

「えっと……

忙しいくなりそうな予感だから、無理かなーって。
駄目かな？」

「駄目です。

例の貸しを返して頂きたいの。
勿論、お礼はしますわ」

結構強引に話を進めて來たな。

まあ話位なら聞いても良いか……

「うーん、じゃ話だけでも聞こつかな……
それで、電話で事足りる内容かな？」

話が複雑なら、一度会つて話し合つた方が良いだろ？。

「有難う御座います。

これから横須賀中央に向かいますから、昼食でもござ一緒に話をして話を聞いて下さらない?」

昼食だと!

桜岡霞、また懲りずにフードファイトを挑むのか?

「分かつた!

その挑戦を受けよう。

場所は京浜急行線の汐入駅に有るダイエー前のセンターグリルだ。米軍仕込みのネイビーバーガーやステーキ各種が質・量共に豊富にある。

勝負だ、桜岡霞よ。

12時半に汐入駅改札前で待つ!』

「えつ?

ちょ……何を……』

彼女は何かを言い掛けたが、構わずに電話を切る。

奴との対戦までに一時間も無い。

体調を整えなくては……

ベストなコンディションで挑む為に、トイレの個室に向かった。

出す物を出して、胃と腸にスペースを作らねば!

京浜急行線汐入駅は米軍基地の有る、比較的に外国人の多い街だ。

それ故にドブ板通りと云つ米兵相手の商売をする店が連なつた商店街がある。

昔は治安も悪く怪しい飲み屋が多かつたが、今は観光地化して歩き易い。

最近は「当地グルメ」として、横須賀海軍カレー・ネイビーバーガー等の食べ物や軍港クルージングとして海上自衛隊横須賀基地と米軍基地に停泊している軍艦を間近で見れるツアーもある。

榎本からフードファイトを挑まれ、比較的お腹周りの緩い服に着替えて直ぐに事務所を出た。

京浜急行線は10分間隔で快速特急が運行しているので、約束の12時半よりも早く着いた。

改札を出て周りを見渡せば……

向かって右手側がバスロータリーになつていて、その近くの自販機の前に筋肉が立つていた。

不思議……

体格の良い外国人が多く通っている中で、あの筋肉は存在感が負けてない。

何と言う筋肉！

ジー・パンに革ジャン、インナーはラガーシャツかしら？

悪くないコーディネートだが、色合いがカジュアル過ぎるくらいもある。

あの体格なら、もつと……

あつ、私を見付けらしく手を振ってくれたわ。

笑顔を浮かべ小走りで彼に近付く。

「こんにちわ、榎本さん。
カジュアルな服装は初めてね」

彼は自分の服装を見回し

「いや、密先に出向く時は背広だし現場には長瀬綜合警備保障の制服か動き易く目立たない服装にするからね。

今日はフードファイトを挑まれたから、普段着だ」

やはり筋肉グマめ！

彼の胸板を遠慮無く叩く。

バシッと良い音が鳴り響いて周りの人達が、私達に注意を向ける。

「違うわよ！」

フードファイトじゃなくて、相談に乗つて欲しいのー。」

全く衆人環視の中で目立つてますわよ。

毎回思うけど、叩いた私の手が痛いわ。

本気で叩いたのに平然としてるし……

「ん？」

分かった分かった。

勝負に勝つたら相談に乗るから。

さあ行くよ。

予約入れてあるから待たさないからさ」

何時の間にか

「相談に乗つて下さい」

が

「勝負に勝てば相談に乗ろう」

になつてるわよ？

「お待ちなさいな。

」「ハ、勝手に話を進めないで……」

スタッフと歩き出す彼の左腕に抱き付く。

丸太みたいに太い腕だ。

「ちょ、おま、くつ付かないで」

この脳筋グマは、見た目と違ひ照れ屋さん。

だからスキンシップに過剰な反応をするの。

羈^{しつけ}的な意味で、スキンシップをする様になつたわ。

反応が面白いのよね。

「早くお店に案内しなさいな」

見上げる様にして催促する。

渋々と彼は歩き出す。

きっと優しいから女性に強く言えないのだろう。

バスロータリーを横切り134号線を渡ると直ぐにダイエーだ。

「あら、ダイエーの中なの？」

「いや……

ダイエーじゃなくて、アレだよ

榎本さんが指差した先には、ダイエーの敷地内だけれど独立した建物が見える。

「センターグリル……

あら、お店の前に客車が有るわ」

古風な電車が一両隣接している。

本物かしら?

「センターは駅を表してゐるんだ。
だから店内も電車に因んだ内装になつてゐる。
ほら、行くよ」

腕に絡んでいるからか、歩き出す時は声を掛けてくれる。

きっと引っ張つたりするのが嫌なのね。

ちょっとした優しさが嬉しい。

オートドアを潜り店内に入ると、80年代のアメリカがテーマみたいね。

いや、開拓時代かしら?

イマイチ統一感が無いわね……

窓際のソファー一席に案内されたけど、流石に窓側を譲つてくれたわ。

でも店員さんとの遣り取りは馴れた感じだわ。

つまり彼のホームであり、私にはアウォーか……

メニューを差し出す彼に対して、沸々と闘志が湧いてきたわ！

どれどれ……

なる程、ステーキ屋さんだけは有り種類は豊富ね。

パスタ系もあるわ。

悩むわね……

彼が手を上げて店員を呼んだわ。

私は未だ決めかねているのに？

「何時もの奴に、バーベキューチキンとコーンサラダ。

それに生を一つ……

いや、桜岡さんも飲む？」

「ひひ「ハイツ、素面で相談乗る気無いわね？」

「勿論頂くわ。

それと彼と同じ物をお願いします」

フードファイトなら、同じ物を食べないと勝ち負けがハッキリしないからね。

「えつ？

此方のお客様の何時ものとは……

750グラムのフィレステーキですが！

大丈夫なのですか?「

ウェイターさんが、私のお腹周りを見て不思議そうに聞いてくるけど。

「構いませんわ。

オーダーは以上よ。

但しメニューは一つ置いて置いて下さいな」

びっくりした顔で、お辞儀をして下がっていく。

たかだか750グラムのステーキでビビるなんて!

彼を見れば、何を当たり前な事を的な顔ね。

やつぱり大食い仲間つて良いわ。

普通だと不思議な生き物を見る様な目で見るのよ。

私達は珍獸じやなくてよ!-

四人掛けのソファー席に山のように並べられた料理！

周りのお客さんも注目の中、普通に食事を始める。

やはり750グラムのステーキは大きいわ。

成人男性の握り拳位の大きさが有るわね……

「「いただきます！」」

ナイフとフォークで切り分けながら食べ始める。

うん、美味しいわ。

付け合わせのマッシュ芋も野球ボール位のボリュームがあるけど、味はクリーミーね。

多分、ジャガイモを裏ごしして生クリームを混ぜていると思つ。

榎本さんを見れば、食べる前に全てを切り分けているわ。

大きな手にナイフとフォークを持って、器用に切り分ける姿は……

躾の行き届いたクマさんみたいね。

暫くは無言で食べる。

ステーキを完食したタイミングは、計った様に同時だわ。

「やりますわね。

この私のスピードについていれるのは榎本さんくらいよ

「ふん。

体の容積は半分以下の桜岡さんが良く言つ。

勝負はバーべキュー・チキンだな」

鶏の半身を使い焼き上げたボリューム満点のチキン。

此方の付け合わせは、ブロッコリーにインゲン・ニンニクスライス・人参と野菜が盛り沢山ね。

「まだまだ余裕よ。

では、いただきますわ」

上品にチキンを切り分ける。

榎本さんも器用にチキンを切り分けているわね。

野趣溢れる手掴みじゃないのは嬉しいわ。

ウチも一応は上流階級だし、旦那様のマナーには五月蠅いか、ら?

いえいえ、違うわよ。

落ち着いて、霞。

落ち着くのよ。

ほんの少し動搖した間に、既にチキンを切り分け終えて食べ始めるわ。

私も負けられないの！

ビーフステーキを完食し、チキンのバーベキューは頸的にキツい。

残りはコーンサラダだけだわ。

お腹は余裕綽々だけど頸が痛いの……

食べる手を止めた私を心配そうに見るわね。

「食べ過ぎて、ぽんぽん痛いの？」

「ちよ、ほんほんって子供じやなくてよ。

「頸が、痛いの。

流石に咀嚼する力は普通の女の子なのよ。
この勝負は負けね……」

頸が回復するのを待つのは勝負ではアウト。

私の負けね……

ナイフとフォークをテーブルに置いてギブアップ。

「お腹は平氣なんだ。

じゃゆっくりデザート食べますか？

此處のお勧めはラズベリーチーズケーキだよ。
あつ「ローンサラダは貰うよ」

そう言つなり、私の分のローンサラダに手を伸ばす。

サラダ自体の量は少ないけど、やはり肉はクマさんの得意分野な訳ね？

次はお寿司かスイーツで挑めば、何とかなるかしら……

見る間にローンサラダを完食し、生ビールを飲み干す彼を見てリベンジに燃える！

ローンサラダを完食してから、ウェイターを呼びラズベリーチーズケーキと紅茶を二つ注文。

確か珈琲は余り好きじゃないのを覚えてくれていたのかしら？

負けたからには、相談は出来ない。

当たり障りの無い雑談で時間が流れて行く。

次こそは負けないわよ！

今回の勝負はハンデを考えなかつた僕に非がある。

つまりは引き分けだ。

そのつもりで彼女の「ローンサラダを取り上げ、変わりにデザートを注文した。

デザートを食べながらの会話は、当たり障りの無い雑談だ。

一向に相談を話してこないけど……

ケーキを食べ終わり、紅茶を飲み干せば店を出なればならない。

レシートを持ち席を立つ。

「そろそろ出ようか？

忘れ物の無い様にね」

何か言つている彼女を抑えて、会計を済ます。

結構楽しい食事だったな……

「で？」

喫茶店に入る？

それとも事務所に来るかい？」

「えつ？」

おいおい、本題の相談を忘れてないよね？

何時までも話さない桜岡さんに水を向けてみる……

「相談だよ、相談。

勝負はハンデを見込まなかつた僕の負けだ。

何か相談が有るんだろ?

この辺の喫茶店は相談をする場所としては不適切かな……」

汐入駅の周辺の喫茶店は……

メルキュールホテルのラウンジしか思い浮かばない。

でもホテルは対外的にマズいだろうな。

彼女は「お茶の間の巫女さん」だから、知名度が高い。

「私の負けでしょ?

同情は要らないわ……」

結構頑なんだ。

「完食のタイミングは一緒でしょ?

次は顎の疲れないメニューを選ぼう。

僕の場合は生トマトは苦手だから、これが入っていた時点で負けを認めるけどね

数少ない食べられない物。

生トマト……

ケチャップやトマトジュース、それに煮込んだりすれば平氣だが生

は無理だ。

小学校の頃、当時の給食は今よりグレードが低かった。

トマトなど今の品種では考えられない程、固く青臭かつた。

好き嫌いを認めない担任か

「正明ちゃんがトマトを食べないと、他のお友達がお昼休みを遊べないんだよ?」

とか今なら裁判沙汰な強要をされ、同時も嫌いだったトマトを一口で食べて牛乳で流し込んだ……

そして

「ウホッ！ ゲロゲロゲロ……」

その担任の顔に向かい吐き出したんだ。

当然、担任は激怒。

親を呼び出された。

同時は学校の先生も体罰が容認された時代。

悪い事をすれば、当たり前に拳骨！

それは教育の範疇なら、素晴らしい事なんだが……

質の悪い教師なんて、何時の時代も居る。

放課後に呼び出された爺さんが、担任に対して説教を始めた。

ただ

「貴方の息子さんは好き嫌いが激しい。
ご家庭でも指導して下さい」

とでも言いたかったのだろう。

しかし説法を生業としている住職に、根拠も無い話が通じる訳が無い。

結局一旦帰ったが、その後に校長が頭を下げにきたらしい。

田舎で檀家衆を抱える住職に、転勤で来た校長や担任が適う訳が無い。

「何を黄昏ていろのかしら?」

「いや、子供の頃に嫌いなトマトを強要した担任の顔に吐いたのを思い出したんだ……

それ位トラウマなんだよ

呆れた顔の彼女と、取り敢えず僕の事務所の方に歩いて行く……

相談事なら周りに聞かれてたくないだろう。

だから事務所が一番良いかな?

彼女を伴いドブ板通りを歩いて行く。

最近は観光地化したが、同時の面影を残す店もある。

ワッペンや刺繡の大将・肖像画の武谷・スカジャンの大熊、名前は知らないが米軍放出品を扱う怪しい店など、アメリカと日本のコラボレーションな商店街だ。

勿論アメリカスタイルのバーも有るが、昼間は閉まっている。

暫くドブ板通りを歩いていると、彼女には珍しいのだらつ……

キョロキョロと左右を見回している。

「ねえ？

大通りは綺麗だけど、脇道は怪しいわね。
何か怖いわ」

「うひー！

腕を絡めるな、腕を……

此処は僕のホームなんだよ。

「ゲームのシェンムーでも舞台になつたけど、まだまだ夜は治安が良くないね。

勿論昔に比べたら各段に良いけど、ちょっとしたスラム街な雰囲気でしょ？」

本当は脇道や怪しい店に入らなければ殆ど安全な商店街になつている。

「これも地元のイメージアップ戦略と商店街の努力だと思つけどね……」

「ふーん……」

あつ、あれ！

凄いわね、あれがスカジャンなのね？」

店頭に吊された竜や風神雷神、それに鷹？鶯？の刺繡を凝視している。

「通称スカジャン。

本当は横須賀ジャンパーまたは空飛ぶ東洋の竜が人気だったから……スカイドラゴンジャンパーの略とか言われてるね」

横須賀では当たり前な事だが、それは地元だから知識だ。

随分と感心している。

「兄ちゃん、美人な彼女に買つてやれよ。
この揚羽蝶とか女性でも喜ぶぜ」

立ち話を聞いていたのだろう。

商売のチャンスと、すかさず商品を勧めるが……

紫のベースに金糸銀糸で揚羽蝶の刺繡を施したスカジャンは、彼女には似合わないだろう。

見れば桜岡さんも笑顔が固いし……

「いや、また今度考えるよ?」

お断りの決まり文句を言つて立ち去る。

その後は此処がネイビーバーガーで有名なハービーだと、ドブ板で一軒だけの行き着けの鰻屋だとか紹介しながら横須賀中央駅まで到着。

駅前広場を通り過ぎて坂を少し登つた先に、僕の事務所がある。

ゆっくり歩いても20分位の距離だ。

二度目となる事務所来訪だが、特に問題は無いだろう……

事務所に戻り応接セットに通してからお茶を用意する。

とは言え普通の日本茶だが、寒い時期には有り難い。

エアコンの暖房を入れたが、暖かくなるのに時間が掛かるからね。

でも石油ストーブは面倒臭いからなあ……

「粗茶ですが……」

湯呑みを彼女の前に置いて、向かいのソファーに座る。

「あり、じー寧に有難う御座いますわ」

チクショウ、やはり見てくればお嬢様だな。

湯呑みを持つ動作も、何か上品だ。

「……ん? 何かしら?」

「いや、何でもない。

それで相談事とは何だい?」

彼女の顔を凝視していた事を誤魔化す様に質問を被せる。

桜岡さんは、鞄から何やら書類を取り出して僕に差し出してきた。

A4サイズの紙の束だが、結構な枚数があるな……

受け取つて表紙を見ればタイトルに

「貴方の近くにあつた本当に怖かつた話2011」

と有り、例の梓巫女シリーズの企画書だ。

中を流し読みすれば、有りがちな女性タレントと心霊スポットを巡る内容だ……

しかも事前準備無く、いきなり現地に乗り込みだよ。

普通、その建物の所有者なり管理者に許可を得る筈だけど……

敢えて書類には書いて無いのか、それとも他に意味が有るのか?

場所はハ王子市の山中か……

企画書なのに場所の特定も曖昧だし、廃墟の資料や写真も無い。

でもホテル名は書いてあるな。

これなら調べる事は可能だわい。

しかし企画書自体は数枚だ……

これは企画書じゃないな。

その後ろには、何だ？

契約書？

やたら約款が多いし字も小さいな……

ポケットから眼鏡を取り出す。

こんなExcelなら文字の大きさが4位な文字なんか見えるか！

「榎本さん、まさか老眼なのかしら？」

「違います！

近眼なの、コンタクトは体质的にダメなの。
でも運転免許はギリギリで眼鏡無しで平気だよ

失礼な物言いの彼女を軽く睨んでから、契約書の約款を読み始める

……

うん、見事な程に責任の区分を明確にしている。

これ、僕も参考にコピーさせて貰おうかな。

余りの文字数の多さに10分近く読んでいただろうか？

じつと僕の様子を伺う彼女に聞いてみる。

「桜岡さんは、ちゃんと読んだかい？」

「ええ、読みましたわ。

初めて契約書を隅から隅まで読んだわ。

見事に責任が私に有る事になるわよね……」

良かった。

ちゃんと学んでくれたんだな。

契約書のサインをする前に、ちゃんと読んだのか。

「そうだね……

少し桜岡さんに不利な内容だ。
特に現場での責任者になってるよ。

これは君の企画だから、責任の殆どは仕方ないと相手は言つてるね。
でもペラペラの企画書には、君が主体で進める内容じゃないし。
どちらかと言えば、テレビ局が企画から準備・進行・現場での権限
が有る。

この辺の一文に……

現場撮影の進行について（桜岡靈）は甲（テレビ局）に最大限の

配慮をするつて有るよね。

実際は現場の責任者は桜岡さんだけど、テレビ局の立会者が何か言つたら配慮してね！

でも最終的に判断し許可したのは君だから、責任は君持ちだよ。つて意味だよ。

何か有つた場合の保障の殆どは桜岡さんだし、事故の損害も相手は請求出来る内容だね。

どうするの？」

契約書は大切だ。

しかし、これは少し酷いと思つ……

「……だから悩んでいるのよ。

逆に企画を持ち掛けるか、それとも契約内容を変更して貰つか。
どちらも私だけでは難しいの……
何か良いアイデアは無いかしら？」

縋る様に此方を挾む彼女を見て考える。

下手に強気に出れば、企画自体無くなるか他のタレント霊能力者に替えられるだけだろ？。

さて、どうするか……

第29話

フードファイトを挑んで来たと思えば、テレビ局の仕事内容の相談だった……

早く言えば良いのに？

いや、相談を持ち掛けられたけどフードファイトになつた？

何故だつけ？

向かいに座る、困った顔をして此方を見詰めるお嬢様を見て思つ。確かにこの内容では、何か有つた時に彼女の人生が被害者の補償で終わる内容だ。

幾らお嬢様とは言え、個人で負担するのは辛い。

てか、安全管理の殆どを彼女に押し付ける内容は酷いだろ？。

普通に考えて、交渉内容は幾つか思い浮かぶ……

一つ目は、この契約内容をバラすぞって脅す。

勿論、グレーゾーンな部分を法的に指摘する。

発注者の責任の部分をだ。

まあ、なら結構ですで終わりだな。

他にも売れる為ならと無理をする奴は居るから……

彼女の望む進展は、ちゃんとした除霊のプロセスを踏む事だと思つ。

だから2つ目は、逆企画を提案する事だ。

でもテレビ局的に地味な調査とか平氣か?

何か彼らを惹き付けるネタが必要だけど……

本物の心霊物件でも宛がつてやろうか?

でもテレビ局的に本物はヤバいので、放送ではダニーを混ぜてるつて聞いたな。

衝撃映像など半分以上は偽物だとか……

曰く付きの映像の取り扱いが難しいと言つ事か?

確かに除霊もしてない写真や動画を無闇やたらと電波に流すのは考え物だ。

「難しいね……

これを不当と突っぱねる事は簡単だ。

けど、なら企画自体を他の方にとか言われて終わり。

桜岡さん的には、除霊のプロセスを踏んだ流れにしたいんだろう? でも地味な調査はテレビ局的には受け入れ難い。

彼らは視聴率を求めるからな……」

「やうなのよね……

でも出来れば早く付きと言われてしまつた靈の真相を調べて成仏して欲しいの。

これじゃ自己に十足で踏み込んで喧嘩を売る内容じゃない？」

ちょっと驚いた。

暫く見ない内に、いや結構会つてゐるけど……

そんな考え方を持つてるなんて！

出来れば彼女の望む展開にしてあげたい。

んーどうするか？

気持ちを切り替える為に、温くなつたお茶を一気飲みする……

うん、渋くなつてる。

新しいお茶をいれる為に一旦席を立つ。

急須に新しい茶葉を入れお湯を注ぐ。

お茶請けに買つておいた坂倉本舗の豆大福を奮発するか。

「はい、熱いよ。

それと地元の老舗和菓子屋の豆大福だよ」

湯呑みと豆大福を渡して、自分も豆大福をパクリ。

うん、上手い。

「この甘さを控えた上品なこし餡が良いんだ。

「んで提案だけど……

テレビでは映さないが、事前に桜岡さんが現地入りをして心霊物件の調査と準備をする。

これは契約書にも

乙（桜岡靈）は甲（テレビ局）の関係者の安全に最大限の配慮をする。

つて有るから、逆手に取つて事前準備をしないと危険だからと説得させよ。」

責任を桜岡さんに押し付ける為の一文だから、向こういつも危険と言われば断れない

これで行き当たりばつたりの出たとこ勝負は回避出来るだろ。

「でも……

それってテレビでは放送されないかもしない部分ですわよね？」

「確かに編集でカットかダイジェストで少し使つだけかもね。

でも桜岡さんのやりたいプロセスは踏める。

テレビ局は視聴率が重要だ。

だから妥協が必要だよ。

それに君がやりたい事は出来る筈だ

曰く付きと言われる原因の靈を助けたい。

なら過程は割り切りも必要だろ？。

気がつけば10個有った豆大福が残り4個だ。

あれ？

僕はまだ2個しか食べてないよ……

彼女を見ても特に口をモグモグさせてないし、僕の倍も食べた様には思えないし。

「ん？ どうかしましたか？」

と微笑む彼女の口元は、豆大福の粉が少し付いている。

つまり僕が気付かない内に4個も食べれたのか？

凄いテクニックだ……

「いえ、何でもないよ。

さて事前の調査や準備は出来る可能性は見えた。
後は責任区分だけど……

これは難しいね。

精々が現場では桜岡さんの指示に従う事くらいしかない。
本来危険だから素人は同行させたくない。
しかし番組の企画上、彼女達を同行させないと意味は無いんだよね
……

同行する彼女達にも一筆念書をとるか

同行する彼女達にも一筆念書をとるか

彼女達も危険を承知で、この企画を請けだ筈だ！

若しくは心霊現象なんて信じていないか……

でも危険な場所に行くからには、幾つかの基本的な身の振り方と桜岡さんの指示に絶対従う事。

何か怪我や靈障が出ても、事故責任の範疇で。

これ位なら、テレビ局側も交渉に応じるかな？

誰だつて自分の危険はお断りの筈だ。

ましてや他人の怪我等に気を使えるかは少ない。

責任をテレビ局側に余りいかない様にすれば、或いは責任区分も緩和されるかも知れない。

これで駄目なら、桜岡さんの方を止めるしかないだろう。……

何もテレビ以外が仕事では無い筈だ。

「参加するアイドル達にも、自己責任にするの？」

「可愛そうじやないかしら」

「僕には、これ以上は桜岡さんの責任を軽くする方法は考えつかないよ。

アイドル達も売れる為に無理をするんだから……

それで辞退するなら、それまでだよ。

因みに、これ以上の妥協案で仕事を請けようとするなら僕が桜岡さんを止めるから……」

知り合いが不幸になるのを知つていて止めない訳にはいかない。

文句を言つなら物理的に監禁か、呪術的に腹下しでもして動けなくするだけだ。

「なによ、保護者みたいな事を。
でも、どうやって止めるつもりかしら?」

そう言つて、彼女は挑発的に微笑む。

「具体的に?

物理的には監禁。

呪術的には下痢。

兎に角、動けなくして止めるよ」

「なつ?

何を言つてるのよ!」

それに監禁や下痢って犯罪じゃない

僕も無言で微笑む。

でもイケメンじゃないから、微笑むが恫喝の笑みになるから困る。

ほひ、桜岡さんもドン引きだし……

「それだけ無茶苦茶な契約と仕事の内容つて事だよ。
どうする?

交渉するなら同行するよ。

もう乗りかかった船だし、目立ちたく無いけど君だけじゃ交渉は無

理だ！」

本当はテレビ局など関わりたくない。

でも……

このお嬢様一人じゃ無理だし、交渉だけなら……

甘い考え方だな。

「箱」に関わってから地味に生きてきたが、ここで心変わりするなんて。

自然と口元が緩む……

「何よ、怖い顔をしたと思つたら微笑んで。本当にお父様みたい。良いわ。

その条件で交渉しますわ」

桜岡さんの説得は一応の成功か？

彼女はテレビ局への交渉には同行する面倒を嫌えたが、帰つていった。

日時を決めて連絡をくれるそうだ……

彼女を玄関から送り出して考える。

時刻は既にオヤツの時間を大分過ぎていた。

随分話し込んだものだ。

湯呑みや豆大福のお皿を片付けて、自分のデスクに座る。

桜岡さんは話していないが、交渉は揉める。

問題は靈的な被害の補償と、普通の労災との区分けが今回の交渉のキモだ！

どの道、除霊の危険を話しても……

そのハプニングもテレビ局的には美味しい。

だから先程の内容では纏まらない。

ならば、どうするか？

簡単な事だ。

現地に先入りして準備・調査。

これを何としても約束させる。

最悪はテレビ局には関係無く調べても良い。

それと責任区分を普通の労災と靈的な傷害に分ける。

これは靈能力者だから、靈障は引受けが一般的な怪我等はテレビ局側の責任者に取らせる。

少し大変だが、難しくは無い筈だ。

彼らだつて普段行つている事だから……

それさえ契約書に明記してしまえば、口ッチのモノだ！

後は調査・準備の時に除霊迄終わらせてしまつ。

これなら（過去に）曰く付きだつた廃墟に、単純に肝試しに行くだけだ。

これで僕達の手に負えない奴が居たら、その時は強い力を持つ靈が居る。

廃墟に近付けば、僕達では対処出来ない。

どうするんだ？的にして、責任を相手に委ねれば良い。

もし強引に進めれば、その時の責任は全て向こう持ちだと約束させ一筆とるか上司に連絡させる。

彼女の負担は減るだろ？……

僕の負担は増えるけど。

彼女に内緒の指向性は決まつた！

後は裏付けと交渉を有利に進める準備だ。

僕は携帯のアドレス帳から、爺さんの代からお世話になつてゐる松

尾法律相談所を探す。

相続の時にお世話になつた個人弁護士だが、本来は企業相手の相談が主な仕事内容だ。

だから仕事の契約の時に同席して貰い、アドバイスをしてもらう。

大抵は弁護士を同席するどビビる！

これはグレーゾーンな契約内容を理解して結ぼうとしている相手には覗面てきめんだ！

松尾先生は同郷で爺さんの後輩だ。

御年73歳だが現役で働いている。

小柄で頭髪は真っ白、短く刈り込んだ髪型に鋭い眼差しの老紳士だ。

和服を好み、ちょっと目にはヤクザな大親分な感じがする。

僕を子供の頃から知つていて、やれオシメを替えたとか恥ずかしいネタを知つてているんだよね。

数回のコールの後、電話が繋がった。

「はい、松尾です」

「松尾先生、ご無沙汰します。
榎本です」

強面だが、話し方は一寧で優しいんだ。

だから電話で話した後に会うと、みんな驚く。

「ああ、正明君か。
久し振りだね。

急に電話をするなんて、何か有ったかな？
それともやつと嫁さんを見付けて、紹介してくれると嬉しいのだが

……

松尾先生は死ぬ前に僕の嫁さんと子供を見たいと煩く言つをだ。

だから頻繁には連絡をしないんだけど……

「いえ……

少し仕事の契約について問題が有りまして。
出来れば交渉の場に同席をお願いしたいのです

出来ればテレビ局に呼ばれたら、その場で話を纏めてしまいたい。

即断・即決を出来る準備をしておきたいんだ。

「ほう！

厳しく教えた筈の正明君から、そんなお願いとは。
余程の事かな？
詳しく述べようか

「実は知り合いがテレビ局と契約をするのですが……」

松尾先生が同席してくれれば、問題は無いだろう。

後は「ペーした、この企画書の物件を調べられるだけ調べよう。

上手くすれば、交渉の必要な無いガセネタの廃墟かも知れないから

……

そんな淡い期待は直ぐに霧散した。

コレは、厄介な建物かも知れないぞ……

帰りの電車の中で吊革に捕まりながら、先程の相談事を考える。

最初は渋った癖に、結局は最後まで面倒を見てくれそうな感じ。

あれだけ目立つ事を嫌がっていたのに、テレビ局まで一緒に黙って
くれるつて……

榎本さんにとって、私の位置つて何なのかしら？

同業者？

大食い仲間？

それとも友達？

少なくとも恋人ではないわよね。

告白してないし……

いや、その、えっと、告白って私は何を考えているのかしら？

真っ赤になつて首を激しく振ってしまった為に、周りの注目を集めてしまつたわ……

でも本当に、彼は私の事をビックリ思つてゐるのかしら？

奇態を晒し恥ずかしかくなつたので、次に停車した駅で降りた。

金沢文庫駅……

駅自体は普通だが、ホームの反対側に車両を待機させる引き込み線が何本も有る鉄道マニアでなくとも楽しめる場所。

普通の電車だけでなく、モーターカーと呼ばれる工事用の黄色い作業車はレール削成車？

青色の独特な形の電車も有る。

アレは走りながらレールの傷を測定し研磨するらしいわ……

暫く眺めていると次の快速特急が来たので乗り込む。

やはり適度に混んでいて座席には座れないが、ビックリ次で降りるのだから扉脇の手摺に捕まり外を眺める。

ボーッと眺めていると、やがて電車は京急上大岡駅に到着した。

さて、事務所に帰つたらテレビ局に連絡して日程調整ね。

榎本さんも今週中なら午前・午後開いてるけど、一応何日か候補を
あげてくれって言ってたし……

これから忙しくなるわ。

第30話

東京都港区高輪に有るテレビ局本社。

例の企画書と契約書の件で打ち合わせのアポを取り、現在は榎本さんと待ち合わせ中。

京急品川駅を降りるとJR品川駅と改札が隣接していて、その構内に有るユニオンの前で待ち合わせ。

今日の私は仕事の打ち合わせと言う事も有りビジネススーツを着込んでいる。

黒のタイトなスカートにジャケットをチョイス。

首に巻いたスカーフがアクセントよ。

コートはバーバリーの新作にした。

確認の為、左右を見ても可笑しくはないわ。

暫く待つていると京急の改札を見慣れた筋肉の塊が？

あれ？

あれれ？

見慣れてない法衣を着込んだ榎本さんと、小柄ながら着物を着たご老人が近付いて……

あの着物の柄は江戸小紋染めかしら？

慣れた感じで着物を着こなした眼光鋭いご老人だわ。

誰かしら？

「ここにちは、桜岡さん。

此方は僕がお世話になつてゐる弁護士の松尾先生だよ。先生とは子供の頃からの付き合いでだから、安心して信用して欲しい

いきなり弁護士のお爺様を連れてくるなんて！

聞いてませんわよ。

「あつ、えつと……

初めまして、桜岡霞と申します

取り敢えず、お辞儀をする。

榎本さんの子供の頃からの知り合いつて？

家族的な付き合いが有るつて事なのかしら？

お爺様は失礼に感じない程度の視線で私を見ると、突然榎本さんの脇腹に肘鉄を喰らわせた！

流石の筋肉バカな榎本さんも顔をしかめたわ。

でも、あれで顔をしかめるだけなの？

ガスつとか、結構良い音がしたわよ。

「なんだ正明君。

こんな綺麗なお嬢さんを紹介するとは、コレか？
都会に出てから体ばかり鍛えて筋肉ばかり付いたが、ちゃんと彼女
を捕まえたのか」

カツカツカ、と高笑いをするお爺様。

「レ？ 彼女？

私つて榎本さんの中では、そういう位置付けなの？

「いえ、お爺様。

私達はそんな関係では……」

「爺さん、彼女が困つてるだろ。
ごめんね、桜岡さん。

テレビ局との交渉だけど難航しそうだからね。
本職の弁護士を呼んだんだ。

あと企画書の廃墟だけど色々調べたら、かなりヤバいんだ。
だから僕も僧侶として、いち霊能力者として助言をするよ

私と彼のやり取りを楽しそうに見ているお爺様。

周りの通行人も私達を注目し始めたわ。

「えっと、テレビ局にはタクシーで行きます。

此方ですから……

品川駅のバスロータリーの一角に有るタクシー乗り場に案内する。

私も「お茶の間の靈能力者」として有名だし、彼は法衣を纏つている。

ムキムキの短髪筋肉和尚様状態だわ。

しかも、ただ者でない感じのお爺様も居る。

目立つ事は確実だわ。

助手席に私が乗り込み、後部座席に彼らを押し込む。

運転手さんに行き先を告げると、タクシーはゆっくりと走り出した。

関東近郊の八王子市山中にある廃墟。

地元では有名だ。

日本中の経済が麻痺したバブル末期に完成し、バブル崩壊と共に破綻し廃墟となつたホテル。

これを管理する会社が倒産し、競売にかけられた物件だ。

しかも立地も悪く近くに観光スポットも無い。

序でに温泉も出ない。

これでは観光客も寄り付かないだろう。

このホテルの売りは何だったんだろうか?

競売後も買い手が付かず、管理会社も交通の便の悪いこのホテルを半ば放置している。

買い手もままならない建物に金を掛けて警備はしない。

入口を閉鎖した程度で、絶賛放置中……

だから、この建物及び周辺での事故・事件が多い。

先ずは何時もの様にパソコンで検索する。

キーワードは

「八王子 山中 廃墟 ホテル」

を入力。

これだけで出るわ出るわ。

ヒット件数は3万をこえる……

この中で代表的な物を幾つかピックアップする。

真偽は別としても、ホテルで自殺が2件。

これは営業中と廃墟化してから1件、づつだ。

近くで遭難・行方不明者が3件。

誘拐殺人の現場の山荘や、死体遺棄の場所も近い。

んー、曰く付きだけなら曰く付き捲りだ……

次はグーグルマップを開き、周辺の神社仏閣や史蹟・古戦場の有無を調べる。

近くには神社のマークがあるが、名前は分からないな。

こんな山中の神社だし、実際に行かないと無理かもしねい。

神主さんも常駐してるかも不明だ。

関係は無さそうだが、面白いのは運行を中止したロープウェイの廃墟がある。

これだけでも横須賀のマンションよりも調べる事が多いな……

次は廃墟としての検索だ。

キーワードは

「八王子 廃墟 ホテル 探検 画像」

を入力。

廃墟探訪や廃墟探検、または廃墟マニアのブログに写真付きで探検記録が載っている。

何件かのサイトには、かなり詳細に探検した様子が書かれていた。

エントランスから客室、大広間に厨房。

それに大浴場に機械室や屋上までを探索している。

パンフレットや顧客名簿、それに備品類まで残されていた。

夜逃げに近い状況だな……

流石に立地の関係で浮浪者等は居ないし、悪戯に来る連中も少ないのでだろう。

さほど中は荒らされていない。

もっとも公開は5年も前だから、現在は不明だ。

気になるのは2006年の冬を最後に、何処のサイトにも写真や探検記録が無いんだ。

この手の廃墟は年数が余り経つてなくて、マニアの間では評価が低い。

しかし掲載された写真を見る限りでは、落書きは破壊活動は少なく保存状態は良好そうだ。

中には客室の家具や厨房の機器類も残されたままだし、機械室等も手付かずで残っている。

こういう物件を好んで探検する連中も居るので……

これは判断が難しい。

訳有り曰く付きで廃墟マニアが寄り付かないのか、単純に廃墟として魅力が足りないのか。

最後は本命の心霊スポットとしての検索だ。

キーワードは

「八王子 ホテル名 心霊 スポット」

を入力。

此方もヒット件数は8000件をこえた……

中でも古参の心霊スポットサイトに、興味深い記述が有った。

「深夜このホテルの客室から呻き声が聞こえる」

「地下の機械室で自殺した男の靈がホテルを徘徊している」

「ここの大広間で写真を撮ると必ず靈が写る」

「深夜2階の廊下を赤ん坊がハイハイしていた」

「実はホテルの敷地内に有るお稲荷様がヤバい」

「ホテルの物を持ち帰ると携帯に電話が有る。」

「わく持ち帰った物を返してくれ、と」

最後のは良く有る作り話だな。

携帯電話が使えなくなつたり、妙なノイズや画面の乱れは有る。

しかし通話は聞いた事が無い。

それを除いても多彩な心靈現象だ！

男と赤ん坊の靈。

呻き声は上記のどちらかと関係が有りそうだ。

大広間の心靈写真は、それ以外の靈も引き寄せられているのか？

最後のお稲荷は危険だ。

伏見稻荷大社を總本社とする稻荷神を祀るお稲荷様は日本古来の神様だ。

赤い鳥居に白い狐のお稲荷様は、誰でも一度は見た事がある筈だ。

全国に6万を越えるお稲荷様は、企業やホテルが屋敷神として祀る

事が多い。

これを倒産後に放置していたら大変だ！

稻荷神は真言密教ではインドの女神ダーキーと習合させた。

つまり羅刹や刹那の如く災いの神・祟り神の一面も持つ。

しかも勧請の方法が簡易な申請書だけで出来るんだ。

逆に言えば強力な稻荷神が住まつ事は殆ど無い。

厄介なのは信仰あつく祀られると神格が上がる。

その後で無碍に扱え、途端に祟り神だ！

これを真っ向勝負は負けるだけだらう。

仮に神格の低い動物靈とか他の良くない靈が社に入り込んだとしても強力だ。

出来れば現地で先に調べたいが時間が無い。

明日の午後に桜岡さんと待ち合わせをして、テレビ局で打ち合わせだ。

嫌な予感がする……

靈感か第六感か知らないが、この件に関わるのが凄く嫌な予感がするんだ。

何故だろ？

仕事的な意味でなくプライベート的な意味で、嫌な予感がするんだ。
しかし乗り掛かった船だし、桜岡さんを放つておく訳にもいかない
からな。

頑張るしかないか……

初めてくるトレビ局！

芸能人に会えるかと見回すが、特に知った顔はない……

「ちょっと、榎本さん。

落ち着いて下さいな」

そう^{たこな}窘められてしまつた……

まあ隣にお茶の間の霊能力、桜岡霞が居るけど見慣れてしまつたし。

アポを取つていた為か、桜岡さんも認知度が高いのか受付で彼女が
記帳しただけで中に入れた。

受付から連絡を受けた私服姿の若者が案内してくれて、第8会議室と掛けられた部屋に案内された。

6畳程度の広さで、小会議室といった所か？

8人掛けの会議テーブルが用意されていた。

暫く待つていると、先程の若者がペットボトルのお茶を配りに来て、また待たされる……

「なあ、桜岡さん。

何時も待たされるのかい？」

パイプ椅子に座り、お茶を飲むのも飽きたので彼女に話題を振つてみた。

「すみません。

わざわざ同行して貰いましたのに……

普段は此処まで待たされた事は無いのですが

既に15分以上は待たされているが、此方も5分前には来ているからな。

「正明君。

落ち着きが無いぞ。

慌てる乞食は貰いが少ない。

果報は寝て待て、だ。

なに直ぐに来るだろ？」

いや爺さん、ペットボトルをベロベロ鳴らさせて貰つた間、じゃないぜ。

結構苛ついてるだろ？

「爺さんもな。

その原型を留めてないペットボトルを良く見ろよ」

意外に短気なんだよな。

本人は認めないが、一般的な基準では短氣だよ。

「ん、ああ。

儂を待たせた奴を思つてな。

ほら、こうじや」

勢い良くペットボトルを潰す。

「榎本さんの筋肉なら、もっと潰れないかしら？」

桜岡さんも悪乗りしてきたか？

仕方無く渾身の力を込めてペットボトルをねじ切る……

結構簡単に潰れたな。

哀れペットボトルよ、昇天しておくれ……

こんな漫才を繰り返していると、漸く担当ディレクターが現れた。

かれこれ20分程待たされた計算だ！

「霞ちやーん、お待たせー。

前の打ち合わせ延びちゃつてさー。

あら、此方の2人は?」

多分40代前半だろうか?

細身で170センチ程度の身長。

赤いポロシャツに白のチノパン。

首から社員証をぶら下げた七三分けの男だ。

微妙に茶髪だし、全体的に軽い感じがする。

パイプ椅子から立ち上がり、見下ろす様にして自己紹介をする。語尾を伸ばす変な話し方のディレクターが、此方を值踏みする様に見詰める。

「僕は桜岡さんの知人で、真言宗の僧侶をしています。此方は松尾先生です。
個人で法律事務所をやっています」

ディレクターも流石に驚いた様だ。

「ほう!

霞ちやーん、凄いね。

格闘家みたいな坊さんに、ヤクザの親分みたいな弁護士さんですか? で、彼らが同行した目的はなんだい?」

中々大した物だ。

威嚇を含めた自己紹介をかわし、的確な表現で僕らを表す。

これがテレビ局の「ディレクター」か……

「えつ、と……

その、企画書の内容と契約書の件で」

途中で彼女の言葉を遮る。

「ああ、桜岡さんから相談を受けまして。

八王子市山中の廃墟を撮影するとか？

あの廃墟を何故、舞台に選んだか聞かせて頂きたい

チンピラにガンをくれる様にディレクターの田を見詰めながら質問する。

彼は、テレビ局は何処まで知ってるのだろうか？

ディレクターは

「ああ、自己紹介が遅れまして。
西川と申します。

お坊様は、あの廃墟をご存知で？」

少しだけ動搖したようだ……

でも落ち着いているな。

「ええ、ある程度は。

なので何故、あの廃墟を撮影したいのかお聞きしたい」

重ねて質問する。

「えー、我々は毎年の様に心靈スボットを紹介する番組をしてまして……

その中で、視聴者からのリクエストみたいな葉書や手紙が来るんですよ。

中でも、あの廃墟が凄いとか怖いとかが多くて。

ならば、今売り出し中のアイドルとお茶の間の梓巫女桜岡靈を「ハボすれば売れるんじゃね？」と思つたんですよ

なんと、原因は視聴者からのリクエスト？

そんな偶然が有り得るのか……

第31話

桜岡さんにテレビ局から仕事のオファーが来た。

ネットで調べただけでも、ヤバい感じだ。

僕の靈感も第六感も危険だと訴えている。

そもそも仕事の契約自体が不利な内容だ……

これを何とかする為に、松尾の爺さん迄引っ張り出したのだが。

ディレクターは視聴者からの葉書か手紙で安易に決めたと言つ。

これは本当の話なのか？

兎に角、情報が少ないんだ！

テレビ局の会議室で、桜岡さん・僕・松尾の爺さんと向かい合わせに座るディレクター。

名前は西川と言つたか……

「なる程、視聴者からの手紙で廃墟の存在を知ったのですか……しかし少々不用心ではないですか？」

企画書には、準備・調査の無いスケジュールですよ」

予算が無いから適当に…

では済まされないのだが……

「えつ？」

事前に調査ですか？

何も無い様にするのが、其方さんの仕事では？

惚けているのか？

それとも本気なのか？

「失礼ながら西川さんは靈の存在について、どうお考えですか？」

基本的な質問をする。

肯定派か否定派か？

それだけ分かれば対応は幾らでも有る。

「えつ私ですか？」

えーっと、お坊さんの前でアレですが居るんですかね？」

そつ言い放った表情は、否定派な感じだ。

なる程、危険性を感じてないから普通の口調みたいな感覚なのか……

僕は盛大に溜め息をついた。

「ふーっ……

僧籍に身をおく僕が居ないなどと言えまじょつか？

我々は死者の魂を極楽浄土に送るのが仕事。

居ないと言つるのは、仏教界全体を否定なさる訳ですな

大体、人が死んで魂を極楽か地獄に送らないと現世は魂で溢れ出しているつて！

「いえいえ。

そんなつもりは無いですよ。

ただ見た事無いのに信じろつてのは、乱暴じゃないですかね？」

見れば信じる、か……

内心は僕らを馬鹿にしているんだつ。

でも……

こんな奴が、例え見間違いでも靈を見たつてなると盲信的な肯定派になるんだよな。

何でもかんでも心靈現象に結び付けるから、余計に怪しくなるんだ。
肯定派だからって、僕らの味方にはならない場合が多い。

逆に邪魔なんだよね。

「話を契約内容に戻しましょう。

西川さんは心靈スポットに行く事を前提に企画を練られた。
つまり靈が居るかも知れない場所にアイドル達を送り込むから、保
険で桜岡さんに仕事を依頼した。
で、良いですよね？」

幽靈の居る・居ないは、話が荒れるだけだ。

政治・野球と同じに交わる事がない平行線の不毛な言い合いでから。

だから「居るかも」と言い換える。

素直に頷いたな。

「そして、この契約書には桜岡さんはテレビ局のスタッフやアイド
ル達を守る事に全力を尽くさなければならない。
ならば彼らの危険を減らす為に、事前に調査・準備は契約内容に則
った事。

これを不当に止めさせるのは、契約違反ですね？」

どんな仕事でも準備は必要だ。

まして安全が掛かってるんだぞ！

「いや、でも準備つて？
何をするんです？」

僕は桜岡さんに視線を送る。

これは彼女が言わなくては駄目な内容だ。

僕と田が合つて、小ちく頷いて話しだす。

「先ずは今回の廃墟について、出来る限り調べます。何故、ホテルを廃業しなければならなかつたのか？それから周辺を隈無く調べます。

お寺や神社、庚申塚やお地蔵様。

靈が出ると言う事は、何か原因が有る筈なんです。それを調べてから、実際に廃墟に入つて調査します」

うん、良い手順だ。

僕もネットで調べただけだが、幾つか彼女の知らない情報が有る。

「靈とは、悪靈と言い換える構いませんが誰かに縋りたいのです。恨みの元凶に復讐に……

とか考へがちですが、實際は波長が合えば彼らは誰でも良いんですよ。

だから、今回の心靈スポット巡りは危険なのです。

テレビ局のスタッフやアイドル達を守る為にも、桜岡さんは事前調査を要求したんですよ。

勿論、現地に居る人だけが危険じゃない。

彼らに理屈は通用しませんから、貴方も危険かもしれません。もつとも僕らは現地の人達は守りますが、他は知りませんよ

卑怯な言い方だが、責任範囲外の連中を守る必要は（契約上は）無い。

「いや、それは……」

靈を信じていなくても、自分に被害が及ぶと聞けば弱気になる。

これって靈感商法の手口だ。

「いや別に脅かすつもりはありません。
安心して下さい。

現地スタッフは必ず守つてみせましょっ」

そしてお前以外は守つてみせると囁く。

一人だけ仲間外れの心理だ。

「ちょ、お坊さん！

私の安全は？」

そして駄目押し！

「僕が一番心配しているのは、この廃墟が……
まだ現役のホテルとして営業していた時に勧請した稻荷神社の事で
す。

バブル当時は賑わっていた高級ホテルだ。
さぞ、稻荷神も手厚く祀られていたでしょう。
しかしホテルは倒産……

廃墟と化したホテルに残された稻荷神は、最悪の場合。
良くないモノに変化してるかもしねえ。
靈獸白狐、扱いを間違えれば祟り神になります。

僕は……

これらを事前調査しないなら、桜岡さんをどんな手を使つても必ず
止めますよ。

誰か他の人によらせれば良い」

本命の稻荷神の話題を振る……

正直な所、僕も関わりたくないからな。

この交渉が拗れても、最悪は構わないんだ。

「正明君、彼を追い詰めるな。

君、実はこの仕事が危険だから先方から断らせるつもりか？
なあ西川さん。

幾ら靈を信じていないと言つても、この会社にも屋上に稻荷神を祀
つてゐるじゃん？

あれを不當に扱うのと同じ危険が有るんじやよ。
靈獸白狐、神として崇められた存在を敵に回すんだ。
多分、まともな靈能力者なら断るぞ。

正明君も桜岡さんが危険だから同行したんだ」

爺さん、ナイスフォロー！

桜岡さん、僕を感激した顔で見ない！

西川、僕を複雑な顔で見るな！

「榎本さん……

私の為に、そこまで考えていたのですか？」

「全く若いもんは老人をヤキモキさせおつて。
幸せになれ正明君。
と、言つ詫びや。」

西川さんとやひ……

今回の件はキヤンセルじゃな。

若い一人を祝福してくれたまえ」

カツカツカツカ！

とか高笑いして、水戸黄門裁きみたくまとめるなー！

「爺さん、水戸黄門じゃないんだ。

話をまとめるな！

桜岡さんも、まつ良いか的な顔しない。

貴女の仕事でしょ？」

流石は弁護士だ。

危うく納得する所だつたぜ！

いや、仕事は断れるから良いのか？

でも流れ的に、桜岡さんとお付き合いが始まる感じだぞ？

取り敢えず咳払いをコホンとひとつ……

「僕達はちょっと調べただけでも危険な廃墟に、準備無く行こうとするのを止めたいのです。

テレビ的に地味な調査ですが、他の口ケでも下見とかするのと同じですよ。

それと現在の管理者には撮影の許可を貰つてるのですか？」

複雑な顔で黙り込む西川さんに話し掛けた。

「ん……

勿論、撮影の許可は取つてますよ。

実は管理者の方から手紙を貰つたんですよ。

何でも地元でも有名なお化け廃墟だから、一度取材に来て欲しいって。

普通は管理者や所有者と揉めるじゃないですか？

それが向こうから提案してきたんだ。

だから渡りに船つてね」

管理者？

所有者じゃなくて？

自分の管理する物件の資産価値が落ちる……

いや、価値なんて無いから話題作り？

でも何かが引っ掛かるな。

何故、所有者じゃなくて管理者……

わざわざ廃墟に呼ぶ意味。

ギャラだつて大した額じゃないだろ？

「さて、西川さん。

どうします？

桜岡さんに仕事を依頼するなら、事前の調査と準備の費用と日数は必要だ。

それと心霊絡み以外の保障は責任区分から外して下さい。

それは一般的な部分だから、発注者側の責任だ。
あとは……

現場の最終的な決定権。

例えば危険と判断して、中止に出来るのは誰か決めて頂きたい。
勿論、その人が責任者だから責任取るんですよ。
それはテレビ局側から出して頂かないとね」

桜岡さんに仕事をさせるなら、この条件を飲め！

そう言つ意味を込めた。

「うーん、私じゃ即決は出来ませんね。
お預かりして、後日に返事をさせて下さー」

うん、その通りだよね。

「確かに、そうですよね。
松尾先生から、何か有りませんか？」

「いや、儂の出番は返事次第じゃな。
で？」

どれ位で返事を貰えるかな？」

「一週間以内には、多分平氣かと……」

まあ妥当な線だよね。

「桜岡さんは？」

他に何かないかな？」

「私は……」

私が言つた事は無くなつたから平気ですわ

では長話する必要も無くなつたかな?

「では西三さん。

宜しくお願ひします」

やつぱり、今回の話は終了した。

色々と問題はあるが、初回だからこんな物かな?

受付で貰つたバッヂを返却し、テレビ局を出る。

行きと同様にエントランスに待機していたタクシーに乗り込む。

暫くは誰も無言で、ただタクシーの運転手の振る話題に一言一言、
僕が応えるだけだ……

品川駅に近付いた辺りで爺さんが

「運転手さん、駅前で喫茶店は有るかな?
静かな雰囲気が良いんだが……」

「そうですね。

国道沿いに有るルノーアールなら、広くて静かですよ」

「桜岡さんも良じやうか?

少し話してから解散しようか

「はい、お祖父様」

お祖父様？

これだからお嬢様は困るんだ。

コレがお祖父様だつて？

文句を言つても鉄拳制裁だから黙つておく。

ルノアールは駅から2分もしない好立地だ。

店内は広くて、基本的にソファーだ……

黒い革張りのソファーに深々と座りこむ。

何故か隣には桜岡さん。

向かいが松尾の爺さん。

店員が来て、水とオシボリを配つている。

「えーアイスコーヒーと……

爺さんと桜岡さんは？」

「儂はホットだな」

「私はカフェモ力を」

暫くは、水を飲んだりオシボリで顔を拭いたりしてオーダーが来る

のを待つ。

ひと通り品物が来てから、爺さんが話し始める。

「さて、正明君。
どうなんだい？」

また漠然とした質問だなあ……

ガムシロップと格闘している僕に質問を振る。

「どうつて？」

アレは無知故に危険を考えられないタイプだな。
大体、管理者からの手紙って怪しいだろ？
どうして所有してる物件を曰く付きにしたいんだろう？
普通は変な噂が立つのを嫌がる筈だよね」「

僕的には、その管理者が怪しいと思つ……

「榎本さんが危険と思う程なの？」

危険なら、今回の仕事は諦めても……」

「おやおや、この筋肉馬鹿が心配か？
全く体ばかり頑丈で困った馬鹿息子みたいな物なんだが、心配して
いる娘がいるとはな。」

桜岡さん、この筋肉馬鹿をお願いしますぞ」

変な話をして頭を下げる爺さん。

おおおい……

「心配なのは桜岡さんだろ？」

あの契約じや仕事は無理だ。

でも、かの感じじや上手くいくとは限らないな……」

腕を組んで悩む僕を見て、クスクス笑う彼女。

「何だよ、笑つてさ」

「いえ、喫茶店に法衣を纏つた榎本さんは浮いてますわよ。
周りの方もチラチラ見てますし……」

まるで初めて会った帰りに寄ったファミレスの時と逆ね。
あの時は私が巫女装束だったけど、今思えば確かに浮いてたわね」

嬉しそうに笑う桜岡さん……

そう言えど、前は巫女装束の彼女と深夜のファミレスでファーストバトルをしたつけ……

あの時も引き分け。

居酒屋も引き分け。

ステーショングリルも引き分け。

次はフルーツパーラータカノ辺りで勝負を……

「なんじゃお前さん達は、そんなプレイをする仲なんかいな?
もう結婚しちゃえよーーー！」

親指立てで嬉しそうにホザキやがつた！

無駄に若者言葉にアンテナを張つてる爺さん、場違いな発言アリだ
ツと疲れたんだ……

「本当に、もう嫌だよ……
疲れたんだ……」

第31話（後書き）

これで連続更新は一旦終わりです。

3日に1話程度の更新スペースになりそうです。

リアル仕事が本気で忙しくなりました……

完結まで頑張りますので、宜しくお願いします。

第32話

ちくしょう、舐めやがって……

今回はヌレヌレのスケスケしか能がないお色気巫女と、売り出し中のイマイチな二線級の女達を集めた低予算な企画なんだぞ！

それを弁護士やら筋肉坊主を連れて来やがって……

準備・調査だと？

パツと行つてパツと撮影しろってんだ。

全くイライラするぜ。

デスクの上には吸い殻で山盛りの灰皿。

そこに無理矢理くわえていた煙草を押し込む……

飲みかけの缶コーヒーを飲み干して、また煙草に火を付けた。

イライラを解消する為に、深々と煙草の煙を吸い込む……

「ふーっ！」

少しだけ気持ちが落ち着いた時にADが駆け寄つて來た。

お前も少し落ち着けよな。

「西川さん、分かりましたよ。

あの坊さんは警備会社や不動産屋のお抱えの揉み屋ですよ。
坊さん + 筋肉で有名です！

直ぐに分かりました。

榎本心靈調査事務所を開業しています。

爺さんは個人で弁護士事務所を開業しています。

松尾弁護士事務所。

こちらの専門は企業間の契約トラブルですね」

メモ書きを差し出しながら、興奮気味に説明する。

渡されたメモを見ながら説明を聞いているが……

ほう！

それなりに有名なんだな。

しかも本物の靈能力者に契約専門の弁護士か。

やり難いなあ、全くよ。

「で、例の廃墟も調べたのか？

何かヤバいらしいぞ？

全く、ちゃんと調べるよ」

くそADめ！

私に呪いだか祟りだかが降りかかるのは、お断りなんだよ。

「えつと……

手紙をくれた管理者の方とは連絡が取れないとす。

でも留守電は入れてありますから。

ネットで調べたんですが、靈の田撃情報は多いですね。坊さんの言つお稲荷様の情報も確かに有りました。

どうします?」「

あの筋肉坊主、マジで仕事を断られても構わない話運びだったな。

つまり相手も厄介と思つてゐるのか?

つまり本物の心霊現象を捕らえる事が出来るのか?

「よし!」

特番のコメンテーターを何人か切つて予算を浮かせるぞ。ひな壇芸人とか要らんだろう?

浮いた金で事前調査をさせよう。だが、その様子も全て撮影しろ」

本物の拌み屋の手順だ。

何かに使えるだろ?……

後は責任区分だが、心霊関係以外なら何時もの事だからな。

会社の一括労災の契約範疇で何とかなるか……

「A Dちゃん。

この企画練り直すから関係者集めて!

今日は面白くなるぞ」

本職坊主にエロチック巫女、売り出し中の女達ならお色気を出させ

ても嫌とは言えないだろ。

元々モデルと言つても下着メーカーとかにも所属してゐる連中だ。

パンツ位は見せ慣れてるだろ?

でも、ゴールデンだから、微エロで止めないとな。

チラチラで終わりか?

テレビ放送で視聴率が取れたら、特別編集してビデオ販売するか?

なら過度なお色気は、そっちで見せれば売れるだろ?

何たつてホラーにはエロチックはセット販売だ。

大抵映画での最初の被害者は、イチャイチャしてるカップルだしな

……

よし!

新しい企画の基本方針は決まりだ。

一時はイライラしたが、次善の策としては悪くないぞ……

「西川さん!

関係者集まりましたよー

「さて、ヌレヌレ梓巫女・桜岡霞の最新作はテレビとビデオの一本立てで行くぜ!」

要らん所で要らん企画は進行し始めた……

あれから榎本さん達とは喫茶店の前で別れて、今は一人で電車で帰宅途中。

午後の3時過ぎとは言え電車内は、それなりに混んでいる。

扉部分の手摺りに捕まり窓の外をボーッと見ながら、先程の事を考える。

彼は番犬……

いえ番クマとして、本当に頼りになるわ。

まさか弁護士のお爺様まで連れて来てくれるとは……

それに事前にホテルの事も調べていてくれた。

契約内容を変更しなければ、私を止めるつて……

何故、そこまでしてくれるのかしら?

私が大切だから?

すっすすす、好きだから?

いえいえいえ、あの見た目クマさんは妙に優しいからもしかしたら心配してくれただけ……

今回の件をもし請けるならば、少し行動してみましょう。

でもでも……

こんなに心配してくれるのだから、少しは期待しても良いわよね?

結構な美人が電車内でクネクネしながら赤面してる姿は、車内の人達の注目を集めていた。

「嗚呼、美人なのに残念な娘なんだなー」

「妄想癖があるのか?」

「でも赤面する美人は良いものだ……」

乗客の心の突つ込みは、意見がかなり割れていた。

此方は桜岡さんと品川駅で別れたオッサンと爺さん。

松尾弁護士事務所は東京都大田区平和島に有る。

行きは事務所で合流し電車で品川駅に向かつたが、帰りはタクシーを利用している。

やはり筋肉坊主は悪目立ちをするから……

「正明君、桜岡さんだつたか。
なかなかの美人でお嬢様な感じだな。
アレは育ちが良いぞ」

流石は弁護士！

人を観察する目が有るな。

「そうですね。
父親は社長とか言つてましたよ。
普通に金持ちのお嬢様でしょう」

黙つていれば完璧なお嬢様なんだが、中身はオッサンなんだよな……

「ふむ……

で、どうなんだ？」

ああ、ニヤニヤ始めたぞ。

この爺さんは他人の色恋沙汰が好きだからな……

全く面倒臭い。

「どう、 とは？」

僕らは仕事仲間ですから、 それ以上でも以下でもないですよ」

キッパリ断らないと、 ここの爺さんは暴走するから大変なんだ。

「何だ、 つまらんな。

でも結衣ちゃんだったか？

女子中学生よりは余程健全だ。

彼女も悪い娘ではないが、 お前には桜岡さんみたいなタイプが似合うと思つた……

なつ？

マイエンジールよりも中身オッサンを選ぶとは！

「爺さん、 人を見る目が無いぞ！

結衣ちゃんの方が良いだろ？」

「ここの口つコンが！

お前がサッサと結婚しないと、 儂がアイツに顔向け出来んだ。早く結婚しろ、 早くだ！」

僕が……

僕がアイツにあの世で会つ前にだぞ！」

松尾先生は俺の爺さんと懇意にしてくれてたからな。

もう年だし、 焦つているのか？

でも結衣ちゃんと結婚するなら、 あと四年は待たないと……

幾ら法的には16歳で結婚出来るとはいえ、せめて高校は卒業しないと。

指折り数えていた僕をぶん殴る！

何でフリーダムな爺さんだ。

「何を数えているんだ？

桜岡さんなら直ぐだろ？」

「彼女じやねーよ！

結衣ちゃんなどだよ！」

「お姫さん、目的地に着きましたぜ……」

運転手さんが目的地に着いて話しかけるまで、不毛な会話は続いた。

第三者的前で延々と痴態をさらす榎本と桜岡……

とつても似た者同士しだった。

お前ら、もう付き合つちやえYOー！

その翌日、西川氏から連絡が有りほぼ此方の希望通りの責任区分での契約となつた。

費用の方は事前調査は出来高清算とし日数及び内容にて積算するが、それは榎本が日常で行つ事なので問題は無い。

ただ、あくまでも元請けは office sakurao ka であり複本は一次下請けとして契約した。

これはテレビ局と直接契約をして縛られるのを防ぐ為だ。

発注者は一次以降の下請けに直接命令は出来ない。

必ず元請けを通すしかなく、請ける仕事の内容も桜岡をこと決められるから。

揉め事回避の為の契約形態となつた。

そして、いよいよ現地に乗り込む日となつた……

何処までも抜ける様な青い空……

絶好のドライブ日和！

そして八王子市という田的故に日帰りは厳しいのだが、我が愛の巣に結衣ちゃんを独りきりにする訳にはいかず日帰りです。

今日は初日と言つて現地に9時に集合。

渋滞を避ける為に、余裕を持つて朝6時前に自宅を出る。

結衣ちゃんには桜岡さんと仕事をする事を説明した。

凄く喜んでいたが、何が嬉しいのだろうか？

早出をするので起こさない様に静かに支度をしていたが、ちゃんと起きていて送り出してくれた……

相棒のキューブは好調だ！

自宅を出て一番近い高速道路、横浜横須賀高速道路。

通称「ヨコハマ」に佐原インターから乗り込み、軽快に目的地に向かう。

山間部を縫う様に道路が有り、暫し緑を堪能しながらのドライブ。

途中の自販機で購入した、午後ティーを啜りながらの安全運転。

80キロで巡回！

途中一般道の国道16号線に降りた時は渋滞に捕まつたが、八王子バイパスに乗つて目的地へ。

現場は山の中の為、一旦麓のファミレスの駐車場で合流した。

所要時間は1時間45分。

まざまざのタイムだ！

既に駐車場には、見慣れたスカイラインが停まっている。

R34 GTターボ、なんちゃってスポーツカーのAT車だ。

スカイラインの横に停車すると、直ぐに桜岡さんが降りて来た。

「お早う、榎本さん。

早いわね。

まだ8時前よ」

今日の服装は、薄いピンクのジャンパーにチェック柄のキュロットスカート。

足元は歩き易そうなスニーカー。

小さなリュックを背負っている。

毎回思うが、お洒落度では完敗だ。

僕はと言えば、調査が目的だし依頼人は桜岡さんだから普通の服装だ。

山登りを考えて撥水加工を施したジャンパーにカーゴパンツ。

足元はアーミーブーツで固めて、腰にポーチとリュックを背負つている。

軽い登山並の装備だ。

腕時計を見ながら現在時刻を確認する。

僕も の Speed masterを見るが、少し早かつたか……

「お早う、桜岡さん。

でも一時間後に出たなら、この時間には着かないよ」

渋滞を避ける為に早出したんだ。

7時に家を出たなら、まだ保土ヶ谷辺りを走っている筈だよ。

「ふふふ、私もちょっと前に着いたのよ。
他の人達は、まだみたいね。
でも凄い装備！」

相変わらず準備に手抜かりはないのね。
もしかしたら遭難しても平気な位かしら？」

勿論、一泊位なら一人は楽勝な装備だ。

しかし田舎故に広大な駐車場。

如何にも登山します的な服装の男女。

そして僕らを含めても5台しか停まってない駐車場。

つまりお店から丸見えな訳です……

「先に店に入つてようか？」

まだ待合せ時間までは余裕有るし、それに店から丸見えだからね

彼女を伴い店内へ。

待ち構えていた様に店員さんが案内してくれる……

きっと待っていたんだろうな。

店内は統一されたショーン店の筈だが、微妙に地方色が溢れている。昔の農工具がオブジェの様に展示してあつたりとか……

それにお土産コーナーが、やたらと『デカい』。

「何かしら?」

億貯まる貯金箱……

これじゃ100万円も無理じゃないかしら?」

それに、「コレ蠣を乾燥させた物なの!」

ああ、地方の駄洒落商品か……

「桜岡さん。

それは億貯まるで奥多摩つて駄洒落だよ。

場所は全然離れてるのに不思議だね。

蠣は本物だけど、一匹で3000円は安いのか高いのか判断が微妙だ……

まあ席に座りうつよ

他にも田舎観光地ならではの定番のペナントやマグカップ、提灯にお饅頭と色々だ。

暫くお土産コーナーで時間を潰せた……

取り敢えずドリンクバーと軽食を頼む。

軽食と言つても僕はトーストセット、彼女はホットケーキ。

それに山盛りポテトだ！

机に料理が並び、各自好きなドリンクを用意してから打合せを始める。

「さて、調査初日。

テレビ局関係者も来るけど、何から始めようか？」

他の連中が来る前に、簡単な打合せをしておくべきだひつ。

「ん？

ホットケーキ食べます？」

僕は眞面目な話をしているのだが……

上品にホットケーキを切り分けてたのに、フォークに刺して一切れ口の前に寄越してきやがった。

「いえ、要らないです」

アーンな感じですよ？

嫌ですねえ、全く相変わらずガードが緩いぞ！

食べ物を前にして彼女に眞面目な話は無理なんだ。

食べ終わるのを待つ。

そう思い、自分の分のトーストにジャムを塗り始めた。

第33話

鄙びたファミレスチーン店で朝食……

周りには殆ど客は居ないから、嫌でも目立つ美女と筋肉。

凄い目立つ凸凹カツフルだ。

最近思つたが、梓巫女の装束を着ていないと桜岡さんが有名人とはバレない。

微妙に髪型とか衣装とかを変えている為か、バレたのは三浦海岸のファミレスだけだな。

まああの時はまんま巫女装束だったし、バレない方が不思議だらう

……

本当に何でも上品に美味しそうに食べる。

普通にお嬢様な彼女が、又レヌレだのスケスケだの変なアダナになつたのが不思議だ。

これがテレビの怖さなのだから。

真実が歪曲されて伝まってしまう。

僕も奴らとの付合い方には気を付けないとダメだ。

ただでさえ後ろ暗い、過去と秘密を持っているのだから……

料理を完食したので、漸く眞面目に仕事の話をする事が出来る。

「「御馳走様でした！」」

僕らは食材への感謝の思いを忘れない。

「さて、漸く仕事の話が出来るね。

余り時間は無いから簡単に……

テレビ局側は何人来るのかな？」

余り大所帯だと、行動に制限が掛かる。

今日は様子見だが、何が有るか分からぬから……

「A Dさんにカメラさん、音声さんにマネージャーの四人よ

マネージャー？

居たんだっけ？

この間のテレビ局との打合せには来なかつたよね。

「桜岡さんのマネージャーなんだ？

居たんだ、ならテレビ局との打合せに……」

「マネージャーと言つても専属じゃないのよ。

私も一応、芸能プロダクションに登録してゐる。

だから複数のタレントの面倒を見ている人だから、仕事の契約をした時だけお世話になるの。

でも今回は、特別に同行するのよ。

なんたつて怖いのが嫌いな人なんだけど、契約とかの話をしたら一度榎本さんに会いたいからって……」「

僕に？

変な地雷を踏んだか、プラグを立てたのか？

「まあ良いや。

先ずは今日の行動だけど、基本的には廃墟には入らないよ。出来れば依頼人の管理者にも下調べが済む迄は会いたくない。ちょっと気になるし、怪しいんだよね……」

あれ？

不思議そうな顔だぞ。

「凄い慎重なのね。

でも依頼者に会わないのは何故かしら？」

色々と話を聞ける筈でしょ？

それこそ当事者だからこそ、確かな情報よ」

僕は管理者の癖に、心霊とかお化けとか建物に悪いイメージが広まる事をやううとするのが分からぬ。

普通は隠すか、話が広まるのを嫌がる筈だ。

なのにテレビ局に手紙を出してまで呼び寄せるのは何故だ？

「普通は管理している建物に、悪い噂が立つのは嫌だろ？」

わざわざ手紙を出してまで呼び寄せるのは何故だ？

考えられるのは、本物の心霊物件だから無料で解決して欲しい。ならば僕らに不利な情報は話したくない。

無理だと帰られては困るからね。

それを調べる前に廃墟に入らされる危険も有る。だから下調べをしてから接触するべきだね

「うーん……

考え過ぎじゃないかしら？

本当に困って連絡してきたかも知れないし

まだまだ甘いと言つか、優し過ぎるんだ。

僕が歪んでしまっただけかも知れないけどね。

人は本当に困ると、他人を巻き込んで何とかしたい連中が多い。

まだ情報が全く無いのに、そんな不用心な真似は出来ないんだ。

「用心にこした事は無いからね。

さて、これからテレビ局の連中が来るけど……

僕の立場は桜岡さんに雇われた同業者。だから何か有つても僕に安易に判断を委ねちゃダメだよ。彼らが君を甘く見るから……

あくまでも責任者は桜岡さんだからね

最悪、本物のホラーハウスの場合にだ。

頼り無い姿を見せていたら統制が取れない。

勝手に逃げ出したり、勝手な事をするかも知れない。

だから桜岡さんの近くに居れば、彼女の言つ事を聞けば安全と思わ
せないとね。

ただでさえ本番では、僕はテレビに映りたくないから距離を置くし
……

「分かつてます。

私がしつかりしないとダメだから……

私の企画ですもんね！」

笑顔で答える彼女は、本当に眩しい。

人助けをする事に迷いがないから……

命が惜しくて「箱」に贅を差し出している僕とは根本が違うんだ。

だから、だから出来るだけの事はしよう。

ある程度、話し終わつた頃に彼女の携帯が鳴つた。

駐車場を見ればワゴン車と軽自動車が新たに停まつていて、四人の男女が佇んでいる。

どうやら全員集合のようだ……

あの後、皆で軽く朝食を探つてミーティングをした。

勿論、僕らも一回目の朝食だが軽い物だ。

今回の参加者だが……

AD君は前回テレビ局で案内してくれた彼だ。

20代後半、今風な若者。

カメラさんは40代だろうか、無口なマッチョメンだ。

彼とは気が合ひそうだ。

逆に音声君は金髪ロングのチャラチャラした30代で、苦手なタイプ。

マネージャーはといえば、20代後半かな？

黒髪ショートの極々普通のO君で、幼い感じの女性だ。

口っこじやないが、20代前半でも通用するかな？

程度の口っこ道を歩む僕としては中途半端な感じだ……

現地調査だから他の男性陣は動き易い格好だが、彼女はハイヒールでした。

いや、山道どうするの？

微妙に先行きが不安な六人組だ……

因みにマネージャーさんの名前は、石川恵理子さん。

男達は、どうでも良いので役職名で通します。

目的地の廃墟の有る山の入り口まで到着した。

見上げる山々は、濃い緑色をした葉を茂らせている。

鬱蒼として暗い感じで、とても観光地とは思えない。

人の手が最低限しか入ってない原始の森だ。

先ずは周辺の調査を行うのだが……

「榎本さん、先方に連絡して有るんですよ。

本当に会わないんすか？」

「相手を信用する根拠が無いのに、いきなり会つんですか？」
此方が問題の廃ホテルです！

つて案内されて予備知識無しでホラーハウスに突入?
はははは！

僕も桜岡さんも君の安全は保証しないよ」

このAD君は馬鹿なの？

事前に今日の予定は打合せしてあるのに、何故訪ねないと言つてある先方にアポを取つてるんだ？

「でも僕、連絡しちゃつたし……

困りますよ」

「調査が難航して其方まで伺えない。

とか、色々と理由は付けられるでしょ？」

桜岡さんからも言われてますが、初日だし慎重に進めますから……」

未だにブツクサ言つAD君を放置して、桜岡さんの元へ。

マネージャーさんと話していたが、此方に気が付くと笑いかけてくれる。

「榎本さん。

先ずは車で徐行しながら、周りを確認してみましょう。

それで気になる物が有ればチェックして調べる。

特に庚申塚やお地蔵様、神社やお寺は要チェックですね」

うん、上出来です。

「そうですね。

車は四台ですが、我々は六人。

「一台に分乗するか、ワゴン車に全員乗るか……」

僕の車には道具一式乗せてるから「一台が良いです」

出来れば一台まとめて移動が制御し易いが、機材が無いのは心許ない。

それに万が一の為に、お神酒と油揚げを用意している。

神様相手だから、下手に出ないとアッサリ死ぬから……

「では榎本さんの車と局のワゴン車で。

私と石川さんの車は置いて行きましょう。

では私達は榎本さんの車に乗りましょう」

僕と桜岡さんは別れて乗り込んだ方が良くない?

「僕らが一緒より分かれた方が対処し易くない?」

「んー、それも考えたけど調査だし一緒に直ぐに意見交換が出来るから。

それに今田は調査だけですから、平氣でしょう?」

責任者で有る桜岡さんに、挙む様に言われては立場的に断れないか。

それにムサイ男共より、口利じやなぐても女性の方が万倍マシだ!

「分かりました。

AD君来てー!

一応これ、渡しておくから。

それと携帯の番号を交換しておこう。

「分かりました。

AD君来てー!

一応これ、渡しておくから。

それと携帯の番号を交換しておこう。

AD君を読んで、お札と清めの塩を渡す。

「お札は各自で懐にでも入れておいて。
塩は何か有ればバンバン撒くんだよ。
量は有るから気にせず使ってね」

取り敢えず、お札を三枚と清めの塩を一キロ。

「重つ？」

「こんなに清めの塩？
相撲みたいですね？」

「てか、これで何十万とか請求されるんすか！」

量が有ると有り難みは薄れる筈だが、何十万つてボリ過ぎだろ。

「チマチマ撒くよりドバッと撒いた方が効くよ。
ちゃんと僕が祭壇で清めた塩だから、効果は保証するし。
勿論、何十万もしないよ」

おつかなびっくりと塩を持つAD君から取り上げて、コンビニのビニール袋に小分けして、各自に配る。

余計に有り難みが薄れた……

「何か榎本さんって、僕の知ってる靈能者と違つたすね！
お札とか清めの塩とか、貰つた事ないですよ。
こういつのつて僕らでも使えるんすか？」

AD君が、お札を珍しそうに眺めながら聞いてくる。

カメラさんも音声君も同様だ。

「別に特別な力が必要な訳じゃないよ。勿論、作り出すには靈力を込めるし使用効果も一般人より高いけどね」

お札やお守りなどは、元々は普通の人でも使える様に出来ている。

「でも高額つすよね？」

「値段に拘る奴だな……」

他の連中も、僕の顔を伺ってるし。

使つたらお金を取られるとでも思つてるのかな？

ならば、その心配を解消しないとダメだな。

「坊主に法事とかで読経させると、相場は一回で三万から五万。例えば一回に1キロの塩ならば、1グラムで30円だよね。でも10キロなら1キロ当たり3円だ。だから、それだけ使い切つても3000円。まあお金は取らないから安心してよ」

靈感商法じゃないんだから、ボッタクリみたいな真似はしないよー。

「榎本さん。

私にも、その塩を売つて下せー」

「えつ？」

桜岡さんも必要なのか？
何時もはどうしているの？」

確か前は持つてたけど、まさか何処から買つてるのか？

「えつと、知り合いの神社から清めた塩を買つてるんです……」

偉く恥ずかしそうに、申し訳無そしそうに言つて居るのは……

多分高いんだろう。

「1月に1回、1キロ迄ですよ。
友情割引で1万円で良いです」

別にボツタくる気もないし、1回で大体3キロは清めるから平氣だ
るづ。

「ハニコ」している桜岡さんを促して車に乗せる。

「よいよ調査に出発だ！」

車を走らせて数分、幸い他に車は見掛けないので30キロ程度のス
ピードで走る。

山の中をクネクネと曲がりくねつている道は、雑草が生え落ち葉が吹き溜まり荒れかけている。

標識やガードレールもサビが浮いているし……

「んー、相当痛んでるし手入れをしていない。生活道路として使っている感じもしない。あつ！」

落石が道の端に、そのまま有るな……」

「それは仕方ないんじゃ？」

「バブル崩壊から10年以上過ぎてるわ」

マネージャーの石川さんが、外を見ながらポツリと言つ。

ソワソワしている様に感じるのは気のせいかな？

もしかしてトイレ……か？

「地図で見ると付近に古い集落があるんだ。

彼らが道路を使っていたら、もう少し手入れをするとと思つ。ほら！」

ガードレールが無くても、何も養生していない。

人が使つていれば、ロープを張るとか何かしらするよね。

特に都会でなく田舎の人達は、そういう事には細かいんだよ

「他人に無関心な都會と違い、田舎は横の繋がりが強い。

この手の仕事は共同で迅速に行つ筈だ。」

放置する程、人手が無いか他に道があるか……

営業中のホテルと集落の連中は、上手く関係を築いていたのかな?

少し走ると大きな鎧だらけの看板を見つけた!

縦2m横6mは有る大きな看板だ。

車を降りて確認する。

鎧だらけで良く分からぬ部分も有るが、この山全体の簡易な地図とホテル迄のルート。

それに付近の景勝地が分かる。

近くに川が有り、小さな滝と池が有るのか……

「観光出来る場所が滝と池だけ?

これは廃れるよ。

でも水場には靈が集まり易い。

行ってみるか……」

現在地から一番近い池迄は、車なら5分と掛からない場所だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177w/>

榎本心靈調査事務所

2011年10月8日17時43分発行